

いのち、尊厳限りないもの

～宣教する共同体のありようを求めて～

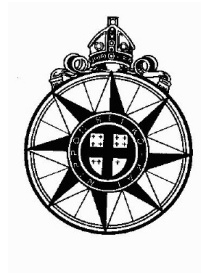
2012年 日本聖公会宣教協議会報告書



2012年9月14日(金)～17日(月)

於 カリアック (浜名湖畔・商工会議所福利研修センター)

日本聖公会 宣教協議会実行委員会



2012年 宣教協議会のための祈り

天と地とその中のすべてのものを造り
「それは極めて良し」と祝福された主よ
神の似姿を与えられたわたしたちを導き

すべて生きるものと共に

いのちを輝かして

主の栄光を現わすことができますように

委ねられた主の働きを担うため

宣教協議会を通して

歩む道を計画する人々を祝し

その一步一步を備えてください

主イエス・キリストによって

お願いいたします

アーメン

◆ 目次

- 1 日本聖公会<宣教・牧会の十年>提言 3
提言に関するお願い
- 2 実行委員長あいさつ 9
- 3 宣教協議会プログラム 10
- 4 2012年日本聖公会宣教協議会に向けて 12
- 5 基調講演 司祭 西原廉太 22
わたしたちの「宣教」を想い描くために
—日本聖公会の宣教の課題と可能性—
- 6 特別講演 シスター 清水靖子 97
イエスの道を歩く
～未踏へのチャレンジ・未来の子どものために原発を止めるためには～
- 7 「いっしょに歩こう！プロジェクト」報告 117
・被災の地にて 司祭 長谷川清純
・3・11から1年5ヶ月福島は今・・・ 司祭 越山健蔵
- 8 バイブルシェアリング 司祭 笹森田鶴 134
わたしたちは何者で 何をすべき存在であるのか
～神との関わりの中で問いかけに答える～
- 9 グループ討議中間報告 149
- 10 お詫び 167
- 11 提言作成に向けてのグループのまとめ 168
- 12 礼拝説教 187
開会礼拝 主教 五十嵐正司
主日礼拝 主教 加藤博道
閉会礼拝 主教 植松 誠
- 13 参加者名簿 200

◆ 関連資料

- ① 原発のない世界を求めて 204
—原子力発電に対する日本聖公会の立場—
- ② 聖公会の戦争責任に関する宣言 206
- ③ 日本聖公会第58(定期)総会決議第18号 208
—日本聖公会宣教協議会開催の件—

◆ 収支報告

宣教協議会収支報告 209

2012年日本聖公会宣教協議会

「いのち、尊厳限りないもの」－宣教する共同体のありようをもとめて－

日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言

2012年9月14日(金)から17日(月)の日程で、浜名湖畔の研修施設「カリアック」に、すべての教区主教をはじめ各教区代表、管区諸委員会、そして大韓聖公会からの代表など信徒・教役者140余名が集い、「2012年日本聖公会宣教協議会」が開催されました。この宣教協議会は2008年の日本聖公会第57(定期)総会において、以下の3つの目的で開催されることが決議されていました。

- ① 聖公会信徒の減少・高齢化、聖職者の不足、教会建物の老朽化、財政の逼迫などの現状を受け止め、互いの知恵と経験を分かち合い、この喜びの福音を伝える具体的な宣教ビジョンを構築すること
- ② 長期にわたる経済不況のもとで、貧困・失業・家庭崩壊など様々な困難に直面し、殊に高齢者や障がい者など社会的に弱い立場におかれている人びとにとっては、ますます生きにくい社会になっています。このような社会において、教会に求められている宣教について再認識し、具体的な方策を検討する
- ③ 世界各地における政治・宗教・国家・民族などを巡る対立が続いており、未だ戦火が止むことはありません。1996年の第49(定期)総会決議を通して日本聖公会は、日本の戦争責任に関してアジア諸国に対して公式に謝罪しました。その決議を踏まえ、日本聖公会が永久に平和の器として用いられるため

しかし、2011年3月11日に起こった東日本大震災と福島第一原子力発電所の災害は、その地に生きるすべての<いのち>に対して重大な犠牲と被害をもたらしました。これらの災害をもたらしている様々な課題は、わたしたちのこれまでの生き方や教会のありようを根本的に問い続けています。もはやこの災害によってもたらされた事態・現実とは無関係に、わたしたちは宣教や教会の具体的な事柄を考えることができません。このような状況の中で今回の宣教協議会が開催され、わたしたちは教会の宣教課題や組織維持の課題を巡り、多くの時間を共有し、学び、語り合いました。

「イエスの道を歩く～未踏へのチャレンジ・未来の子どもたちのために原発を止めるためには～」というタイトルで話されたベリス・メルセス宣教修道女会の清水靖子シスターからは、福島第一原子力発電所の災害による放射能汚染に関する深刻な問題提起を受け、キリスト者としてこの現実において、どのような生き方を選択するのかを問われました。東日本大震災被災者支援活動「いっしょに歩こう！プロジェクト」の長谷川清純司祭は、被災者に寄り添う主イエスとの出会いの中から教会の働きを語られました。また、同じく越山健蔵司祭は、放射能汚染地域に生きる人びとの現実と苦悩、そしてその中に置かれている教会と牧師の苦悩・躊躇を語られました。

西原廉太司祭による基調講演「わたしたちの『宣教』を思い描くために～日本聖公会の宣教の課題と可能性～」では、豊富な資料とともに多様な宣教ビジョンが提供されま

した。さらに笹森田鶴司祭によるバイブル・シェアリングは、「わたしたちは何者で、何をすべき存在であるのか～神との関わりの中で問いかけに答える～」というテーマで行われ、被造物としての人間の使命について互いに分かち合いました。

これらの学びをもとに、わたしたちは15のグループに分かれ、これからの教会のビジョンについて語り合いました。わたしたちはここで話し合われた様々な内容をまとめ、日本聖公会がすべての<いのち>を守る決意を持った共同体として新たにされるために、以下のような提言をいたします。

しかしながら、限られた時間と人数でのディスカッションによる提案であり、それゆえこれらの提言をもとに、各教区・教会においてさらに議論を深め、実践していかれることを願っています。

日本聖公会<宣教・牧会の十年>にむけて

今回の宣教協議会で、わたしたち日本聖公会の宣教の原点は、教会内の牧会はもちろん、教会のある地域全体に対する牧会的働きをていねいに実践していくこと、その地域にある課題、そしてこの世界にある課題に誠実に取り組むことにありと再確認しました。

悲劇に満たされたこの世界・社会において、絶望の内にある人びとのかすかな声に耳を傾け、声を出せない人びとの「声」となっていくこと。圧倒的に希望を奪われた状況の中に生きる人びとに対して、「にもかかわらず」、神の祝福“<いのち>の喜び”を語り続けること。それがたとえ、か細い声や小さな祈りであったとしても語り続けること。これらはわたしたちが、「いっしょに歩こう！プロジェクト」の働きから学んだことでもありました。

日本聖公会が新しい共同体となるために、わたしたちは過去の歩みを謙虚に省み、神への信頼と希望をもって歩みだします。キリストの救いと喜びをこの世に現すため、また sacrament をとおして与えられる神の恵みに多くの人びとを招くために、み言葉と礼拝への思いを深め、ともに祈ります。教会は、特に癒しと解放を求める人びとに心を通わせ、一人ひとりの<いのち>を宝とし、地域(パリッシュ)そしてすべての被造物とともに主の救いに与ることを願います。

わたしたちは、これからの十年間を『日本聖公会<宣教・牧会の十年>』と名づけ、日本聖公会のすべての信徒・聖職、教会・教区が心をつなげて、それぞれの場、それぞれの形で、以下の諸項目を中心とする<宣教・牧会>に徹底して取り組むことを提言します。その動きを推進するための機関を管区と各教区に設置し、相互に協力しながら新たな共同体づくりをめざします。どのような機関がふさわしいのかについては、管区においては常議員会に、教区においてはそれぞれのしかるべき機関に付託し、新たに歩みだすことを願います。

十年後に「2022年日本聖公会宣教協議会」を開催し、十年の間どのように<宣教・牧会>に取り組むことができたのかを分かち合うことを合わせて提案します。それは同時に、わたしたちの<宣教・牧会>の果実を刈り取る収穫感謝の祭りとなることでしょう。

今回の宣教協議会で話し合われたことを、聖公会が大切にしてきた教会の5つの要素、宣教(ケリュグマ)、奉仕(ディアコニア)、証し(マルトウリア)、礼拝(レイトゥルギア)、交わり(コイノニア)に基づいて次のように提言します。【()内はギリシャ語です】

1 み言葉に聴き、伝えること<ケリュグマ>

- ◇わたしたちは、すべての<いのち>の創造者であり、すべての<いのち>の尊厳を回復してくださる方であり、すべての<いのち>の導き手である、主なる神のみ言葉にたえず聴き従います。
- ◇信徒と聖職がともに、“ていねいな<宣教・牧会>”を担っていくため、信徒奉事者・伝道師・特任聖職などを含め、より多様な働きを作り出していきます。そのために必要な養成・訓練プログラムを整備します。
- ◇神学校での教育を教区や管区が積極的に捉え直し、日本聖公会として、聖職および神学教育指導者の養成に取り組むことを望みます。
- ◇東日本大震災被災地の現場における証言をとおして、「被災者に寄り添う主イエスとの出会い」の物語と聖書の物語を重ね合わせ、各々の地域(パリッシュ)で担うべき課題を明らかにします。

2 世界、社会の必要に応え仕えること<ディアコニア>

- ◇わたしたちは、自然と共生することで、地球の<いのち>を守ります。
- ◇困難な状況に置かれた人びととともに歩む中で、<いのち>より他のものを優先する社会に「否」を言い、社会的矛盾を明らかにする勇気を持ちます。
- ◇1962年に立教大学原子力研究所の開所にあたって「原子炉奉献の祈り」¹を唱えたことの問題性を認識し、「原発のない世界を求めて—原子力発電に対する日本聖公会の立場—」²で表明した内容を誠実に主張・追求・実践します。
- ◇これからも東日本大震災の被災者に寄り添い、ともに歩み、祈り続けます。「いっしょに歩こう!プロジェクト」が、その「活動方針(ミッションステートメント)」を大切にし、被災した人びとに敬意を払ってきたように、プロジェクトに区切りをつける2013年5月末以降も、被災地の人びととのつながりを尊重することを望みます。
- ◇教会の歩みの中で生まれてきた施設(保育園・幼稚園・学校・医療・福祉施設など)が宣教の働きであることを再認識し、地域社会においてそれらの施設と協働していきます。

3 生活の中で福音を具体的に証しすること<マルトウリア>

- ◇わたしたちは、それぞれの地域における多様な教会の姿が、<福音><宣教>であることを確認します。
- ◇これまでの教会のありよう(習慣や組織など)を尊重しつつ、現代に証しするために、それらを大胆に変えていく勇気を持ちます。
- ◇「どこで、誰と、どのように」を大切にして歩む教会のありかたを模索し、地域の必要に応えていきます。
- ◇誰にでもわかる言葉と方法で、信仰生活の魅力を伝えられるように努めます。

¹ アメリカ聖公会から研究用原子炉が寄贈された際の祈り/2001年稼働停止

² 2012年第59(定期)総会決議

4 祈り、礼拝すること<レイトウルギア>

- ◇わたしたちは、すべての<いのち>の尊厳に基づいた多様な礼拝・諸式の研究に取り組みます。
- ◇様々な状況で生きる人びとの必要に対応するため、礼拝の時間や曜日の検討、式文のデータベース化、選択肢が豊かな式文の作成、多様な礼拝音楽の研究に取り組みます。
- ◇礼拝における信徒の役割をより豊かにするために、必要なプログラムを整備します。
- ◇共同の礼拝をより豊かにすると同時に、各自の祈りをとおして、一人ひとりが霊的に成長することに励みます。

5 主にある交わり、共同体となること<コイノニア>

- ◇わたしたちは、すべての人の居場所・出会いの場となる教会の形成をめざします。
- ◇「高齢者」「青年」「女性」「男性」「子ども」「障がい者」「外国人」などとひとくりにせず、一人ひとりの生きている重みを尊重し、積極的な出会いの中から、いっしょに歩く交わりを形成していきます。
- ◇一人ひとりが宣教の担い手として、対等なパートナーシップのもとに協働していくため、ジェンダーの平等を保障し、いかなるハラスメントも起こさない共同体を築きます。
- ◇青年たちの声に耳を傾け、自主的な活動を尊重して支援します。
- ◇この世に仕える教会の形成のためには、様々な立場の人びとが、教会・教区・管区の意志決定機関へ平等に参画することが求められます。その一歩として、女性の比率が高まるように働きかけ、2022年までに少なくとも30%の参画³を実現し、さらに青年層の参画も推進します。
- ◇「聖職任せ」「信徒任せ」ではなく、一人ひとりが教会内外でともに牧会をするという意識を持ち、共同体全体が積極的に宣教の業に参加していきます。
- ◇一つの教会だけではなく、教会・教区を超えて積極的な関わりを持ち、互いの賜物を分かち合います。そして互いの違いを乗り越え、具体的に出会う機会を作り、教区間協働や教区の再編を目指して具体的な活動を推進していきます。
- ◇世界の聖公会と情報を交換し、互いに学び合い、協力し合います。
- ◇大韓聖公会やフィリピン聖公会をはじめ、アジアの諸聖公会との協働をさらに推進します。そのためにも、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」⁴のさらなる実質化を図ります。

2012年9月17日
2012年日本聖公会宣教協議会参加者一同

³ 2004年第49回国連女性の地位委員会に派遣された全聖公会中央協議会代表団による声明を受けた第13回全聖公会中央協議会の承認に基づく。

⁴ 1996年第49(定期)総会決議

日本聖公会〈宣教・牧会の十年〉提言に関するお願い

2012年10月25日

首座主教 ナタナエル 植松 誠



主の平和がありますように。

2012年9月14日～17日、静岡県浜名湖畔の研修施設「カリアック」において、2012年日本聖公会宣教協議会が開かれました。この協議会は、2008年5月の日本聖公会第57（定期）総会で開催が決議されたもので、全教区から主教をはじめ教区代表、管区の諸委員会、また大韓聖公会からの代表など、聖職・信徒約140名が集いました。

基調講演、東日本大震災被災地からの発題、バイブル・シェアリングなどを全員で聴き、それに続いてグループ協議が何回にもわたって持たれました。この、日本聖公会〈宣教・牧会の十年〉提言は、今回の宣教協議会で話し合われたことを、これからの日本聖公会のあゆみ十年間の指針となるべき提言としてまとめたものです。

1995年に開かれた日本聖公会宣教協議会では、戦後50年を迎える日本聖公会として、それまでの過去を振り返り、反省と悔い改めに立って、日本聖公会の戦争責任を告白し、その翌年の総会では、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」を決議しました。しかし、この宣教協議会での協議の結果が、また「戦争責任に関する宣言」が、日本聖公会の隅々にまで伝えられ、皆でそれを共有できたかと言うと、決してそのようにはならなかったというのが真実であったと思います。その点、今回の宣教協議会は、日本聖公会の全教区からの参加者が、それぞれの立場から熱心な話し合いを重ね、その果実として生み出されたのが、この提言であると言えます。

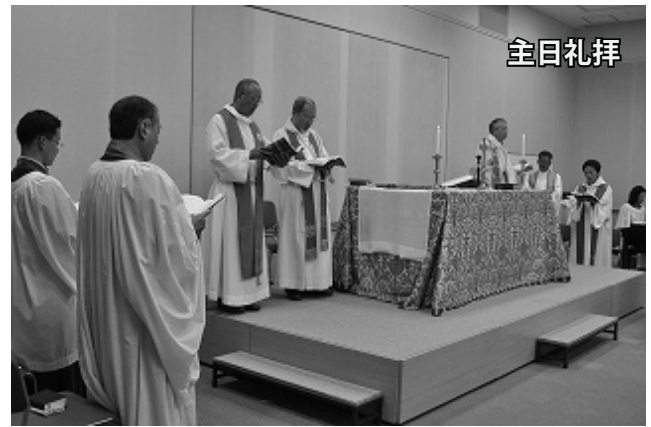
聖公会が大切にしてきた教会の五つの要素、〈宣教、奉仕、証し、礼拝、交わり〉について、多岐にわたる提言がされています。今後10年間にわたって、私たちはこの提言に取り組んでまいります。管区として、教区として、教会として、また個人として、この提言のどの部分に取り組むべきかの検討が始められます。提言を、それぞれのコンテクストに合うように再解釈することも必要でしょう。先週行われた日本聖公会主教会でも、この提言に関して、主教会として率先して取り組むべき課題について、研究を開始いたしました。

この提言は総会決議ではありませんが、それと同じような重さを持ったものであると信じます。どうぞ、皆様の教区、教会、施設、学校、集会などで、この提言を読み、学び、話し合っただけで、これからの宣教・牧会への方向が示されますようにと祈っております。

主の豊かなお導きと祝福がありますように。

在 主

■ 礼拝時の風景



2 実行委員長あいさつ

宣教協議会を主のお導きのうちに行うことが出来ました。感謝です！

宣教協議会実行委員長

主教 ガブリエル 五十嵐正司



2008年日本聖公会総会において、4年後の2012年に日本聖公会の宣教協議会を開催することが決められました。その準備として2010年にプレ宣教協議会が開催され、その準備のもとで宣教協議会開催が用意されていました。その準備の途中で東日本大震災の発生です。津波による被災また福島第一原子力発電所の事故による被災は、人の生きる基盤を根底から取り去るものでした。生きる土台を取り去られた人々との関わりはまさに「いのち、尊厳限りないもの」であることを知らされるものでした。教会は何をすることができるのか。それを協議する宣教協議会では、このことを抜きにすることはできませんでした。

そして用意され、実行された協議会がこの報告書となりました。参加された方々は3泊4日、研修施設から外へ出ることもなかったと思える程に、講演を聞き、報告を聞き、徹底的に話し合いをしておられました。その話し合いの中から「提言」の作成となりました。

協議会の始めには、どのようになるのか不安な中でのスタートでしたが、主は確かに、わたしたちとともにいてくださいました。

箴言「人間は心構えをする。主は舌に應えるべきことを与えてくださる。」(16:1)
この聖句を実感し、主に感謝いたしました。

今回の協議会では「いっしょに歩こう！プロジェクト」の働きを中心的に担っておられる長谷川清純司祭と越山健蔵司祭から、当事者としての思いと揺れる心と、しかし人々と関わり続けておられる働きを話していただきました。宣教、牧会のありかたに示唆を与えられるお話しでした。

シスター清水の講演は福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染の現状が、如何なるものであるのか、緊張して受け止めるものでした。日本聖公会総会で決議しました「原発のない世界を求めて一原子力発電に対する日本聖公会の立場」を内実化させねばならぬと思わさせられました。

西原廉太司祭の講演では、様々な示唆を与えられました。各個教会で受けとめられること、教区として、管区として考えるべき多くのこと、特に、教会として社会、世界に向けて「ていねいな牧会」を行うとの言葉は印象強く聴きました。

バイブルシェアリングでは笹森田鶴司祭の指導により、わたしたち人間が神様から委ねられている使命、被造物と共に生きて行く生き方を分かち合う時となりました。

宣教協議会開催は日本聖公会の各教会の人々の祈りと支えによって行うことができましたことを感謝いたします。また宣教協議会実行委員の方々の熱意と奉仕に感謝いたします。

3 宣教協議会プログラム

9月14日(金)		
12:00	※昼食 グループリーダー会	研修棟 第9研修室
14:00	受付	エントランス ホール
15:00	〈開会礼拝〉 司式担当/沖縄教区 説教/五十嵐正司主教	研修棟 3F
	〈オリエンテーション〉 武藤謙一司祭	研修棟 3F
16:00	〈特別講演〉 清水靖子シスター イエスの道を歩く ～未踏へのチャレンジ・ 未来の子どもたちのた めに原発を止めるため には	研修棟 3F
18:00	夕食	宿泊棟4F 大食堂
19:00	〈いっしょに歩こう!プロジェクト〉 からの報告 長谷川清純司祭・越山健蔵司祭	研修棟 3F
20:00	〈宣教協議会に向けて〉 野村潔司祭	研修棟 3F
21:00	グループリーダー会	研修棟 第9研修室
22:00	スタッフ会議	本部1107

9月15日(土)		
7:00	〈早朝聖餐式〉 司式/大畑喜道主教	研修棟 3F
7:45	朝食(8:30終了)	宿泊棟4F 大食堂
9:00	〈グループ討議〉 【I】	別紙
10:00	ブレイク	
10:30	〈基調講演〉 西原廉太司祭 わたしたちの「宣教」を思い 描くために -日本聖公会 の宣教の課題と可能性-	研修棟 3F
12:30	昼食	宿泊棟4F 大食堂
13:30	〈グループ討議〉 【II】	別紙
	(ブレイク)	
17:30	〈夕の礼拝〉 担当/神戸教区	研修棟 3F
18:00	夕食	宿泊棟4F 大食堂
19:00	〈バイブルシェアリング〉 笹森田鶴司祭 グループでの分ち合い (20:30終了)	研修棟 3F
	【III】	
21:00	グループリーダー会	研修棟 第9研修室
22:00	スタッフ会議	本部1107

9月16日(日) 聖霊降臨後第16主日(特定19)		
7:00	朝食(8:30終了)	宿泊棟4F 大食堂
9:00	<主日聖餐式> 担当/横浜教区 司式/三鍋裕主教 説教/加藤博道主教	研修棟3F
11:00	<グループ討議中間報告>	研修棟3F
12:00	昼食	宿泊棟4F 大食堂
13:00	<グループ討議> 【Ⅳ】 (ブレイク)	別紙
17:30	<夕の礼拝> 担当/聖公会神学院学生	研修棟3F
18:00 19:00	夕食・交流会	宿泊棟4F 大食堂
20:00 21:00	グループリーダー会	研修棟 第9研修室
22:00	スタッフ会議	本部1107

9月17日(月)		
7:00	<朝の礼拝> 担当/大阪教区	研修棟3F
7:45	朝食(8:30終了)	宿泊棟4F 大食堂
9:30	まとめ	研修棟3F
11:00	<閉会聖餐式> 担当/東京教区 司式/大畑喜道主教 説教/植松誠主教	研修棟3F
12:30	解散 ※13:30スタッフ会議	

4 2012日本聖公会宣教協議会に向けて

I 経緯

[1] 1995宣教協議会

1995年に清里にて行なわれた宣教協議会は、「歴史への責任と21世紀への展望」という主題で行なわれましたが、戦後50年という節目でもあり、これまでの聖公会の歩みを検証することに主眼が置かれました。この時、採択された「95宣教協議会宣言」に導かれ、翌年の1996年の第49（定期）総会では、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」を決議するに至りました。このことの重要性は言うまでもありません。これにより、韓国・フィリピンをはじめアジアの諸教会との交わりが深まりました。また、この宣言は、1998年ランベス会議で紹介され、多くの国の人々に感銘を与えました。

日本聖公会は、この宣教協議会及び戦争責任宣言によって、ある意味、21世紀に向かうあらたな教会の歩みのスタートラインについたかに思えました。

[2] 再び、宣教協議会の開催へ

1995宣教協議会から10年を経た頃から、当時、宣教協議会の開催を担った人々の中から、そろそろ宣教協議会以降の歩みや現状を総括し、次の歩みを検討する必要があるのではないかといった声が聞こえるようになりました。2009年には日本聖公会宣教150周年という大きな区切りの時も控えていましたので、新たな歩みを始めるためにも、新たなビジョンづくりが求められていました。

ところが、あらためて私たちの教会と社会が直面している状況を見ると、多くの課題に直面していることに気づかされました。

まず、日本聖公会では多くの教区・教会が、聖職・信徒の減少や高齢化、教会建物の老朽化や財政の逼迫といった課題に直面していることがわかりました。そして、それによって存続が危ぶまれている教会も生じていました。このことは日本聖公会の活力が急速に失われつつある現実を示していました。

他方、今日の日本社会においても様々な歪みが生じています。多くの人々が、長期にわたる経済不況によって、貧困、失業、家庭崩壊など様々な困難に直面しています。殊に高齢者や障がい者など社会的に弱い立場に置かれている人々にとっては、ますます生きにくい社会になってきました。人生に希望を見出せず、人や社会への信頼を失い、精神的な病を患ったり、自らの生命を絶ったりする人も少なくありません。また、無差別殺人など深刻な犯罪の増加もこのような社会状況と無関係ではないのかもしれませんが。

或いはまた、世界の各地では、依然として政治、宗教、民族、国家などをめぐる対立が続いており、未だ戦火が絶えることがありません。世界中のどこかで、毎日のように武力による犠牲者が生み出されています。

このような時代と社会において、今、私たちの教会に与えられた宣教（ミッション）とは何なのか、どのような働きや役割が教会に求められているのか、ということ、あらためて確

認し、共有する必要が生じてきていました。

このような問題意識に基づいて、日本聖公会正義と平和委員会が中心となり、2008年5月に開催された日本聖公会第57（定期）総会に、2010年にプレ宣教協議会を、また2012年に宣教協議会を開催することを提案し、可決されました。提案された「日本聖公会宣教協議会及びプレ宣教協議会開催の件」（決議第16号）には、下記のような提案理由が付記されています。

「1、私たち日本聖公会は、来年2009年、宣教150周年を迎える。しかし、日本聖公会の現状においては、信徒の減少と高齢化、聖職数の不足、教会建物の老朽化、財政の逼迫など様々な課題に直面している。聖公会全体が衰退しているかのようである。このような深刻な状況を克服し、未来を切り開いていくために、真剣な協議が求められているように考える。殊に主教会のリーダーシップに期待したい。

2、格差社会と言われる今日の日本社会は、様々な局面において二極分化している。所得格差、地域格差、教育や医療福祉の領域における格差などが、私たちの生活にも重大な影響を与え、病気、ストレス、家族崩壊、犯罪などの様々な問題の遠因となっていると言われていいる。このような社会における教会のミッションについて検討したい。

3、世界の各地で戦争や暴力が渦巻いている。1996年の管区総会にて、日本の戦争責任に関してアジアの諸国に対して公式に罪を告白し、謝罪をしたが、そのことを踏まえた働きが求められている。未来永久に日本聖公会が平和の器として、世界に対してはたすべき役割について検討する必要がある。」

[3] 各教区常置委員長及び宣教担当者の集い

上記総会決議を受けて、プレ宣教協議会実行委員会が設置され、準備が始まりました。同委員会では、プレ宣教協議会の協議の柱を見出すため、より具体的に各教区の現状を把握しようと考え、2009年1月に「各教区常置委員長及び宣教担当者の集い」を開催しました。各教区には、あらかじめ下記のような三つの質問を出ささせていただき、それに基づいて各教区の現状について分かち合いました。その結果、この「集い」においても、総会決議の提案理由に挙げられていた課題については、ほぼ各教区共通の課題として認識されていました。とりわけ、提案理由の1にあたる部分、すなわち「信徒の減少と高齢化、聖職数の不足、教会建物の老朽化、財政の逼迫など」の課題については、全く深刻な状況であることが確認されました。同委員会では、この時の「集い」の内容について報告書（レポート1）を作成しました。

また、プレ宣教協議会実行委員会では、各教区の財政・正義と平和などの教区担当者及び管区諸委員会、プロジェクト、関連団体などに対しても、同じく三つの質問について回答を寄せていただき、その報告をレポート2としてまとめました。

<三つの質問>

- (1) 貴教区（貴委員会）が直面している問題を三つ挙げてください。
- (2) これから取り組もうとしている宣教課題を三つ挙げてください。
- (3) 日本聖公会で分かち合いたい宣教課題を三つ挙げてください。

[4] プレ宣教協議会の開催

上記のような準備を経て、「宣教する共同体のありようを求めて」と題するプレ宣教協議会が、2010年8月18日～20日の日程で、富士箱根ランドスコールプラザホテルを会場に行われました。その内容については、すでに報告書が作成され、各教会に配布されていますし、この度の宣教協議会に参加される方々には、東京教区が作成した報告書（抜粋版）が配布されていますので、詳しくはそれらの報告書によって内容をお確かめいただきたいと思えます。ここでは、プレ宣教協議会における主なプログラムのねらいについて、短く説明するにとどめます。

(1) 講演

まず、講演を二つ行いました。ひとつは、西原廉太司祭による「聖公会が大切にしてきたもの」と題する講演でした。これは、様々な課題を抱える今の聖公会において、そもそも教会は、聖公会は、何を考え、何を大切にしてきたのかという宣教の原点を思い起こすことで、あらためて宣教の方向性を確認しようというものでした。西原司祭は、地域の教会の物語や、聖公会の時空を超えた歴史的なつながりや、聖公会の伝統、職務、神学、宣教理解などを通して、聖公会が大切にしてきた宣教の原点を示してくださいました。

もう一つは、榊茂樹さんという(株)野村アセットマネジメントのエコノミストをお招きし、「日本の経済・社会の現状」というテーマで講演をお願いしました。これまでの教会は、戦後のキリスト教ブームの頃に教会につながり、日本の高度経済成長期を担ってきた方々の力によって大きく支えられてきました。しかし、今、その方々は高齢化し、これからの教会を支える若い世代の方々は、現在の右肩下がりの経済状況において、就職難に直面し、或いは低賃金労働を余儀なくされています。都市化と過疎化も進み、様々な局面での社会の格差が広がり、貧困層も拡大しています。これからの教会の働きや存続の問題と、これからの日本社会がどうなっていくのかということは無関係ではありえないのです。そのような問題意識から、殊に経済的なアプローチの講演をお願いしました。

(2) 現場からの報告

実行委員会では、二つの現場からの報告をお願いしました。ひとつめは、福祉の現場、殊にお年寄りとの触れ合いの中で働いておられる鈴木育三先生（社会福祉法人榛名新生会、北関東教区執事）から、お年寄りの目線から見たときの教会の役割、存在意義について語っていただきました。もう一つは、大町信也司祭（北海道教区）から、牧会の現場から、殊にこの厳しい社会の現実と直面している人々と共にあろうとする教会の働き、課題そして希望などを語っていただきました。いずれも内容の濃い現場報告で、教会が直面している課題と方向性を示してくださいました。

(3) 分科会

プレ宣教協議会では、準備の過程で提出された様々な課題を下記のような10項目に整理し、それぞれのテーマに沿った分科会を用意しました。参加者の方々には、興味関心のあるテ

マを申告していただき、グループ分けをいたしました。

- ①貧困
- ②高齢化社会を迎えて
- ③正義と平和
- ④社会的少数者
- ⑤ストレス社会と心のケア
- ⑥青少年・子ども
- ⑦宣教の担い手を育てる
- ⑧教区・教会の財政
- ⑨礼拝と祈りの生活
- ⑩組織・教区間協働

①～⑤までは、今日の教会を取り巻いている様々な社会的な状況、宣教・牧会上の課題を取り上げました。いずれのテーマも私たちの生活と切り離せない重要な内容で、教会の宣教活動において避けて通れない課題です。また、⑥～⑩は、教会のなかで問われているテーマです。人材のこと、財政のこと、信仰生活のこと、そして組織のこと。いずれも日本聖公会が直面している課題です。日本聖公会の将来にとって、今、取り組んでおかなければならない課題です。

こうした課題について各分科会で話し合っていたいただき、方向性を示していただきました。

(4) メッセージ

2泊3日のプレ宣教協議会の閉会を前に、二人の方からメッセージをいただきました。一人は西原廉太司祭で二つのことを語られました。一つは聖公会の教会は「鳥の巣型」で行こうということです。鳥の巣は一本一本形が違う小枝で編まれていて、すぐに壊れそうに見えて、実はとてもがんじょうなのだそうです。また、1988年ランベス会議で提唱され、その後のACC-8(1990年)を経て、聖公会の「宣教の五つの指標」(下記)が決議されましたが、宣教協議会では、これの日本聖公会バージョンを作成したらどうかという提案をいただきました。

もう一人は植松誠首座主教からのメッセージでした。植松主教は、私たち一人一人が神様から遣わされた宣教の担い手、主イエスの使徒であり、プレ宣教協議会で話し合われたこと、分かち合われたことを各教会・各教区に伝える責任が参加した一人一人にあるのですと語りました。その意味で、来る宣教協議会にも全員が実行委員の気概をもつことを勧められました。

<宣教の五つの指標>

- ①神の国の福音を宣言すること
- ②新しく信徒になった人を教え、洗礼を授け、養育すること
- ③愛の奉仕によって人間の必要に応えること
- ④社会の不正な構造を変革するように努めること
- ⑤被造物の本来の姿を保護するように努め、地球の命を支え、新たにすること



Ⅱ プレ宣教協議会から宣教協議会へ

[1] 宣教協議会実行委員会の設置

上記のようにプレ宣教協議会を終えた後、新たに宣教協議会実行委員会が設置され、実行委員長には五十嵐正司主教（九州教区）が就任されました。そして、同年10月には第1回目の委員会が開催され、まずはプレ宣教協議会の振り返り及び報告書づくりの相談をしました。そして翌2011年1月に開催された第2回目の委員会では、日程を2012年9月14日（金）～17日（月）とすることを確定し、会場も静岡県浜名市の商工会議所福利研修センター「キャリアック」を第一候補とすることを決定しました。同年2月には第3回目の委員会が開催され、参加者の枠組みが決められ、予算をめぐる協議、また宣教協議会の素案作りも始まりました。そして2011年3月11日が来ました。

[2] 東日本大震災と福島第一原発事故

2011年3月11日（金）、東北地方、関東地方など東日本一帯を襲ったマグニチュード9を超える地震と太平洋岸を襲った巨大な津波は、特に岩手県、宮城県、福島県などを中心に大きな被害と犠牲をもたらしました。津波によって大切な家族や友人を失い、家や仕事が奪われ、1年以上を経た今も、多くの人々が悲しみと喪失感と先の見えない不安に脅かされています。また、この地震と津波によって重大な損傷を受けた福島第一原発から拡散した放射能は、福島県内にとどまらず、日本の土と海と空を広範囲に汚染し続けています。それによって生まれ育った故郷を失ったり、家族が離れ離れになったり、人々の生活や仕事に重大な影響を与えています。

この出来事を、私たちはどのように受けとめたら良いのでしょうか。大切な家族や友人の命を失い、悲しみのなかに置かれている人々に対して、教会は何を語り、何をなすことができるのでしょうか。また、美しい自然を放射能で汚染し、取り返しのつかない状況を生み出し

た人間の仕業を罪と言わずになんと呼ぶのでしょうか？

原子力発電の危険性は、従来から指摘されてきたことです。殊に日本は、広島・長崎における被爆を経験した国として、世界に先駆けて放射能汚染の深刻さについて、また原子力の危険性について、語り伝えるべき役割があったはずですが、しかし、その日本において、放射性廃棄物の処理方法も確立されないまま、これまで54基もの原子力発電所が設置されてきたのです。それは、私たちが、過去の悲劇に学ばず、便利で快適な生活を得るために、あえて原発の危険性に目をつぶり、発電所の建設を容認してきたことを意味します。そして、多くの場合、経済的に貧しい過疎地と原発維持のために駆り出されている不安定就労の労働者にそのリスクを押し付けてきたのです。

教会もまた、こうした問題について本気で取り組んできたとは言えません。このような生活、このような生き方が今、激しく告発されているのだと思うのです。今年5月に行われた日本聖公会第59（定期）総会では、「原発のない世界を求めて～原子力発電に対する日本聖公会の立場～」という議案が主教会から提出され、決議されました。その決議文の最後は、「私たちは教派・宗教を超えて連帯し、原子力発電所そのものを直ちに撤廃し、国のエネルギー政策を代替エネルギーの利用技術を開発する方向に転換するように求めます。そのために、利便性、快適さを追い求めてきた私たち自身のライフスタイルを転換することを決意します。苦しみや困難を抱える人々と痛みを分かち合い、学び合い、愛し合い、支え合って生きる世界を目指します。」と締めくくられています。

まさに私たちのこれまでのライフスタイル、価値観、そして教会が目指してきた方向性など全面的な問い直しが迫られているのだと思います。それは、私たちの教会が、どのような人々と共に歩もうとし、どのような教会の姿をめざしてきたのかというその内容が、今、問われていることに他なりません。私たちは、もはや、この東日本大震災と原発事故によってもたらされた事態と無関係にこれからの教会の在り方を考えることができないのです。

[3] 宣教協議会拡大実行委員会を経て

昨年9月26日（月）に各教区宣教協議会担当者の方々にお集まりいただき、宣教協議会拡大実行委員会が行われました。本来であれば、この集まりは、プレ宣教協議会以降、各教区で行われた取り組みを参考に宣教協議会の内容を作るべき機会でした。しかし、東日本大震災以降、何事もなかったかのように宣教協議会のプログラムを計画することはできませんでした。いったい東日本大震災が何をもたらし、また、原発事故によって人々がどのような状況に直面しており、そして、それらは教会にとって何を意味するのか、ということ、まずもって分かち合うことから始めようと考えたのです。

拡大実行委員会では、午前中に東日本大震災被災者支援活動「いっしょに歩こう！プロジェクト」の長谷川清純司祭から活動報告を受けると共に、越山健蔵司祭（郡山聖ペテロ聖パウロ教会牧師）と岩城聰司祭（大阪教区）の二人からは、原発事故による被害状況と課題について報告していただきました。そして午後からは、実行委員長の五十嵐主教から、東日本大震災及び原発事故に関する報告を受けて、またご自身の被災地訪問の体験を踏まえて、「神様から委ねられたわたしたちの働きは？」というタイトルで発題をされました。

上記のような報告と発題を受けて、宣教協議会の内容について話し合いをしました。その中で、東日本大震災と原発事故の状況と日本聖公会の宣教を切り離すことはできないけれど、そのような課題といわゆるパリッシュの現状とどのように関係づけることができるかという問題が提起されました。また、原子力政策は、沖縄の基地問題と構造が同じであるという沖縄教区からの指摘は重要でした。原子力政策と基地問題に共通する問題は、いずれも様々な危険が想定される施設ということで、中央から離れた、しかも経済的に貧しい地域に押し付けられ、その代償として与えられる莫大な交付金によってしばられていることです。それによって住民が逃れたくても逃れられない、反対したくても反対できない状況を作りだしてしまっていることです。そして、結果的に事故が起こると、真っ先に犠牲となるのはその地の住民のいのちと生活なのだということをあらためて学びました。

五十嵐主教による発題「神様から委ねられた私たちの働き」では、今、私たちにとっての宣教とは、東日本大震災によって被災し、大切な人々のいのちを奪われた人々の悲しみに寄り添い、原発事故によっていのちや生活を脅かされている人々の声を聴くことなのではないかと話されました。長谷川司祭や越山司祭を通して報告された「いっしょに歩こう！プロジェクト」の働きは、まさにそのような願いに基づいた活動でありました。

こうした分ち合いを通して、宣教協議会の方向性として「命（ぬち） どう宝」「いのちの尊さ」というテーマが共有されるに至りました。そして、更に話し合いを重ね、第8回の実行委員会にて、宣教協議会の主題を「いのち、尊厳限りないもの～宣教する共同体のありようを求めて～」とすることにいたしました。

[4] 宣教協議会の方向性について

(1) プログラム作成への模索

上記拡大実行委員会を経て、各教区担当者と共に、東日本大震災と原発事故によってもたらされた状況が、私たちの教会の在り方に根本的な課題を投げかけていることを確認しました。課題としては、その状況から問われていることと、プレ宣教協議会で分かち合った10の課題や、西原廉太司祭が示唆された「五つの宣教指標」とが、どのように内容的につながってくるかということの確認でした。

また、原発事故による放射能汚染の深刻な問題をキリスト教の立場に立ってどのように捉えたら良いかという課題については、長年、原発問題や環境問題に取り組んでこられたカトリック教会のベリス・メルセス宣教修道女会の清水靖子シスターの経験と思想に学びながら、私たち自身の立つべき位置や歩むべき方向について分かち合うことにいたしました。

(2) 特別講演

「主イエスの道を歩く

～未踏へのチャレンジ・未来の子どもたちのために原発を止めるためには～

講師：清水靖子 シスター

シスター清水は、カトリック正義と平和協議会が、京都大学原子炉実験所の小出裕章さん

の協力を得て作成し、2010年末に初版発行したリーフレット「原子力発電は“温暖化”防止の切り札ではない！地球上の生命環境にとって最悪の選択・・・」の作成チームのリーダーのひとりです。

彼女は、自然のうちに生きる神に出会い、神の宿る自然を大切にし、自然環境の保全を説いています。1980年にミクロネシアに派遣された時、日本政府が同地で進めようとしている「放射性廃棄物の海洋投棄計画」を知り、その反対運動を通して原子力発電の問題性に気づきました。

シスターが信じるイエスの神は、森羅万象と共にある神であり、自然の脆さをもち、苦しむものと共に苦しむ脆い神（fragile of God）なのです。その神が、今、人間の暴力によって傷つけられているのです。私たちの信仰においては、そのイエスの神と共に生きることが求められているのです。神と共に生きるということは、genuine（誠実に、本物として）に生きるということなのです。

福島第一原発事故とその後の政府や電力会社の動きによって、原子力発電所が利権やウソにまみれ、闇の部分の多い非常に不透明で、不誠実な産業であることを日本中の人々が知ってしまいました。神が創造した大地を汚し、生き物の命を奪い、人々の生活と未来を奪ったその不正義に対して、私たちは、本物の生き方によって（genuine）立ち向かっていくことが求められているのです。

シスター清水のお話は、きっと「宣教の原点とは何か？」「本物の生き方とは？」という問いを通して、私たちをキリスト者の原点へと導いてくれるだろうと思います。

（3）「いっしょに歩こう！プロジェクト」からの報告

次に、東日本大震災の被災地では何が起きているのか、また放射能汚染が何をもたらしているのか、そしてそれらは私たちの宣教とどのように結びついているのかといった事柄について、日本聖公会の東日本大震災被災者支援活動である「いっしょに歩こう！プロジェクト」からの報告を通して学びたいと思います。

①長谷川清純司祭

長谷川司祭は、同プロジェクトのプログラム・ディレクターとして、震災が起こった直後から仙台に駐在し、様々な支援プログラムを中心的に担ってこられました。長谷川司祭と被災者との様々な出会いが、このプロジェクトによる支援活動の広がりにつながりました。長谷川司祭によれば、その出会いは主イエスの導きによるものでした。主イエスは、プロジェクトのスタッフやボランティアが行く前から、嘆き悲しむ被災者の傍らに立ち、彼らが行くのを待っておられたのです。長谷川司祭たちは、何度となく、そのような場面に遭遇しました。

②越山健蔵司祭

越山司祭が赴任している郡山は、原発事故によって放出された放射線が比較的高い数値を記録しています。殊に教会に隣接するセントポール幼稚園は、ホットスポットとして新

間報道されたこともありました。その影響か、園児数も減少しています。被爆の恐れから郡山から転居する人々と転居したくてもできない人々との間に、人間関係の分断が生じたりしています。放射能汚染に伴う様々な苦悩と痛みを共有しつつ、これからの教会の働きについて分かち合いたいと思います。

(4) 基調講演

「宣教のありようを求めて～今日の教会に求められている役割」

講師：西原廉太 司祭

東日本大震災と原発事故による放射能汚染によって、あらためて私たち生きとし生けるもののいのちの大切さを心に深く刻みつけることになりました。私たちは、主イエスの人生そのものが、殊に小さくされた一人一人のいのちに寄り添うものであったことを覚え、教会として、あらためて「いのちの大切さ」を心に刻み、そのことを宣教の原点として、これからの教会の歩みに生かしていかなければなりません。

西原司祭は、プレ宣教協議会にて「聖公会が大切にしてきたもの」というテーマでお話してくださいました。それは、現実の教会が様々な課題に直面しているなかで、あらためて聖公会が何を大切にしてきたのかということをお考えさせ、私たちが新たな歩み始めるための方向を示してくださいました。

「聖公会が大切にしてきたもの」のひとつとして、「五つの宣教指標」がありますが、宣教協議会では、日本聖公会が直面している現実において、これらの宣教指標をどのように具体的に表現するかということも大切な課題となるように思います。

現在、日本聖公会の東日本大震災被災者支援活動「いっしょに歩こう！プロジェクト」による働きが被災地で行われています。教会の力はささやかなものですが、しかし、ひとりひとりのいのちに寄り添うことを願いながら歩んでいます。そこに大切な意味があるように感じています。これからの聖公会の歩みにおいて、どこで、誰と共に「いっしょに歩こう」とするのか、そのことを分かち合うことはとても大切なことです。西原司祭のお話はこの分かち合いのための重要な示唆と方向を与えてくださるのではないのでしょうか。

(5) グループディスカッション

この宣教協議会において、ある意味、最も大切なセッションは、このグループでの時間です。今回の宣教協議会のキーワードは「いのち」です。このことを常に念頭に置きながら、プレ宣教協議会で分かち合われた課題も含め、今日の教会が直面している様々な社会的課題、宣教・牧会上の課題について具体的な取り組みを提案します。また、教会の人材、財政、組織のことなど日本聖公会が直面している課題についても、具体的な提案をしていただきます。それらは、グループごとにまとめられて、全体への提案という形にしたいと思います。各グループには、あらかじめ指名されたリーダーがおり、具体的な提案まで導いてくださいます。各グループから提案された内容を更に整理し、日本聖公会が歩むべき指針としてまとめ、協議会全体からのメッセージとしたいと考えています。

(6) バイブル・シェアリング

私たちが信じる神は、この美しい世界を創造し、あらゆるいのちに息を吹き込まれました。特に人間には、この世界といのちを守るといふ特別な役割と責任を与えられました。しかし、それは決して簡単なことではありませんでした。人間は、その弱さのゆえに何度となくその責任と役割を放棄しようとしてきました。それどころか、人間は、しばしば、神からの委託を忘れ、自然を破壊し、いのちを奪ってきました。にもかかわらず、神はそのような人間を見捨てず、励まし、導いてくださいました。聖書に記されているイスラエルの歴史はそのことを示しています。

今、様々な困難に直面している私たちに、聖書はどのようなビジョンを指し示してくれるのでしょうか。講師の笹森田鶴司祭を通して、聖書に記された人々の信仰と歩みに学び、私たち一人一人が希望の道を見出し、歩み出すことができますよう願っています。

(7) 礼拝

礼拝は私たちの心を一つにし、神様のみ業に参与する力と勇気を与えてくれます。今、様々な危機と課題に直面している私たちは、共に捧げる祈りと賛美によって心を一つにして、力を合わせ、歩もうとしています。そこに希望が生まれます。

開会礼拝と閉会聖餐式の式文は、ウイリアムス神学館々長の吉田雅人司祭を中心に作成されます。また主日聖餐式と朝夕の礼拝は指定された各教区によって担当されます。礼拝の内容は担当者に委ねられます。朝夕の礼拝は祈祷書を用いても用いなくてもかまいません。多様な礼拝を通して、一致と豊かさを分かち合いたいと思います。そして最終日の閉会聖餐式では、共に主の聖餐に与かり、励まされ、それぞれが希望を携えて宣教の場へと漕ぎ出したいと願っています。

以上

2012年日本聖公会宣教協議会実行委員会



5 基調講演

わたしちの「宣教」を想い描くために － 日本聖公会の宣教の課題と可能性 －



司祭 アシジのフランシス 西原廉太

皆さん、おはようございます。西原廉太と申します、どうぞよろしく申し上げます。マイクのほうは大丈夫でしょうか？ 後ろのほうまで届きますでしょうか。はい。

1 はじめに

わたくしは中部教区の司祭でございます。今、立教大学のほうで教えておりますけれども。このような大切な、日本聖公会の宣教協議会の中で、講演をさせていただくというのはとてもプレッシャーでございます。わたし自身、未だにこの宣教協議会の狙いどころを理解していないというところがございます。何を、どこにフォーカスを当てればよいのかがちょっと掴めてないというところもございます。それで、もしかすると皆様のご期待に添わない話になってしまうのかもしれませんが、そのへんはちょっと、ご了承いただきたいと思います。しかしせっかく与えられました課題でございますので、話しをさせていただきたいと思えます。

そういうわけで、どこにフォーカスを絞るのかちょっとよくわからなかったものですから、だらだらと原稿を書いていたならば、そのまま載せていただいちゃったのですが。これもう笑うしかないのですけれども。48頁のものになってしまいまして、「ま、いいか」と。最初は削る予定だったのですけど。「ま、いいか」と、そのまんまもう、ちょっと時間もなかったものですから、出してしまいました。ですので、この中から少しポイントだけ絞って、掻い摘んでと言いましょうか、お話していきたいと思えます。お話できなかった部分は、分かりにくい文章ですけども、文章にしてありますので、またお時間のあるときにお読みいただければ、今後の議論のご参考にしていただければと思えますので、どうぞよろしく願いいたします。

主に後半の部分を中心にお話をさせていただきたいと思って、前半のほうはちょっと端折りながら、1時間半に収まらないかもしれませんが、ちょっとお許しをいただいとと思えますが、よろしく願いいたします。それでさっそく、余談が長すぎておるので、始めたいと思えますが。

わたしの原稿のほうの頁で、少しアナウンスしてまいりますので、みなさん一生懸命追ってください。

2 1995年日本聖公会宣教協議会で確かめられたこと

「1995年日本聖公会宣教協議会で確かめられたこと」(2頁)と書きました。これについては、野村先生からも昨日、あるいは五十嵐主教様も冒頭お話しなされたように、95年の宣教協議

会の流れ、これ大事である、というお話しです。わたくしも全くそのとおり。ここに宣教協議会の95年の報告書がございますが（これお持ちの方もたぶんおられると思いますが）、改めて、実は今朝、もう一度見ました。おもしろいですね。ただ、この95年の宣教協議会はやはり総会で決議いたしました。それで、もちろん先ほど言いましたように、なかなか、日本聖公会全体で受け止められたかという、そもそもなかったようなこと聞きましたが、ただし、この95年のときも、参加者は160何名だったかな？それで、ああ、そうだったなどわたしが思い出したのは、ゲストですね。今回も大韓聖公会から3名の方が来ていただきました、感謝をしたいと思います。この95年のときは、もちろん大韓聖公会から李在禎先生と来ていただきましたし、それからその他ゲストとして、NCC（日本キリスト教協議会）、そして海外からも、英国のCMS、SPG、それからカナダ聖公会、アメリカ聖公会、フィリピン聖公会、そしてWCC（世界教会協議会）から、ゲストが来ているのです。そういう意味では、まあすごかったなと思います。別に今回がそうじゃないと言っているのではないですが。かなり気合を入れてやったはずの協議会だったのです。この宣教協議会で確認されたことをやはり、わたしたちも、今一度確かめた上で、今回の宣教協議会を考えていくことは、とても大事な点があると思います。

わたしのペーパーの中で書かせていただいたのは何点かあるのですが。ことに、「日本聖公会の戦争責任」をめぐる（3頁）ということで話した。これは95年の宣教協議会をもとに、翌年の1996年の総会で「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」を決議いたしました。今この場にも、たくさんの韓国聖公会からの司祭さんがいて下さいます。それで、わたしたちの日本聖公会、それぞれの教区の働きをご一緒に担ってくださっております、ほんとに感謝をしたいのですが、そのことが実現する。あるいは主教按手のときにお互い、両国の主教さんたちが行き来するのも、できるようになっている、これはとても素晴らしいことなんです。こういうことができるのもやはり、この「戦争責任に関する宣言」、これがあつたからだということ、今一度わたしたち確認をしたい。そのように思います。

それからもう一つは、この宣教協議会の報告書がありますので、また、これを見ていただければと思いますけども。この17年前の宣教協議会（4頁）、すでに今回のわたしたちの宣教協議会で議論されるべき課題が、テーマとして実はほぼ出ているのです。問題は、それを、今わたしたちが、この17年の間にどのように取り組んだのかという検証が必要だと思います。

そして、殊に、この17年前の宣教協議会ですでに、昨日シスターがお話しなさいましたが、原子力発電の危険性を問うているわけです（4頁下）。教会として取り組むことの必要性についても議論をしております（5頁）。殊に、わたしが今責任を持っております立教大学の、原子炉の問題がすでに取り上げられております。もちろんこれ、稼働停止をしておりますけれども。問題はこの原子炉の経緯、ここに書きましたので改めてお読みしませんが、やはりこれは、重大なことであろうと思うのです。殊に、開所聖別式に原子炉を聖別しているわけです。そしてアメリカ聖公会の総裁主教の「原子炉奉獻の祈り」が奉げられた。

「全能の神よ、主はその栄光をまろもろの天のうちに現わし、アブラハムには燃ゆる柴のうちに、エリアにはいと細き静かなる声のうちに現したまえり。また、このわれらの時代には大いなる原子力のうちに、自らを示したまう。」

という祈りを奉げているのですね、これはやはり大きな問題。当時の時代状況があるとはいえ、考えなければならない。これ、昨日も首座主教にご指摘いただいて、わたしもそう思っているのですが、「アブラハムには」って、これちょっとモーセのまちがいではないかと思っているのですけども。実は、出典は何かと申しますと、1962年5月に出されている立教学院の『チャペル・ニュース』です。チャペル・ニュースのタイトルは「立教大学の原子炉竣工感謝礼拝」のために寄せられた米国聖公会総裁主教 A. リヒテンバーグ氏の「原子炉奉獻のための祈祷文」という、そういう記事があります。これと同じものが、別の冊子で、立教大学広報課が出した『立教大学原子炉研究所』という広報誌にも載っています。昨日も、実は学院誌の関係者に聞いて確かめてもらったのですが、アブラハムになっているのですね。推察するに、たぶん訳すときにまちがえたか。実は原典をたどれてないのですね。なので、アメリカ聖公会の、ちょっとわからないのですけれども。まあモーセだと思うのですが。いずれにしても問題は、こういう祈り、公共の祈りを奉げたということを、どうわたしたちが考えるかということだと思います。

3 「日本」というコンテキストで宣教することとは

そして、日本というコンテキスト(文脈、状況)で宣教するとはどういうことかということ、5～9頁にわたって書いています。これはもうお読みください。ただ、わたし、そもそも日本の宗教性とはいったい何なのかということ、やはりわたしたちも、聖公会だけではなくて、他の教派の先生方と共に、検討することはとても重要なことではないかと思います。お読みはしませんが、やはり大事な要点だろう。特に日本の社会システムは、実は16世紀から現在に至るまで、一貫して大きな変化を望まないものであったという分析も、これはある見方だと思います。ですから結局、キリスト教に隙間を与えるものではなかったのではないかとこととか、日本人の宗教性というのはそもそも「触らぬ神にたたりなし」ではないですが、わたしたちの考えているキリスト教の宗教性とは対極的な要素があるので、むしろ意外に健闘しているほうではないかという、そういう見方もできるのではないかと。だから、わたしたちが一生懸命やってもなかなか信徒が集まらない(もちろんわたしたちの問題ではありますが)、しかし、もともと難しい土壌で、わたしたち日本聖公会も宣教、伝道にあたっているんだということは、ふまえておいてよろしいのではないかというふうに思いました。

それから「日本のプロテスタント諸教会における『共同体性』の回復」という。ここも、個人的にはほんとに興味を持っている点でございます。またこれもお読みいただければと思います。

4 アングリカン・コミュニオンの宣教理解

「アングリカン・コミュニオンの宣教理解」(9頁)ということですが、これ、プレ宣教協議会のときに話題になりましたし、あちらこちらで、もうすでに取り上げられている事柄ですので、ご存じの方も多数だと思います。

■アングリカン・コミュニオンの「宣教の5指標」-5 Marks of Mission-

アングリカン・コミュニオンの「5 Marks of Mission」と言われる、「宣教の5指標」を全聖公会的に大切にしております。それは何かと申しますと（10頁）。

＜アングリカン・コミュニオンの宣教の5指標＞(5 Marks of Mission)を、改めて、ここだけお読みしておきますが。

- ① 神の国の福音を宣言すること。
- ② 新たな信徒を、教え、洗礼を授け、養うこと。
- ③ 愛の奉仕によって人間の必要に応えること。
- ④ 社会の不正義な構造の変革に参加すること。
- ⑤ 被造物の完全さを守り、地上の命を保持し、新たにするために努力すること。

ということですね。プレのときにもお話しさせていただいたかと思うのですが。やはり、わたしたち日本聖公会の、特に今回の宣教協議会の課題は、この5指標を、ただ単に、そのままコピー&ペーストするのではなく、わたしたち日本聖公会や日本のコンテクスト（文脈）の中で、いかにこの5指標を解釈し、独自の言葉に練り上げることができるかどうか、ということだと思います。この5指標、翻訳なので、これ自体も、もう少し分かり易く、訳しなおす必要があるだろうと。実は来る直前に、神戸教区の教区報を拝見したら、中村主教様が、大変分かり易い言葉で直されていますね。ちょっと放り込む時間がなかったのですが。ぜひ神戸教区報を改めていただいたらと思いますが。日本語にちゃんと直すって作業というのはとても大事だし、内容はそれも大胆に解釈していくことが大事だというふうに思っています。

しかし、どの管区でも「5 Marks of Mission」が基本的なスタンダードとして大事にしていることを、わたしたちも大事にしたいと思います。それで、この「5 Marks of Mission」をもう少し理解する上で、参考事例として、ここには、英国教会の事例、それからウェールズ、カナダ聖公会の事例を紹介いたしました。

■英国教会の Parish and People 運動

まず英国教会の Parish and People というものがあります（10頁下）。小さな運動なのですが、しかしこれはとても大きな、グループとしてはとても小さいのですよ、けれどもインパクトはかなり大きなものがあります。この運動は、ケラム修道院のガブリエル・ヒーバート (Gabriel Hebert) 司祭さんですとか、ヘンリー・キャンドール (Henry de Candole) 主教様だとかが始めたリタージカル運動（典礼刷新運動）とも絡んでいるものなのですけれども、ちょっとご紹介いたしました。この11頁あたりはどうぞまたお読みください。

この Parish and People の運動（12頁）は、先ほどのアングリカン・コミュニオンの「宣教の5指標」、もちろんこれは本質的な宣教基準として大きな評価を与えられておりますけれども。面白いなと思いましたが、Parish and People が言っているのは、この5つがバラバラに置かれてはいけないというのですね、それが大事なのだ。そうではなくて、宣教の

5 指標それぞれが、1 本 1 本の紐っていかロープといいますか、それらが撚り合わされて、一つのがっしりとした「ロープ（綱）」にならなければならないのだと。どの 1 本がかけても切れちゃう。そうではなくて、5 つがしっかりと絡まりながら一つの太い綱となるという、そういうイメージなのだ。これはわりあい、大事にしたいなというふうに思います。

こういう理解は、もちろん Parish and People が最初に言ったわけではありませんで、実はアングリカンの、聖公会の伝統的な教会論（これはもちろん聖公会のみではないのですけれども）の中に含まれているのだと思うのです。特に古代教会以来、教会の指標はいくつかあるのですけれども。一番有名なのは 4 指標ですね。①ひとつの (one)、②聖なる (holy)、③公の (catholic)、④使徒の (apostolic)。我が聖公会、英国聖公会もそうですが、漢字圏の聖公会という名前を付けているのは、まさに教会そのものをあらわしているのですけれども。これが有名な 4 指標ですが、それに加えて教会の 5 つの要素というのがあります。聖公会はとても大事にしているわけですが、ギリシャ語ですけれども、①ケリュグマ (kerygma)、②ディアコニア (diakonia)、③マルトウリア (martyria)、④レイトウルギア (leiturgia)、⑤コイノニア (koinonia)、というこの 5 つですね。これは端々に出てまいります。これは実をいうと、先週まで行っていました W C C（世界教会協議会）という、この地上にあるほぼすべての教会が加盟している共同体ですが、その場でもあちらこちらでこの 5 つが出てくるのです。やっぱりこれは、近年、全教會的に改めて確認されているキーワードではないかと思います。

あえて簡単に言ってしまうので、先生方の中にはそうじゃないだろうというふうにお叱りをうけるかもしれませんが。わたしの理解では、

- ① ケリュグマ (kerygma) は「み言葉を宣べ伝えること」。
- ② ディアコニア (diakonia) は「この世界、社会の必要に応じて奉仕すること」
- ③ マルトウリア (martyria)、「この世界、社会に対して、福音を具体的に証しすること」。
このマルトウリア (martyria)、これは「殉教」の語源なのですけれども、これはちょっと理解が難しいと思いますけれども、存在そのものが福音の証、そういったことが言えると思います。
- ④ レイトウルギア (leiturgia)、「祈り、礼拝すること」。
- ⑤ コイノニア (koinonia)、「交わり、共同体」、をそれぞれ意味するということ。

でございます。

で、この関係性については実はさまざまなパターンといいますか、見解がありまして、神学者によってもずいぶん違います。教派によってもずいぶん違いますね。ただわたしの理解では、こういうような関係じゃないかなと思うのですが。つまり、み言葉（ケリュグマ）があり、奉仕（ディアコニア）があって、証し（マルトウリア）があって、そのいずれの要素が欠けてもならない。大事なことはそれら全てが礼拝、祈り（レイトウルギア）とつながっている、ということですね。これ、ちょっと誤解をされる方が結構おられるのですが、なぜかという、あの中に「祈り」がないのです、礼拝がないというね。アングリカンでも、たぶん考え方としては、実は大前提として祈りがあるのです。それらが宣教的理解。表現としてはやはり、このように、明確に、レイトウルギアっていうものが全てを包むというイメージのほうが分かり易いのではないかというふうに、あるいは大事なのではないかというふう

に思います。そしてそれら、ケリュグマ（み言葉）、ディアコニア（奉仕）、マルトウリア（証し）、それらをつなげた、つながったレイトウルギア（礼拝）を包んだもの全てが、コイノニアという交わり。つまりわたしたちの教会ではないか。

ですから、そういうある種のバランスというところちょっとへんになっちゃうのですが、どれが欠けてもいけない。もちろんどこかに強調点があることはある。ディアコニアにより強調点がある場合にも必ず、み言葉があり、証しがあり、礼拝に参加できる。場合によってはみ言葉に強調点がある場合もあるかもしれない。その時も同時に、ディアコニアやマルトウリア、そしてレイトウルギアを維持する。そういうことなのだろう、それが、わたしたちの考えるべき宣教の基本なのではないかというふうに、個人的には考えます。

なので（13頁）（これはわたしの勝手なものなのですが）これらをもし考えると、わたしたちの宣教のチェックリストみたいなものができるのではないかと思います。わたしたちの教会は、①み言葉に聴き、また伝えているだろうか（ケリュグマ）。②世界、社会の必要に応え仕えているだろうか（ディアコニア）。③日常の生活の中で、証しをしているかどうか（マルトウリア）。④これらすべてのことを、礼拝、聖餐の中で祈りとしているかどうか（レイトウルギア）。⑤これらすべての要素が欠けることのない交わり、共同体となっているかどうか（コイノニア）。ということ、それぞれ少し確かめてみることも、ある種の意味があるのではないかと思います。ただこれはわたしの一つの思い考えで、今回のこの宣教協議会は、たっぷりとグループ討議の時間がこれからあると思いますので、みなさんそれぞれの中で、日本聖公会独自の〈宣教の道しるべ〉を、紡ぎ出せるといいなあというふうに思っております。

■ウェールズ聖公会の宣教ヴィジョン Church in Wales Review – July 2012

ウェールズ聖公会の宣教ヴィジョン（13頁中ほど）を、ちょっとご紹介したいと思います。ウェールズ、ご存じのように第104代カンタベリー大主教ローワン・ウィリアムズ (Rowan Williams) さんのご出身ですが、この新たな宣教ヴィジョン。これちょっとこちらに持ってきましたけれど「Church in Wales Review – July 2012」、これ43頁の報告書が出ていますが、これがつい最近、7月20日、出されました。これはかなり、世界的に評価されてきています。まだいくつかのコメントしか見ていませんけれども、重要な資料になると思います。

近年、ウェールズ聖公会は数多くの聖職者が引退されたり、聖職志願者の減少とか、ウェールズでも一人の牧師さんが三つも四つも教会を管理しているという（どこかで聞いたことがあるような）、そして若者がいない、財政が圧迫されているという、そういう問題に直面しておりまして、「もはやこれまでと同じやり方では立ち行かない」ということを2010年に確認をして、大胆な改革が必要だということで、このレビューが出されるに至ったわけなのです。これは巻末のほうにちょっと抄訳なのですけれども、（完全な訳ではございません、原文はまたウェールズ聖公会のホームページで、ウェブサイトで見ただけだと思いますが、）ほぼ網羅しております。このお話の中では時間がありませんので触れませんが、ちょっとなかなか刺激的なこともありますのでまああとで。マイクを通していうとちょっと憚る話もござい

ますので。ただ、それだけ大胆にウェールズは真剣に考えているということなのですね。また、ご参考にしていただければと思います。これもちょっといくつか取り上げてみたいと思うものを。

やはりこのウェールズ聖公会の報告が提言しております大事なポイントは、さまざまな教会の働きの中で、より信徒の奉仕職、信徒が働くことができなければならない、奉仕職を皆が担うことです。それは当たり前だろうというふうに言われるかもしれませんが、なかなか、やはり聖職中心主義がウェールズに長く続いておりましたので、信徒の働きの重要性を再確認しているということでございます。

特に提言がいくつかありますけれども、例えばこれはおもしろいなと思いましたのは、「教区諸委員会、機関のメンバーになる者が選挙で選出される場合には、候補者は必ず短いマニフェストを明らかにする」のです。「自身が教区の直面する諸課題に対し、どのような見解を持っているのかを公表することを義務付ける」というのですね。その方がどういうヴィジョンを持っているのか、それを、信徒も、聖職はもちろん、表明しなければならないというのですね。日本聖公会でも常置委員など選挙しておりますけれども。教区会で、いちいちマニフェストを、って。終わらないじゃないかって、そういう物理的な問題もありますし、なかなか難しいかもしれませんが。しかしその意味は、やはり共有してもよいのではないかといいうふうに思いました。

それから、「一人の司祭が一つの教会を牧会、管理することはもはや今後のウェールズ聖公会ではあり得ない（言い切っています）。大胆な改革が必要である」。(14 頁一番下のパラグラフ)。「パリッシュ (教会区)」。教会が置かれておりますよね、わたしは日本聖公会中部教区の岡谷の教会の管理牧師ですが、岡谷のパリッシュは、だいたい北は塩尻あたりから南は駒ヶ根とか、そういう範疇で何となくエリアがありますね。それを教会区、パリッシュと言いますが、そのパリッシュではなくて「より広いエリアを考え、一人の司祭ではなく、異なった賜物を持つ者たちによるチームで」やっていきたいと。そのエリアをウェールズ聖公会では、「今後は【ミニストリー・エリア (Ministry Area)】と呼ぶ」と言っています。「これはこれまでも為されてきた単なるチーム・ミニストリーの奨励ではなく、ウェールズ聖公会全体で公式的、組織的に新たに導入する「仕組み (ここが大事)」なのだ」と、スキームなのだということですね。それぞれの「ミニストリー・エリア」には (15 頁) 明確な宣教目標が立てられる」。ということは、「ミニストリー・エリア」ごとに目標が違っていいのですね。どちらかという、何が課題かということを確認に考えなければならない。そして、この「ミニストリー・エリア」の運営は、聖職、信徒から構成される「リーダーシップ・チーム」で行うのだということです。で、「ミニストリー・エリア」における「リーダーシップ・チーム」の内、3 人だけは有給のポストだということ。これ 7, 8 人で構成されていくのですけども、そういうような構成になっている。ウェールズ聖公会でさえも、ということなのですが、「もはや一人の聖職が一つの教会を牧会することが不可能になっている」。こういう「ミニストリー・エリア」という考え方が出てきたということなのですね。

このような、複数の教会を複数の聖職で、信徒で運営しようという考え方は、わたしたちの中でも前からありました。今回、総主事さんをお願いして、今回の宣教協議会のために各

教区で行われてきた、各教区の宣教協議会の報告書を読ませていただきましたら、それぞれの教区で同じような発想といますか、もうすでに出されております。ですけれども、ウェールズの場合には、それを管区的に制度化したいということですね。

で、聖職のみならず、この「リーダーシップ・チーム」に任命された信徒も、その信徒の属している自分の教会だけではなくて、「ミニストリー・エリア」内にある全ての、他の教会も、運営や牧会に責任を持つということなのですね。なので、ウェールズでは今後は、一教区単位で宣教を考えるのではなくて、すべてこの「ミニストリー・エリア」を基礎的な単位としてやっていきたいというふうに、考えておられるということなのです。

わたしたち日本聖公会、教区の状況がちょっと違いますので、一概に管区レベルでというわけにはいかないのかもしれませんが、しかし管区的な仕組みを何かしら取り入れていくという、これは法憲法規も変わりますけれども、やはり考えるような時期にきているのではないかなというふうに思います。

この「リーダーシップ・チーム」っていうのはとても重要なので、また巻末につけました資料をご参考いただければ。この中で特に重要なのは、次のところ「聖職評価システム」。信徒が大事だと言っていますけれども、では聖職は何もしなくていいではなくて、プロフェッショナルの聖職の役割は逆に、重要になるのです。ファシリテーター、コーディネーターとしての、聖職の役割が極めて重要である。そのための神学教育をしっかりとしなければいけない。しかし同時に、「聖職評価」という言葉が出ているのですね。これがなかなか、わたしも含めて、ちょっと刺激的なのですが、「360度審査」という、どういうこと？みたいな感じですが、そんなことを言われています。「聖職評価」と言いますと、刺激的なのですけども。これ、内容を見てみますと、いわゆる教役者の継続教育であると同時に、大切なことは、それぞれの先生方が自分に与えられた特別の賜物や役割を再発見する。そして、自分自身の召命感をもう一度確認することなのですね。自分自身の生き方をもう一度整えるという、そのことを定期的にちゃんとやらなければいけない。そのことを求めています。ウェールズ聖公会も、この「ミニストリー・エリア」の成否は、実は「一方で、フルタイム聖職の働きにかかっているのだ」ということなのですね。これは、わたしたちの聖公会も検討すべきテーマだろうと思います。

青年たちとのつながり（16頁）。もちろん大切な事柄でございます。礼拝が魅力的なものになっているかどうか。そして、「リーダーシップ・チームを構成する信徒奉仕職にも十分な教育訓練を取り入れる」（16頁の下）ということですね、そのためのスキーム（仕組み）も開発するということです。

これもちょっと面白いですね。ウェールズ聖公会は6教区ですが「教区数は変更しないで、より効率的に運営するために、3運営センターを設定する」（17頁）ということ。教区主教の数も変更しない、けれども運営は三つで行うという。そういう提案がなされています。ウェールズの地形を皆さんご存知の方ですか、団子みたいなどころなのでかもしれませんが。日本のようなパーッと長いところはなかなか難しいかもしれませんが。しかし、ちょっとここに、お読みしますが、ちょっと暇つぶしで書いた感じですが、日本聖公会の教区再編の参考にもなるのではないかという意味も含めました。

そして、「大聖堂」（主教座聖堂）の役割はより重要なものとなる」（17頁の最後）。これも、日本聖公会においてもすでにいくつかの教区が試みられていることとございます。この「主教座聖堂」の意味と機能を、より積極的に回復していくことが求められる（18頁）。これも、もう一度わたしたち、確認をしていくといい事柄ではないかなと思います。ちょっとここで、一部しかご紹介いたしませんでしたが、巻末につけました資料、またお時間のあるときに見ていただいて、これは参考になるのではないかと、話の材料にさせていただければというふうに思います。で、ここにも出ているのですが、アイルランドの聖公会も大きな提案をしていまして、そのことも言及されていますので、またそこもちょっと、関心をもっていただければと思いますけれども。

■カナダ聖公会 Vision 2019

カナダ聖公会の話（18頁）になりますが。カナダ聖公会は、2010年6月に、Vision2019と題された宣教大方針をカナダ聖公会総会において決定をいたしております。これも、ちょっと持ってきて、ファイルに綴じていますけれども、こんな分厚いですね。全部で66頁にわたっているものですが、これは、カナダ聖公会が置かれている状況を、かなり細かく分析、調査したうえで、2019年の時点で、カナダ聖公会がどのような姿になっているのかを描いているのです。で、そこから逆算して、それぞれの年度において、どの課題をどこまで取り組む必要があるのかという、マイルストーンですね、タイムラインを明確に示しています。これは、こちらの資料の最後の48頁、ちょっと最後の資料3を見ていただければと思いますが、これは一例で。こちらのほうの本体には細かく、他の項目にわたってタイムラインを示されていますので、関心のある方は、やはり、カナダ聖公会のウェブサイトをご覧くださいければと思いますが。これ見ていただきますと、上に「Preliminary Timeline for Vision 2019 Priorities and Practices」。そして、2010年から2013年はこう、2013年から2016年はこう、2016年から2019年はこう、で、結局2019年までのアウトカウント、こうなっているという話ですね。ここで例として挙げたのは、第4番目の課題として「Work toward peace and justice」平和と正義に向けての働き、5番目「Engage young people in mutual growth for mission」青年活動ですね。これらの課題について、それぞれの、13年までにこう、16年までにこう、19年にはこうなっているという、これをタイムラインで示しています。もちろんカナダ聖公会もこの通りいくとは思っていませんよ。思っていないが、しかしこのカナダの大事な点はですね、内容もさることながら、この議論を総会で行って、シノッドで行って、そしてカナダ聖公会全ての教区、教会、信徒、聖職が、2019年のヴィジョンに向けて、一体となって邁進していくのだということです。ある意味、拘束力を持っている。決議しているのです。だから各教区、教会とも、このタイムラインを踏まえて宣教にあたるのです。カナダ聖公会の現状はとっても大変で。18頁の一番下の注の20番にちょっと言いましたけれど。データですね、信徒数が、1961年時点で、1,358,000人だったのが、2001年時点では、641,845人、半減しているのです。これってどうですか、皆さん。わたしたち日本聖公会、信徒が減っている、減っているって、まあ5万人が4万人とかね、そんな感じですよ、

でもね。だから、この激減のしかたっていうのは、やはりカナダの聖公会の皆さんが、危機感を感じられるのは当たり前なのかもしれませんが、それだけ真剣です。もちろん、だから日本聖公会はましではないかということではなくて。わたしたち日本聖公会も、カナダの真似をする必要はないのですけれども、特に今回の宣教協議会では、とても期待をしておりますけれども、少なくとも、このような意味合いを持つ確認をしたいですね。なんかちょっと大きな研修会で終わってしまったらもったいない。せっかくこれだけの皆さんがお金をかけて集まって来られているわけですから、少なくとも、わたしたち日本聖公会（これは個人的な思いですけどね、字句になるようなものを、摺合せはしていませんが）、これからの10年ぐらいの方向性を導く、何かしらの道しるべを、今回の宣教協議会のこの場で、描きたいですね。で、それを、それぞれ持って帰りたい。べつに総会でないので、拘束力はたぶん無理ですけれども。しかし、いわば日本聖公会のヴィジョン2022というのでしょうか、2022年以後を共に描く、そのような会になればいいなあというふうに思って、願っております。と言いましても、わたしの方に何か回答があるわけではありません。こうしてくださいという話ではなくて。でも、皆さんとご一緒に、この三日間、日本聖公会のヴィジョンを共に描きたいと願っております。

5 「いのち、尊厳限りないもの」～WCC第10回総会との関連で～

「いのち、尊厳限りないもの」(21頁)。これは実は、今回テーマがこうなっているんですね、「いのち、尊厳限りないもの」ということで。これわたくし、ちょっと悩んじゃって。主題講演というのですから、ほんとはこれをテーマにしなければならなかったと思うのですが、ちょっとわたくしなかなか。他にですね。でも何にも触れないわけにはいかないとって、ここに無理やり入れているような感じですが、しかしとても大事なことです。

これ、やっぱり言うまでもないことですね。「いのち、尊厳限りないもの」。そして同時に、このテーマは、実は世界の教会が、今、一番大事にしたいテーマなわけですね。

ここでちょっと紹介をさしていただいたのは、WCC (World Council of Churches = 世界教会協議会) の議論の流れを、21頁のところに少し書かせていただきました、後でお読みいただければと思いますが、22頁のところをちょっと見ていきますと。

わたし先週まで、ギリシャのクレタ島に行っていたのです。何をしに行っていましたかと申しますと、WCC (日本から正加盟している教会は、日本聖公会、日本キリスト教団、日本ハリストス正教会、そして在日大韓キリスト教会、4教会ですけれども) の中央委員会に行ってきました。わたしは日本聖公会の代表ですが、日本からは中央委員に一人しか送れない。前回の2006年のブラジルで行われた総会で、日本からは、わたしが行くということになりましたので、日本の教会を代表して、中央委員会に参加させていただいているということになります。

今回の中央委員会の大きな課題は、次回のWCC (世界教会協議会) の第10回総会について。実は来年の (これ皆さん、ぜひ記憶してください) 2013年10月30日から11月4日にかけて、記念すべき第10回総会が、お隣の韓国の釜山で開催されます。韓国の教会のみなさ

んが、一生懸命誘致をされて、そして決まったわけなのですね。現在、きょう柳時京先生はじめ、韓国聖公会の皆さん来られていますけれども、韓国の皆さんを含めて、とても重要な準備の働きを、韓国聖公会もなさって、お忙しくされておられます。釜山はお隣、わたしたちにとりましては一番近い外国です。なので、いろんな形で参加が可能なので、ぜひ皆さんも関心を持ってつながっていただければというふうに思います。今回のテーマが、「いのちの神よ、わたしたちを正義と平和に導いてください。」ということなのですね。あらゆる<いのち>への配慮を求めること。このことをわたしたちは、世界の教会と共に確認をいたしまして。こんな素敵なポスターですね、少しコピーしてきましたが。ちなみに、今回のW C Cの総会は東北アジアで初めて開催されるのです。この総会のプログラムの中にも、もちろん、いのちの問題がありますが、それだけではなくてもう一つのメイン課題としては、朝鮮半島の平和と統一の問題です。これを世界の教会と共に確認するということですね。これはわたしたち日本聖公会、大韓聖公会、一緒に。来年4月、沖縄で、大会とも連動するものだろうと思います。

そして23頁の一番下の注25にちょっと書きましたが、青年たちのスチュワードを募集されております。それから、実はクレタ島の今回の中央委員会で聖公会の関係者の集まりが持たれて、そこで紹介された話なのですが。来年3月頃に新しい第105代カンタベリー大主教が着座されるかもしれない。いずれにしても、その頃には、カンタベリー大主教決まっているかもしれません。その新カンタベリー大主教が、W C Cの釜山総会に公式訪問される可能性がひじょうに高いです。そういう意味でも、新しいカンタベリー大主教さまとわたしたちの接点がこの機会にもある、可能性があることをお憶えいただけたらというふうに思います。

6 「牧会的配慮」(Pastoral Care)としての聖公会の宣教理解

さて23頁の6番のところですが。ちょっとこのへんから多少、ゆっくりやりたいと思います。

牧会的配慮(Pastoral Care)としての聖公会の宣教理解ということです。これはわたしの小さな本とか、一昨年のプレ宣教協議会でもお話しさせていただいたことで、本をお読みいただいた方や、プレに出られた方には、また同じ話かというふうにとられるかもしれませんが、大事なことだと思いますので、もう一度、そのお話しさせていただきたいと思っています。

■ 聖公会の「パリッシュ制度」と「牧会的配慮」

先ほど言いました「パリッシュ制度」というのが書かれています(24頁)。これは、もともとは国教会だった英国で発展した制度です。では、「国教会でない教会がパリッシュというものを持つ必要があるのか」という議論があるのですけれども。最近のアングリカンニズム、聖公会のさまざまな神学的な議論の中でも、「いや、これはやはり意味があるのではないか。意味を取り出して、再解釈する必要があるのではないか」という、そういう議論がございます。

と申しますのも、こういうことなのですから。国教会としての英国教会は、数世紀前までは、国教会ですから国民全部が信徒なのです、そういう建前ですね、そういう前提条件。ですから、英国教会にとって“pastoral care”（牧会的配慮）というのは、信徒さんへのケア＝国民全員に対する配慮だったということです。それは同時にパリッシュと同じことで、地域住民全員が信徒ですね。ですから、わたしたちも同じように、岡谷の管理牧師ですと、伊那に住んでいらっしゃる信徒さんのところを訪れて「お元気ですか？」と。あるいは、駒ヶ根におられる方を訪れて、と。そういう牧師としての牧会的配慮になるのですけれども。ただ、本来の意味としてはそれだけではなくて（岡谷のパリッシュは諏訪湖周辺、北は蓼科から南は伊那、駒ヶ根までですね）、岡谷の教会の牧会というのは、これら地域全体に対する課題に、積極的に、教会として関わっていくということになるのだらうということです。もちろんこれ、誤解がないように強調しておきますけれど、信徒さんの訪問はいらないって言うのではないですよ。もちろんそれは基礎的なものです、必要条件、当然です。それだけではなくて、教会が抱えている地域全体の課題やテーマや悩みに関わっていくということが、わたしたちにとっての“pastoral care”であるということです。

こういうスピリットは、おそらく聖公会の宣教師たちも共有していたと思われます。ですから聖公会の宣教師たちはどこに行こうと、教会の当然の牧会的責任（“pastoral care”の責任）として、教会のみならず、例えばその地域に教育が必要だと思えば学校を建てる。子どものための配慮をする。幼稚園や保育園をつくったり、ハンディを持った方がおられたら施設をつくったり、病院をつくっていくということ、それは牧会的な責任として作っていくわけですね。

これ、必ずしも一概には言えませんが、ちょっと乱暴な言い方になりますけども、他のプロテスタントの教会はちょっと違いますね。いわゆる、信徒獲得のためのツールとして、学校や施設を考えているところがあります。ところが聖公会の場合は、あんまりそういう意識ないのです。信徒を増やしたいからつくるというより、むしろ教会として当然の“pastoral care”の責任として、そういう施設をつくっている。だから日本でもそうだと思いますね。立教とか聖ルカとかありますけど、そうだと思います。わたしたちの聖公会の中では、そういった理解を持っている。教会の置かれている社会の課題に関わることは、実は、何か「社会派」がやっているのではなくて、すぐれて牧会的な働きなのだということと、それはすぐれてアングリカニズムの伝統なのだということと、今一度確認をしておきたいというふうに思います。

■ ウィリアム・テンプルと教会の牧会的責任

そして、今日資料としては出してお話しをしなかったのですが、ウィリアム・テンプルですね（24頁）。もちろんこれテンプルだけじゃありません、いろんな方々が同じような働きをしておられます。ここでちょっとご紹介したいのは、ウィリアム・テンプル (William Temple) カンタベリー大主教です。彼などはやはり、わたしは、聖公会の“pastoral な、牧会的なミニストリーを見事に実践した方だ”と思っておりますが。

(25頁) テンプルは当時の、社会恐慌、非常に経済的に、まあ今も似たような状態ありますけれども、厳しい状態の中で、教会が積極的に社会の中へ踏み込んでいく必要性を痛感しております。そして1926年の有名な鉱山労働者のゼネラルストライキの仲介をするのですね。常に労働者の側に立って動くのです、主教として、教会として。それで、当時のボールドウィン首相がエライ怒る。そういう事態が起こります。これちょっと風刺画を(25頁)。これ面白いですね。これ、何て書いてあるかという、「不法侵入者は訴えられる」って書いてある。この裸のおじさんがボールドウィン首相で、この犬の下、経済的領域と書いてある、そこには入るなど、教会は。そういう象徴的な風刺画ですが。しかし、この件を通して、教会は「労働者の側に立つのだ」。国教会ですよ、ここがポイントです、国教会だからって、国のやっていることにウンウンじゃないのです。そうではなくて、きちんと預言者的な働き、ダメなものはダメ。しかも大事なことは民衆の側に立つこと、人々の側に立つこと。それが逆に言うと国教会の責任なのです。だから、これは、とても画期的なことだったというふうに思います。

このウィリアム・テンブルは、よくこんなことをしていたので、ウルトラリベラリストだ、ウルトララディカリストだと批判されるのですけれども。実際には彼の神学は、ひじょうに、ハイチャーチ、カトリックですね、 sacrament 主義だった。これも面白いなと思いました。テンブルにとって、教会の社会的な働きと、教会の sacramental な性質とは分けることのできないものでした。キリスト者、教会の関心は sacramental な宇宙全体、つまり、すべて神様に造られた世界に向けられなければならない。だから教会の sacramental な働きも、教会の枠組みの中に留まることは許されない。それは世界へ、社会へと広げていかなければならない。こういう理解、神学を持っていました。そのことが、一番、可見的、目に見える形で表されるものが、「ユーカリスト(聖餐式)」であるということです。テンブルは、そういう意味で「ユーカリスト」を、未来社会のヴィジョンとしてシンボリックに理解しているということですね。 sacramental なものとして、教会そのものを理解する。この世界、社会の中で、教会が現実的な働きを担うこと、この根拠がこの神学の中にあるのです。そのことをテンブルは言っています。そのことは、やはりわたしたちはもう少し丁寧に学んでいかなければならないと思います。こういう言葉も、紡いでいきたいと思うのですね。「労働者のために働こう」だけだと、ちょっとアジテーションと言いますか労働組合と同じ。労働組合が悪いと言っているのではないのですよ。ただ、教会が宣教的な課題として取り組むときには、こういうような理解が必要なのではないか、というように思っております。

■マーガレット・ビンズの牧会的働き

(26頁)。大学院の授業で、アーバン・ホームズ先生の本をみんなで読みまして、とても面白かったです。小さな本です、とても分かり易い本で、皆さんも、もしご関心があれば26番に注をつけておりますので、アマゾンで買えますので。

このホームズ先生の本の中で、特に、アングリカンの“pastoral care”、pastoral な理解、豊かさを、とても分かり易く紹介をしてくださっております。ここでちょっとご紹介したのは、

無名のアメリカの女性の執事（27頁）、マーガレット・ダッドリー・ビンズ先生の物語を彼は紹介しているんです。このビンズさんは、西南ヴァージニアのアパラチア山脈にある小さな村で、50年以上にわたって奉仕をされました。彼女は、もともとニューヨークのブルックリン生まれで、お連れ合いがヒュー・ビンズ司祭さんだった。ご主人が亡くなって、実家に戻るのではなくて、ヒュー・ビンズ司祭の仕事を引き継がれる。そしてそのために勉強されて、1915年に、ニューヨークにあった女性のための執事の専門校を卒業され、その後、アパラチア山脈の山奥へと入って行かれるのです。そこで彼女は、炭鉱会社が所有している、昔教会であった今は店舗として使われている、建物を見つけて、いくつかのファミリーと出会うのです。そしてその元教会であった建物を使う許可などを得て、そして彼女はこの村の人々と共に生き、そして死んでいったということなのです。1917年に、ある材木会社がこの村に入ってきた時に、先生は小さな学校を開かれた。そして、彼女と彼女が採用した先生の2人が、そこで16年間教育をした。学校をつくる。これはだから信徒を増やすためではない。そして日曜学校も作った。彼女はそこに、馬の背中に乗って出かけて行った。また彼女は、村の「医者」でもあった。村人に健康への配慮の仕方を教え、そして（医者ではなかったけれども）できる限りの手当をしていく。身体的な必要に応えました。そして、このアパラチアの厳しい自然と、劣悪な環境の中で、彼女は80歳になるまで働かれたそうです。

このビンズ先生が教えた聖ステパノ教会は、もう存在しないそうなのですね。もう、信徒が少なくなったので存続してはいけないという決断に至ったと。ホームズ先生は、この決断は正しい、けれども、もしわたしたちの「存続」の基準が、いわゆる都市近郊型教会の基準であるならばそれは正しいとおっしゃっていますけれども。ただ、この村の学校には、今も執事マーガレット・ビンズの名前が冠せられているということで、今もこの村の人びとは、聖公会のある一人の女性の執事である、マーガレット・ビンズの名前を、永遠に、記憶し続けているというのです。

ホームズ先生がおっしゃるには、この執事ビンズは、絶望の中にある者に希望を与えられる受肉の主の福音の内に生きられた。ビンズ執事は、もし福音が村人たちを自由にするならば、神様の恵みは、知識や健康そして愛という形をまとってやってくることを、知っていたのだと。イエス・キリストは、すべての者にとっての主であって、人々の日常すべての生活の中で、具体的な形をとって、神様の恵みは与えられる。それは、けして日曜日の説教の中だけの出来事ではないのだ、ということです。ホームズ先生が強調されるのは、アングリカン（聖公会）は、伝統的に、もしわたしたちが「牧会的」であるならば、それは同時に「預言者的」でなければならないし、また、わたしたち聖公会は、世界を、聖なるものと世俗なるものとに分けることはしない。わたしたちは、愛は、わたしたちが生きるすべての面において知られて、分かち合われなければならないと確信しているのである。そして、わたしたち一人ひとりの個人的な生活が、教会の牧会的な関心の主要舞台である。それと同時に、政治や社会や経済、産業あるいは娯楽といった領域もまた、これも「牧会」の対象なのだ、ということです。ここはとても大事な指摘だと思いました。

ホームズ先生はこうおっしゃっている。聖公会にとっての「牧会」とは、多忙な司祭のオフィスを訪ねて、15分に限って話を聞いてもらうことではない。ちょっと身につまされて、「5分ね。

5分ね」とか言って。まあこれは信徒さんだけではなくて、学生にもですね、「じゃ5分だけ」とかなんとか言っているのは、良くないなど、反省いたしました。そうではなくて、ピンズ先生のように（28頁）、馬の背中に乗って、山々を越えて、そこで生き、働く人々を訪ね歩くことなのだ。「牧会的配慮」というのは、基本的に、マニュアルに基づく「お仕事」じゃない。「アート」だと。破れ、弱さ、痛みの中にある人々の、その生の中に、その人自身にしかない「聖なるもの」をいかに発見できるのか。そういった感性が求められる、ということでございます。

わたしたちの聖公会の全てのパリッシュが、このような意味の「牧会」を求められている。そしてその「牧会」というと、何か牧師さんの専売特許とってしまうかもしれませんが、そうではなくて、ここでの「牧会（pastoral）」というのは、教会全体、聖職者のみならず、信徒も含めた、先ほどのウェールズの例で言いますと「ミニストリー・エリア」全体の働きです。教会共同体全体で担われるものを、この場合の「牧会」という。そしてこの意味での「牧会」こそが、実は、聖公会にとっての宣教であるといっても、過言ではないと思っています。わたしたち聖公会にとって、「宣教」と「牧会」は切っても切り離せないコインの裏表だと、こういうふうに思いますね。

7 東日本大震災「いっしょに歩こう！プロジェクト」から学ぶこと

昨日は、長谷川先生・越山先生から、なんと表現していいかわからない、お話を伺いました。この1年半にわたって、「いっしょに歩こう！プロジェクト」を通して、様々な気づきを与えられました。これはやはり大事な働きだった。まだ継続中ですが、働きであるというふうに思います。直接被災地に赴くことができない者たちも、このプロジェクトを通して、様々な願いや気づきを与えられたと思います。このプロジェクトを担ってくださった方々に、ほんとに感謝をしたいと思います。

■「いっしょに歩こう！プロジェクト」の働き

昨年4月末だったかに、仙台基督教会で開かれた最初の会議。日本聖公会の会議に、わたしも立教大学の東日本震災復興支援本部長を任命されていて、その関連もあって陪席させていただいたのですけれども。その時の議論を今でもはっきりと覚えているのです。名前をどうするかという。たしか加藤主教さまが、何かメッセージをお話しなさりながら、「復興」という言葉はちょっと違うのではないかというお話をなさり、他の先生方も、もう少し復興というか、被災者の方と共に歩くという思いを表現したいということになって、最終的に、この『東日本大震災被災者支援「いっしょに歩こう！プロジェクト」』という名前がつけられたと思います。この名前に、先ほどお話ししたような、アングリカンが大事にしている、宣教や牧会の深い意味が含まれていると思います（29頁）。いま一度お読みしますと、

- ・わたしたちは、東日本大震災により困難を負って生きる人々に敬意を払っていっしょに歩きます。

- ・わたしたちは、被災地の方々の生活と地域の再創造に向けていっしょに歩きます。
- ・わたしたちは、主イエス・キリストが、共に歩いてくださることに励まされていっしょに歩きます。震災被災者の内、特に困難の中にある方々に思いを寄せて活動を行います。
(高齢者・こども・障がい者・在留外国人・貧困層・避難民・・・)

で、これは昨日、長谷川先生、越山先生から伺った通り、あるいは「いっしょに歩こう！プロジェクト」のニュースレターなどを通して、わたしたち理解しておりますけれども、まさにこのプロジェクトの目的の通り、隙間に置かれた人々やハンディを抱えた人々、在日外国人と、いっしょに粘り強く、じっくりと歩く働きをされていると思います。これは、歴史的にですね、ちょっと大げさになりますが、日本聖公会の教会史、あるいはアングリカンの教会史的に、ちゃんと評価されるべきことであっただろうというふうに思います。それから副産物というふうになりますけれども、凶らずも、教区間協働が入れ乱れて実現したということ、これもやっぱり。教区間協働って何か理屈で言っている前に、必要な者に必要な者が関わるときに、必然的に、九州の先生が東北に行ったり、東京の先生がいろいろもう、関西の先生方が東北、もうグチャグチャ。そういう交流が起こるといふ、これもある意味、奇跡であるし、ああ、感謝であったというふうに思います。これも、日本聖公会の歴史始まって以来のことだったというふうに、評価していいのではないかなと思います。

■「にもかかわらず語り続ける細い声、祈りの声」

この5月の総会で、加藤博道主教さまが開会聖餐式で説教をなさいました。わたしは加藤主教さまのこの説教は、きわめて深い意味がある。神学的な意味があるし、これは皆さんにもう一度、じっくり味わっていただきたいという思いで、掲載をさせていただきました。特に30頁のところですね。

何かわたしたち人間の基本は「いつも安全で安定していて物事が基本的には予定どおり進み、繁栄したり進歩していく」ということが通常な、ノーマルな状態で、時々それを破って災害や悲劇が起こる、不慮のことが起こる、想定外というのではなくて、むしろわたしたちの世界の基本的な原理が「悲劇」なのではないか！？ そう思わないと説明がつかないと、そんな気がしています。この世界そのものが基本的に「悲劇」なのだ、多くの悲しみのある世界なのだということを、「今日も無事で、明日も無事で、物事が計画通り進み、長い生涯を全うする」等ということが、むしろ「たまたま」のことなのではないか、という感じを持ち始めています。

この思いですね。そして最後のところにも、

しかしもし、この世界の原理は「悲劇」だ、というのではなく、やはりそこには神の祝福、命の喜びがあるのだということを教会が語るならば、それは本当に、「にもかかわらず語り続ける細い声、祈りの声」なのだと思います。

というのですね。この、「にもかかわらず」。絶望、悲劇、「にもかかわらず語り続ける細い声、祈りの声」、この「にもかかわらず」というところに、わたしたち教会の使命があるのだ。それがたとえ一見無力であったとしても、悲劇に満たされたこの世界、社会や絶望の内にある

人々に対して、「にもかかわらず」神様の祝福や、<いのち>の喜びを、語り続けること。それがたとえ、か細い声や小さな祈りであったとしても、語り続けることこそが、わたしたちの担うべき「宣教」なのだとすることを、わたしたちは、学んだのではないかなと思います。

昨日の、ことに越山先生のお話し、わたしはもう胸につまされて。お話しは、福島のみなさん、そこに居ざるを得ない、そして「牧師さんは、いつ移動になるのですか？」って言われながらも、しかしそこに留まり続ける。しかしそこでの葛藤ですね。この苦しみ、葛藤ですね。そこがわたしたちの聖公会、教会、大事なことでないでしょうか。だからその、「にもかかわらず」、そこでいっしょに悩んで、いっしょに。

実はわたしの連れ合いが日本YWCAの総幹事をしておりまして、彼女もちょっと胃を痛めるほど悩んでいるのが福島のことですね。日本YWCA全体としては、やはり福島に、例えば40歳制限ですね、若い人を送らない、と決めています。しかし、福島YWCAの若いお母さんたちは、そこに、赤ちゃんを抱えながら住まざるを得ない。そこで悩むのですよね。その悩みを、わたしたちが、どのように共有することができるか。それはもう、簡単な言葉では判断はできないですね。ほんとに祈らなきゃならないし、「にもかかわらず」、語り続けねばならない声だし、祈りの声だと思います。

■ 陸前高田、戸羽市長のメッセージ

陸前高田、立教大学の復興支援活動。わたしは、「いっしょに歩こう！プロジェクト」としっかりと繋がれなかったのがとても残念だったのですが。しかし、わたしたち自身は「いっしょに歩こう！プロジェクト」の一つの枝だと思ってやっておりますが。立教大学は陸前高田に深いつながりがございます。そして、わたしも陸前高田に何度も足を運んでいるのですが、これはもう皆さんも経験されていることだろうと思いますが、震災直後の、無数の人々の命も、町も生活も日常も、人々の涙さえもが押し流されてしまった陸前高田の状況を前にして、言葉を失いました。確かに「復興」って何？とか、そういうことだったですね。そこで、幸いにも立教の学生たちを受け入れてくださって、去年も今年も、今もやっていますこの時期もやっていますが、陸前高田にボランティア活動で入りました。立教の多くの教職員もスタッフとして現地に入りましたが、コミュニティー福祉学部の先生たちは定住しています。研究期間1年間、陸前高田居住。家を借りて（大学でお金を出しています）。そういう活動をさせていただいています。そのような出会いと経験は、学生や教職員にとって計り知れないものです。

ちょっとご紹介したいのは、立教大学と陸前高田、このたび協定を結んだのですけれど。陸前高田市の戸羽太市長は、（学生たち毎回レポートを書くのです。人数で言うと150人ぐらいです）多忙な中、学生たちが書いたレポートすべてを読んでもらった。そしてひとり一人お返事を書きたいのでとおっしゃった（手書きで、ですよ）。「それは申し訳ない、一つで結構です」と言って、いただいた手書きの手紙があるのです。それがこちらに載せたものです。

ボランティアに参加して頂いた皆様へ

立教大学 2011 年度夏季陸前高田支援ボランティアに参加して下さいました皆様に市民を代表し、心から感謝を申し上げます。立教大学と本市は長年にわたり御縁を頂いておりますが、今回東日本大震災で壊滅的な被害を受けた陸前高田市に沢山の学生諸君がボランティアに来て下さった事は、言葉にできない程嬉しく思っています。皆さんのレポートを読む時間がなく、今日まで御礼も言えずに歳月が経ってしまい申し訳ありません。レポートを全て読ませて頂き思った事は、人間て優しいな。まだまだ日本も捨てたものじゃないな。という事でした。「絶望」という言葉があります。わたし自身 46 年間生きてきて、生まれて初めて「絶望」というものを感じました。妻を亡くし、二人の子供をどうやって育てていくか。市長として陸前高田市を再生できるのか。普段は強気な性格であるわたしが、まさに身動きひとつとれない「絶望」の中にいました。しかし、そんなわたしを絶望の淵から救ってくれたのは人々の優しさでした。失ったものは本当に沢山ありますが、一方で得たものも沢山ありました。人は一人では生きていけないなどと歌の歌詞だけの世界と聞いていましたが、日本中から、世界中から頂いた励まし、優しさにより今日も何とか頑張れているのだと思っています。皆さんがボランティアで経験された事、感じた事は皆さんの今後の人生に必ず生かして下さい。多くの犠牲の上に皆さんの経験があったという事を忘れないで下さい。わたしたちは必ず陸前高田市を世界に誇れる美しい町として復興させます。復興には長い長い時間がかかります。皆さんもその頃には結婚され、お子さんもいるかもしれませんね。わたしたちが復興を遂げた時、どうかご家族で陸前高田市にいらして下さい。そして奥様や旦那様、そしてお子様にボランティアに来た時の話をしてあげて下さい。

皆様、本当にありがとうございました。

平成 23 年 11 月 22 日 陸前高田市長 戸羽 太

学生たちも、この戸羽市長さんの言葉をどのように聴いてくれるかなあとと思いますけれど、きっといろんな意味を、彼女、彼らの中に持っていくのだというふうに思います。とっても忙しい方ですよ。ほんとに忙しい中に、手書きで丁寧な手紙を若者たちのために、むしろ励ましてくださるわけですね。そういう姿にわたしたちは感銘を受けましたし、学びたいなど思っています。

わたしたち聖公会、外から行った者たちも、宣教の大事なことは、若い人たち青年たちにこういう出会いを提供すること。青年たちは自分たちで出会っていくのですけれども。しかし青年たちを励ましたり、彼女、彼らのタラントを最大限に引き出していくことは、わたしたち日本聖公会の「宣教」にとって、まさに中心的な課題だと思います。「日本聖公会・全国青年大会」もたいへん盛況の内に終わったと聞いていますけれども。今回の宣教協議会もたくさんの方のスタッフの皆さんがきておられますが、このような青年たちの働きと存在に、わたしたちは希望を見たいし、このわたし自身がこういう青年活動の中で育てられてきましたし、柳時京さんなんかは、学生時代からの日韓青年の仲間です。そういう中で、またいっしょに時間を過ごしていることに感謝をしたいと思っています。

8 日本聖公会の小さな宣教の歩み

最後になりますけれども。これまでアングリカン・コミュニオンのミッションとか、いろいろな話をしてまいりました。しかし一方で、わたしたちは新しいことをやらなければいけないのか。それも思いますが、それも大事なことですし、新しく変えなきゃならないことたくさんあるのですが。同時に、実はすでにわたしたち日本聖公会の宣教の歩みの中で証しされてきたものも、もう一度振り返っておく必要があると思うのです。学ぶことはたくさんあります。『聖公会が大切にしてきたもの』の中では、ベッテルハイム（琉球宣教）や、『アイヌのユーカラ（神謡集）』を筆録した知里幸恵さんの物語。ジョン・バチェラーの話、プレ宣教協議会では（信州の）両角平左衛門さんの働きなどもご紹介いたしましたけれども。こういった日本聖公会ではあまり知られていない、光りがあてられていないけれども、しかし大事な意味を持っているものはたくさんあるので、それを皆さんのそれぞれの場所でもう一度聴いていただくこと、これはぜひお願いしたいなというふうに思います。わたしが知っているものはごくわずかですが、皆さんのそれぞれの足元に、歴史があるはずなのです。ここではちょっと、2つだけ紹介したいと思います。

■九州教区・大口聖公会の宣教の歩み

今年の8月初めに、九州教区五十嵐主教さんにお招きをいただきまして、九州教区大会で講演する機会を与えられました。九州の皆さん元気！ もうエネルギーが充満しているのですね。中部教区も元気ですけども、より元気な九州教区。たくさんのお恵みをいただきました。

そのとき、中島省三司祭さんが管理、牧会されている大口聖公会の宣教の歴史を教えてください、資料なんかも丁寧にコピーして送っていただきました、ここにもあるのですけれども。これとっても興味深くて、ちょっとご紹介したいと思います。（ちょっと訂正がありまして、先ほど大口の方から、大口市というのは今存在しないそうです。伊佐市というところと統合されているそうです）（32頁）、伊佐市。鹿児島県の大口ですね、南側を除いて全て山に囲まれているところだそうです。大口聖公会の歴史はすでに85年ぐらいになるのですが。中島先生の資料によりますと、1919（大正8）年に書かれた『教会日誌大口聖公会』（重要保存）、そのコピーをいただきました。これは全てご紹介していると時間がありませんので、少しだけ紹介いたしますと、

（1919年）＜七月十四日＞午後二時より、小学校講堂に於いて、生徒の為に、リー監督（主教）の精神講話あり。後、教師の為に神の實在について講演せられ、数多くの教師の質問あり。午後八時より、劇場に於いて伝道講演会開会。開会松崎氏、開会の辞を述べ、副島氏、「基督教と国民道徳」と題し、エシ・ハッチンソン師（33頁）「文明の基礎」と題し、リー監督、「平和伝える基督教」と題し各々熱弁を振りし、聴衆に多大の感動を与えたり。

ということです。ああそうかと。宣教、伝道のために、小学校の講堂を借りて、あるいは劇

場を借り切って、講演会を開催しているのです。そして、大口の町の人々に大きな感動、感銘を与えた、とあるのですね。わたしたち日本聖公会はどこも、教勢の落ち込みで悩んでいる。だからこのように、宣教協議会をやっているわけですけども。しかし、よくよく考えてみますと、100年前は信徒なんかいなかったということです。そもそも信徒がおらず、ほとんどが「0」からの、このような開拓伝道であったことを、もう一度思い起こしたいと思います。この大口聖公会の1919年の『教会日誌』が伝えておりますように、小学校を借り、劇場を借り、一般の町の人々が分かるような言葉で、そして大きな感銘を与えながら、その地に、大口の地に教会が生み出されていったという。ですからわたしたちも、もう一度このような、開拓伝道をしていく。そのような思いを持って、「0ベースからの宣教」を、今一度、始めたいということです。こちらの右のほう、日誌の上に紙が貼りつけてありまして、当時の案内に

今度リート云ワレル西洋人ノ先生方ガ御出ニナリマシテ 今日カラ明日迄二日ノ間午後六時カラ松崎醫院(松崎さんというのはこの写真に載っている信徒さん)ノ二階デ日曜學校ガアリマスカラミナミナ誘合セテ御出デクダサイ。

チラシを配っていたのでしょうかね。この教会日誌以外に、1988年に出されています『大口聖公会創立七十周年記念誌』もいただきましたけれど。それもすごく豊かな物語で満たされておりました。ちょっとご紹介したいと思いますが。こんな言葉があります。

大口聖公会はそもそも、その伝道の始めから信徒活動によっている。わたしたちの記憶の中には殆ど教会生活で定住教師の思い出はない。教会の活動はすべて信徒の手によるものというように、先輩方の働きはわたしたちに映っている。伝道活動から礼拝、教会の運営からすべてを先輩の方々は全うされてきた。

ということですね。ですから、大口の教会は、創立からほぼ一貫して、(今は中島先生が与えられている)定住の教役者が与えられていなかった。すなわち、大口の教会は最初から、信徒を中心とした宣教によって生かされてきたということですね。

今までごいっしょに見てきましたように、今、世界の聖公会も、我々日本聖公会も、聖職中心ではなく、信徒奉仕職を基本とした新たな方向を模索しています。けれども、大口の教会をはじめとして、100年以上も前から、実は、「信徒の奉仕職」によって、日本聖公会の多くの教会が、命を与えられてきたことを、もう一度思い出したい、記憶したいと思います。

(34頁)それから1957年に、当時、日本聖公会教務院伝道局長の久保渕主教さんが、宣教研修のため大口に派遣されたときのことを、こう書かれています。

この訪問(1957年)で感じたことは、御教会が地元の人々と密着していること、地元根を下ろしていると言うことで、都市の中で孤立し易い都会の教会では感じられない自力と安定感があることであって、とても羨ましく思った。

村上先生は、大口聖公会は、まさに教会の原点、「家の教会」であった、と言われます。

大口の教会は原始キリスト教会によく似たものようでした。いわゆる教会らしい教会ではなく、主にある兄弟たちの集まりとか、家の教会といった感じのものでした。この教会の初代の人たちは、いつも「兄弟」と呼び合って話をしていました。昭和9年の夏はじめて大口に来たとき、あの方たちが「兄弟」と呼び合っておられるのを聞いて非常に感動しました。主にある兄弟たちの家庭集会、それがあの方たちの考えておられた教

会だったようです。それが今日に至るまで、大口の教会の基調となっています。この教会は、創立から今日まで70有余年の大部分を定住牧師のいない無牧教会として過ごしてきました。無牧教会はたいいてい、だんだん衰え小さくなり消滅することさえありますが、大口の教会は、無牧のために弱り衰えることなく、無牧なるがゆえにかえっていきいきとたくましく活動して、今日に至っております。

というのです。ある信徒さんは、こう語っているのですね。

父母達の時代は、教会は純粹に祈りの場であり得たし、公の場というより、家庭の延長線上に存在していたのではないのでしょうか。自宅の庭掃除の続きのように教会の庭を掃き、わが家の家計を切り盛りするのと同じ責任感で教会の財政を支え、遊んでいる子供達を勉強室に追いやるようにして教会へ向かわせていたのです。山間部の僻地であったために長いこと専任の牧師さんに恵まれなかったのですがかえって、そのことのためになにかの媒体にたよらぬいわゆる「教会信仰」ではない、直接天に向かってまっすぐに伸びる信仰を先駆者は強く身につけたのでしょう。教会があったから信仰したのではなく、熱烈な信仰がおのずから教会をうち樹てた。その歴史をこの時代、特に尊く感じています。

最初から無牧であった大口の教会は、今もしっかり、信仰を引き継いでおられますけれども、村上先生や信徒さんがおっしゃるように、むしろ無牧であったがゆえに、信徒を中心として生き生きとした、先ほど申し上げた「コイノニア」が形成されたと言えるのかも知れませんし。教会はまさしく自分たちの『家』であった、「オイコス」(家)であった。そこで養われた信仰は、ひじょうに鮮烈な言葉、「直接天に向かってまっすぐに伸びる」、「教会があったから信仰したのではなく、熱烈な信仰がおのずから教会をうち樹てた」というのですね。この宣教の証を、わたしたちは、今一度、しっかりと日本聖公会全体で聴きしていきたいと思えます。

■ 岡谷聖バルナバ教会の歴史—深澤小よ志さんのこと—

つぎは岡谷の話ですが。「くどいよ、もうわかっている」と言われそうですが、しかしやはり、わたしは思い入れがありますので、語らせていただきたいと思えますが。

岡谷聖バルナバ教会は、2008年6月に聖堂聖別80周年の記念礼拝をおこなうことができました。中部教区はカナダ・ミッションなのですが、この岡谷の聖公会を宣教したのもカナダ聖公会から派遣された宣教師、ホリス・コーリー (Hollis Hamilton Corey) 司祭でした。コーリー先生が岡谷という場所に教会を建てる決断をした時に、いろんな問いがあったのです。「ここで何ができるのか」「何か良いものが生まれるのか」ということですね。たしかに今も小さい教会です。最近堅信式が与えられて、けっこう増えたり、若い人たちが増えたりして、嬉しいなと思っていますけれども。今も豊かな礼拝と交わりを持つことができているのは感謝しておりますけれども。

80年前の当時、諏訪湖一帯をコーリー先生が伝道しておられて、いよいよどこかに聖堂を建てることになり、カナダ・ミッションは「下諏訪の温泉地の歓楽地に建てなさい」ということでした。(たしかに、他のプロテスタントの教会やカトリックの教会は、現在でもほと

んど上諏訪、下諏訪にあるのです。)しかしコーリー先生は、そのミッションからの指示を拒否いたしました。コーリー先生は、諏訪の一帯で「最も重荷を背負わされている人々のために教会をつくりたい」「最も辛い思いをしている人たちのために聖堂を建てたい」と考えていました。「誰と共に」ということですね。コーリー先生が諏訪の一帯を考えた時には、1928年当時の岡谷という町は製糸工業の町であり、「シルク岡谷」として世界的に有名でした。当時の岡谷の町の人口が今と変わらないのですが、6万人のうちの7割、8割は、14歳から17、18歳ぐらいまでの、いわゆる女工さんたちでした。当時の岡谷は、女工さんたちで溢れかえっていました。山本茂実さんの『あゝ野麦峠』という本がありますが、それは木曾から飛騨の山々を越えて岡谷に働きに来ていた少女たちの涙の物語です。岡谷の図書館には、『製糸女工虐待史』という資料がありまして、そこにはちょっとマイクを通してはお話しにくい、様々な虐待があります。そして人権侵害、場合によっては鞭打たれていた、そういう状況が描かれていますが、いかに彼女たちが辛い思いをしていたかですね。それゆえにコーリー先生は、岡谷の地に教会をつくることを決断するわけです。彼女たちのための、女工たちのための聖堂を建てるのだ、だから教会は岡谷だと。もちろんカナダ・ミッションは強く反対をいたしました。女工さんたちは季節労働者です。定着もしません。貧しい、経済的な支えにはならない。そんな者たちが集まっても教会を維持できるわけがない。しかし、コーリー先生は「お金のことは神さまが何とかしてくださる」と応え、その地に、岡谷の本町にあります教会を建てました。当時、女工さんでいらっしゃって、信徒の深澤小よ志さんは、かつてわたしにこう語ってくれたのです。

なけなしのお小遣いを献金として手に握りしめながら教会に駆けつけると、階段の下で背の高い青い目の司祭さんが待ちかまえていて、よく来たねと言ってわたしを抱きしめてくれた。お説教の意味はほとんどわからなかったけれども、司祭さんが抱きしめてくれた温かさにわたしは涙が溢れた。教会は確かに天国だった。

という証言を今から15年ほど前に、若い青年たちに語ってくれました。

岡谷聖バルナバ教会の聖堂は今でも畳敷きです。それは、女工さんたちのリクエストでもあったということです。一日16時間労働で、休み時間を全部足しても40分にしかならないのです。そして、女工さんたちはいつもは、工場では硬い椅子に座らせ続けられていました。そういう彼女たちが、教会に来たときには自分の実家に戻ったようにリラックスしたいという希望があったのを聞いて、コーリー先生は岡谷の教会を畳敷きにしたのです。

そういう意味で、先ほどの大口の教会の証言にもありましたが、岡谷の教会も、彼女たちの「家」であったのです。この岡谷の教会はそんな彼女たちが癒やされて、慰められて、そして自分たちの尊厳を取り戻していくための「家」として存在してきたということなのですね。この歴史はやっぱり大事だろうと思っています。

実は今年、2012年の1月26日サロメ深澤小よ志さんは、主のみもとに召されました。96歳でいらっしゃった。小よ志さんは、実に80年にわたる信仰生活を送ってこられました。何が彼女を支えてきたのか。それは彼女の晩年、お体の自由がきかなくなった後も、常にその枕元には、聖書と祈祷書、聖歌集がありました。そして、彼女の信仰が彼女の人生を支えていたのだと思うのですけれども、ほんとにやさしい方でした。いろんな人に配慮される方

だったのですが。特に岡谷の教会に、アフリカのナイジェリアから働きに来られているピーター君という身長2mくらいある、いわゆる外国人労働者の方がおられます。家族を残して、お子さんもナイジェリアに残して。だから小さい子が大好き。一見恐そうなピーター君を前にしても、小よ志さんはいつも笑顔で、気をつかって言葉をかけておられました。小よ志さんがある時、こんなことをおっしゃっています。「わたしはピーターさんの気持ちがよう分かる。さみしいよね。家族と離れて。辛いよね。毎日きつい仕事をして」。そういう、外国人労働者問題ってわたしたち教会でよく言いますよね。〇〇問題。そうではなくて、小よ志さんにとってみれば、ピーターさんも、昔の自分と同じように今さびしい思いをしている。だから彼のためにいっしょにいたいという。だからわたしは、その言葉にとっても反省させられたのです。それまでは、当時の宣教協議会でもわたしのレジメ見て恥ずかしいのはそのことです。頭で考える、理屈。〇〇問題。人権問題、在日外国人労働者問題。わかったようなことを言っていました、本気でその人といっしょに歩むということは、理論上は歩めるかもしれないませんが、ほんとに歩もうとしたら、小よ志さんのように自分の人生を重ね合わせて、「さみしいよね」って、いっしょに居てくれたことに、わたしは学ばされたのです。その小よ志さんの96年のご生涯。楽しいこと、うれしいこと、そして、辛いこと、苦しいこと、せつないこと、たくさんありました。しかし、その小よ志さんの「人生」といっしょに歩いてこられたのは神様だったと思います。愛唱聖歌は古今聖歌第134番で、彼女はオルガンを一曲だけ弾ける、これだけ弾けるのです。聖歌第134番は、「みちちよ世のなみさかまくうみじわたりゆくわれをまもらせたまえ」。父なる神さま、この世の波がたとえ逆巻いても、この海を渡ろうとする、わたしを守ってくださいという意味ですけども。まさに、これいっしょにお葬式で歌いましたが、小よ志さんは、さまざまな困難を乗り越えてこられたと思います。小よ志さんの人生という舟旅には、その海が荒れて、水浸しになった時も、いつも主が、小よ志さんのそばにいて、小よ志さんを励まして、支えて、涙を拭い続けておられたのだらうと思います。

聖公会という教会が大事にしてきたものは、こういった眼差しが確実にあったのではないかと思います。そしてここでは、大口聖公会と岡谷聖バルナバ教会という、小さな、牧師も定住しているわけではない、けれども、深い意味を持った宣教の歴史をご紹介します。大事なことはここから先で、わたしたち日本聖公会の各教区、教会には、おそらくそれぞれの物語が、宣教の物語、歴史があるはずですが、わたしたちが、宣教について語り合う時に、どうしても、これからどのようなプロジェクト、プログラム（それもとっても大事ですが）となりがちですが、その前に、一方で、すでにわたしたちの信仰の先達たちが歩んできたその道程に、ていねいに学ぶことも、不可欠であると思います。

9 おわりに—わたしたちの「宣教」を思い描くこと—

■ わたしたちの宣教の原点に立ち帰ること

わたしたちの宣教の原点はどこかということですが、日本聖公会は、現在どの教区、教会

も、教勢の低落、財政状況の逼迫等に苦しんでいます。しかし、やっぱりいくら宣教協議会をやっても、こう言っちゃうともう本も子もありませんが、特効薬などあるわけがないと思っています。むしろ教会の宣教の原点や、教会としての牧会的働きの原点に立ち帰ることによってのみ、道筋が備えられてくるのではないかと思います。

ではその原点は何かというと、きわめてシンプルなものだと思うのです。信徒さんへのそれぞれの教会はもちろんですし、先ほど来申し上げているような、教会のあるパリッシュ全体、地域全体に対する牧会的働きを、ていねいに実践していくことに尽きるのだろうと。その地にある、かすかな声に耳を傾けていくこと、声を出せない人々の「声」となっていくこと。この世界、社会、絶望の内にある人々に対して、「にもかかわらず」、神の祝福、<いのち>の喜びを、語り続けること。それがたとえ、か細い声、小さな祈りであったとしても、語り続けることではないか。そして、パリッシュにある課題、そしてまたこの世界にある課題に、教会として、ていねいに、地道に取り組むこと以外にないのだろうと思います。わたしたちの教会が、先ほどの小よ志さんの話ではありませんが、一人ひとりを抱きしめていくこと、温もりを与えていくこと。小よ志さんの場合には、彼女をその後96年生かしたのです。そのぬくもりを与えていくこと。必要なのは、「2匹も魚があるじゃないか、5つもパンがあるじゃないか」「幸いなるかな貧しき者」と励まされた主イエスに、堅く信頼することではないかと思っています。

日本聖公会には現在、北は北海道から南は沖縄まで、約300の教会、礼拝堂、伝道所があります。すなわち日本聖公会は、約300もの全国チェーン店「ミッション・ステーション」から成るネットワークがある（セブン・イレブンよりは少ないかもしれませんが）。しかもさらには、「アングリカン・コミュニオン」という国際的な、グローバル・ネットワークの中にも結ばれています。それぞれの「ミッション・ステーション」が、地域における牧会的働きを担う時に、社会に対する貢献力は計り知れないものとなると思います。その結果、ある意味でその果実として、聖公会の信頼度が高まったり、場合によっては信徒数の増加に繋がったり、献金額の増加といった教勢の強化、という果実をもたらすのではないかと、結果としてついてくるのではないかと。ですから、わたしたちのそれぞれの「ミッション・ステーション」が有効に働くために、どのような仕組みや組織（スキーム）が必要なのか、相応しいのかを検討することが求められる。ウェールズ聖公会が提案する「ミニストリー・エリア」だとか、そういったものが模索されるのだろうと思います。

また、今回ちょっと時間がないので申し上げられませんが、いわゆる、エキュメニカルなつながりですね。ルーテル教会やカトリック教会、ひじょうに深いつながりがあります。ルーテルとはもうほとんどいろんなことを交換できます。なので、日本聖公会だけで考えないで、例えばルーテルなどの教会との繋がりの中でも考えてみる。そうするとネットワークはさらに広がるわけです。教会が無いところにもルーテルがあればそこで協力してやれるし、逆もしかりです。と言ったことも考えてみたいと思います。

（39頁）聖公会の伝統的な教会論は、「風船型教会論」ではなく「鳥の巣型教会論」であるとも言われています。これもプレの最後のところで少し話しましたが。風船を膨らませていくように同質なものを同心円的に膨張させるのではなく、聖公会の教会はむしろ「鳥の巣」

なのだと、そういうイメージが語られるのですね。「鳥の巣」というのは、ご存じのように、それぞれ形も、長さも、太さも、大きさも異なる、一つひとつの枝が結び合わされて作られます。わたしたちの教会共同体も、一人ひとりの異なる多様な者たちが、神さまの愛という泥によって結ばれて作られている、ひとつの「巣」です。風船はどんどん膨らんでいくと割れてしまいますし、ほんの小さな針に刺されても、脆いです、あっけなく破裂してしまいます。でも「鳥の巣」は、時には枝だけではなくて針金やプラスチックも混ざって、ひじょうに醜い不格好なものですけれども、針で刺されても壊れませんし、専門家の方かに伺ったのですが、鳥の巣というのは落としても壊れない、けっこう丈夫なのだそうです。そういう教会だと。その「鳥の巣」の中では、大切に新たなくいのちが育まれていく、そういうイメージだと思います。

また、わたしたちの教会は、主の十字架と復活を証しし続ける共同体です。神の正義、平和、そして、くいのちを証し続ける者の群れです。そして古代教会からの「使徒的」(apostolic)な、時間を超えた繋がりと、世界に広がる「普遍的」(catholic)な、空間を超えた繋がりの中に、皆さんの教区、教会、一つひとつが結ばれ、生かされているのです。そのことをやはり大事にしたいと思います。

■ 日本聖公会＜ Vision 2022 ＞の可能性 ex. -NSKK Walk Together…2022-

最後になりましたが、今回の「宣教協議会」から、何が生み出されるかひじょうに期待をしております。日本聖公会＜ Vision 2022 ＞（これはわたしの一つのイメージです、こだわらないでくださいね）。10年後、わたしたち日本聖公会はどのような教会であってほしいのかを、皆さんで語り合ってほしいです。少なくとも10年間は耐久可能な、何かしら「ミッション・ステートメント」。神戸教区さん、すごいなと思ったのは、各教会で「ミッション・ステートメント」をつくられている。そういう「ミッション・ステートメント」を、日本聖公会全体でつくることのできないのだろうかと思います。

それから「いっしょに歩こう！プロジェクト」からは、さらに学ぶことができると思うのですね。もちろん大事な点は、「いっしょに歩こう！プロジェクト」は、被災地の人びとと共に、あるいは福島の人びとと共に歩くという、重要な特有な任務を持っていますけれども、このプロジェクトを通してわたしたちがあらためて気づかされたのは、イエス様がされたように、わたしたちも隙間に置かれた人々、痛みや悲しみの内にある人々、重荷を背負って道行く人々と共に歩くことの重要性だったのではないかと思うのです。

ですから例えば、＜ NSKK Walk Together…2022 ＞みたいな、運動を始めることはできないだろうか。つまり、すべての日本聖公会に属する教区、教会の一つひとつ、一人ひとりの信徒、聖職が、この10年間、この一つのテーマのもとに、誰か、隣人と丁寧に共に歩くことを目標とする、そういうことが考えられないかと。その「隣人」が誰であるのかは、それぞれが置かれている状況（コンテクスト）の中で、考えられてよいものだと思うのです。それが、在日外国人であるかも知れませんが、教会におられる高齢者かも知れませんが、青年や子どもたちであるかも知れませんが。大切なことは、日本聖公会に属するすべての教区、教会、

信徒、聖職が、先ほどのウェールズやカナダと同じように、全体で一致して、この10年間、徹底した「牧会」を丁寧に担うことだと思います。例えば、10年後の2022年に、もう一度「日本聖公会・宣教協議会」を開き、その時に、この10年の間、わたしたちは誰と共に歩むことができたのかを分かち合えれば。それは同時に、わたしたちの「宣教」の果実を刈り取る祝祭、収穫感謝の時となるはずです。これは一つのわたしの夢を語っていますが、そのような話し合いが、この後、もたれたらいいなと思います。「いっしょに歩こう！ プロジェクト」のニュースレター第12号の中で、松本普さんは、こう書いておられたのですね。

誰と「いっしょに歩こう」なのか。

何処で「いっしょに歩こう」なのか。

何をして「いっしょに歩こう」なのか。

これからのグループ討議の時間の中で、わたしたちも、それぞれが置かれた「コンテキスト（文脈、状況）」の中で、この問いに答えてみるができないだろうかと願います。もちろん、これは、わたしからの一案に過ぎないのですけれど。

今回のこの場から、これからの、日本聖公会の「宣教」を想い描くことのできる、豊かな提案が紡がれることを、わたしも心から願って期待をしています。

どうも長い間、ご静聴ありがとうございました。（拍手）



2012 年日本聖公会宣教協議会

2012年9月15日

わたしたちの「宣教」を思い描くために

－ 日本聖公会の宣教の課題と可能性 －

司祭 アシジのフランシス 西原廉太

1 はじめに

2 1995 年日本聖公会宣教協議会で確かめられたこと

- 「日本聖公会の戦争責任」をめぐって
- 「福音伝道の十年」を明確に意識した宣教理解
- 「原子炉奉献の祈り」を唱えたこと責任

3 「日本」というコンテキストで宣教することとは

- 日本でキリスト教が広がらない不思議
- 日本のプロテスタント諸教会における「共同体性」の回復

4 アングリカン・コミュニオンの宣教理解

- アングリカン・コミュニオンの「宣教の 5 指標」 - 5 Marks of Mission -
- 英国教会の *Parish and People* 運動
- ウェールズ聖公会の宣教ヴィジョン *Church in Wales Review – July 2012*
- カナダ聖公会 *Vision 2019*

5 「いのち、尊厳限りないもの」～WCC 第 10 回総会との関連で～

- 「いのちの神よ、わたしたちを正義と平和に導いてください」

6 「牧会的配慮」(Pastoral Care)としての聖公会の宣教理解

- 聖公会の「パリス制度」と「牧会的配慮」
- ウィリアム・テンプルと教会の牧会的責任
- マーガレット・ビンズの牧会的働き

7 東日本大震災「いっしょに歩こう！プロジェクト」から学ぶこと

- 「いっしょに歩こう！プロジェクト」の働き
- 「にもかかわらず語り続ける細い声、祈りの声」
- 陸前高田、戸羽市長のメッセージ

8 日本聖公会の小さな宣教の歩み

- 九州教区・大口聖公会の宣教の歩み
- 岡谷聖バルナバ教会の歴史 – 深澤小よ志さんのこと –

9 おわりに –わたしたちの「宣教」を想い描くこと–

- わたしたちの宣教の原点に立ち帰ること
- 日本聖公会 <Vision 2022>の可能性 ex. – NSKK Walk Together...2022 –

【資料 1】 日本聖公会の戦争責任に関する宣言

【資料 2】 ウェールズ聖公会 Church in Wales Review –July 2012

【資料 3】 カナダ聖公会 Vision 2019 から

1 はじめに

日本聖公会・宣教協議会で基調講演をするように求められました。プレ宣教協議会でもお話しさせていただいたことと、今回の宣教協議会の目的とするところが、十分に理解できていないこともあり、かなり躊躇したのですが、わたしに課せられた宿題だと思い、お引き受けすることにいたしました。

これからのグループ討議などの中で、わたしの拙い話の中から、どこかの部分でも取り上げて下さり、話し合いの一助になれば幸いです。

2 1995年日本聖公会宣教協議会で確かめられたこと

日本聖公会のこれからの宣教を考える上で、1995年の夏に、清里清泉寮で開催された「日本聖公会宣教協議会」は忘れてはならないものです。この宣教協議会は、日本聖公会の管区総会で決議され、実施されたにも拘らず、主教も半数近くが欠席であったことに象徴されるように、日本聖公会全体で十分に受けとめられたとは言い難いものでした。しかしながら、この1995年宣教協議会では、その後の日本聖公会にとって欠かすことのできない、

いくつかの視点が確かめられたのも事実です。

■「日本聖公会の戦争責任」をめぐって

1995年宣教協議会の主題である「日本聖公会の宣教一歴史への責任と21世紀への展望」からも分かるように、議論の中心は、日本聖公会の戦争責任をめぐってでした。日本聖公会が、戦前の天皇制軍国主義に教会として抵抗することができず、侵略戦争に結果として加担した責任を問うことがなければ、わたしたちはアジアの姉妹兄弟と繋がることはできない、という認識のもとに、宣教協議会は、日本聖公会の戦争責任を告白しました。これを受けて、翌年の1996年の日本聖公会第49定期総会において、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」を決議するに至ります¹（巻末資料1）。

敗戦後すでに半世紀を経たものではありませんでしたが、それでも、わたしたち日本聖公会がこの時点で、公式に教会として、自らの教会の戦争責任を率直に宣言したことの意味は決して小さなことではありません。現在、大韓聖公会から、数多くの司祭さんが、日本聖公会各教区に派遣されて、重要な働きを担っていただいています。韓国聖公会の聖職の存在なくしては、日本聖公会各教区とも、もはや成り立たないと言っても過言ではないでしょう。今は、日韓それぞれの主教按手式には、互いの主教が参加し、手を突き合います。しかし、これらは、長年にわたる日韓聖公会の地道な交流と、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」がなければ実現することはなかったものです。

1988年に開かれた「ランベス会議」²の8月6日の聖餐式は、日本聖公会が担当しました。主イエスの変容貌を記念すると同時に、「ヒロシマ」を覚える聖餐式でもありました。この聖餐式の中で、日本聖公会は、教会としての戦争責任を告白し、世界の聖公会の人々と共に、「キリストの平和」を歌いました。わたしも通訳として参加していましたが、多くの参加者から、8月6日の聖餐式は、今回のランベス会議のハイライトであったとの言葉を受けました。アフリカのある主教は、アングロサクソンの教会が、かつてアフリカに為したことを告白したことなどない、と言われていましたが、いずれにしても、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」は、世界の聖公会に大きなインパクトを与えたのです。東日本大震災に際し、わたしたちは、世界中の聖公会からたくさんの温かい支援をいただきましたが、それも、このことと無関係ではないのです。

¹ 1996年日本聖公会第49（定期）総会、決議第34号（第18号議案修正案可決）。

² 1867年以来、基本的に10年に一度、カンタベリー大主教の招待のもとに、全世界の聖公会主教が一同に会する会議。当初はロンドンのカンタベリー大主教邸である、ランベス・パレスで開催されたため、この名前が付いているが、現在は、カンタベリーのケント大学で行われている。

■ 「福音伝道の十年」を明確に意識した宣教理解

1995年宣教協議会は、21世紀に向けた日本聖公会の宣教を展望するために不可欠な視点を提示しています。これらは、1988年ランベス会議で決議された、アングリカン・コミュニオン³の共通の宣教目標であった「福音伝道の十年」⁴を意識したものでした。この宣教協議会は、わたしたちの日常の中で、キリストの福音が受肉化されることがいかに大切であるかを指摘します。そのために以下の諸点を確認しました。①礼拝、説教、聖書研究を再検証すること、毎主日の礼拝での説教が、宣教を励ます力となること。信徒使徒職の働きの重要性を再認識すること。②教会教育、神学教育をより充実させること。宣教を担う者を育てる教育を実践すること。③マイノリティとされた人々と共に生きる教会となること。④女性の教会参与をより推進すること。女性の司祭按手を実現すること。⑤いのちと環境をめぐる問題に教会として関心を持つこと。「被造物の保全」を宣教的なテーマとすること。「核」の問題に取り組むこと。⑥<いのち>の尊厳として、死刑執行停止を求めること。

今から17年前の宣教協議会で、すでに、今回のわたしたちの宣教協議会で議論されるべき課題はほぼすべて出されていると言ってもよいでしょう。今回の主題でもある「いのち、尊厳限りないもの」も然りです。問題は、この17年の間、わたしたちは何を為してきたのか、ということです。戦争責任の宣言と共に、宣教協議会では決議された「共同懺悔式文」は実現することはありませんでした。「宣言」自体も対外的には、大きく評価されたものの、日本聖公会内で、十分に共有されたかと言えば、必ずしもそうではありません。教会教育の充実、女性の参与も決して大きく進展しているとは言えません。1995年宣教協議会自体のセッティングの問題や、一方で、教勢の減少、高齢化等々の現実的課題に向き合っていないなどの指摘もありましたように、せつかくの宣教協議会がその後、生かされる仕組みが構築されなかったことも事実です。しかし、この協議会の中で語られた文字通りの「宣教課題」は、今もなお有効なものばかりです。

■ 「原子炉奉献の祈り」を唱えたこと責任

ことに、17年前の宣教協議会で、わたしたちは、原子力発電の危険性を問い、「核」の問題性について、教会として取り組むことの必要性についても議論していたことを、思い起こしたいのです。当時、立教大学の大学院生であった相原太郎さんによる、「立教大学の原子炉」についての発表は重要なものでした。それは、1962年に、横須賀市武山に建設された立教大学原子力研究所の研究用原子炉をめぐる問いでした。

1950年代中盤から1960年代の時代、「原子力の平和利用」はある種の憧れのテーマで

³ 「アングリカン・コミュニオン」とは、全世界の聖公会の交わりを総称するもので、現在は、8,500万人の信徒を擁している。

⁴ 1988年ランベス会議において決議された、世界聖公会共通の宣教方針。

した。鉄腕アトムと妹ウランの活躍に大人も子どもも熱中した時代です。大学においても、「安全な原子力」の研究のため、立教大学以外にも、京都大学、近畿大学などに実験用原子炉が建設され、実際、重要な研究が為されてきたことも事実です。福島第一の原発災害以後も、きわめて信頼度の高い情報を提供してくれている小出裕章さんも、京大原子炉実験所の研究者です。

立教の研究炉は2001年にすでに稼働を停止しましたが、わたしたちが記憶に留めなければならぬのは、この原子炉が造られた経緯です。1958年に開かれた米国聖公会総会において、日本聖公会宣教100年を記念した原子炉寄贈募金決議案が可決されました。これは米国聖公会の原子炉寄贈計画に、日本聖公会が積極的に誘致した結果でもありました。米国政府から原子力平和利用の活動を託されて日本国内でも活動したウィリアム・ポラード(William G. Pollard)、オークリッジ原子力研究所所長が、同時に米国聖公会の司祭であったことも大いに影響したに違いありません。マンハッタン計画にも参画したポラードは、自らの研究が結果的に広島、長崎への原爆投下をもたらしたことを苦悩し、後に聖公会の司祭となりました。彼や、米国聖公会の原子力平和利用推進は、ヒロシマ・ナガサキに対する懺悔の実践でもあったのです。

1962年の開所聖別式において、日本聖公会主教代読によって、この、米国聖公会リヒターバーガー(Arthur C. Lichtenberger)総裁主教の「原子炉奉獻の祈り」が奉げられました。

「全能の神よ、主はその栄光をもろもろの天のうちに現わし、アブラハムには燃ゆる柴のうちに、エリアにはいと細き静かなる声のうちに現したまえり。また、このわれらの時代には大いなる原子力のうちに、自らを示したまう。」

日本聖公会は、今年5月に開催された第59定期総会において、「原発のない世界を求めて—原子力発電に対する日本聖公会の立場—」と題する声明を決議しました。この声明は、アングリカン・コミュニオン事務局を通じ、即座に全世界の聖公会に配信され、大きな反響を生んでいます。しかし、今、福島第一の原発災害を経験したわたしたちは、それがたとえ時代の限界点であったにせよ、かつて「原子炉奉獻の祈り」を唱え、ある意味先頭に立って「原子力の平和利用」という悪夢をこの地に振りまいたことへの深刻なる反省なくしては、脱原発のうねりの中に身を置くことは決してできないのではないのでしょうか。

その上で、わたしたちは、原発というものが、「創造」を「混沌」へと解体する、神のみ業への反逆であることを、わたしたちの社会に対して、そして全世界に向かって、勇気を持って宣言していきたいのです。

3 「日本」というコンテキストで宣教することとは

さて、1995年宣教協議会を踏まえつつ、わたしたちは、この2012年宣教協議会で、こ

れからの日本聖公会の宣教の課題と可能性を語り合いますが、まずその前提として、そもそも、わたしたちがこの「日本」というコンテキスト⁵で宣教するというのは、どういうことなのかを考えてみたいと思います。

■ 日本でキリスト教が広がらない不思議

今回の宣教協議会に向けて、各教区でもさまざまな形での宣教協議会が開催されました。わたしも、今回の講演を準備するにあたり教区報等の資料を読ませていただきました。それらに記された数字が語ることは、今の日本聖公会の教勢がいかに劣化しているかという歴然たる事実でした。しかし、この状況は、決して日本聖公会だけのことではなく、日本カトリック教会や日本基督教団なども含めて、日本の教会全体に共通する問題です。

日本ナザレン教団牧師の石田学さんは、『キリスト教年鑑』のデータを基に、1996年が一つのターニングポイントであったと指摘されています⁶。石田さんは、1995年のオウム真理教、地下鉄サリン事件が、マスコミと役所のスタンスを反宗教へと変化させたと分析します。確かにそれ以降、日本の人々は、ことさらキリスト教も含めた宗教団体全体に懐疑的になったと言えます。しかし、その一方で、いわゆる「スピリチュアル・ブーム」は根強いものがあります。日本人はよく無宗教であると言いますが、毎朝のテレビや電車内で今日の運勢などが流され、けっこう気になったりするものです。それもまたある種の宗教性であると言えます。相変わらず教会での結婚式は人気ですし、赤ちゃんが生まれればお宮参りは欠かしません。日本人は基本的に宗教的なのであって、昨今の反宗教は、宗教的なもの自体に対する反対なのではなく、宗教団体による組織的活動に対する警戒心であると言えるかも知れません。

石田さんは、日本で急速にキリスト教が浸透した時代があったことに着目されます。それは、16世紀のキリシタン初期の時代です。それが幕藩体制下で、禁教政策というシステムが導入され、キリスト教の進展は物理的に閉ざされてしまいました。明治に入り、初期にはこのシステムが崩壊し、異文化であるキリスト教が受け入れられる余地がありました。しかし、明治政府は、すぐに「天皇制」というシステムによって、幕藩時代のシステムを上書きしてしまったのです。結局、依然として、日本の社会構造の中にキリスト教が入る隙間はほとんどなかったと言えます。

第二次世界大戦で日本は敗戦しますが、それにより、これまでのシステムが崩れ、それは同時に、キリスト教宣教にとっての大きなチャンスを意味しました。実際、いわゆる「戦後キリスト教ブーム」が到来するのです。わたしたちの教会をこれまで中心的に支えてきた、現在70代以上の信徒さんの多くは、その時代に洗礼を受けた方々です。しかし、「戦

⁵ 「コンテキスト」(context)は、文脈、状況等の意味がある。神学的には、聖書(テキスト)解釈の関係で用いられる用語。

⁶ 越川弘英編『宣教ってなんだ?—現代の課題と展望』(キリスト新聞社、2012年)参照。

後キリスト教ブーム」は、あくまでも一時的なものでした。戦争で傷を受けた日本社会が、急速に回復すると同時に、天皇制を基本とした社会システム、人々の滅私奉公的意識は、そのまま継承されてしまい、やはりキリスト教が受け入れられるシステム変更はなされないままに終わったと見ることができます。

そもそも、「キリスト教」は、新しい世界観や価値観に人々をいざなうものであって、したがって、キリスト者になるということは、生活のあり方も含めて、多少なりともその社会の中で「異質な存在」として生きる決断を求めるものです。けれども、日本の社会システムは、実は16世紀から現在に至るまで、ほぼ一貫して、大きな変化を望まないものであり、キリスト教に隙間を与えるものではなかったと言えるのです。

また、一方で、日本の伝統的な宗教観を理解する必要もあります。これは、すでに多くの宗教学者が指摘しているところですが、日本人にとって、「神」に関わるのは、通常ではない事態や危機的な状況に直面した時である、ということです。普通の日常生活を平穩に送っている間は、むしろ「神」と積極的に交わらない方がよいのです。日常の生活の中では、「神」と関わらないでいられることが、むしろ幸福のしるしなのです。わたしたちのキリスト教は、「神と共に」あること、「主と共に」いてくださることを求めますが、そもそもそれは伝統的な日本人の宗教性とは相いれないことなのです。まさしく、「触らぬ神にたたりなし」です。日常の生活を意味する「ケ」と、神との接触である「ハレ」を、はっきりと峻別するのが、日本人の伝統的な宗教観だと言われています。

このように、そもそも日本人の宗教性は、キリスト教の宗教性と対極的な要素に依っているのですから、日本にキリスト教がなかなか広がらないのは、決して不思議なことでもなんでもないので。むしろ、日本の人口の約1%がキリスト者というのは、実は良く健闘しているとも言えます。わたしたち日本聖公会も、非常にキリスト教宣教が難しい土壌の中にあること、そんな簡単に人が教会に集まらないのは実は当たり前なのだ、ということ、を、まず理解する必要があるのです。

■ 日本のプロテスタント諸教会における「共同体性」の回復

石田さんも指摘されていることですが、日本のキリスト教の大きな特徴として、その独特なプロテスタント的信仰形態が挙げられます。明治の初めに日本に入ってきたプロテスタントのキリスト教は、個人の内面の信仰と高い倫理的生活を強調するものが主流でした。教会は、聖書を学ぶ場であって、説教壇はあくまでも「講壇」でした。“church”が結局、日本語では「教会」と訳されたことが象徴的です。日本のプロテスタント教会は概ね、自覚的な「個」としてのキリスト者を生んだ一方で、共同体意識を欠落させてきたと言われるのも、このような背景があります。確かに、日本基督教団などで用いられてきた『讚美歌』は、「わたしたち」ではなく、「わたし」の信仰を歌うものがほとんどでした。

そうした反省から、現在の日本のプロテスタント諸教会においては、教会本来の「共同

体性」を回復しようとする主張が多く見られるようになってきました⁷。「宣教」と言えば何かを「する」ことが意識されますが、そもそも、この世の中に教会が存在すること自体が「宣教」なのであり、その意味で、教会とは「宣教共同体」なのだという理解です。また、かつて、日本の教会は、個人としてはキリスト者であったとしても、共同体としては、「国家」に取り込まれ、反キリスト的な天皇制軍国主義に対する対抗的共同体となることができなかつたことの反省から、この世のあらゆる権威、支配、制度、構造、価値観、理念に対して、教会は「対抗的共同体」として存在すべきであるということ。教会は、礼拝において、この世の価値とは異なるものを価値として重んじることを表明する。教会とは、礼拝において、キリスト教の信仰内容、希望、喜び、感謝、確信、究極の目標が全体的に表現される「礼拝共同体」であること。したがって、わたしたちは、礼拝の在り方を、より宣教的なものとして常に整え、刷新していくことが必要であるということ、です。

石田さんは、教会が、愛と憐れみ、和解と平和の共同体である以上、この世の構造に対する対抗的構造のはずであり、教会は、世の社会構造によって苦しめられ、疲弊させられている人々、世の共同体に問題を感じている人々にとって、別の共同体の可能性を示し、生きることを可能にするオルタナティブな共同体として、自らの存在を明らかにしていなければならない、と強調されます⁸。教会は、愛と憐れみ、恵みと平和、正義と公平の交わりを、教会内に閉じ込めておくべきではないし、また閉じ込めておくことはできない。

もちろん、対抗共同体だからと言って、教会が自分たちだけで閉じられてしまつてはならないことは言うまでもありません。地域の中で教会が異次元的な存在になってしまつているとすれば、それはそれこそ単なる得体の知れない「よそ者」でしかありません。同時に、わたしたちは、自分たちの価値観や理念を積極的に周囲に示し、伝えることによって、神の国の理念と倫理を世に広めていく責任があります。これらのことは、教会が、聖公会を含めてエキュメニカルに共有してきた5つの要素、ケリュグマ(*kerygma*)、ディアコニア(*diakonia*)、コイノニア(*koinonia*)、レイトゥルギア(*leiturgia*)、マルトゥリア(*martyria*)と大いに関係がありますが、これらについては、また後ほど言及いたします。

いずれにしましても、昨今の日本のプロテスタント諸教会では、教会の共同体性の回復が重要視されている、ということです。教会が「共同体」ではないから、キリスト者になつても、教会以外のどこかに、自らが所属する共同体を見出そうとします。教会は、残念ながら、教会外共同体に優先順位を譲り渡してしまつた、という認識です。学校共同体に負け、スポーツクラブに負け、企業共同体に負け、地縁、血縁共同体に負けている。国家共同体にも負けていることは深刻だ、というものです。「教会本来の共同体性をどのように構築するかが、わたしたちの取り組むべき宣教的課題」⁹という主張に、わたしたち日本聖公会に属する者も十分に耳を傾ける必要があるように思います。

⁷ 同書、26頁。

⁸ 同書、28頁。

⁹ 同書、24頁。

そもそも、聖公会の教会論の本質は「共同体性」にあります。わたしたちが大切にしている『祈祷書』はまさに、聖公会が大切にしてきた「共同体性」の象徴です。聖公会の礼拝における主語は、「わたしたち」であって「わたし」ではありません。後ほど触れることとなります聖公会の牧会理解、また、国家と教会における“critical solidarity”¹⁰理解など、本来、聖公会という教会は、「共同体性」を地で生きてきたのです。しかしながら、日本聖公会は、そうした聖公会本来の伝統的な共同体性を上手く表現することができずに、他の日本のプロテスタント諸教会と同質の傾向の中に埋没してきてしまったとは言えないでしょうか。わたしたち日本聖公会は、聖公会という教会のアドバンテージをもっと活かすべきであろうと考えます。そこで、次に、現代のアングリカン・コミュニオンが、どのような宣教理解、教会理解を持っているのかについて、今一度、概観してみたいと思います。

4 アングリカン・コミュニオンの宣教理解

世界の聖公会は、「アングリカン・コミュニオンの宣教の5指標」(5 Marks of Mission)を共通の宣教の基準点としていることは、プレ宣教協議会でも取り上げました。この「宣教の5指標」が生み出された流れを、ごく簡単に振り返っておきましょう。

■ アングリカン・コミュニオンの「宣教の5指標」 - 5 Marks of Mission -

1984年にナイジェリアで開催された第6回全聖公会中央協議会(ACC-6)は、アングリカン・コミュニオンにおける「宣教の4指標」を以下のように決議しました。①神の国の福音を宣言すること。②新たな信徒を、教え、洗礼を授け、養うこと。③愛の奉仕によって人間の必要に応えること。④社会の不正義な構造の変革に参加すること¹¹。1988年ランベス会議は、この「4指標」を正式に承認した上で、わたしたち聖公会にとっての「宣教の場」をこのように定義しました¹²。「宣教の場は全世界である。すなわち、飢えた世界、不正な世界、怒れる世界、恐怖の世界である。汚染され、回復不能な損害の危険の中にある世界である。しかし、それはまた、善意と愛が溢れている美と希望の世界でもある。正義と完全と平和を求めて苦闘している世界でもある。」

そして、ACC-8(1990年、ウェールズ)で、さらに第5の指標が加えられたのです。⑤被造物の完全さを守り、地上の命を保持し、新たにするため努力すること¹³。この5つが、

¹⁰ 拙書『聖公会が大切にしてきたもの』(聖公会出版、2010年)63頁、参照。

¹¹ Cf. The Anglican Consultative Council, *Bonds of Affection-ACC6* (London: Church House Publishing, 1984).

¹² 『1988年ランベス会議諸報告・諸決議・牧会書簡』(管区事務所、1990年)30頁。

¹³ Cf. The Anglican Consultative Council, *Mission in a Broken World-ACC8* (London:

わたしたちアングリカン・コミュニオンのいわゆる「宣教の 5 指標」の内容です。もう一度、以下に「宣教の 5 指標」をまとめておきましょう。

<アングリカン・コミュニオンの宣教の 5 指標> (5 Marks of Mission)

- ① 神の国の福音を宣言すること。
- ② 新たな信徒を、教え、洗礼を授け、養うこと。
- ③ 愛の奉仕によって人間の必要に応えること。
- ④ 社会の不正義な構造の変革に参加すること。
- ⑤ 被造物の完全さを守り、地上の命を保持し、新たにするため努力すること。

ACC-9 (1993 年、ケープタウン) は、アングリカン・コミュニオン全体で「宣教」をめぐるさまざまな角度から研究し、方向性を提示するための特別常置委員会 “Missio” を設置しました¹⁴。Missio は、ACC-11 (1999 年、スコットランド) に最終報告『宣教における聖公会のわたしたち変革への旅ー』(*Anglicans in Mission - A Transforming Journey*) を提示しました¹⁵。この最終報告は、「宣教の 5 指標」についての重要性を再強調する一方で、宣教を行う視点がこの 5 つしかないと考えられてはならず、それぞれの聖公会が置かれているコンテキストの中で、より創造的に考えられなければならないと指摘しています。大切なことは、「宣教の 5 指標」を、そのまま引用することではなくて、それぞれの聖公会が、それぞれの状況や課題に向き合う中で、豊かに「解釈」しなければならない、ということです。その意味では、今回のわたしたち日本聖公会の宣教協議会の課題とは、日本聖公会のコンテキストの中で、いかにこの「宣教の 5 指標」を解釈し、独自の言葉に練り上げるか、ということにあると言っても過言ではありません。

そのために参考にできるものとして、英国教会、ウェールズ聖公会、そしてカナダ聖公会の事例を、次に紹介しましょう。

■ 英国教会の *Parish and People* 運動

英国教会における伝統ある宣教運動の一つに、*Parish and People* というものがあります。それほど派手なものではありませんが、世界の聖公会の宣教論、宣教実践に有形無形の影響を与えてきました。現在のスタッフは、3 人の信徒と 3 人の聖職による 6 名という小さなチームで構成されています。他の宣教グループとは異なり、誰か特定のリーダーを創らないことも特徴の一つです。あくまでもこの信徒、聖職の協働チームが、それぞれのヴィジ

Church House Publishing, 1990).

¹⁴ <http://www.anglicancommunion.org/communion/acc/meetings/acc9/resolutions.cfm>

¹⁵ <http://www.anglicancommunion.org/communion/acc/meetings/acc11/resolutions.cfm>

ョンと価値観、多様な経験と現実的関わりを分かち合うことによって、宣教の方向性とキーワードを提示することを中心としていて、この姿勢は創設以来変わりません。

Parish and People は、1950年代後半から、いわゆる「リタージカル運動」¹⁶への英国教会内からの一つの応答として開始されました。ケラム修道院のメンバーであった、ガブリエル・ヒーバート(Gabriel Hebert)司祭、ヘンリー・キャンドール(Henry de Candole)主教らが創始者です。リタージカル運動は、英国教会においても、小さなパリッシュ¹⁷の一つひとつの共同体に「静かな革命」をもたらし、活性化に大きく寄与したと言われています。このリタージカル運動と連動して、*Parish and People* が生み出されていきます。

その後、1963年に、*Parish and People* は、「チーム・ミニストリー」と「シノディカル¹⁸な教会運営」を大きな目標として掲げた運動を開始します。現在でこそ、「チーム・ミニストリー」は、聖公会においてもごく一般的なものとなりましたが、そもそもの起源は、およそ半世紀前の *Parish and People* 運動にあると言えます。1970年には、‘ONE for Christian Renewal’を主題に英国教会内の宣教活性化運動をリード。その後も地道に英国教会の宣教運動を先導してきました。

Parish and People は、<Vision and Values> (ヴィジョンと価値) という基本的な視座を明らかにしています。現代の英国教会も深刻な教勢不振に陥っています。もはや、英国の人々の中で、キリスト教信仰が生活の規範となっていないという現実認識のもとに、*Parish and People* は、地方の教会を活性化することを通して、英国教会に再び<いのち>を与える道を提案しています。その鍵は、先述したことと関連しますが、聖公会という教会が大切にしてきた「共同体性」を徹底して回復していこうというところにあります。

ことに、わたしたちの聖公会が、「聖餐共同体」(Eucharist Community)である、ということ。 *Parish and People* は、それを以下のような「場」であるとして、提示しています。①神の恵みが感謝を持って受け留められ、分かち合われる場。②いろいろなグループや個人が、多様性を大切にすることを通して、それぞれの一致を発見する場。③会衆が、さまざまな現代的な方法で、神の宣教に奉仕しながら、より大きな交わりの一部であることを自覚できる場。④会衆が、それぞれの生活の中での召命を確かめながら、結ばれる場。⑤すべて洗礼を受けた者が、それぞれが奉仕職であるという召命を受け入れる場。⑥リーダーシップというものが、管理するものではなく、キリストのような自己奉獻の働きを担う者として認識される場。⑦感謝をもって受け、喜びをもって与えることが、互いに実践される場。⑧一人ひとりが、それぞれの信仰の旅の中で、たとえその旅がどこに向かおうとも、支えられ、養われる場。 *Parish and People* は、地方のパリッシュ教会の一つひとつが、このような場であることを求める「聖餐共同体」であることを、再認識することが、

¹⁶ 1960年代以降、ローマ・カトリック教会や聖公会などで起こった世界的な礼拝刷新運動。

¹⁷ 「パリッシュ」(parish)は「教会区」と訳される。

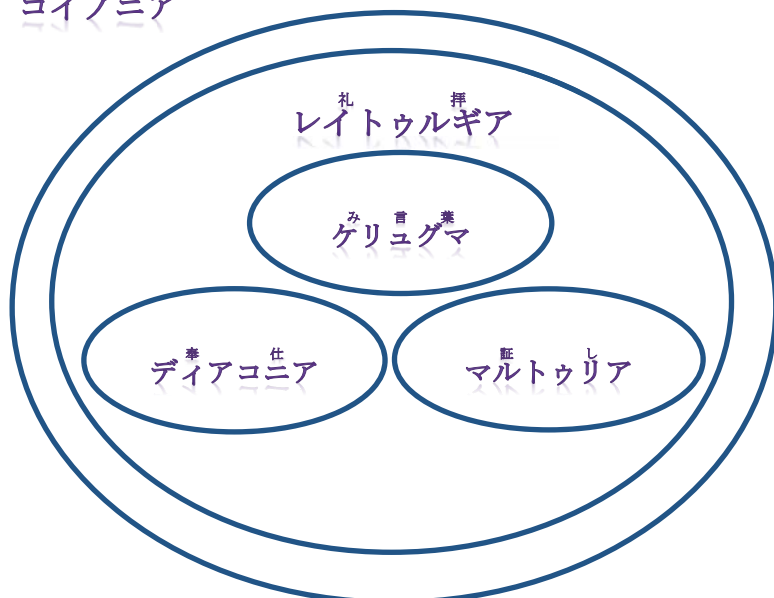
¹⁸ 「シノディカル」(synodical)は、“synod”から来ていて、「会議的な」等に訳されることが多い。もともとは、ギリシャ語の *syn-hodos* (共に道を歩む) が語源。

基本的に重要なのだと主張しているのです。

Parish and People は、アングリカン・コミュニオンの「宣教の 5 指標」を、本質的な宣教基準として、大きな評価を与えています。同時に、これらの 5 指標が、ばらばらに

置かれるのならば意味がないとも指摘します。そうではなくて、Parish and People が提示するのは、宣教指標の 5 つのロープが、しっかりと寄り合わされて、一本の強靱な「綱」となる、というイメージです。

交わり
コイノニア



もちろんこのような理解は、Parish and People が初めて提起したもの

ではなく、聖公会の伝統的な教会論の中にすでに含まれているものであると言えます。古代教会以来の「教会の 4 指標」である、①ひとつの(one)、②聖なる(holy)、③普公の(catholic)、④使徒の(apostolic)教会、に加えて、聖公会も大切にしてきた、教会の 5 つの要素をここで思い起こしておきたいと思います。ギリシャ語ですが、①ケリュグマ(kerygma)、②ディアコニア(diakonia)、③マルトウリア(martyria)、④レイトウルギア(leiturgia)、⑤コイノニア(koinonia)、の 5 つです。ケリュグマ(kerygma)は、「み言葉を宣べ伝えること」、②ディアコニア(diakonia)は、「この世界、社会の必要に応じ奉仕すること」、③マルトウリア(martyria)は、「この世界、社会に対して、福音を具体的に証しすること」、④レイトウルギア(leiturgia)は、「祈り、礼拝すること」、⑤コイノニア(koinonia)は、「交わり、共同体」をそれぞれ意味します。この内、「マルトウリア」は、「殉教」の語源ですが、存在そのもので、福音を証しすることが含まれます。

これら 5 要素の関係については、神学の歴史においてもさまざまな見解があるのですが、わたしの理解では、上図のようなイメージとなります。ケリュグマ(み言葉)、ディアコニア(奉仕)、マルトウリア(証し)のいずれの要素が欠けてはならず、またそれらがレイトウルギア(礼拝)と結びつけられながら表現される。それらすべてが包括されるコイノニア(交わり)が、わたしたちの「教会」である、ということです。わたしたちそれぞれの教会で、これらの要素をもとにチェックしてみるのも、宣教を考える上で、大きな助けに

なるでしょう。

- | | |
|------------------|--|
| わたしたちの
教会は・・・ | <ul style="list-style-type: none"> ① み言葉に聴き、また伝えているか (ケリュグマ) ② 世界、社会の必要に応え仕えているか (ディアコニア) ③ 日常生活の中で、証ししているか (マルトウリア) ④ これらすべてのことを、礼拝、聖餐の中で祈りとしているか (レイトゥルギア) ⑤ これらすべての要素が欠けることのない交わり、共同体となっているか (コイノニア) |
|------------------|--|

これらはもちろん、「宣教の5指標」とも繋がるものです。今回の、宣教協議会で、わたしたち日本聖公会独自の<宣教の道しるべ>を、紡ぎ出せるとすばらしいと思います。

■ ウェールズ聖公会の宣教ヴィジョン Church in Wales Review – July 2012

ウェールズ聖公会は、宣教の新たなヴィジョンを提示した報告書、*Church in Wales Review* を、去る 2012 年 7 月 20 日に公表しました (巻末資料 2)。ウェールズ聖公会はもちろん歴史と伝統のある教会です。ローワン・ウィリアムズ(Rowan Williams)、カンタベリー大主教もウェールズ出身です。しかし、ウェールズ聖公会が現在置かれている状況は、実はわたしたち日本聖公会と良く似ています。この報告書は、わたしたちがこれからの宣教を模索するための、いくつかの重要な視座を提供してくれています。

ウェールズ聖公会(*Church in Wales*)は、6 教区で構成されていて、信徒数は約 75,000 人です。1920 年まで英国教会の一部であり、カンタベリー大主教の管轄下にありましたが、1920 年の独立後は、大主教制を採用しています。ウェールズ大主教は、6 教区主教の中から選出されますが、選出後も教区主教としての働きも継続します。現在のウェールズ大主教は、バリー・モーガン(Barry Morgan)大主教(ランダフ教区主教)です。

近年、ウェールズ聖公会は、数多くの聖職者の引退、聖職志願者の減少による、聖職者数の激減、一人の聖職が管理する教会数の増加、信徒数の漸減、若者の教会離れ、財政圧迫等々の問題に直面しています。2010 年に、もはやこれまでと同じやり方では立ち行かないことを確認し、大胆な改革の必要性が求められました。

“The Review Group”という改革委員会が立ち上げられ、さまざまな調査を踏まえて提言に至ったものが、*Church in Wales Review* と題された報告書です。50 項目にわたる提言から成っており、この報告は、現在、ウェールズ聖公会執行機関に提示され、検討に付されているところです。同グループは、ウェールズの全教区を訪問し、各主教、各教区の多様なメンバーとの会合を重ね、さらには管区常置委員会、主教会、神学校の代表者とも協

議を続けました。地方の若い教会の代表者たちとの会合や、青年たちの声も含めて、グループがインタビューした人は1000人以上に上ります。また、各方面から寄せられた、200以上の文書も検討材料とされました。

報告は、ウェールズ聖公会の、誇るべき点は何かの確認から始めています。パリッシュ・レベルでのさまざまな豊かな働きに注目しています。具体的な社会活動、プロジェクトも担っています。しかし報告書は、何よりも、疑いなく、ウェールズ聖公会は、暖かくて、親切で、他者を迎え入れる共同体であると語ります。その上で、これから、よりウェールズ聖公会が生かされる道、方策を考えることが必要であるということです。

報告が提言する一つの重要なポイントは、教会生活、教会の諸活動の中において、より「信徒」が中心的な働きを担うこと、です。ウェールズにおいては、信徒は未だに、聖職にすべてを依存しようとする傾向があり、信徒が持っている豊かなタラントと熱意を、十分に教会の宣教のミニストリーに生かす方策を考えなければならないと指摘します。この点を基本として、報告が、具体的な提案をしています、その中からいくつかを以下に紹介しましょう。

①ウェールズ聖公会の教区会は、各教区主教が自身の考えを教区に伝える機能はあるが、パリッシュの思いを吸い上げる仕組みにはなっていない。本来、聖公会の教区会は、「シノッド」(Synod)であるべき。地域の声と主教の声が有機的に往還し合う「シノッド」がいかに重要であるか。【提言】「教区会」の名称を「シノッド」に変更する。【提言】教区諸委員会、機関のメンバーになる者が選挙で選出される場合には、候補者は必ず短いマニフェストを明らかにし、自身が教区の直面する諸課題に対し、どのような見解を持っているのかを公表することを義務付ける。

「シノッド」(Synod)の語源は、ギリシャ語の *syn-hodos* (共に道を歩むこと) から来ています。教区とパリッシュの教会一つひとつが共に歩み、主教と聖職、信徒が共に歩み、地域と教区、教会が共に歩むことを確かめる「場」が本来の教区会が持つ意味である、ということです。また、教区を構成するさまざまな委員会のメンバーを選挙で選ぶ場合には、候補者は、必ず自分が教区の課題、将来に対してどのようなヴィジョンを持っているのかを信徒、聖職共に表明しなければならない、というのも興味深いことです。日本聖公会が各教区で常置委員を選挙する際に、同じようなことをするのは現実的ではないかも知れませんが、少なくともその意味は共有してもよいでしょう。

②一人の司祭が一つの教会を牧会、管理することはもはや今後のウェールズ聖公会ではあり得ない。大胆な改革が必要。パリッシュからより広いエリアを考え、一人の司祭ではなく、異なった賜物を持つ者たちによるチームで。このエリアを、ウェールズ聖公会では、【ミニストリー・エリア】(Ministry Area)と呼ぶことにする。これはこれまでも為されてきた単なるチーム・ミニストリーの奨励ではなく、ウェールズ聖公会全体で公式的、組織的に新たに導入する「仕組み」である。各「ミニストリー・エリア」には明確

な宣教目標が立てられる。「ミニストリー・エリア」には、聖職、信徒からなる「リーダーシップ・チーム」が設定される。原則として、「ミニストリー・エリア」における「リーダーシップ・チーム」の内、3人は、有給のポスト。

ウェールズ聖公会でさえも、もはや一人の聖職が、一つの教会を牧会することは不可能となっているのです。そこで提案されているのがこの「ミニストリー・エリア」というものですが、複数の教会を複数の教役者、信徒で運営しようという考え方は、日本聖公会でも以前からありまして、今回、読ませていただいた各教区の宣教ヴィジョンの中でもいくつか示されていました。ウェールズの場合には、それを管区的に制度化し、聖職のみならず、リーダーシップ・チームに任命された信徒も、自教会のみならず、ミニストリー・エリア内にある他のすべての教会の運営、牧会に責任を持つというものです。ウェールズでは、今後は、一教会単位で宣教を考えるのではなく、すべてこの「ミニストリー・エリア」を基礎的な単位としていこうとしているのです。わたしたち日本聖公会でも、それぞれの教区の状況に合わせながらも、管区の新たな仕組みとして取り入れる可能性があるのではないのでしょうか。

③リーダーシップ・チームにおける有給聖職の役割はきわめて重要。したがって、有給聖職の養成、支援は、教会にとっても再重要事項。そのためには、「聖職評価」のシステムを確立しなければならない。聖職としての始めから終わりまで、「360度審査」(360 degree examination)が求められる。他の協働聖職者、会衆、その他から、自分がどのように見做されているか。教会外の専門職によるインタビュー。聖職者のより有効な継続教育システムの開発。【提言】ウェールズ聖公会全体で共通する、体系的な「聖職評価システム」を導入する。この「聖職評価」は、各聖職が、自身に与えられた特別な役割を再発見し、自身の生き方を相応しく整えるために設定される。

ウェールズ聖公会が提案している「ミニストリー・エリア」を運営する「リーダーシップ・チーム」は、聖職、信徒で構成されますが、その中でのフルタイム聖職の働きは、今まで以上に重要なものとなります。そのために、聖職者が、十二分に働くことができるような支援体制が求められます。「聖職評価」と言うと、少々刺激的ではありますが、教役者のいわゆる継続教育であると同時に、大切なのは、それが、各聖職が、「自身に与えられた特別な役割を再発見し、自身の生き方を相応しく整えるため」のものである、という点です。おそらく、ウェールズ聖公会も、この「ミニストリー・エリア」の成否は、実は一方で、フルタイム聖職の働きにかかっていると見ているのでしょう。わたしたち、日本聖公会でも、検討すべきテーマであろうと思います。

④ウェールズ聖公会が直面する最も深刻な課題は、若者の教会離れである。各ミニストリー・エリアには、青年たちに関わるより訓練されたフルタイムのスタッフが必要。青年たちをキリスト教の信仰と生活に繋

げるために、ソーシャル・メディアを十二分に活用できなければならない。

ウェールズ聖公会でも、青年たちとの繋がりをいかに活性化させるかが、中心的な課題の一つのようです。そのためにトレーニングされた専任のスタッフを置くことは確かに大切なことです。

⑤ウェールズ聖公会にとって、聖餐式は、礼拝生活の中心である。しかしながら、現在の多くの人々にとって、礼拝はまるで外国語のように縁遠く、不思議なものとなってしまっている。とりわけ、青年たちにとってはそうである。各ミニストリー・エリアは、キリスト者共同体と礼拝の多様なスタイルを提供すべきである。もちろんだからと言って奇抜な礼拝を奨励するわけではない。若い人の中には、より伝統的なスタイルを好む者もいる。しかしながら焦眉の課題は、教会外の諸文化の中で、多くの人々にとって今の礼拝のあり方が無意味なものとなってしまっているという現実はどう立ち向かうかである。大多数の人々、ことに若者たちにとって、日曜日の朝というのは必ずしも礼拝に相応しい時間ではないことに、わたしたちは向かい合うべきである。他の曜日、時間がもっと検討されてよい。

聖公会の本家のウェールズでさえと言えど語弊があるかも知れませんが、果たして今の礼拝が魅力ある、豊かなものとなっているのか、という問いに誠実に向き合っていることが分かります。決して、奇をてらった礼拝を創りだす必要はないけれども、一方で、さまざまな工夫がなされる必要があるというのは、わたしたち日本聖公会にとっても共通の課題です。

⑥ウェールズ聖公会における奉仕職養成は、聖職か信徒かに拘わらず、統合された養成理念に基づいて実施されるべきである。信徒奉事者としての養成プログラムを受けた者が、按手聖職を志願する際には以前の教育が勘案される。将来の教会における奉仕職のほとんどは、信徒や無給の聖職となっていくであろう。それゆえに、より相応しい質を持つ教育訓練システムが必要とされるのである。【提言】ウェールズ聖公会において一般的な Reader という呼称は、今後、Licensed Lay Minister (認可信徒奉仕職) に変更される。信徒それぞれ異なる賜物、召命に相応しい信徒奉仕職の多様性を認識したトレーニングが、なされなければならない。

ウェールズ聖公会が提案している「ミニストリー・エリア」が実現するための必要条件は、もちろん信徒奉仕職の働きです。ことに、リーダーシップ・チームを構成する信徒奉仕職には十分な教育、訓練が求められています。ですので、そのための教育トレーニング・システムを構築することが重要なのです。日本聖公会のいくつかの教区でも、「信徒神学校」などの試みをされています。各教区の状況を勘案しながらも、多様な信徒奉仕職の養成プロセスを、管区的に整えていくことも必要なのではないのでしょうか。

⑦ウェールズ聖公会において、適切な教区数は何教区なのかという議論。多くは、現在の6教区を、教区境界線を見直した上で、3~4教区に減じるべきという意見。しかし現状において直ちに教区数を変更するのは望ましくない。少なくとも今後4年間は、現状の6教区を維持する。しかしながら、それぞれの教区体制を維持するための委員会や制度があまりにも多すぎる。教区数を変更しないで、より効率的に運営するために、北・南・南西の3運営センターを設定する。教区主教数も変更しないが、すべての運営は、この3つのセンターを中心に運営する。これらセンターによって運営されるエリアに属する教区間で、統合できる委員会は一体化させる。これによって、経費、時間、運営負担を軽減することが可能。3教区体制となる場合でも、教区主教数は現状(7主教)を維持し、3教区主教と、司牧的責任を公的に持つ4人のエリア主教(area bishops)という仕組みにする。エリア主教は、本来主教職に課せられている宣教的、牧会的、靈的職務に集中する。

ウェールズ聖公会のこの議論は実に興味深いものがあります。教区数も、教区主教の数も維持しながら、運営については複数の教区を統合した形で行うというものです。ウェールズという国の形状だから可能なことであって、東西南北に細長い日本では無理かもしれません。しかしながら、教区再編を大きな課題としている、わたしたち日本聖公会も、このウェールズ方式を参考にしてみてもよいのではないのでしょうか。

例えば、日本聖公会を、大きく「東日本エリア」と「西日本エリア」の二つに分けます。「東日本エリア」には、北海道教区、東北教区、北関東教区、東京教区、横浜教区、中部教区、「西日本エリア」には、京都教区、大阪教区、神戸教区、九州教区、沖縄教区、という2エリア制として、宣教、牧会等については、これまでの各教区の伝統を活かしながら、教区主教を中心にていねいに担い、一方で、財政、運営組織等々のロジスティックスな部分については、2つのエリアそれぞれに統合して行うというものです。「東日本エリア」の運営本部は東京教区内に、「西日本エリア」の運営本部は大阪教区内に置きます。

もともと、日本聖公会の歴史において、いわゆる自給自立を基本とした「教区」としての要件を満たして成立した教区は、東京教区と大阪教区の2教区のみでした。その他は「地方部」と呼ばれた「伝道教区」であったのが、1940年の宗教団体法という国家の要請（強制）に応じて、「教区」にしてしまったのです。戦後直後の1945年12月13日に開かれた、「日本聖公会昭和20年臨時総会」（通計第21総会）で、日本聖公会は、宗教団体法成立以前の法憲法規に復帰しました。本来はその時点で、無理に教区としたものをもう一度、地方部に戻すべきであったのですが、そのまま「教区」として継続してしまっただけです。そのような意味では、ロジスティックスな拠点を、東京と大阪に置くということは決して不自然なことではありません。もちろん実際に有効な仕組みがどうかは、さまざまな角度から検証されなければならないことは、言うまでもありません。

⑧「大聖堂」（主教座聖堂）の役割はより重要なものとなる。証し、教育、音楽の傑出した拠点としての機

能。「大聖堂」は、各教区の宣教とミニストリーの中心。

拙書、『聖公会が大切にしてきたもの』でも言及しましたが、わたしたちの宣教にとって古代教会以来の「主教職」の意味を理解することは重要なことです。今一度簡単にまとめておきたいと思います。

第1には、「ティーチング・ミニストリー」「教える者」としての「主教職」という理解でした。第2に、教会のみならず世界・社会の方向性、ヴィジョンを提示する「先導者」「預言者の使命」としての働きです。第3に、「一致の焦点」としての主教職です。グローバルな、普遍的な教会と、地域の教会とをダイナミックにつなげていく働きです。第4には、「時間的な一致の焦点」としての主教職理解がありました。過去の教会と現在の教会、そしてまた未来の教会を繋ぎます。過去・現在・未来という時間を結んでいく時間と空間を超えた「一致の焦点」です。世界の教会をつないでいくグローバルな「共時的」な意味と、古代・現在・未来と時間を超えた「通時的」な意味があるのだ、ということです。

これらの主教職の内容は、すなわち教会の宣教の働きと直結しています。そして、これらの主教職の働きは、主教個人だけではなく、教区に属するすべての者によって担われますが、この「主教職」の働きを象徴するのが、各教区の大聖堂（主教座聖堂）に置かれている文字通りの「主教座」という「椅子」です。したがって、ウェールズ聖公会が再確認しているように、「主教座」が置かれる「主教座聖堂」の意味と機能には、きわめて中心的なものがあるのです。わたしたち日本聖公会においても、すでに複数の教区が試みていることですが、この「主教座聖堂」の意味と機能を、より積極的に回復していくことが求められるでしょう。

■ カナダ聖公会 Vision 2019

カナダ聖公会は、2010年6月に、Vision 2019と題された宣教大方針を総会において決定し、内外に公表しました。Vision 2019は、全部で66ページにわたるものですが、カナダ聖公会が置かれている状況を詳細に分析した上で、2019年の時点で、カナダ聖公会がどのような姿であることを求めるのかを描き、そこから逆算してそれぞれの年度において、どの課題をどこまで取り組む必要があるのかという、マイルストーン、タイムラインを明確に示しています（巻末資料3）¹⁹。

カナダ聖公会は、ここ数十年の間に急激に教勢を落としていまして、例えば、1961年から2001年にかけて、信徒数は、実に50%以上も減っているのです²⁰。この減少傾向は、今

¹⁹ Vision 2019の全文は、<http://archive.anglican.ca/gs2010/wp-content/uploads/019-GS2010-Vision-2019-Report-and-Appendices.pdf> を参照のこと。

²⁰ 信徒数が、1961年時点で、1,358,000人であったのが、2001年時点では、641,845人に半減している。

世紀に入ってから10年間も止まっていません。そのような状況に向き合い、今後、新たにカナダ聖公会が再生するために、2008年に、カナダ聖公会総会は、統計的な視点を通して、これからカナダ聖公会がどのように成長できるのかを精査する「Vision 2019 タスクフォース・チーム」を設置し、検討を開始しました。もちろん、それまでカナダ聖公会が何も対策を取っていなかったわけではなく、ほとんどの教区毎に、さまざまな取り組みが為されていて、それらの中で、カナダ聖公会全体で、より効果的な宣教のために共有できるものについては、このVision 2019にも取り入れられています。

Vision 2019は、すべてのカナダ聖公会に属する者が共に宣教に参加することを強力に求める中で生み出されました。最初に、タスクフォースは、すべてのカナダ聖公会の信徒、聖職に対して、2つの問いを出しました。それは、①「みなさんの教会が、いま、どこにあり、どこに向かおうとしているのか」、②「みなさんは、カナダ聖公会が2019年にはどのようなようになって欲しいのか」、の2つです。その結果、1,009名から、メールやYouTubeビデオ、ヴォイスメッセージ、手紙、ファックス等を用いた応答があったそうです。

タスクフォースはこれらを分析し、以下の8領域のテーマに絞り込みました。それらは、①青年と若い家族、②包括性(inclusiveness)、③伝統、④礼拝、⑤アウトリーチ²¹、⑥新しい力とアイデア、⑦成長と減衰、⑧さまざまな違いに向き合うこと、です。タスクフォースは、これらの応答を精査するための「レンズ」として、アングリカン・コミュニオンの「宣教の5指標」を用いました。寄せられたほとんどの応答が、「5指標」のどれか一つに当てはめることが可能だったと報告されています。同時に、「5指標」をそのまま適応するのではなく、それぞれの現場での働きの中で、「5指標」を、いかに自分たちのものとするかが不可欠であるとも指摘しています。

タスクフォース・チームは、2009年11月に、草案をカナダ聖公会総会準備委員会と主教会に提示し、他の18のステークホルダーグループも含めてフィードバックを受けました。タスクフォースは、さらなる検討を加えて、「神の宣教の中に生きる」、「神の宣教のために備える教会」というテーマのもとに、7つの「宣教指針」を提示するに至りました。総会、諸委員会、スタッフのみならず、すべてのカナダ聖公会につらなる者が、この「宣教指針」に責任を持って応答し、コミットすることが求められています。

さて、Vision 2019のすべてを紹介することはできませんが、ここではその7つの「宣教指針」の概略を取り上げてみたいと思います。

- ① 「**宣教、伝道、ミニストリーのためのリーダーシップ教育の展開**」。礼拝、学び、伝道、証し、奉仕において、「神の宣教」に仕える、活発で、世代を超えた会衆を導くことのできる信徒リーダー、接手されたリーダーを養成する。
- ② 「**北部協議会(Council of the North)²²を通じたミニストリーの支援**」。カナダ聖公会全体にわたって、

²¹ 「アウトリーチ」(outreach)とは社会奉仕等の支援活動一般のこと。

²² 「北部協議会」とは、カナダの主要都市以外の北部地域全般を管轄するカナダ聖公会の

北部協議会における諸教区の、牧会的、 sacramentalなミニストリーを支援するための、わたしたちの教会全体の力を強める。

- ③ 「先住民の人々共に、癒しと全体性を求める旅を歩む」。カナダ聖公会全体で、聖公会先住民協議会との協働を継続しながら、先住民の人々が自決的なミニストリーの旅を歩むことができるように、支える。「聖公会先住民ネットワーク」²³との関係を引き続き推し進める。先住民の声が明確に聴かれることを求め、先住民の正義に関わる諸課題の解決に向けた働きを教会が引き続き先導する。
- ④ 「正義と平和を求めて働く」。カナダ政府が、正しい国家諸政策を実行し、地方における草の根レベルでの働きを強めることができるように、カナダ聖公会は働く。そのために、オタワ（首都）に政府との関係部局を設置する。
- ⑤ 「宣教に向かって相互に成長できるように、青年と関わる」。「神の宣教」に仕える者としての青年との繋がりを強化することを求めた、カナダ聖公会青年イニシャティヴ・ワーキンググループの勧告を実行する。
- ⑥ 「わたしたちの礼拝を活性化させる」。礼拝式文の刷新を進め、時代を経て、文化を越えて、わたしたちが経験してきたさまざまな礼拝から、また、聖書と、キリストの弟子であることの招きから生み出された原則を基礎として、礼拝実践そのものを改革する。
- ⑦ 「アングリカン・コミュニオンとエキュメニカルな働きの中での先導者となる」。カナダにおけるアングリカニズムの深さと広さに誇りを抱きながら、「神の宣教」に参加する共通の感性を育てる。そのために、アングリカン・コミュニオンの他の枝との関係を強め、エキュメニカルなパートナーシップを深める。ミニストリーの規範的なフレームワークとして、アングリカン・コミュニオンの「宣教の 5 指標」を基本とする。この「宣教の 5 指標」を、カナダ聖公会の管区すべての教区、地方のミニストリーにおいて推奨する。

これらは、基本的に、さきほど見た、ウェールズ聖公会からの提案と重なるところが多いものです。また、先述しました、ケリュグマ、ディアコニア、マルトゥリア、レイトゥルギア、コイノニア、それぞれの要素を、カナダというコンテキストの中で、切り結ぼうとしたものであるとも言えるでしょう。

しかしながら、わたしが注目したいのは、その充実した内容もさることながら、カナダ聖公会がその宣教指針を決めていくプロセスと形式にあります。カナダ聖公会全体にわたる調査、分析をもとに、さまざまな宣教協議会等を通して議論を重ね、最終的には、総会においてこの Vision 2019 を決議し、カナダ聖公会すべての教区、教会、信徒、聖職は、2019 年のヴィジョンにむけて、一体となって宣教に邁進していくことを、ある意味拘束力を持って、「決議」しているのです。

翻って、わたしたち日本聖公会はどうでしょうか。決してカナダの真似をする必要はあ

協議体。カナダ全土面積の 85% をカバーするが、人口は 15% である。主要な課題は、先住民の人権等である。

²³ 世界各地の先住民の人権問題に関わるアングリカン・コミュニオンのネットワーク。

りませんが、今回の「宣教協議会」は、せめてこのような意味を持つものでありたいと願います。この宣教協議会が、少し規模の大きな研修会、修養会で終わらないために、少なくともわたしたち日本聖公会のこれからの10年の方向性を導く何かしらの〈道しるべ〉を、わたしたち一人ひとりがそれぞれの場へ持ち帰りたいと思います。いわば、〈日本聖公会の Vision 2022〉を、共に描きたいのです。

5 「いのち、尊厳限りないもの」 ～WCC 第10回総会との関連で～

さて、アングリカン・コミュニオンの「宣教の5指標」の第5番目は、「被造物の完全さを守り、地上の命を保持し、新たにするため努力すること」でした。ここでは、この第5番目の指標に少しこだわってみたいと思います。当初は4指標だったものに、この第5番目が加えられたのが、1990年のACC-8でした。実は、これは、同じ1990年に韓国、ソウルで開催された「世界教会協議会」(World Council of Churches: WCC)の、「正義・平和・被造物の保全(Justice, Peace and Integrity of Creation: JPIC)世界会議」と連動しています。2006年に、ブラジル、ポルトアレグレで開かれた、WCC 第9回総会に招かれた、ノーベル平和賞受賞者でもある南アフリカ聖公会の、デズモンド・ツツ(Desmond Mpilo Tutu)元大主教は、WCCの人種差別撤廃に向けた働きがなければ決してアパルトヘイトが無くなることはなかった、と大きく評価しましたが、確かに、長年にわたり、WCCは、世界の正義と平和、人間の尊厳の問題に深くコミットしてきました。

■ 「いのちの神よ、わたしたちを正義と平和に導いてください」

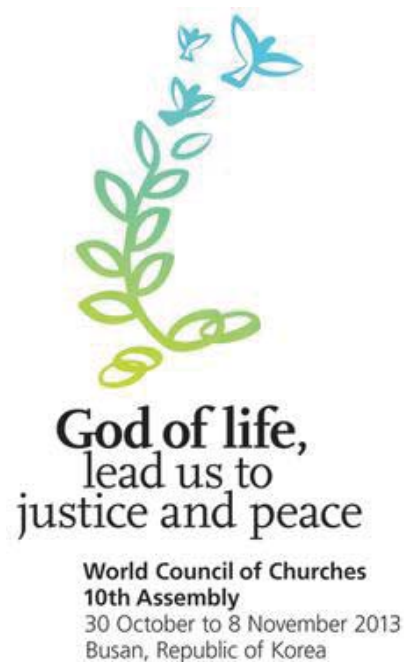
一方で、1980年代後半に入り、環境破壊、生態系、気候温暖化などの、エコロジカルな諸課題もまた世界の教会が共通して取り組むべきものとしての認識が高まり、これまでの〈正義と平和〉に加えて、あらゆる〈いのち〉を、尊厳をもって守り、慈しむことが、いわゆる「トップ・アジェンダ」とされて行きます。WCCが主催したJPIC会議は、そのことを明確に確認する意味も持ちました。聖公会の宣教の第5指標も、こうした流れの中で位置づけられるものなのです。蛇足になりますが、『日本聖公会聖歌集』に、1曲だけ、わたしが作詞に関わらせていただいたものがあります。聖歌第412番「主を求めよ、生きよ神の民」ですが、これは3節まであって、1節が「正義」、2節が「平和」、3節が「いのち」を主題としていまして、実は、このエキュメニカルな流れを意識したものなのです。

わたしは、先週まで、ギリシャのクレタ島で開催された WCC 中央委員会に参加してまいりました。日本聖公会、日本基督教団、日本ハリストス正教会、そして在日大韓基督教会が、日本から WCC に正式加盟している教会です²⁴。今回の中央委員会の重要な課題は、来年、2013 年 10 月 30 日から 11 月 8 日にかけて、韓国・釜山で開催される、WCC 第 10 回総会のテーマ、プログラム、参加者等の最終確認でした。

WCC 第 10 回総会のテーマは、「いのちの神よ、わたしたちを正義と平和に導いてください」(God of life, lead us to justice and peace)となりました。あらゆる<いのち>への配慮を求めることの緊急性が意識されているものです。この主題をイメージしたロゴマークも作られました。イザヤ書第 42 章 1~4 節を基にして、神が選んだ者たちが、この地上のすべてに正義を据えるその時までには、決して傷つき果てることがないように願うものです。硬い岩や鎖の絡まる大地から一本の「芽」が萌え出で、大きな「木」となること。その木から飛び立つ三羽の「鳥」が、この世界の隅々にまで、神の愛と正義と<いのち>の種を運んでいく、というイメージです。

ちなみに、今回の WCC 総会は、東北アジアで初めて開催されるもので、総会のプログラム内容にもアジアの諸課題や文化、思想が大きく取り入れられます。人間以外の<いのち>をも深く慈しんできた仏教などの東洋の宗教性にも深い関心が払われます。また、とりわけ開催地である朝鮮半島の平和と統一の問題が、世界のエキュメニカル運動にとっても重要な課題であることが確認されることとなります。総会全体では、前述したことも関わりますが、①コイノニア（キリストにおけるひとつの信仰と絆）、②マルトゥリア（世界における証し）、③ディアコニア（正義と平和、<いのち>に仕える）、④エキュメニカル・フォーメーション（リーダーシップ形成）、⑤宗教間の協働、という 5 つの領域のもとに各プログラムが構成されることになりました。

昨年、2011 年 5 月 17 日から 25 日にかけて、ジャマイカ・キングストンで、「国際エキュメニカル平和会議」(International Ecumenical Peace Convocation :IEPC)が開催されました。この会議は、WCC がファシリテートし、ジャマイカ教会協議会がホストとなって開かれたものですが、およそ 1000 名が参加する大きなものとなりました。平和会議の主題には、「神に栄光、地には平和を」というルカによる福音書からのみ言葉が与えられました。この会議は、大震災直後の混乱した状況ではありましたが、日本からも代表を派遣することができました。そのお一人が、昨日、特別講演をいただいた清水靖子シスターです。シスター清水の原発、核をめぐるプレゼンテーションは世界のキリスト者に大きな反響を与



²⁴ WCC は教会協議会なので、日本キリスト教協議会(NCCJ)も準代議員の扱いとなる。

えるものとなりました。IEPC の総責任者であった、ドイツ・メノナイト教会のフェルナンド・エンス(Fernando Enns)牧師も、清水さんの証言を聴きながら涙が溢れて止まらなかった、まさに協議会のハイライトであった、と言っておられました。

しかし、先週の WCC 中央委員会では、こちらから口にでもしない限り、東日本大震災のことも、福島第一原発災害のこともほとんど話題にならないことに、正直言って驚くほどでした。わたしたちにとっては、今もって、最も重要な課題なのですが、世界の人々の関心からは遠くなっているというのが残念ながら現実です。シリアなどの緊迫した状況が世界のアジェンダ（課題）になることは当然ですが、わたしたちは、被災地でのこと、福島のこと、そして脱原発というテーマを、日本の教会として、より積極的に伝えていかなければならないことを実感しました。

日本から最も近い外国の町である、釜山という地で開催される WCC 総会です。ことに脱原発を願う聖公会をはじめとする日本のキリスト者のメッセージを、世界に伝える重要な機会ともなります。それは、「いのちの神よ、わたしたちを正義と平和に導いてください」を主題とする WCC 総会への、大きな貢献ともなるはず²⁵。

6 「牧会的配慮」(Pastoral Care)としての聖公会の宣教理解

さて、『聖公会が大切にしてきたもの』や、一昨年のプレ宣教協議会でもお話ししたことはありますが、「牧会的配慮」(Pastoral Care)としての宣教理解について、ここで今一度、確認させていただきたいと思います。これは、わたしたち日本聖公会がこれからの宣教を思い描く上で、欠かすことのできないものだと考えるからです。また、あらためて言うまでもありませんが、この場合の「牧会」とは、聖職のみならず、信徒を含めた教会共同体全体で担われるものを意味します。

■ 聖公会の「パリッシュ制度」と「牧会的配慮」

言うまでもなく、聖公会の源流は 16 世紀英国宗教改革期の英国教会に溯ります。英国教会は、成立以来「国教会」でありました。国教会というシステムの中で発展した形態が、「パ

²⁵ WCC 総会では必ず、青年たちによるスチュワードを募集する。青年たちにとっても世界の教会、世界のエキュメニカル運動を肌身で経験するまたとない機会でもあり、世界のエキュメニカル青年、世界の聖公会の青年たちとの出会いの場ともなること、また、日本から最も近い海外の街である釜山で開催される総会でもあるので、ぜひ日本聖公会からも、多数の青年たちをスチュワードとして派遣したい。またこれは今回の中央委員会中に開かれた聖公会関係者会議で出た話題であるが、来年着座される第 105 代カンタベリー大主教が WCC 釜山総会を訪問し、聖公会の参加者との交流の機会を持つ可能性が、きわめて高い。

リッシュ」(教会区)制度です。実際には、英国教会以外の諸聖公会もパリッシュ制度を基本的に採用していますが、国教会ではない教会がパリッシュ制度を持つ意味があるのか、という問いは常に為されてきました。しかし、近年このパリッシュ理解をある意味で逆手に取って再解釈しようとする動きが生まれているのです。

国教会としての英国教会は、数世紀前までは、英国教会の信徒＝英国国民という前提条件が成立していました。すなわち、教会の“pastoral care”(牧会的配慮)とは、もちろんパリッシュに住む信徒への配慮なのですが、それは同時にパリッシュの全地域住民に対する配慮を意味していたのです。したがって、地域社会における課題に対して責任を持つことが、教会の牧会的配慮の内容に必然的に含まれておりました。

例えば、わたしは、日本聖公会中部教区の岡谷聖バルナバ教会を管理していますが、岡谷聖バルナバ教会のパリッシュは、諏訪湖周辺を中心に北は蓼科から南は伊那、駒ヶ根までを含みます。岡谷の教会の牧会とは、これら地域に点在する信徒に対する配慮だけを意味するのではなく、諏訪、伊那地域における社会的諸課題に積極的に教会としてコミットしていくことが求められるものなのです。過疎化、滞日外国人労働者の人権、等々、「牧会的」課題は少なくありません。

それゆえ、聖公会の宣教師たちはどこにおいても、教会の当然の「牧会的責任」として、教会のみならず、学校や病院を建てていきました。基本的には、信徒を増やすための伝道の「ツール」ではなく、聖公会の宣教師たちの目的はあくまでも教会の責任として、その地域社会のために当然のごとくに学校や病院、施設を作ったと言えます。この英国教会の伝統的な牧会理解を、国教会体制のない聖公会においても、むしろ大切にできるのではないか、という動きが世界各地で生まれています。教会が置かれている社会の課題に関わることは「社会派」なのではなく、実はすぐれて「牧会的」な働きであって、それはまさしくわたしたち聖公会の「伝統」であることを確認したいのです。

■ ウィリアム・テンプルと教会の牧会的責任



カンタベリー大主教であったウィリアム・テンプル(William Temple)は、この「聖公会の牧会的責任」を見事に表現し、実践した者の一人です。テンプルは1921年にマンチェスター教区主教に按手されますが、マンチェスターは、ランカシャー有数の産業都市で、教区としても英国教会内でも大きな地でありました。1924年に開催された COPEC 会議(キリスト教政治・経済・市民会議)を主管し、この中で、「政治・経済・市民社会」という主題がまさに教会の宣教の課題であることを明確に宣言します。19世紀末から20世紀初頭にかけて、教会にも個人主義の波が押し寄せ、政治社会といった事柄は政府、国家の専有事項であり、教会は口を出すべきではないというのが当時の一般的風潮でした。しかしなが

ら、社会状況は全世界規模の不況の中、混乱を極めており、ことに労働者をめぐる諸条件は抜き差しならないところまで来ていたのです。

テンブルはこのような状況にあって、教会が積極的に社会の中へ踏み込んで行く必要性を痛感していました。1926年の鉱山労働者のゼネスト仲介を通して、テンブルは労働者の権利獲得の立場から積極的に動き、時の首相ボールドウィン(Stanley Baldwin)を「教会の出る幕ではない」と激怒させますが、この件を通して「労働者の側に立つ教会」という立場を明らかにしたことは画期的なことであったと言われています。1942年にカンタベリー大主教に着座。第二次世界大戦中という激動期にカンタベリーに赴いたテンブルは、常に社会的課題とそれに対する「教会の牧会的規範」の提示を試みていたと言えるのです。



＜ウィリアム・テンブルに対する風刺画＞

テンブルは時に、社会的ラディカリスト、リベラリストと見られることもあります。が、実際には、神学的には明確な sacrament 主義、カトリック的なハイ・チャーチの立場に立っていたのも実に興味深い点です。テンブルにとって、教会の社会的な働きと、教会の sacramental な性質とは分けることのできないものでした。キリスト者、教会の関心は sacramental な宇宙、つまり、すべての神によって創造された世界に向けられなければならない。したがって教会の sacramental な働きは、教会の枠内に留まることは許されない。それは世界へ、社会へと拡張されなければならないのだ、という確信を、テンブルは持っていました。

実は、テンブルにとって、このことが最も目に見える形で表されるものが、他でもない「聖餐式」であったのです。聖餐においてキリストの犠牲を記念するということは、社会的隣人を覚えることであり、キリストにおいてあらゆる差別、抑圧などの隔ての障壁は乗り越えられるという確信が、聖餐において表現される。陪餐に与かることにより、イエス・キリストの牧会的働き、ミニストリーに与かり、教会から世界、社会へと派遣されていく。聖餐におけるパンとぶどう酒は、神と人間の協働性と社会性の象徴でもある。

このように、テンブルは、聖餐を未来社会のヴィジョンとして象徴的に理解しました。教会そのものを sacramental なものとして捉えることにより、教会が、この世界で、社会で現実的働きを担うことの根拠を明らかにしたのです。わたしたちが、テンブルの神学とその実践から学ぶことは少なくありません。

■ マーガレット・ビンズの牧会的働き

今年度の立教大学大学院キリスト教学研究科で、わたしが担当しているアングリカニズムの授業では、米国テネシー州スワニーにある聖公会大学であるサウス大学(University of the South)の神学部長なども歴任された、アーバン・ホームズ(Urban T.Holmes III)司祭のテキスト、『アングリカニズムとは何か』²⁶を読みました。ホームズは米国聖公会司祭で神学者ですが、1981年に51歳の若さで逝去されています。

ホームズは、アングリカニズムが、リタジー、詩、音楽、そして日常の生活の中で、神を愛することのできる、豊かな世界を生み出してきたことを強調します。また、先に紹介しました、英国教会の *Parish and People* 運動を高く評価し、特に、感性豊かなリタジーこそが、生き活きとした活発なキリスト者共同体を生み出し、そしてそのような共同体こそが、この世での証しとなると確信していたことに注目しています。

しかしながら、ホームズの著書におけるハイライトは、聖公会の「牧会的配慮」(Pastoral Care)の豊かさを語ることにあります。彼は、アングリカンは「牧会的教会」(Pastoral Church)と言われるが、わたしたちが本当にその真の意味を知っているかは、はなはだ疑問であると指摘します。

1950年代後半、ある司祭は、説教壇から聖書の話しかしなかった。彼は、社会の課題を語ることが「牧会的」だとは考えていなかった。おそらくそのような課題は、彼よりもむしろ信徒の方が良く知っていると考えていたからだ。²⁷

ホームズは、聖公会の伝統における牧会的な関わりは、検証される必要がある、と言います。それは伝統が不適當であるからではなく、わたしたちが、しばしば、本当に牧会的であることを避けるために「牧会的」(pastoral)という「ラベル」を安易に用いようとするからです。

さらにホームズは、聖公会における「牧会者の守護聖人」と称される、ジョージ・ハーバート(George Herbert:1593-1633)を取り上げます。ハーバートは、牧会神学書と共に、すばらしい詩を残しました。また彼は、田舎にある小さなパリッシュの牧師でもありました。ハーバートは、罪と死、十字架と愛について書いています。彼の牧会神学は、司祭がいかに自らの信徒に誠実であるべきかを想起させるものでした。司祭とは、キリストの痛みを自らが負う者として、信徒一人ひとりを訪ねる者である。ハーバートは、司祭とは、牧師とは、自ら十字架を背負うことによって、他者もまた、希望をもって自分の十字架を背負えるように導く者である、と明言します。

²⁶ Urban T.Holmes III, *What is Anglicanism?*(Wilton, Connecticut: Morehouse-Barlow, 1982).

²⁷ Ibid.,p.58.

ホームズは、無名の女性の執事である、マーガレット・ダッドリー・ビンズ(Margaret Dudley Binns:1884-1968)の物語を紹介します。ビンズは、西南ヴァージニアのアパラチア山脈にある孤立した村の、小さな教会で、50年以上にわたって奉仕しました。彼女は、もともとニューヨーク、ブルックリン生まれで、聖公会司祭であるヒュー・ビンズ(Hugh Binns)と結婚。夫の死後、実家に戻るのではなく、夫の仕事を引き継ぐ決心をします。1915年に、ニューヨークにあった女性のための執事専門校を卒業し、その後アパラチアの辺鄙な山奥へと入って行くのです。そこで彼女は、炭鉱会社が所有する、使用されなくなった教会で、今は店として使われている建物と、2、3の家族を見出します。家を借り、元教会であった建物を使う許可を得ました。

ビンズ執事は、この村の人々と共に生き、そして死んで行きました。1917年に、ある材木会社がこの村に入ってきた時に、彼女は、小さな学校を開きました。彼女と、彼女が採用した教師の2人が、そこで16年間教えました。また数か所で、日曜学校も作りました。彼女はそこに、馬の背中に乗って出かけました。ビンズは、村の「医者」でもありました。村人に健康への配慮の仕方を教え、できる限りの身体的な必要に応えました。それらはまさに、ジョージ・ハーバートの精神そのものでした。アパラチアの厳しい自然と、劣悪な環境の中で、彼女は80歳になるまで働いたのです。

ビンズが奉仕したこの村の聖ステパノ教会は、もう存在しません。少ない信徒ではもはや存続してはいけないと、教会が決断したからです。もちろん、この教会の決定は正しい。もし、わたしたちの「存続」の基準が、都市近郊型教会のそれであるならば、とホームズは言います。この村の学校には、今も、執事マーガレット・ビンズの名前が冠せられています。それゆえ、この村の人々は、今もなお、聖公会の女性の執事、マーガレット・ビンズの名前を記憶し続けているのです。

執事ビンズは、絶望の中にある者に希望を与えられる、受肉の主の福音の内に生きました。ビンズ執事は、もし福音が村人たちを自由にするならば、神の恵みは、知識、健康、そして愛という形をまとってやってくることを、知っていたのです。イエス・キリストは、すべての者にとっての主であり、人々の日常すべての生活の中で具体的な形をとって主の恵みは与えられる。それは、日曜日の説教の中だけの出来事では決してないのです。

聖公会は、伝統的に、もしわたしたちが「牧会的」であるならば、わたしたちはまた同時に「預言者的」でなければならないと考えてきた、とホームズは強調します。聖公会は、世界を、聖なるものと、世俗なるものとに分けることはしません。わたしたちは、愛は、わたしたちが生きるすべての面において知られ、分かち合わなければならないと確信しています。わたしたち一人ひとりの個人的な生活が、教会の牧会的な関心の主要舞台であることは当然ですが、同時に、政治、社会、経済、産業、娯楽といった領域もまた「教会」の対象なのです。

ホームズは言います。聖公会にとっての「教会」とは、多忙な司祭のオフィスを訪ねて、15分に限って話を聞いてもらうということではない。そうではなく、ビンズのように、馬

の背中に乗って、山々を越えて、そこで生き、働く人々を訪ね歩くことだ、と。「牧会的配慮」とは、基本的に、マニュアルに基づく「お仕事」などではなく、「アート」(art)なのだ。破れ、弱さ、痛みの中にある人々の、その生の中に、その人自身にしかない「聖なるもの」をいかに発見できるか。その感性が必要である、と。

確かに、わたしたち日本聖公会のすべてのパリッシュが、そんな「牧会」を求められているのでしょう。もう一度確認しますが、この場合の「牧会」とは、聖職者のみならず、信徒も含めた、パリッシュの教会共同体全体で担われるものを意味します。そして、この意味での「牧会」こそが、実は聖公会にとっての「宣教」であると言い切っても過言ではありません。わたしたち聖公会にとって、「宣教」と「牧会」は切っても切り離せないコインの裏表なのです。

7 東日本大震災「いっしょに歩こう！プロジェクト」から学ぶこと

さて、昨日は、「いっしょに歩こう！プロジェクト」の働きを中心に、長谷川清純司祭・越山健蔵司祭からお話を伺いました。昨年3月11日以来、この1年半にわたって、わたしたちは「いっしょに歩こう！プロジェクト」を通して、多くの出会いと気づきを与えられました。被災地に直接赴くことが難しい人々も、このプロジェクトを通じて、さまざまな形で、被災された方々と繋がることのできたのは、実に大きなことであったと思います。今一度、このプロジェクトを担ってくださった、加藤博道主教、長谷川先生、越山先生、中村淳先生をはじめとする、すべての信徒、聖職のスタッフ、ボランティアの方々に心よりの感謝を表したいと思います。

■ 「いっしょに歩こう！プロジェクト」の働き

昨年4月末に、仙台基督教会で開かれた、日本聖公会としての対策会議に、わたしも立教大学・東日本震災復興支援本部長として陪席させていただきました。その時の議論を今でもはっきりと覚えているのですが、当初は日本聖公会の対応プロジェクトの名称案にも「復興支援」という言葉が入っていたのです。しかし、加藤主教の「復興」という言葉への違和感の表明があり、また、一方的に支援をするというのではなく、じっくりゆっくりに、被災地の人々と共に歩くという想いを表現したいということになり、最終的に、『東日本大震災「いっしょに歩こう！プロジェクト」』という名がつけられました。

このプロジェクト名称の中に、わたしがこれまでお話してきた、聖公会が大切にしてきた、宣教と牧会の神学の本質がすべて詰まっているように思います。プロジェクトの目的は以下のように確認されました。

- ・わたしたちは、東日本大震災により困難を負って生きる人々に敬意を払っていっしょに歩きます。
- ・わたしたちは、被災地の方々の生活と地域の再創造に向けていっしょに歩きます。
- ・わたしたちは、主イエス・キリストが、共に歩いてくださることに励まされていっしょに歩きます。震災被災者の内、特に困難の中にある方々に思いを寄せて活動を行います。(高齢者・こども・障がい者・在留外国人・貧困層・避難民・・・)

実際、プロジェクトが開始されて今に至るまで、昨日報告された通り、日本聖公会の「いっしょに歩こう！プロジェクト」の活動は、ことに、隙間に置かれた人々、ハンディを抱えた人々、在留の外国からの人々と、辛抱強く、ていねいに共に歩もうとするものとなりました。この姿勢は、大いに評価されるべきものです。

また、ある意味で、副産物と言ってもよいかも知れませんが、はからずも、さまざまな形での教区間協働が実現しました。このような経験は、日本聖公会の150年以上の歴史の中でも、初めてのことであったと言ってもよいでしょう。

■ 「にもかかわらず語り続ける細い声、祈りの声」

この5月に行われた日本聖公会総会における開会聖餐式での、加藤博道主教の説教は、深い洞察をわたしたちに与えてくれました。加藤主教の説教から、その一部を、以下にご紹介させていただきます。

「一年が過ぎましたけれども、最初の頃のように、あらゆるところに破壊された「瓦礫」(しかしあの瞬間までは人々が愛した家や家具だったわけですが)や、押しつぶされた車や打ち上げられた船が積み重なっているという状態はある程度片付けられてきましたが、かえって赤茶けて乾いた土が住宅や会社だったところ、あるいは畑だったところに無機質に広がり、その中に建物も壊れたままに建っています。多くの子どもの犠牲を出した石巻の小学校は、ほんとにまわりの校庭も赤茶け、ところが不思議なことに水だけは、地盤沈下をしているせいか、たまった水さえもひかずに大きな池のようになっていますし、川や海の水位も妙に高く感じられ、水の威圧感があるという状況があります。その中に校舎も無人のまま建っています。その日の朝普通に「行ってきます」と言って家を出た子ども達、あの時の直前まで子ども達の声や笑い声が響いていただろう校舎が、今そのようになっているという姿は、胸を締め付けられる思いがします。もちろん子どもの場合だけでなく、ひしゃげた介護ベッドが庭に積み重なった高齢者施設も見てきました。子どもや家族を失った悲しみが癒えることはないし、家が流出し、職場を失った、それは今も少しも癒えていないし、見通しもたっていないというのが一年たったの現実であると思えます。

勿論多くの皆様からのご支援とお祈りをいただいている、そのことは決して無駄なわけではなく、精一杯のことがなされていますけれども、それでもやはり現実はまだそうである、と言わなければなりま

せん。」

「このような状況をみながらわたしの中に起こってきている思いを申し上げれば、今回のことも「想定外」等と言われますけれども、何かわたしたち人間の基本は「いつも安全で安定していて物事が基本的には予定どおり進み、繁栄したり進歩していく」ということが通常な、ノーマルな状態で、時々それを破って災害や悲劇が起こる、不慮のことが起こる、想定外というのではなくて、むしろわたしたちの世界の基本的な原理が「悲劇」なのではないか!? そう思わないと説明がつかないと、そんな気がしています。この世界そのものが基本的に「悲劇」なのだ、多くの悲しみのある世界なのだということを、「今日も無事で、明日も無事で、物事が計画通り進み、長い生涯を全うする」等ということが、むしろ「たまたま」のことなのではないか、という感じを持ち始めています。」

「圧倒的な暴力と破滅的な状況の中で、なお「畑を買い、証人を立てよ」と主は言われる。人が生きていくという営みは「にもかかわらず」、圧倒的に希望を奪われた状況の中でも、続けられていく、「続けるようにと」主が言われるというのです。回復の希望が続いて語られますけれども、それは非常に終末論的な言い方であって、決して安易に語られることではありません（パレスチナということ言えば、その旧約聖書の回復と平和の希望はいまだに実現していない、と言えるでしょう）。「正義、公正、平和」ということをわたしたち、現代の教会は繰り返し語りますけれども、しかし同時にそれら「正義や公正や平和」が普通に、普遍的にあったことは人類の歴史で一度もない、ということも思わなければならないのだと思います。いや、教会自体が思想や信仰によって人を処刑し、戦争を主導してさえたのです。」

「しかしもし、この世界の原理は「悲劇」だ、というのではなく、やはりそこには神の祝福、命の喜びがあるのだということを教会が語るならば、それは本当に、「にもかかわらず語り続ける細い声、祈りの声」なのだと思います。」

「にもかかわらず語り続ける細い声、祈りの声」。この、「にもかかわらず」というところに、わたしたち教会の使命があるように思います。それがたとえ一見無力であったとしても、悲劇に満たされたこの世界、社会、絶望の内にある人々に対して、「にもかかわらず」、神の祝福、<いのち>の喜びを、語り続けること。それがたとえ、か細い声、小さな祈りであったとしても、語り続けること。それこそが、わたしたちの担うべき「宣教」なのだ、ということ、わたしたちは、学んだのです。

■ 陸前高田、戸羽市長のメッセージ

わたしは、立教大学の復興支援活動で、これまでも深い繋がりのあった陸前高田市に足を運びました。震災、津波直後の、無数の人々の命も、町も生活も日常も、そして人々の涙さえもが押し流されてしまった陸前高田の状況を前にして、語るべき言葉を失い、茫然と立ち尽くしました。確かに、そこでは、「復興」がリアリティを持つものではありませんでした。立教の学生たちは、昨年を引き続き、今夏も陸前高田でさまざまな活動に関わらせていただいています。立教の多くの教職員も、スタッフとして現地に入りましたが、こ

のような出会いと経験は、同時に、学生、教職員に計り知れない気づきを与えてくれます。

陸前高田市の戸羽太市長は、多忙な中、学生たちが書いたレポートすべてに目を通していただき、立教の学生たちのために、このような手書きのお手紙をくださいました。

ボランティアに参加して頂いた皆様へ

立教大学 2011 年度夏季陸前高田支援ボランティアに参加して下さいました皆様に市民を代表し、心から感謝を申し上げます。立教大学と本市は長年にわたり御縁を頂いておりますが、今回東日本大震災で壊滅的な被害を受けた陸前高田市に沢山の学生諸君がボランティアに来て下さった事は、言葉にできない程嬉しく思っています。皆さんのレポートを読む時間がなく、今日まで御礼も言えずに歳月が経ってしまい申し訳ありません。レポートを全て読ませて頂き思った事は、人間て優しいな。まだまだ日本も捨てたものじゃないな。という事でした。

「絶望」という言葉があります。

わたし自身 46 年間生きてきて、生まれて初めて「絶望」というものを感じました。妻を亡くし、二人の子供をどうやって育てていくか。市長として陸前高田市を再生できるのか。普段は強気な性格であるわたしが、まさに身動きひとつとれない「絶望」の中にいました。

しかし、そんなわたしを絶望の淵から救ってくれたのは人々の優しさでした。失ったものは本当に沢山あり過ぎますが、一方で得たものも沢山ありました。人は一人では生きていけないなどと歌の歌詞だけの世界と思っていましたが、日本中から、世界中から頂いた励まし、優しさにより今日も何とか頑張れているのだと思っています。

皆さんがボランティアで経験された事、感じた事は皆さんの今後の人生に必ず生かして下さい。多くの犠牲の上に皆さんの経験があったという事を忘れないで下さい。

わたしたちは必ず陸前高田市を世界に誇れる美しい町として復興させます。復興には長い長い時間がかかります。皆さんもその頃には結婚され、お子さんもいるかもしれませんね。わたしたちが復興を遂げた時、どうかご家族で陸前高田市にいらして下さい。そして奥様や旦那様、そしてお子様にボランティアに来た時の話をしてあげて下さい。

皆様、本当にありがとうございました。

平成 23 年 11 月 22 日 陸前高田市長 戸羽 太

学生たちは、この戸羽市長の言葉をどのように聴いてくれたでしょうか。きっと学生たちのこれからの人生の中で、さまざまな意味を持つことになるかと確信しています。戸羽市長は、若い人々に未来へのヴィジョンを託されているのだと思います。被災地の大変な状況の中にありながら、若い者たちに、ていねいな言葉と励ましを与えてくださる、その姿勢に、わたしたちも学びたいのです。

聖公会につらなる者たちの責任の一つは、若い青年たちに、本物の出会いの機会と場を提供することにあります。前述しましたが、青年たちを励まし、彼女、彼らのタラントを最大限に引き出していくことは、わたしたち日本聖公会の「宣教」にとって、まさに中心的な課題です。今夏、開催された「日本聖公会・全国青年大会」は、被災地においてさまざまな経験をし、物語を聴き、盛況の内に終わったと聞いています。このような青年たちの存在と働きに、わたしたちは希望を見たいのです。

何を隠そう、このわたし自身が、聖公会やエキキュメニカルな青年活動の中で、育てられてきました。そのことに感謝をしたいと思っています。

8 日本聖公会の小さな宣教の歩み

さて、これまで、世界の聖公会をはじめとする、さまざまな宣教についての考え方などをご紹介してきました。しかし、一方で、それらの中で示された実践や視点は、実はすでに、わたしたち日本聖公会の宣教の歩みの中で証しされてきたものでもあるのです。『聖公会が大切にしてきたもの』においても、歴史の中に埋もれた、貴重な宣教史に光を当て、学ぶことが重要だと指摘し、具体的には、琉球宣教を担ったベッテルハイムや、アイヌのユーカラ（神謡集）を筆録した知里幸恵の物語を紹介しました。プレ宣教協議会では、信州の両角平左衛門の働きに言及いたしました。ここでは、2つの、日本聖公会の小さな、しかし大きな意味を持つ、宣教の歩みを紹介したいと思います。

■ 九州教区・大口聖公会の宣教の歩み

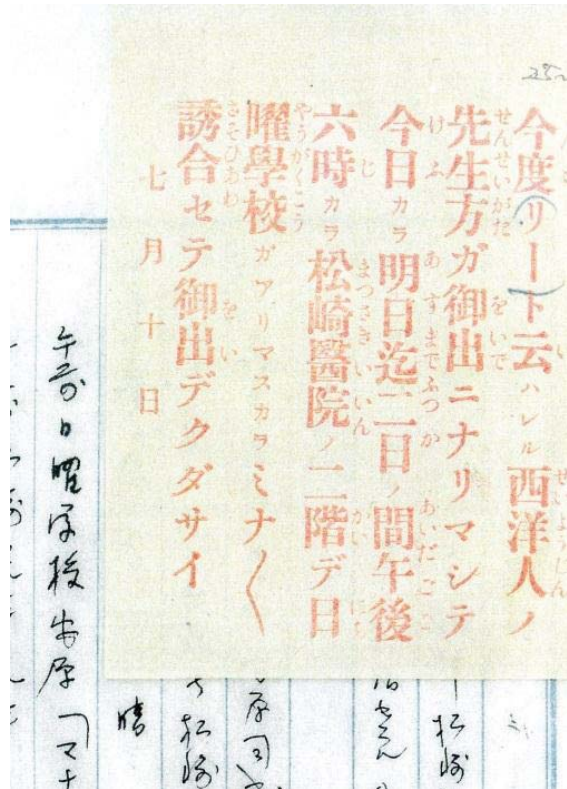
今年の8月頭に、九州教区大会にお招きいただき、講演する機会を与えられました。九州教区のみなさんの熱意とエネルギーに、逆にわたしのほうがたくさん元気をいただきました。ことに、中島省三司祭から、司牧されている大口聖公会の宣教の歴史を教えてくださいましたが、それは実に興味深いものです。

大口市は鹿児島県最北部にある町で、その境は南側を除きすべて山岳に囲まれています。大口聖公会の歴史はすでに85年ほどに及びますが、中島先生は、大口の町で宣教が開始された当時の、1919年に書かれた貴重な『教会日誌』を見せてくださいました。そこにはこのような記述もありました。

<七月十四日>午後二時より、小学校講堂に於いて、生徒の為に、リー監督の精神講話あり。後、教師の為に神の実在について講演せられ、数多くの教師の質問あり。午後八時より、劇場に於いて伝道講演会開会。開会松崎氏、開会の辞を述べ、副島氏、「基督教と国民道徳」と題し、エシ・ハッチンソン師「文

「明の基礎」と題し、リー監督、「平和伝える基督教」と題し各々熱弁を振りし、聴衆に多大の感動を与えたり。

宣教のために、小学校の講堂や劇場を借りて、講演会を開催しているのです。そして、大口の町の人々に大きな感動を与えた、とあります。今、わたしたち日本聖公会はどこの教区、教会も教勢の落ち込みに悩んでいます。であるからこそ、今、このように宣教協議会も開催されているわけです。しかし、100年以上ほど前までは、信徒などそもそもおらず、ほとんどが「0」からの開拓伝道であったことを、思い起こしたいのです。この大口聖公会の1919年の『教会日誌』が生き生きと伝えるように、小学校を借り、劇場を借り、一般の町の人々が分かるような言葉で、そして大きな感銘を与えながら、その地に教会が生み出されていったのです。わたしたちも、もう一度、開拓伝道をしていく。そのような思いを持って、「0ベースからの宣教」を、今一度、始めたいのです。



1988年に出された、『大口聖公会創立七十周年記念誌』もいただきましたが、数多くの豊かな物語で満たされたものです。そこには、このような言葉が記されています。

「大口聖公会はそもそも、その伝道の始めから信徒活動によっている。わたしたちの記憶の中には殆ど教会生活で定住教師の思い出はない。教会の活動はすべて信徒の手によるものというように、先輩方の働きはわたしたちに映っている。伝道活動から礼拝、教会の運営からすべてを先輩の方々は今うさされてきた。」

大口の教会は、創立からほぼ一貫して、定住の教役者が与えられなかったそうです。すなわち、大口聖公会は、その最初から、信徒を中心とした宣教によって生かされてきたのです。これまで見てきましたように、世界の聖公会においても、わたしたち日本聖公会においても、聖職中心ではなく、信徒奉仕職を基軸とした新たな宣教方策が模索されています。しかし、大口の教会をはじめとして、実は100年以上も前から、実は、「信徒の奉仕職」によって、日本聖公会の多くの教会が、命を与えられてきたことを、わたしたちはしっかりと記憶したいと思います。

1957年に、当時、日本聖公会教務院伝道局長として、宣教研修のため大口に派遣された、久保淵豊彦主教はこう書かれています。

「この訪問(1957年)で感じたことは、御教会が地元の人々と密着していること、地元を根を下ろしていると言うことで、都市の中で孤立し易い都会の教会では感じられない自力と安定感があることであって、とても羨ましく思った。」

管理牧師であった、村上豊吉司祭は、大口聖公会は、まさに教会の原点、「家の教会」であった、と言われます。

「大口の教会は原始キリスト教会によく似たものようでした。いわゆる教会らしい教会ではなく、主にある兄弟たちの集まりとか、家の教会といった感じのものでした。この教会の初代の人たちは、いつも「兄弟」と呼び合って話をしていました。昭和9年の夏はじめて大口に来



松崎 兼時
近藤 利孝
宮原 嘉一郎
市来 政香

たとき、あの方たちが「兄弟」と呼び合っておられるのを聞いて非常に感動しました。主にある兄弟たちの家庭集會、それがあの方たちの考えておられた教会だったようです。それが今日に至るまで、大口の教会の基調となっています。この教会は、創立から今日まで70有余年の大部分を定住牧師のいない無牧教会として過ごしてきました。無牧教会はたいへい、だんだん衰え小さくなり消滅することさえありますが、大口の教会は、無牧のために弱り衰えることなく、無牧なるがゆえにかえっていきいきとたくましく活動して、今日に至っております。」

さらに、ある信徒さんは、このように自分たちの教会を語ります。

「父母達の時代は、教会は純粋に祈りの場であり得たし、公の場というより、家庭の延長線上に存在していたのではないのでしょうか。自宅の庭掃除の続きのように教会の庭を掃き、わが家の家計を切り盛りするのと同じ責任感で教会の財政を支え、遊んでいる子供達を勉強室に追いやるようにして教会へ向かわせていたのです。山間部の僻地であったために長いこと専任の牧師さんに恵まれなかったのですが、そのことのためになにかの媒体にたよらぬいわゆる<教会信仰>ではない、直接天に向かってまっすぐに伸びる信仰を先駆者は強く身につけたのでしょう。教会があったから信仰したのではなく、熱烈な信仰がおのずから教会をうち樹てた。その歴史をこの時代、特に尊く感じています。」

最初から無牧であった大口の教会は、しかし今もしっかりと信仰を引き継いでいます。村上先生や信徒さんが言われるように、むしろ、無牧であったがゆえに、信徒を中心とし

た生き生きとした「コイノニア」が形成されたと言えるのかも知れません。教会はまさしく自分たちの『家』であった。そこで養われた信仰は、まさに、「直接天に向かってまっすぐに伸びる」ものであったのでしょう。「教会があったから信仰したのではなく、熱烈な信仰がおのずから教会をうち樹てた。」この宣教の証しを、今わたしたちは、今一度、しっかりと聴きたいと思います。

■ 岡谷聖バルナバ教会の歴史 — 深澤小よ志さんのこと —

『聖公会が大切にしてきたもの』でも、プレ宣教協議会でもご紹介したのですが、やはり、わたしが管理牧師を任ぜられている、中部教区の岡谷聖バルナバ教会の歴史については、ぜひあらためてお話しさせてください。

岡谷聖バルナバ教会は、2008年6月に聖堂聖別80周年の記念礼拝を祝うことができました。聖公会中部教区全体を宣教したのがカナダ聖公会であり、この岡谷を宣教したのもカナダ聖公会から派遣された宣教師、ホリス・コーリー(Hollis Hamilton Corey)司祭でした。コーリー司祭が岡谷という場所に教会を建てる決断をした時に、どれほどの者がこの岡谷の教会の将来を確信し得たであろうかと思います。現在も非常に小さく、貧しい教会です。フルメンバーが揃っても20人くらいにしかならないような教会ですが、今も豊かな礼拝と交わりを持つことができているのは感謝です。

80年前の当時、諏訪湖一帯をコーリー司祭が伝道し、いよいよ聖堂を建てることになり、諏訪の一帯のどこに教会を建てるのか、そういう選択に迫られました。カナダ・ミッションの指示はより賑やかな温泉地で有名な下諏訪、あるいは上諏訪に教会を建てよ、ということでした。実際、他のプロテスタントの諸教会は、現在でもほとんど上諏訪、下諏訪にあるのです。

しかし、コーリー司祭は、そのミッションからの指示を拒否したのです。コーリー司祭は、諏訪の一帯で、最も重荷を背負われている人々のために教会をつくりたい、最も辛い思いをしている人たちのために聖堂を建てたいと考えていました。1928年当時の岡谷は製糸工業の町であり、「シルク岡谷」として世界的に有名でした。当時の岡谷の町の6万人のうちの7割8割が、14歳から17、18歳ぐらいまでの女工²⁸さんたちでした。当時の岡谷は、女工さんたちで溢れかえっていたのです。有名な山本茂実の『あゝ野麦峠』²⁹という本がありますが、それは飛騨から山を越えて岡谷に働きに来ていた少女たちの涙の物語です。岡谷の図書館には、当時の共産党関係者が調査をした資料があり、そのタイトルが『製糸女工虐待史』と言います³⁰。そこには当時の女工たちが置かれた悲惨な状況が克明に描かれ

²⁸ 「女工」という用語は、現代においては、本来は「女子工員」等に置き換えるべきものであるが、ここでは文脈上、あえてそのまま使用している。

²⁹ 山本茂実『あゝ野麦峠—ある製糸女工哀史』(角川書店、1977年)参照。

³⁰ 佐倉啄二『製糸女工虐待史』(解放社、1927年)参照。

ており、彼女たちがいかにつらい思いをしていたかが分かります。

それゆえに、コーリー司祭は岡谷に教会をつくることを決断したのです。彼女たちのための、女工さんたちのための聖堂を作りたい。だから、教会は岡谷だと決断したのです。それに対してカナダ・ミッションは、強く反対しました。女工さんたちは季節労働者で定着せず、もちろん貧しく、経済的な支えにはならない。そんな者たちが集まっても教会を維持できるわけがないからです。しかし、コーリー司祭は、「お金のことは神さまが何とかしてくださる」と応えました。

当時、女工さんであった、信徒の深澤小よ志さんは、かつてわたしに、こう語ってくれました。

「なけなしのお小遣いを献金として手に握りしめながら教会に駆けつけると、階段の下で背の高い青い目の司祭さんが待ちかまえていて、よく来たねと言ってわたしを抱きしめてくれた。お説教の意味はほとんどわからなかったけれども、司祭さんが抱きしめてくれた温かさにわたしは涙が溢れた。教会は確かに天国だった。」



岡谷聖バルナバ教会の聖堂は今でも畳敷きです。それは、女工さんたちのリクエストでもありました。普段、一日 16 時間労働で、休み時間を全部足しても 40 分にしかならないのです。しかも、女工さんたちは、工場では硬い、何のクッションもない木の椅子に座らせ続けられていました。その彼女たちが、教会に来たときには自分の実家に戻ったような思いになりたい、そういうリクエストであったのです。それに応えてコーリー司祭は岡谷の教会を畳敷きにしたのです。

文字どおり、岡谷の教会は、彼女たちの「家」でありました。この教会はそんな彼女たちが癒やされて、慰められて、励まされて、そして自己の尊厳を回復していく、自らの尊厳を取り戻していくための「家」として存在してきたのです。岡谷聖バルナバ教会の歴史は、中部教区の教区史にはわずか数行しか出てきませ

ん。しかし、これもまた大切な聖公会の「宣教の歴史」なのです。

今年、2012 年の 1 月 26 日、サロメ深澤小よ志さんは、主のみもとに召されました。96 年のご生涯でした。

小よ志さんは、実に 80 年にわたる信仰生活を送ってこられました。その信仰は限りなく深いものでした。晩年、お体の自由がきかなくなった後も、常にその枕元には、聖書と祈

書がありました。また、小よ志さんは、本当にやさしい方でした。人に心からの配慮をされる方でした。教会に、アフリカのナイジェリアから日本に働きに来られてきた方がおられました。一見少し恐そうな、ちょっと大きな外国の人を前にしても、小よ志さんは、いつも笑顔で、気をつかって言葉をかけておられました。小よ志さんがある時、こんなことをおっしゃっていたのを覚えています。「わたしはピーターさんの気持ちがよう分かる。さみしいよね。家族と離れて。辛いよね。毎日きつい仕事して。」小よ志さんのその穏やかなやさしさは、しかし、小よ志さんが歩んでこられた人生という道のりの中で、育てられていったものなのだろうと思います。

その 96 年のご生涯。楽しいこと、うれしいこと、そして、辛いこと、苦しいこと、せつないこと、たくさんの思いと共に、小よ志さんはその「人生」という道を歩いてこられたのだろうと思います。小よ志さんが愛された聖歌は、古今聖歌第 134 番でした。聖歌第 134 番はこのように歌います。

「みちちよ 世のなみ さかまく うみじ わたりゆく われを まもらせ たまえ」

(父なる神さま、この世の波がたとえ逆巻いても、この海を渡ろうとする、わたしを守ってください。)



小よ志さんは、きっとさまざまな困難を乗り越えてこられた。小よ志さんの人生という舟旅には、たとえその海が荒れて、水浸しになった時も、いつも主が、小よ志さんのそばにいて、小よ志さんを励まして、支えて、小よ志さんの涙を拭い続けておられたのだと思います。

聖公会という教会が大切にしてきたものに、尊厳や存在を奪われてきた者たちへの眼差しというものが確実にありました。最

も弱くされている者や、痛みや重荷を背負って生きていかなければならない者たちと共に、聖公会の教会は歩んできたのです。それはまた、わたしたちの宣教の最も基本的な規範となるべきものなのです。

ここでは、大口聖公会と岡谷聖バルナバ教会という、小さな、常に牧師も定住しているわけではないけれども、しかしながら、深い意味を持った宣教の歴史をご紹介します。

わたしたち日本聖公会の各教区、教会には、きっと多くの、このような宣教の歴史があるはずですが、わたしたちが、宣教について語り合う時に、どうしても、これからどのような新たなプログラムを始めるべきか、といった議論になりがちです。それはそれで必要なことなのですが、しかし一方で、すでに、わたしたちの信仰の先達たちが、歩んできたその道程に、ていねいに学ぶこともまた、不可欠なことであると確信するのです。

9 おわりに — わたしたちの「宣教」を想い描くこと —

日本聖公会は、現在どの教区、教会も、教勢の低落、財政状況の逼迫等に苦しんでいます。しかし、これらの問題を解決する特効薬などはなく、むしろ教会の宣教の原点、教会としての牧会的働きの原点に立ち帰ることによってのみ、道筋が備えられてくるのではないかと思います。

■ わたしたちの宣教の原点に立ち帰ること

わたしたちの宣教の原点は、実はきわめてシンプルなものなのでしょう。信徒への牧会はもちろん、教会のあるパリッシュ全体、地域全体に対する牧会的働きを、ていねいに実践していくことに尽きると言っても過言ではありません。

その地にある、かすかな声に耳を傾けていくこと、声を出せない人々の「声」となっていくこと。この世界、社会、絶望の内にある人々に対して、「にもかかわらず」、神の祝福、<いのち>の喜びを、語り続けること。それがたとえ、か細い声、小さな祈りであったとしても、語り続けること。パリッシュにある課題、そしてまたこの世界にある課題に、教会として、ていねいに、取り組むこと以外にないのだと思います。わたしたちの教会が、一人ひとりを抱きしめていくこと、温もりを与えていくことです。必要なのは、「2匹も魚があるじゃないか、5つもパンがあるじゃないか」「幸いなるかな貧しき者」と励まされた主に堅く信頼することです。

日本聖公会には現在、北は北海道から南は沖縄まで、約 300 の教会、礼拝堂、伝道所があります。すなわち、日本聖公会は、約 300 もの「ミッション・ステーション」から成るネットワークを全国に張りめぐらしているということになるのです。さらには、アングリカン・コミュニオンというグローバル・ネットワークの中にも結ばれています。それぞれのミッション・ステーションが、地域における牧会的働きを担う時に、社会に対する貢献力は計り知れないものとなるでしょう。その結果、聖公会の地域における信頼度は高まり、それは最終的には信徒数の増加、献金額の増加といった教勢の強化、という果実をもたらすはずです。わたしたちの「ミッション・ステーション」が有効に働くために、どのような組織が相応しいのかを検討し、ウェールズ聖公会が提案する「ミニストリー・エリア」や、教区間協働、教区再編などの方策が模索されるべきでしょう。

また、聖公会は伝統的に「ブリッジ・チャーチ」と呼ばれ、エキュメニカル対話、教会間対話にとっても積極的な教会です。ことに、聖公会とローマ・カトリック教会、ルーテル教会の 3 教会は、さまざまなレベル、地域で実に深い繋がりを持っています。日本においても同様で、例えば、日本聖公会と日本福音ルーテル教会は、相互に洗礼を承認し合っていることはもちろん、「ユーカリスティック・ホスピタリティ」(Eucharistic hospitality)

と言って、それぞれの聖餐に、互いの信徒を招くことが、公式に可能となっています。ですので、このようなエキュメニカルな関係を活かすことによって、わたしたちの宣教、牧会の可能性もより広がるはずです。

聖公会の伝統的な教会論は、「風船型教会論」ではなく、「鳥の巣型教会論」であるとも言われます。風船を膨らませていくように、同質なものを同心円的に膨張させるのではなく、むしろ「鳥の巣」だと言うのです。「鳥の巣」は、それぞれ形も、長さも、太さも、大きさも異なる、一つひとつの枝が結び合わされて作られます。わたしたちの教会共同体も、一人ひとり異なる多様な者たちが、神さまの愛によって結ばれて作られた、ひとつの「巣」です。風船は膨張し過ぎても割れてしまいますし、ほんの小さな針に刺されても、あっけなく破裂してしまいます。「鳥の巣」は、時には枝だけではなくて針金やプラスチックも混ぜあって、不格好なものです。隙間だらけです。けれども、針で刺されても壊れませんし、高い木から落ちてもしっかりしているそうです。「鳥の巣」の中では、大切に新たなくいのちが育まれます。

わたしたちの聖公会は、主の十字架と復活を証しし続ける共同体です。神の正義、平和、そして、くいのちを証し続ける者の群れです。古代教会からの「使徒的」(apostolic)な、時間を越えた繋がり、世界に広がる「普遍的」(catholic)な、空間を越えた繋がりの中に、実は、聖公会につらなる一つひとつの教区、教会、信徒、聖職も結ばれ、生かされているのです。

■ 日本聖公会 <Vision 2022>の可能性 ex. - NSKK Walk Together...2022 -

さて、今回のわたしたちの「宣教協議会」から、何が生み出されるのでしょうか。先にも述べましたが、この宣教協議会は、少し規模の大きな研修会、修養会で終わってはならないと思います。わたしたち日本聖公会の、少なくともこれからの10年の方向性を導く何かしらの「道しるべ」を、わたしたち一人ひとりがそれぞれの場へと持ち帰ることができればと思います。そのためには、本日の午後から続きます、グループ討議が鍵となるでしょう。

わたしは、今回の宣教協議会を通して、いわば、日本聖公会の<Vision 2022>が、共に描けないだろうかと願っています。10年後の2022年の日本聖公会はどのような教会であって欲しいのかを語り合えればと思います。少なくとも10年間は耐久可能な「ミッション・ステートメント」を作ることができないのでしょうか。

「いっしょに歩こう！プロジェクト」から、さらに学ぶことができるのではないかと思います。「いっしょに歩こう！プロジェクト」は、もちろん被災地の人々と共に歩くという重要な固有の任務を持っています。しかし、このプロジェクトを通して、わたしたちがあらためて気づかされたのは、イエスがなされたように、わたしたちも隙間に置かれた人々、

痛みや悲しみの内にある人々、重荷を背負って道行く人々と共に歩くことの重要性だったのではないのでしょうか。

例えば、〈NSKK Walk Together...2022〉と題した、ムーヴメントを始めることはできないのでしょうか。すべての日本聖公会に属する教区、教会の一つひとつ、一人ひとりの信徒、聖職が、この10年間、この一つのテーマのもとに、誰か、隣人とていねいに共に歩くことを目標とするのです。

その「隣人」が誰であるのかは、それぞれが置かれたコンテキストの中で、考えられてよいのです。それが、在日外国人であるかも知れませんが、教会におられる高齢者かも知れません。青年や子どもたちであるかも知れません。大切なことは、日本聖公会が属するすべての教区、教会、信徒、聖職が、少なくとも、この10年間、徹底した「牧会」をていねいに担うことなのだと思います。2022年に再度、「日本聖公会・宣教協議会」を開きましょう。そして、その時に、この10年間で、わたしたちは誰と共に歩むことができたのかを分かち合いましょう。それは同時に、わたしたちの「宣教」の果実を刈り取る祝祭、収穫感謝の時となるはずで

「いっしょに歩こう！プロジェクト」のニュースレター第12号の中で、松本普さんは、こう書いておられます。

誰と「いっしょに歩こう」なのか。

何処で「いっしょに歩こう」なのか。

何をして「いっしょに歩こう」なのか。

この後からのグループ討議の時間の中で、わたしたちも、それぞれが置かれた「コンテキスト」の中で、この問いに答えてみることはできないのでしょうか。もちろん、これは、わたしからの一案に過ぎません。

今回のこの場から、これからの、わたしたちの「宣教」を思い描くことのできる、豊かな提案が紡がれることを心から期待しています。



【資料1】日本聖公会の戦争責任に関する宣言

1996年日本聖公会第49(定期)総会、決議第34号(第18号議案修正案可決)

1. 日本聖公会は、戦後50年を経た今、戦前、戦中に日本国家による植民地支配と侵略戦争を支持・黙認した責任を認め、その罪を告白します。

1945年、日本聖公会は日本によるアジア太平洋諸地域に対する侵略と植民地支配の終焉という歴史的転機に立ちました。その年の臨時総会告辞で、佐々木鎮次主教は戦時下の教会の反省を述べ、「国策への迎合」「教会の使命の忘却」を指摘しました。このとき、総会も主教会も教区も各個教会も預言者的働きをなしえなかったことを深く反省し、日本が侵略・支配した隣人へ心から謝罪し、真実に和解の関係を公会として求めるべきでありました。

日本聖公会は、設立以来、福音に反する天皇制国家の国体思想や軍国主義に対し、妥協をつづけ、強く抵抗し拒むことができませんでした。日本聖公会が英国、米国、カナダなどの聖公会と繋がりを持つゆえに、官憲の圧迫を受け、信仰の戦いを経験した牧師、信徒もいましたが、その苦汁の経験にもかかわらず、わたしたちの教会は、抑圧され苦しむ人々と共に立つ姿勢を持ちえませんでした。また、国際的な交わりを持つ教会であるにもかかわらず、侵略戦争による加害者としての国家の姿に目を開くことができませんでした。むしろ「支那事変特別祈願式」「大東亜戦争特別祈祷」などを用い、他民族支配や戦争協力をキリスト教の名において肯定し、教勢の拡張や体制の維持のみをめざす閉ざされた教会にとどまり、主の福音が示す「地の塩」としての役割を果たすことができませんでした。

2. 日本聖公会は、敗戦後、すみやかにこの過ちを認めなかったこと、また戦後の50年も自らの責任を自覚せず、和解と補償のため積極的に働くことなく今日にいたったことを、神の前に告白し、アジア・太平洋の人々に謝罪します。

戦後、日本聖公会は1947年第22総会において、1938年版の祈祷書をそのまま正本として採用しました。その祈祷書には、天皇の支配を神の御旨とみなす「天皇のため」「紀元節祈祷」などの祈祷文がありました。さらに1959年の祈祷書改正まで、公会問答において「隣に対してなすべきこと如何」の答えとして「…天皇陛下とその有司(つかさ)に従い…」と教え、聖餐式の中では「すべて主権を持つもの殊にわが今上天皇を祝し」と司祭が祈りました。このように戦後もなお、戦争責任においてもっとも問われるべき天皇やその国家体制を肯定する祈祷書を用い続け、自らの姿勢を自覚的に正すことを怠ってきました。

皇国臣民化政策の結果、引き起こされた沖縄戦の住民虐殺や強制集団自決、さらに戦後における米軍基地の脅威などの沖縄の経験は、沖縄教区を通して語られつづけ、1972年の日本聖公会への移管に向けて「歴史と現状を理解してほしい」との沖縄教区からの問いかけがありました。しかし、その後も日本聖公会として応答することを怠ってきたことを、反省しなければなりません。

3. 日本聖公会は、差別体質を戦後も克服できないでいることを告白します。神の民として正義を行うことへと召されていることを自覚し、平和の器として、世界の分裂と痛み、叫びと苦しみの声を聴きとることのできる教会へと変えられることを祈り求めます。

以上わたしたちの悔い改めの徴として次のことをすすめていきます。

- ①日本聖公会の戦争責任の告白を全教会が共有すること。
- ②日本が侵略した諸国の教会に対し、日本聖公会としての謝罪の意志を伝えること。
- ③歴史的事実の認識と福音理解を問い直し深めるための取組みを、各教区・教会の中で継続してすすめること。

* 『日本聖公会'95 宣教協議会共同さんげ』を教会の様々な機会に用いること』は最終的に削除された。

【資料 2】 ウェールズ聖公会 Church in Wales Review –July 2012

[ウェールズ聖公会(Church in Wales)の概況]

6 教区、信徒数約 75,000 人。1920 年まで英国教会の一部であり、カンタベリー大主教の管轄下にあったが、1920 年の独立後は、大主教制を採用している。ウェールズ大主教は、6 教区主教の中から選出されるが、選出後も教区主教としての働きも継続する。現在のウェールズ大主教は、Barry Morgan 大主教(Llandaff 教区主教)。

■ 2010 年、ウェールズ聖公会は、ここ数年での数多くの聖職者の引退、聖職志願者の減少による、聖職者数の激減、一人の聖職が管理する教会数の増加、信徒数の漸減、若者の教会離れ、財政圧迫等々の問題に直面し、もはやこれまでと同じやり方では立ち行かないことを確認。大胆な改革の必要性。

■ The Review Group が立ち上げられ、さまざまな調査を踏まえて提言に至る。50 項目にわたる提言。この報告は、現在、ウェールズ聖公会執行機関に提示され検討に付されている。同グループは、ウェールズの全教区を訪問し、各主教、各教区の多様なメンバーとの会合を重ね、さらには管区常置委員会、主教会、神学校の代表者とも協議を続けた。地方の若い教会の代表者たちとの会合や、青年たちの声も含めて、グループがインタビューした人は 1000 人以上に上る。また、200 以上の文書も検討材料とされた。

■ ウェールズ聖公会の、誇るべき点は何かの確認から始めた。実際、パリッシュ・レヴェルでさまざまな豊かな働き。社会活動、プロジェクト。しかし何よりも、疑いなく、ウェールズ聖公会は、暖かくて、親切で、他者を迎え入れる共同体である、ということ。その上で、これから、よりウェールズ聖公会が活かされる道、方策を考えることが必要。

■ 一つの重要なポイントは、教会生活、教会の諸活動の中において、より「信徒」が中

心的な働きを担うこと。ウェールズにおいては、信徒は未だに、聖職にすべてを依存しようとする傾向がある。信徒が持っている豊かなタラントと熱意を、十分に教会の宣教のミニストリーに生かす方策を考えなければならない。

■ ウェールズ聖公会の教区会は、各教区主教が自身の考えを教区に伝える機能はあるが、パリッシュの思いを吸い上げる仕組みにはなっていない。本来、アングリカンの教区会は Synod であるべき。地域の声と主教の声が有機的に往還し合う Synod の重要性。

⇒【提言】「教区会」の名称を Synod に変更する。

⇒【提言】教区諸委員会、機関のメンバーになる者が選挙で選出される場合には、候補者は必ず短いマニフェストを明らかにし、自身が教区が直面する諸課題に対し、どのような見解を持っているのかを公表することを義務付ける。

■ 一人の司祭が一つの教会を牧会、管理することはもはや今後のウェールズ聖公会ではあり得ない。大胆な改革が必要。パリッシュからより広いエリアを考え、一人の司祭ではなく、異なった賜物を持つ者たちによるチームで、このエリアを、ウェールズ聖公会では、【ミニストリー・エリア】(Ministry Area)と呼ぶことにする。これはこれまでも為されてきた単なるチーム・ミニストリーの奨励ではなく、ウェールズ聖公会全体で公式的、組織的に新たに導入する「仕組み」である。各「ミニストリー・エリア」には明確な宣教目標が立てられる。

■ 各「ミニストリー・エリア」はおよそ 25 の教会から構成される。「ミニストリー・エリア」には聖職、信徒からなる「リーダーシップ・チーム」が設定される。原則として、「ミニストリー・エリア」における「リーダーシップ・チーム」の内 3 人は、有給のポスト。

■ 各教会においても、基本的に無給の聖職もしくは信徒奉事者、相応しい訓練を受けた信徒による「リーダーシップ・チーム」が構成される。この内の一人が、「ミニストリー・エリア」の「リーダーシップ・チーム」のメンバーとなる。自給可能な数少ない大都市教会は、より小さな諸教会のハブとしての役割を果たす。

■ 教区主教、アーチ・ディーコンは、各ミニストリー・エリアを統括する。各ミニストリー・エリアの代表を当面、「エリア・ディーン」(Area Dean)と呼ぶ。エリア・ディーンは、各ミニストリー・エリアの宣教目標にしがって、相応しい「信徒」から選ばれることが望ましい。

⇒【提言】エリア・ディーンは、主教管轄の下、他の聖職、信徒と協働して、リーダーシップ・チームの課題を設定する。

⇒【提言】ミニストリー・エリアが確立された後は、エリア・ディーンは廃止する。

■ 「大聖堂」(主教座聖堂)の役割はより重要なものとなる。証し、教育、音楽の傑出した拠点としての機能。「大聖堂」は、各教区の宣教とミニストリーの中心。

⇒【提言】大聖堂(主教座聖堂)の中心のかつ特別な役割が、教区の宣教とミニストリーの方向性の中に十分に位置付けられなければならない。

■ 協働的なリーダーシップの養成の必要性。もちろん、数年で多数の聖職者が引退するに伴い、フルタイムの聖職者の養成も急務。

⇒【提言】各教区主教は、ミニストリー・エリアのリーダーシップ・チームに相応しい人材の発掘に努めなければならない。また、神学校と協力して、協働的なリーダーシップの養成コースの開発を進める必要。

■ リーダーシップ・チームにおける有給聖職の役割はきわめて重要。したがって、有給聖職の養成、支援は、教会にとっても再重要事項。そのためには、「聖職評価」のシステムを確立しなければならない。聖職としての始めから終わりまで、「360度審査」(360 degree examination)が求められる。他の協働聖職者、会衆、その他から、自分がどのように見做されているかどうか。教会外の専門職によるインタビュー。聖職者のより有効な継続教育システムの開発。

■ 「ミニストリー・エリア」の導入に伴い、聖職者の役割についての混乱が生じる可能性。最初に接手された時の働きと、「ミニストリー・エリア」導入後では、必然的に、聖職者の役割は変化する。「聖職評価」は、同時に、新たにされた聖書者の役割と、自身の召命を再確認する重要な機会でもある。

⇒【提言】ウェールズ聖公会全体で共通する、体系的な「聖職評価システム」を導入する。各ミニストリー・エリアにおいては、アーチ・ディーコンがその責任を担う。この「聖職評価」は、各聖職者が、自身に与えられた特別な役割を再発見し、自身の生き方を相応しく整えるために設定される。ミニストリー・エリアのチーム・リーダーは、リーダーシップ・チームの聖職のみならず信徒リーダーも、同様の評価を受けるように責任を持つ。

■ ウェールズ聖公会が直面する最も深刻な課題は、若者の教会離れである。各ミニストリー・エリアには、青年たちに関わるより訓練されたフルタイムのスタッフが必要。青年たちをキリスト教の信仰と生活に繋げるために、ソーシャル・メディアを十二分に活用できなければならない。

⇒【提言】各アーチ・ディーコナリーには少なくとも2人以上の、青年と関わるフルタイム・スタッフ(聖職もしくは信徒)を任命しなければならない。

⇒【提言】ミニストリー・エリアが創設された後には、各リーダーシップ・チーム内に一人は、とりわけ青年のための働きを担う訓練された者が置かれなければならない。

■ ウェールズ聖公会にとって、聖餐式は、礼拝生活の中心である。しかしながら、現在の多くの人々にとって、礼拝はまるで外国語のように縁遠く、不思議なものとなっている。とりわけ、青年たちにとってはそうである。各ミニストリー・エリアは、キリスト者共同体と礼拝の多様なスタイルを提供すべきである。もちろんだからと言って奇抜な礼拝を奨励するわけではない。若い人の中には、より伝統的なスタイルを好む者もいる。しかしながら焦眉の課題は、教会外の諸文化の中で、多くの人々にとって今の礼拝のあり方が無意味なものとなっているという現実はどう立ち向かうかである。

■ 大多数の人々、ことに若者たちにとって、日曜日の朝というのは必ずしも礼拝に相応しい時間ではないことに、わたしたちは向かい合うべきである。他の曜日、時間をもっと検討されていい。

⇒【提言】各ミニストリー・エリアでは、伝統的な諸礼拝に加えて、少なくとも週に一回は、教会を身近に感じていない人々に響くことができるような形の礼拝を行うべきである。

■ ウェールズ聖公会における奉仕職養成は、聖職か信徒かに拘わらず、統合された養成理念に基づいて実施されるべきである。モジュール方式が望ましい。信徒奉事者としての養成プログラムを受けた者が、按手聖職を志願する際には以前の教育が勘案される。

■ 将来の教会における奉仕職のほとんどは、信徒や無給の聖職となっていくであろう。それゆえに、より相応しい質を持つ教育訓練システムが必要とされるのである。

⇒【提言】教会におけるすべての奉仕職養成は、それが、聖職、信徒、在住、非在住に関わらず、一つの統合されたビジョンに基づいて実施されるべきである。

■ 聖職養成のプロセスが現状でよいのかどうか検討されなければならない。アイルランド聖公会のモデルを参考にすることも可能。アイルランド聖公会では、まず聖職志願者は、通信教育によって、自らの教区における召命に関する神学的な単位を履修することから始める。それが完成した者のみが、神学校に進学し、そこで2年間過ごす。自身の将来の奉仕職に向けた神学教育カリキュラムを学ぶ。それから、執事として按手され、インターンとして一年間パリッシュで経験する。毎月、一週間は神学校に戻ってリフレクションする。この期間に、2万字の修士論文を仕上げなければならない。これらをパスすれば、司祭として按手され、各パリッシュに派遣される。

⇒【提言】アイルランド聖公会のプレ神学校・神学校・ポスト神学校の聖職養成モデルを検討する。また同時に、無給聖職の養成プロセスを開発する必要。リーダーシップ・チームによって奉仕されるミニストリー・エリアの奉仕職養成を熟考する。

■ 信徒奉仕職のトレーニング・スキームの開発。ばらばら、思いつきではなく、あくまでも統合された養成ヴィジョンが求められる。無給聖職の養成も本質的に不可欠。神学校で一定期間、在住しての訓練も必要。

⇒【提言】ウェールズ聖公会において一般的な Reader という呼称は、今後、Licensed Lay Minister (認可信徒奉仕職)に変更されるべき。信徒それぞれ異なる賜物、召命に相応しい信徒奉仕職の多様性を認識したトレーニングされなければならない。

■ ウェールズ聖公会において、適切な教区数は何教区なのかという議論。多くは、現在の 6 教区を、教区境界線を見直した上で、3~4 教区に減じるべきという意見。しかし現状において直ちに教区数を変更するのは望ましくない。少なくとも今後 4 年間は、現状の 6 教区を維持する。

■ しかしながら、それぞれの教区体制を維持するための委員会や制度があまりにも多すぎる。教区数は変更しないで、より効率的に運営するために、北・南・南西の 3 運営センターを設定する。教区主教数も変更しないが、すべての運営は、この 3 つのセンターを中心に運営する。これらセンターによって運営されるエリアに属する教区間で、統合できる委員会は一体化させる。これによって、経費、時間、運営負担を軽減することが可能。各課題についての専門家等を、教区の壁を越えて共有する。財務委員会などは教区固有性が高いので難しいが、宣教とミニストリーに関連する諸委員会は合同が十分可能である。

■ この形態を 3 年間継続してみて、評価を加えた上で、3 つの運営センター+6 教区体制か、それとも 3 教区体制が望ましいかを判断する。3 教区体制となる場合でも、教区主教数は現状(7 主教)を維持し、3 教区主教と、司牧的責任を公的に持つ 4 人のエリア主教(area bishops)という仕組みにする。エリア主教は、本来主教職に課せられている宣教的、牧会的、霊的職務に集中する。

■ 管区機能は、現在の Cardiff に置くが、いくつかの管区的職務を、政府機関がある北部に移すことも検討する。ビデオ会議システム、Skype などの現代のコミュニケーション・ツールを活用すれば、すべての管区運営機能を一か所に集中させる必要はない。

・現在の教区機能の内、可能なものは管区機能に統合する。

⇒【提言】北・南・南西の 3 運営センターを設定する。

⇒【提言】運営センターによって支援される教区間で、分離しておく必要がある委員会以外は基本的に統合する。

⇒【提言】3 年間継続した上で、3 つの運営センター+6 教区体制か、それとも 3 教区体制(+4 エリア主教)が望ましいかを判断する。

■ 教会建物の整備は宣教的にもきわめて重要である。辺鄙な場所にある小さな教会が良く手入れされていれば、それ自体が宣教的証しとなることを忘れてはいけない。その地域にとっても、教会自体が、さまざまな資源として用いられるはずである。地域に「友の会」(Friends)を作り、財政的に教会独自では建物維持が難しい場合でも、礼拝に出席しない人々からも資金援助を募る努力をする。

■ 場合によっては、教会建物を「多目的」に活用することを検討する。

■ 教会の将来構想をその教会や教区のみ任せるとは無責任である。運営センター内に、特別チームを作り、その教会、教区が相応しい判断に至るまで援助する。

■ まず「ミニストリー・エリア」は、エリア内の個々の教会の状況等を、牧会的、宣教的に分析し、どのような形が望ましいかの原案を策定する。場合によっては多目的化したり、また状況によっては閉鎖という決断もあり得る。

■ さらに、エキュメニカルな観点からの評価を加える。他教派との共同使用や、譲渡等の可能性を検討する。アーチ・ディーコンは、ミニストリー・エリアのリーダーシップ・チームと協議を重ね、その結果を、関係する各パリッシュに、オプションの提言という形で示し、最終判断を委ねる。

⇒【提言】地域に「友の会」(Friends)を作り、教会建物の維持に貢献する。

⇒【提言】「ミニストリー・エリア」内の個々の教会の状況等を、牧会的、宣教的に分析し、どのような形が望ましいかの原案を策定する。

■ 「ミニストリー・エリア」のシステムでは、少数の有給チームがより大きなエリアを管轄することになる。一つの教会の牧師館に誰かが定住する必要はない。牧師館を処分することは、教会運営の負担の軽減にも繋がる。

⇒【提言】ミニストリー・エリアを牧会する有給聖職は、エリア全体と関わる上でより至便な場所に、家を買うか借りる。

■ ミニストリー・エリアを構成する各教会は、リーダーシップ・チームの経費と、教区分担金を負担する責任がある。

⇒【提言】独自で経費を負担することが困難なミニストリー・エリアに対して、より余裕のあるエリアが財政援助を行うスキームを作る。

■ 「十分の一献金」(tithing)は重要であるが、家計の5%を教会のため、5%を他のよい働きのために献じるという方法もある。

⇒【提言】主教、聖職は、独自の「十分の一献金」モデルを作るべきである。さらにはその霊的意味、

基礎を十分に知らしめる必要がある。

■ 現在、ウェールズ聖公会は、聖職者が冠婚葬祭等を執行した際の「謝礼」を許している。しかしこれは批判されるべきであり、受け入れられるものではない。聖職はそれらの職務を聖職者に許された特別な働きとして喜んで引き受けた上で按手されているのであり、それらの働きを含めて、有給聖職者には給与が支払われているのである。したがって、これらの「謝礼」はすべて教会会計に入れられるべきであり、ミニストリー・エリアの中でシェアされるべきものである。同時に、有給聖職者の給与と年金の水準はしっかりと維持されなければならない。

⇒【提言】諸式、諸行事の際の謝礼は教会会計の中に組み入れられ、最終的には、「ミニストリー・エリア」内の財政を支えるものとなるべきである。

⇒【提言】有給聖職の給与は、近隣の聖公会諸教会に比して遜色ない水準が維持されるべき。

【資料3】カナダ聖公会 Vision 2019 から

APPENDIX A: Preliminary Timeline for Vision 2019 Priorities and Practices

PRIORITY	2010-2013	2013-2016	2016-2019	OUTCOME BY 2019
<p>4 Work toward peace and justice</p> <p>Establish a government relations presence in Ottawa that will both advocate for just national policies and motivate local grassroots strategies.</p>	<p>Include this initiative in the case for support for the fundraising initiative.</p> <p>Research the best way to staff this function.</p> <p>Recruit a volunteer or staff lead for this office.</p> <p>Begin work in Ottawa developing relationships with key politicians and bureaucrats.</p> <p>Hold one "Anglican Hill Day" to begin to make connections more noticeable.</p>	<p>Build local relationships with MPs through volunteers suggested by bishops across the country.</p> <p>Provide these volunteers with training and key messages to deliver.</p> <p>Consider linkage with the Evangelical Lutheran Church in Canada (ELCIC) in this effort.</p>	<p>Keep building relationships, and using them to make our concerns felt.</p>	<p>The Anglican Church of Canada will become known as a voice for the marginalized in the corridors of power, especially in calling for action on the Millennium Development Goals.</p>
<p>5 Engage young people in mutual growth for mission</p> <p>Implement the recommendations of the Youth Initiatives Working Group for the strengthening of the church's engagement with young people as servants of the mission of God, and for the renewal of the whole church as partners in God's mission.</p>	<p>Develop an action plan with timeline to be presented to the Council of General Synod (COGS) in spring 2012.</p> <p>Implement plan as approved, utilizing funds as available through the nationwide fundraising initiative.</p>	<p>Ongoing</p>	<p>Ongoing</p>	<p>Youth are fully involved in the church's work in mission.</p>

■ 提言作成に関する議論の様子



6 特別講演

イエスの道を歩く

～未踏へのチャレンジ～

未来の子どもたちのために原発を止めるためには～

講演者 シスター 清水靖子



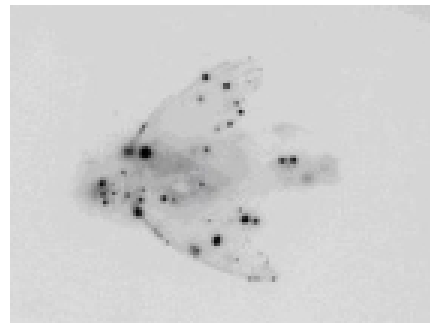
二 レジメ

原発を止められない社会を止め（やめ）よう。

- ◆フクシマ原発事故という、人類史上稀にみる重大事故が起きて尚、原子カムラは、甘い汁を国民の税金と電気代から吸い上げ、地元自治体や有力者は、“原発利権”の甘い蜜の味のしがらみから、逃れられないで生きている。利権のしがらみは、原発へさらにゆるい規制さえつくりだしている。
- ◆原子カムラ＝原子力産業、およびその“原発利権”からカネをもらい、連座する政治家・官僚・巨大金融機関・学者・マスコミ・芸能集団・・・
- ◆「どうしてこれだけのことが起きながら誰も責任を問わずに、いけるのかと。それが私にとっての最大の不思議な点です。“個人責任”“東電責任”“国家責任”も問わない、問わせない日本の構造。それが原子カムラを支えてきてしまった。」小出裕章
- ◆「放射能に被曝するということは、“神秘的”な神業であるとしか言いようがない細胞とその遺伝情報を切断し、遺伝子異常を引き起こすということです。被曝のリスクは低線量にいたるまで、直線的に存在しつづけ、しきい値はないのです。」小出裕章
- ◆原発と、その核生成物は、細胞を寸断し、社会を寸断し、被災地を寸断し、家族を寸断し、生きとし生けるものを寸断する。
- ◆日本の54基の原発は、広島原爆がまきちらした放射能物質の120万発分に相当する核分裂生成物（死の灰）をまきちらしてきた。それは何十万年も消すことが出来ない生成物となり、原発の中に留り、また地球にばらまかれる。
- ◆福島県の子どもの甲状腺検査で、3万8千人の35%、1万3千人以上に、すでに嚢胞（のうほう）・しこりが発見された。これはきわめて異常。こんなことは今までなかった。20100830
- ◆「生きとし生けるもののなかで、自らの種族の未来を奪う生き物が、他にいるでしょうか。」福島代表の武藤類子さんの訴え。彼女は福島原発訴訟団の団長になって訴えつづける。20110919
- ◆東電は、福島第一原発事故で広島原爆の百七十発分の放射性セシウムをばらまいて、それを“無主物”だと主張。
- ◆安全神話が崩れたのち、さらに強調される「原発は地球“温暖化”を救う」キャンペーン。“温暖化”キャンペーンのウソに注意。



- ◆東電によるヒタ隠しのウソ。3・11の原発事故が、原発の脆弱性によるものであり、津波が襲う前に、地震によって、すでに格納容器や細管の一端が破損していた。→冷却材全喪失という前代未聞の事故となっていた。3号機ではプルトニウムが燃料に使われていたこと。その使用済み燃料プールのプルトニウムは四散したこと。
- ◆事故処理もまた、原子力村の同じ利権集団。原発を製造した産業軍。汚染「除去」や、震災瓦礫特需も、原発の断層調査をした企業も、規制委員会も、すべて同じ利権集団。
- ◆生きとし生けるものへの加害
ムクドリのアートラジオグラフィ 森教授提供



- ◆3・11で被曝した遺体。収容することも焼却することもできなかった高線量の遺体。作業する部隊の隊員が二次被ばくする可能性があった。
- ◆南相馬市で採取された黒い物質（藻草）には、1kg当たり200万~600万ベクレルものセシウムが含まれている。日本の法令では、1kg当たり1万ベクレルを超えるセシウムは、厳重に管理されなければならないものであった。放射線管理区域以外に存在することも許されないものであった。それが今では、人々が普通に生活している場に存在してしまっている。100万人の人たちを、放射線管理区域の中で生活させつづけている。
- ◆海底ト海洋のとほうもない汚染。福島第1原発からおよそ20キロ離れた沖合でとれたアイナメ、から、1キロあたり2万5800ベクレルのセシウムが検出された。これは、今、置かれている食品の基準、の、258倍の濃度です。201208
- ◆国策が民を切り捨てつづける。日本の国策は棄民政策。
大本営は、原爆投下を事前に知りつつ、民衆に知らせず、負けつづけながらも、指導者の誰ひとり、戦争を終結しようと言いだせなかった日本。

国策の元で、現場の苦しみは、棄てられた。指導者の胸中にあったのは、自分の地位や責任逃れの方法だった。

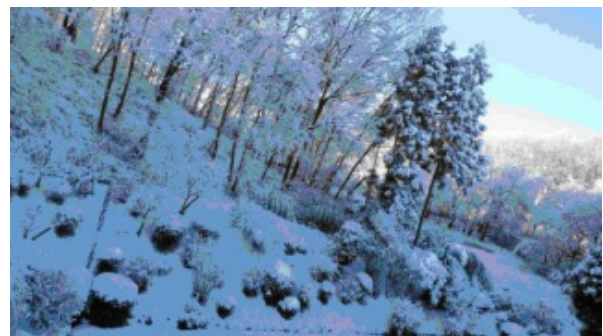
- ◆汚染除去のウソ。除去ではなく、移染にすぎない。
除去や、瓦礫移動や、地盤調査にあたる企業は、原発村の企業軍。
- ◆2012年8月3日の最高の猛暑日に、最も電力が不足すると宣伝しつづけた関西電力で、大飯原発を除いても、24%も供給力が余っていた。大飯原発は不要だった。→別ページに詳細。

日本全国で、最猛暑日に、供給は余っていた。

政府が再稼働させたい、浜岡原発、滋賀原発、島根原発、伊方原発、九州電力の玄海原発、川内原発が、いずれも、全く不要であることが、今年の夏に実証された。

- ◆原発再稼働の本当の狙いは、エネルギーの「需給問題」ではない。廃炉にすると、原発⇒巨額の負債になるためである。

美しく見える雪の下に放射能が・・・
2012年1月23日の夜半、1時ごろ、日野の放射線量の数値のWEBサイトを開くと、数値が急激に上昇中だった。四号機の温度急上昇だった。・・・現場から250キロ離れた、私の部屋の前の雪のなかに、生命の主も、雑木林も閉じ込められていた。翌朝清水撮影。



- ◆本当の Inculturation、森羅万象に受肉した神の視点から見ること。
脆い神の視点から、原発問題も、3・11も見直し、祈り直してみよう。
- ◆Genuine（本もの）に生きよう。genuine とは何か、ウソを見抜く知恵と目と耳を持ち、騙されずに生きること。そのウソから人々を解放しよう。イエスがそうであったように。
- ◆Local（草の根）に深く生きよう。現場の苦しみ、地域の苦しみに連動し、解放しよう。
イエスがそうであったように。
- ◆日本の伝承「夕鶴」木下順二 にみる脆い神。
- ◆パプアニューギニアで原生林を守りつづけている村々の共同体の多くが、女性を中心として、伐採企業と政府の圧力を跳ね返し、イエスのメッセージを生きている。聖公会とカトリックの村々が多い。夕鶴の話をしたら、涙と深い感動をもって聴いてくれた。「よくわかる」と言う。
原生林を失うことも、原発を持つことも、その脆い神を踏みにじること。
- ◆そしてイエスは、どんな人だったのか。何をメッセージとしたのか。脆い神、解放する神の視点から見よう。

「イエスとともに生きる祈り」 清水靖子作成

イエスが今生きておられたら・・・どのような行動をなさるのだろうか？
その問いに応える次の祈りをつくってみた。

「3・11 後のイエスへの祈り」

「私たちは絶望と傷心と癒されぬ心の傷を負って生きています。
その悲しみのなかで、復活されたイエスは私たちに
イエスの霊の促しを与えておられる。

悪霊と対決して人々を、解放したイエス。
その悪霊は、“レギオン”。
レギオンとは軍隊、集団として人々を死に赴かせるもの。

悲しみから、希望へと人々を解放したイエス。
疲れた人に寄り添って、疲れを癒させたイエス。

金儲けのための組織化された神殿での利権組織や、
御用学者や、御用宗教指導者に徹底的に怒り、対決し、
死んで行ったイエス。

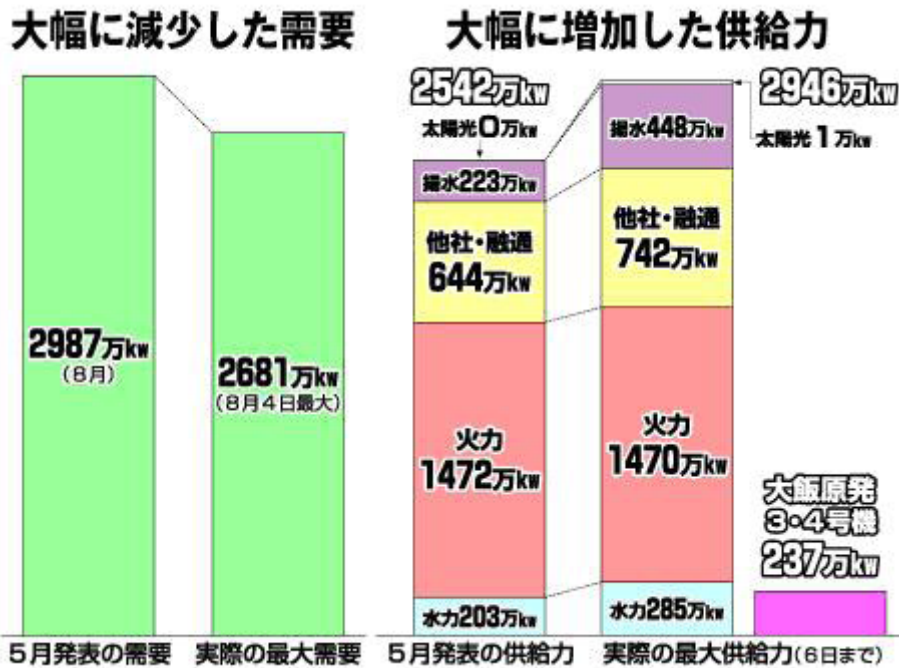
イエスは弟子を派遣するにあたって、「狼の中に羊を送りこむようなもの」
「羊の衣を纏った狼に気をつけなさい」という言葉を添えられた。
イエスの弟子として生きることは、烏合の衆として生きるのではなく、
ひとりひとりの答えとしての未踏の道へチャレンジをすること。

私たちの信仰宣言は、そのイエスの神とともに生きること。
イエスとともに解放を生きること。

イエスの神は、森羅万象と共にある神。
生きとし生けるもののなかに、受肉され、
苦しむものに寄り添ってともに苦しむ“脆い神”。
放射能で汚染された大地で、苦しんでおられる沈黙の神。
どうぞ、私たちをお許してください。

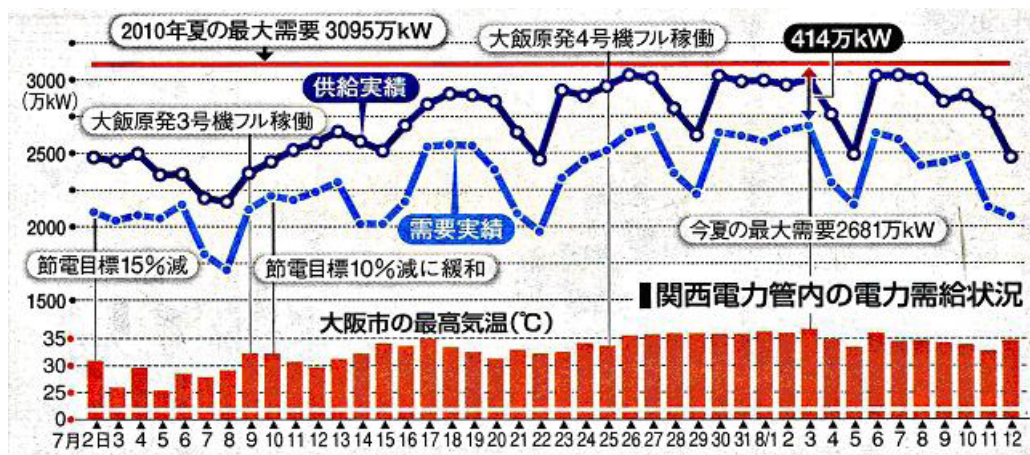
せめて、私たちが、イエスの道を歩めるように、
私たちを拘束している不正義のシステムから、
未来の子どもたちを解放するために、
あなたの智恵と霊をもって立ち上がっていくために、
私たちにも、寄り添ってください。 アーメン。」

今、私たちが歴史の転換点を、大きく変化させて、生きることができなかつたら、私たちの未来の子どもたちは、そして生きとし生けるものは、脆い神は、私たちに何というであろうか。私たちは、実は教会の組織のほうが、神よりたいせつなのであり、私たちもまた、神を棄て、未来を棄てて生きているのではないか。



↑ニュースステーション

東京新聞↓



- 本の推薦 清水靖子より
- ◆ 小出裕章著 『原発のウソ』 扶桑社新書 / 2011年 / 740円+税
- ◆ 小出裕章著 『騙されたあなたにも責任がある』 幻冬舎 952円+税
- ◆ フランク パヴロフ著 『茶色の朝』 大月書店 高橋 哲哉 (メッセージ) 1000円+税

(司会) きょうは特別講演ということで、カトリック教会のベリス・メルセス会宣教修道院のシスター清水靖子さんをお迎えして、「イエスの道を歩く～未踏へのチャレンジ・未来の子どもたちのために原発を止めるためには～」というテーマでお話を伺います。

わたしたちの生活の中で、わたしたちが享受してきた豊かで便利な生活を守るために、あるいは自分たちの利益を守るために、ひょっとしたら、自分たちのいのちを危うくするかもしれない、あるいはさまざまな犠牲を生み出すかもしれない、そのような危険に目をつぶって、あえてほんとうのことを見ないようにしてきたことが、さまざまにあるわけです。日本が引き起こしたかつての戦争がそうであり、戦後は原子力発電です。そのことを明確に指摘したリーフレットを、カトリック教会の正義と平和協議会が作成し発行しました。これは、2010年12月、東日本大震災が起こる3か月前の発行であります。まさに預言の書のようなものだったというふうに思います。シスターはこのリーフレットを作成したチームのリーダーでございます。福島第一原発事故によって問われていること。それはわたしたちの生き方や、あるいは教会のあり方に深くかかわっていることを、シスターのお話を通して、ご一緒に分かち合いたいというふうに思います。

《おことわり》

当日はパワーポイントを使ってたくさんの写真などを映しての講演でした。

しかしそれらの多くは著作権の問題があり、ここに掲載できません。

そのために、それがなくても極力理解できるようにと多少の編集をしています。

イエスの道を歩く

～ 未踏へのチャレンジ・未来の子どもたちのために原発を止めるためには～

シスター 清水靖子 (ベリス・メルセス宣教修道院)

原発を止められない社会を止め (やめ) よう。

はじめまして。よろしくお願いたします。(拍手)

わたしは、カトリック教会と聖公会、わたしが関わってきた現場で、二つの大切な出会いの経験を持ちました。

一つは、1994年から「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」と関わりを通して。日本は、現地で伐採したり買ったりした丸太のほぼ90%を合板建築のために使い続けてきました。今私たちが会場としている浜名湖の奥地の天竜の材木屋さんは、たったの一軒しか国産材を売らないという、そういう羽目になって、あとは外材を伐って売っているという。こういうローカルから全く外れてしまったような日本になってしまったわけですが。そのパプアニューギニアとソロモン諸島の現場で、いくつもの共同体と出会いました。パプアニューギニアの美しい原生林を、守り続け私たちと関わっている村々が何と、カトリック教会と聖公会の二つの共同体なのです。両方ともちょっと似た点があって、三角形のピラミッドみた

いな組織のなかで、司教とか目覚めている信徒とかが上から、原生林を売るのだけは止めよと呼びかけたら、もうそのグループはとても強いのですよね。それで、カトリックはニューブリテン島、聖公会は本島オロ州のウイアク地域でしっかりと原生林を守っています。

かつてわたくしは「森と魚と激戦地」という本を書きました。その中でラバウルにしろ、パプアにしろ、ガダルカナルにしろ、日本が伐採し尽しているところは、かつての戦争の激戦地でした。1980年からは、日本が原発の核のゴミ、放射性の廃棄物を太平洋の海に捨てさせてほしいと言った場所。それに対して太平洋から猛烈な反対をくらって結局止めたという舞台でもあります。加えて日本はその海からマグロを日本に送りつづけている。そういう意味でも「森と魚と激戦地」が今も続いているという、そういう本なのですが、その舞台のひとつが聖公会の村々の原生林であります。

もう一つの出会いは、1994年。わたしにとって忘れられない、生涯で一番幸せな年でした。ボストンの聖公会の神学校に一年間留学させていただいた時に、そこで出会った素晴らしい先生方、仲間たち。聖公会というほんとに懐の大きいですね。

ちなみに、今日もそうなのですね、こんなわけのわからないシスターを、勇気を出して、未踏へのチャレンジで、呼んでくださったというのは、もうとっっても考えられない。きょうはとっっても緊張し尽くしておりますが・・・。

ボストンの聖公会で学んだことはエコ・フェミニズム。エコロジーと女性神学を合わせたエコ・フェミニズムです。わたしは「パプアの森を守る会」をずっとやってきまして、あんまり女性問題に目覚めていなかったもので、もっぱらエコロジーのほうに集中しました。

じつは熱帯林の原生林は多様で小さい脆い生命の連鎖でできています。崇高なまでに美しい原生林の姿。ここに外部からブルドーザーなどの猛烈伐採が入ると、将棋倒しのように全ての生態系がガタガタガタァ〜と倒れていく、そういう生態系の連鎖っていうのですか、それはとても脆いのです。原生林の上を飛ぶときに、「こんなに美しいものが、ブルドーザーが入るだけで、こんなに脆くなるのか！」っていうことを、涙が出る思いで見えてきた。

それをどのように表しているか。わたしの中で、その深い気持ち解らなかったのですが。聖公会で出会った教授たちの指導のもとに、「脆い神」、(英語で言うと fragile God と言うのですが) 神様は全知全能、万能、上から指令を与えて強くて逞しくてという、そういう側面がわたしたちの中にずっと強調されて育まれてきました。今この、地球全体がひじょうに危機にある中で、受肉した神様が、その大地の中で、無言の呻き声を、伐られていく木や、(あるいは今で言えば福島原発で失われていくいのちの中で) 呻いておられるっていう、その脆い神様の部分を書くことにしました。

脆い神なんていうことを、今まで言った人がないものですから、最初のペーパーはおそるおそる提出しました。「The Mystery of fragile God」、「脆い神のシンボル」という、ちょっとね、Mystery でごまかして。(ほんとは題を、脆い神と書きたかったのです。) でもそうしたら言われました。「あなたは何でわざわざ Mystery を付けるのだ。神様は脆い方だから Mystery も何もいらぬ。もうその脆さっていうことをわたしたちが、心に刻み、祈り方を変えていく時に、いま、神様がキリスト者に呼びかけていることが新しく見えてくる」と言われました。それでそれについての論文をたくさん書きました。

その時に、もちろん原生林のことも思ったのですが、日本の古い伝説の中に、「夕鶴」（木下順二）という、あの美しい物語があります。鶴（つう）は与ひょうに助けられたそのお礼に、美しい布を織るわけです。与ひょうはだんだん欲に目が眩んで、織らせ続けて、つうである鶴は自分の羽を抜いてそれで織る、最後にやせ細ってしまうわけですね。その鶴の姿の中に、森羅万象の中に宿って、わたしたちに与え尽くす神。人間はその神のことを、英語で言うと、“take advantage”、自分のために利用しつくす。生きとし生けるものだけではなくて、神そのものをも利用し、絞り取る、神様から搾り取るという。もちろんつうですから、そこに女性の神様のイメージも重ねたわけです。そういう古来の伝承とあわせて、脆い神の姿を、現地の神学校で深めていきました。

きょうのテーマの中に見え隠れするのは、そうした脆い神様からのまなざし、脆い神様へのまなざしでもあると思います。

お配りした資料の中の、『原子力発電は“温暖化”防止の切り札ではない！』のリーフレットをまずご覧ください。これにつきましては、カトリックの松浦司教という大阪の司教が大きな力となって、拙いわたしたちを叱咤激励してくださいました。加えて、監修者としての小出裕章さんが、毎日毎日わたしたちに、「その文章のここはこう直したらいいだろう」、あるいはわたしがメールを送ると、もう真っ先に返ってくるのは、小出さんからの返事なのです。ですから、このリーフレットは、小出裕章さんの息がかかったもの。一字一句、「てにおは」さえも、練って、練ってつくったものです。皆様のお役に立てば嬉しいと思います。今14万部発行になっています。英文もあります。英文はNCCの方から出ています。日本語の方は、後ろに連絡先がありますのでカトリック側にご連絡ください。今後もおおいにご利用くださいませ。

このリーフレットの特徴は、政府・電力会社・マスコミが一体となって推進してきた原発推進の理由の中心である“温暖化”キャンペーン。原発はCO₂削減の救い主であるというキャンペーンへの、私たちからの良心の抵抗の声であります。

別紙（レジメの項99頁）の「イエスとともに生きる祈り」というのは、3.11以後にインスピレーションのままに書いたものです。皆さんの教会でのお祈りとか、皆さんの日々のお祈りにお役に立てば幸いですし、別に清水靖子の祈りじゃなくても、これにご自分のイメージのお祈り、イエスのイメージをつくりあげて、豊かなものにしていただければ嬉しいです。

「～未踏へのチャレンジ・未来の子どもたちのために原発を止めるには～」

日本は、もしかしたら一番、原発を止められない社会であるかもしれない。他人と違うことを言ったり、村八分になるのを恐れったりですね、それから、まして非国民とか、グループの中で差別されるのがとても辛いという心情から抜けられない社会です。

ちょっと参考までに申し上げますと、皆さんもそうですし、わたしもそうですけれども、身内の中に原子力産業関係や電力会社、このフクシマと関連するような会社の人々というのはいらっしゃるし、教会の中にもおられます。話をする時にいつも必ず申し上げますけれども、そうだからと言って、口を閉ざすということは逆に、ほんとうに今キリスト者としてわたし

たちに問われていることに答えることにはならないので、それはもっとも重要な、わたしたちの課題であるということを申し上げます。

- ◆(レジメの項 98 頁) これはわたしの部屋の前から撮った美しい写真。もっとも美しい無垢の雪の朝。3.11 直前の雪で、ここには放射能が閉じ込められてはいません。
- ◆ 3・11 以後のある夜更け(2012 年 1 月 23 日の夜半)に、仕事をしたときのことで。パソコン上のデータ情報に、放射能の数値がキューッと上がってきたことがありました。この日野でもそうでした。どうしたのだろう? 問い合わせが殺到していました。後でわかったのですが、4 号機の高温で異常な値の放射能漏れがあったのでした。雪もあったので、もちろんこの日野の丘に(その高濃度の放射能が)閉じ込められたのでした。ちなみに 3・11 直後の高レベル放射能は、この日野の丘を直撃しましたので、今も放射能のレベルがとても高いのです。
- ◆ 福島原発からはすでに、わたしたちの知らないうちに、特に最初の時期に、ヒロシマ原爆 200 個分の死の灰が、環境中に放出されました。これはチェルノブイリとほぼ同じぐらいの量と言われてはいますが、事故はまだ収束してないので、今後を入れると、チェルノブイリ原発の 10 倍以上の死の灰となるでしょう。
- ◆ 原発の死の灰を 100 万年にわたって、いったい誰がお守りできるか? 事故直後、放射性物質と化してしまった死体を運ぶには、防護服を着なければならなかった。
- ◆ 「“ 原発さえなければ ”」。これは誰が書いたとお思いですか? 福島の酪農家です。死の灰に汚染された大地で、自分の畜産や農業を続けられないと分かったときに、自殺する前に、小屋の中に白墨で書かれた遺言です。
- ◆ わたしくしが忘れることができないのは、デモの中で、両手を高く挙げて、未来の子どもたちの声を描いたプラカードを持って、「原発をとめよう!」とお母さんといっしょに歩いている幼い少年の姿です。この少年の姿自身のメッセージ。その中に、脆い神、いっしょに呻いている神の姿が重なるからです。
- ◆ 今、ちょうど事故から一年半が過ぎようとしています。でも事故の真相はほとんど明らかにされない。ウソで塗り固められた原発の姿。
- ◆ 「放射能に被曝するということは、“ 神秘的 ” な神業であるとしか言いようがない細胞とその遺伝情報を切断し、遺伝子異常を引き起こすということです。被曝のリスクは低線量にいたるまで、直線的に存在しつづけ、しきい値はないのです」。これは、小出裕章さんが書かれた文章です。原発とその核生成物は細胞を寸断。神秘的な神業であるその遺伝子情報を切断。遺伝子異常を引き起こす。社会を寸断し、被災地を寸断し、家族を寸断し、生きとし生けるものを寸断する。すべてをバラバラにしてしまう。被災地近くの教区から来られた方たちは、もっと、この意味がわかると思います。まとまることができない。家族の中でも意見が違う。この小出さんは、ずっとメールで交換してきたからよくわかるのですが、宗教は大嫌い。



神なんか信じない。「神も仏もあるものか」と言いながら、こんな「神秘的」な神業である」って書いていらっしやる。どこかほんとに心の奥深くに、もうわたしたち以上に、神というものを持っていらっしやると思います。

- ◆いまの政策は、汚染地域に民衆を磔にしてしまっている。民衆自身が十字架にかかっています。100万人を超える人々が、高濃度の汚染地にいます。100万人。これはチェルノブイリどころではないのです。ずさんな検査。おごなり。検査の真実は隠されたままに。
- ◆残念なことに一年半ですでに、子どもと生きとし生けるものに、遺伝子の異常が生じています。36%の福島の子どもたちが、甲状腺に異常増殖を持っているとの発表がありました。これは政府が発表したのではないのです。政府はこういうことは、もう絶対言わない。4年後に、あるいは100万人に1人に、甲状腺の癌が発症すると言われているのに、もうすでに4年を待たずして、福島の8歳以下の一人が甲状腺癌にかかってしまっている。これはとてつもない事実です。
- ◆「生きとし生けるもの」への異変。例えば、これも最近発表されましたけれども、つばめの尾の不均一な個体が発見されて、その巣を採取して測ったら、2巣からは7,200あるいは6,700ベクレル（キログラム当り）のセシウムを検出し、他の三つの巣は2,100ベクレルぐらい。福島から65キロ離れた角田市での巣です。ヤマトシジミという蝶々の羽や目にも異常が出てきている。遺伝子の寸断ですね。いったん寸断され、傷ついた遺伝子は、元に戻らないわけです。子孫にずっと受けつがれていく。
- ◆野生のマイタケやキノコ類は上に向かってカサを広げているので、汚染値は高いわけです。例えば伊達市の農家のシイタケが7,000ベクレル/kg。で、ドイツのテレビ番組の報道で、「これはもう食品とは言えない。放射性廃棄物」と言われました。
- ◆8月に見つかったアイナメはセシウムが1キロ当たり25,800ベクレル。（食品を測るのは、みんなキロあたりです。）これは基準の258倍、とてつもない数です。アイナメは、海底に生息しており、汚染された海底での影響が大きいわけです。貝や海藻類も同じと言えます。
日本の法令では1キログラム当たり10,000ベクレルを超えるのは、もう放射性物質。ということは、先ほどから言っているものはみんな、放射性物質そのもの。これは、隔離して厳重に管理されなければならない。放射性管理区域以外に置いてはいけないということなのに、日本政府はそれを放置しています。そしてそこに、無数の人々が存在しています。
- ◆7月に発見された男性が、1キログラム当たり20,000ベクレル。身体自身が、とてつもない放射性物質の塊です。妻も10,000ベクレル。お二人はシイタケや近場で採取してきたニラ、タケノコ、干柿、ニンニクなどを食べていただけなのですけども。
戦後、体内被曝の問題はずっと隠されてきました。癌については認めたものの、それ以外の病気についてはアメリカ、そして日本も伏せてきました。
- ◆南相馬で話題になっております黒い物質（藻草）。風に吹かれて道路の上をコロコロと吹き寄せられて。セシウムがキログラム、200万から600万ベクレル。こういうものの上を、子どもたちが歩いているわけです。

- ◆今も1号機から4号機は放射能をばらまき続けています。特に一番憂慮されるのは、膨大な使用済み核燃料を保管している4号機の耐震性です。高い震度の地震が今度きたらもう、日本中が破局になるであろうと言われるほどの状態にあります。
- ◆こうした問題を、なぜわたしたちが新聞で知ることができないかという、原子力産業や政府や電力会社がマスコミと一体となって、隠しつづけていることの一つに、日立、東芝、三菱という原子力産業の御三家の名前があります。この名前をマスコミは出してはいけないということになっているのです。東京電力とか関西電力とかいうのは出てきますけれども、この三つの会社が、その奥の奥に潜んでいる。そしてマスコミを使ってウソと楽観論がふりまかれ、一方で民衆は汚染された大地と闇の中に、未来もないまま捨て置かれています。
- ◆捨てるだけじゃないのですよね。増税、そしていのちも絞り取り続けています。こんな国があるでしょうか。こんな国を許してきたのは、わたしたちの何が足りないのでしょうか。今、キリスト者のわたしたちに何を問われているのでしょうか。
確かに、恐ろしいのは見えない放射能だけではなくて、国を動かしている黒い力です。聖公会もカトリック教会も、私たち自身の三角形のピラミッド組織のなかにあるので、国家とか、そういう三角の上の部分について、あるいは、わたしたちを囲むピラミッド社会について比較的慣れっこになっているかもしれません。国家に対しても。これも私たちが目覚めなければならないひとつの課題かもしれません。
- ◆国家は民衆を守らない。国家が今しているのは、捨てながら税もいのちも搾り取るというそのことです。これは、あの戦争の時と似ていますよね。
民衆が最後に玉砕までいかないように、早めに戦争を終わらせることもできたのですが、指導者たちはそれをしなかった。知っていながら遅らせたのですね。あるいは広島、長崎で原爆攻撃があると知りながら、その朝、何の警戒警報も出さなかった大本営。民衆は赤紙と重税と玉砕の対象だった。
- ◆その闇の力が今も続いている。見捨てられた民衆と大地とともに、生きとし生けるものと脆い神が、わたしたちに沈黙を呻き、沈黙の神の声を発し続けています。
- ◆いつも思うのですが、「国破れて山河あり」という中国の詩がありますが、日本の場合「国破れずして山河なし」。きょうはその沈黙の呻きに耳を澄ましてみていきたい。民衆と大地と脆い神を閉じ込めている、原発の深い闇の実態を。
- ◆では、どんなウソで塗り固められているのでしょうか。その知恵を身に着けていくことは、とても大切。人々はもう気が付いているわけですね。いろんなウソの中で閉じ込められていることを。私たちは自他共にその閉じ込められているウソから解放されていかなければならない。このデモのプラカードにあるように、「国民をバカにするのは止めて！」「再稼働とか狂ってる！」「わたしは放射能で死にたくない！」「節電しないと停電？ウソ〜」。その実態を見ていきましょう。

ウソ① <原発がないと電気が足りない>

- ◆そのウソの一つ。原発がないと電気が足りないのはウソです。推進側の脅しに過ぎない。

今年の夏、一つのピークが7月27日の猛暑日。東京電力は733万キロワットという、とっても大きな余剰電力があったのです。東京電力はこのとき原発は稼働させていないですよ、原発なしで、余剰電力が記録されました。最大ピークのその瞬間でも20%も余っていました。皆さん、帰ったらぜひ伝えてください。「余っている」と。関西電力が一番宣伝していましたよね、「ないとだめだ！だから大飯原発だ！」って。実際の記録では、そのときにも24%も余っていたのです。ウソだったのです。



- ◆実際の猛暑日が証明した原発なしでの余剰電力。一つの例ですけれども。5月発表の需要の数字より、8月の一番需要が多いと思われる時に実際に使った電力はずっと少ない。5月に、供給力は少ないと言われたわけです。でも、実際の最大供給力はたくさんありました。大飯原発なしでも余剰電力があったのです。
- ◆関西電力の状況を克明に記したものをみると、最初はピークが7月中ごろ、供給が需要をぐっと上回っています。8月の状態も同じくです。大飯原発フル活動は関係ない。これ、一つの希望ですよ。企業の関係者はよくご存じと思いますが、もう電力会社からの電気は高いから、自家発電でいこうと切り替えてしまったところが多いのです。
- ◆もともと、火力、水力、自家発電だけで電気は十分まかなえたのです。わざわざ原発を動かし、そのかわりに、火力発電にお休みくださいって50%しか稼働させなかった。年間の平均設備利用率は火力の場合5割にもならなかった。
- ◆小出さんが書かれた図によると、火力は50%しか稼働させていない。原発は70%稼働させています。では、原発を全部止めてみたら？ 火力発電と水力と自家発電で十分に間に合うのです。
- ◆なぜそれほどに原発に固執するのでしょうか？ 理由はエネルギー問題ではない。マスコミはわたしたちの目をくらましている。ほんとうの理由は、今止まっている全ての原発を、再稼働させないと、空焚きでも維持コストがかかり、かつ減価償却によって、電力会社が超赤字企業に転落してしまうからです。赤字を避けるためです。もう一つは、核武装を狙っているという隠された本音と理屈もあります。つまり、原発ゼロにしてしまうと、使用済み核燃料の再処理事業という、とても儲けの多い事業を継続することができないので、プルトニウムを生産する根拠を失ってしまう。プルトニウムを使って核武装という、この隠された意図があるからです。
- ◆もう一つ、ちょっと注意していただきたいのは、自然エネルギー、代替エネルギーということがしょっちゅう口にされてはいますが。これは、あんまり言いすぎると、“原発利権村”の住民たちに、原発を温存させる手段に利用されてしまうのです。つまりこれを育成したり、もっともっと増やしたりするには時間がかかる。今すぐっていうわけにはいかないという理由をつけてくるわけです。だけど、先ほどから言っているように、現存する火力、水力だけで十分に間に合うという部分には、この原発村の人たちは口をつぐんでいます。そのほんとうの姿を隠すために、代替エネルギー論がモヤモヤと広がっ

ている。わたしたちは、この部分にも騙されないようにしましょう。

- ◆“原発利権”の甘い蜜の味を忘れることができない政治家や地方自治体の指導者たち。こうなったら、カネを求めて禁断症状。抜けることができない。
- ◆でも、唯一の希望は民衆です。いま目覚めて、多くの人が、それこそ組織ではない、一人ひとりが、どこからきたのかわからない、老いも若きも立ち上がっている。これはすごい力と希望です。
- ◆原発がない未来をつくるために。私たち日本人の多くにありがちな傾向ですが、非国民と糾弾されたり、村八分になるのを恐れたり、集団に帰属することで安心感を抱きがちです。でも、今や原発問題について、そう言ってはいられない。遺伝子は傷つき、地球は汚染され、子どもたちに未来がなくなっている中で、こんなことに捉えられると歴史の曲がり角を曲がりきれない。周囲を気にして行くという、わたしたちの眼差しと価値観を、自他ともに（教会でも）、変えていかなければならない。「原発やめますか？ それとも人間やめますか？」というデモのプラカードもあります。
- ◆いま都心の首相官邸前や国会の前で、金曜日ごとに繰り返される反原発デモ。何万という人々が参加しています。まず6月29日。金曜日夜、首相官邸前15万人。見上げるとデモを報道するヘリも飛んでいました。報道関係も少し報道し始めた。また今頃の参加者の特徴は、デジカメで写真を撮っては、パソコンに移して、インターネットで知らせあうという新しいスタイルのデモが始まっています。
- ◆その同じ頃、大飯原発の再稼働を止めようと、原発門前では多くのお母さんが子どもを連れて、警備の人と睨み合っていました。自分の身体を、あるいは自分の自動車を鎖で縛りつけて、どんなに警備が引き出そうとしても、引き出せないようにした人々も大勢います。
- ◆7月5日に、反対にもかかわらず大飯原発は送電開始。ここで関電はひどいことをしているわけです。供給能力が低いと言い続けて、わざわざ火力発電を停止させて供給能力を発表してきました。9日には8基も火力発電を停止させて、「ほれごらん」と言っているわけですが。それでも供給力が、大飯原発に関係なく、火力だけで十分まかなえた。
- ◆7月16日、暑い代々木公園。これにいらした方は、きっと多いと思うのですが。もう暑い。17万人がそれぞれの思い思いの「原発非服従」「負けるもんか！」などのプラカードを掲げてがんばりました。
- ◆大勢の若い子どもを連れた両親が、原宿の通りを、延々と何時間も何時間も行進して。最後は夕暮れになるほど、その列が延々に続いていました。
- ◆夜、国会包囲。この頃からですね、警備が厳しくなり始めました。



ウソ② < CO2を出さない原発 >

- ◆さて、もう一つのウソ。このウソはリーフレットに書きました。

“温暖化”そのものはじつは、原発を進めるためのキャンペーンだったというのはご存じだと思います。「CO₂を出さない原発」というのは、これもウソ。原発というのは常に、火力発電のバックアップが必要で、ウラン鉱山の精錬、転換、濃縮、再転換、燃料加工、そして原子力発電に至るまで、全て火力発電のバックアップを受けながら操業されています。CO₂が問題なら、じゃこれは何なの？」って言いたいですね。

CO₂だけが問題にされていますけれども、この陰で、死の灰を生む原発そのものの問題は隠されている。

- ◆「原発は海温め装置」小出さんが書かれた図によれば、100万キロワットの原発のために燃料を燃やしますと、300万キロワットも発熱してしまうわけです。いらない200万キロワットを捨てなければいけない。しかもその熱を冷やさないと原発は爆発します。そのために何が重要かという、海から取水口を通して、毎秒70トンもの海水を取り入れないと操業できないのです。毎秒70トン。どのくらいの量かという、淀川ぐらいの量だそうです。(だから原発のあった福島に、ホースでチョロチョロなんていうのは、もう全然役に立たなかったわけですけども。そんなこと多くの人知らない。)出てくる水は約7度から10度温まったものが出てくる。皆さん泳いでいて、急に7度か10度上がったらどうなりますか。原発の周辺の生態系にダメージを与えますし、放射性廃棄物の影響もうけます。日本の54基の原発の周辺は、こういう状態になります。
- ◆先日再稼働した大飯原発を、人間が止められないから、クラゲが一時止めてくれたので拍手を送ったのです。どうして止めたかっていうと、大飯原発の取水口にクラゲが引っ付いちゃったのです。クラゲっていうのはお魚と違って、泳ぐ力がないからフワフワ浮いていて、取水口の強い水流に抵抗できなくて、ペタッと取水口にくっつくわけですね。今までも、多くの原発が一時停止せざるを得なかった理由にクラゲがあります。越前クラゲとかね。生きとし生けるものの、原発による被害もまたこういうところにもあります。と同時に、その中にある無言の声も聴き取りたいと思います。
- ◆原発とはどのような仕組みか。ウラン燃料を燃料棒の中に縦に入れて、たくさんの核燃料棒を束ねて、炉心に入れる。「原発と原爆は違う、平和利用は良い、核兵器はNO。」これは日本だけで言われてきたことですが、原発＝原爆。原発はウランやプルトニウムの核分裂反応を利用した膨大な熱、これでタービンを回す湯沸かし器に過ぎない。こんな危険な湯沸かし器を電気をつくるためだけに使ってきたわけですね。格納容器にはたこ足のように無数の配線があり、そして、下にドーナツのような圧力抑制室と配線で連携している。水が入っていて、圧力がばあっと出てきたときに、これで調整して爆発を防ぐものです。原発というのは配線だらけです。福島の原発は地震でその配線が破断したのです。
- ◆福島の訴訟を起こした訴訟団長の武藤類子さんが、「生きとし生けるもののなかで、自らの種族の未来を奪う生き物、こんなひどい生き物が、人間以外にいるでしょうか」ということを訴えて、人びとの心をうちました。わたしたちは美しい大地も川も海も故郷も失った。津波だけだったら、永遠に失ったということは無いでしょう。津波による被災と、原発による被曝とをはっきり区別することが必要です。

ウソ③ <除染>

- ◆ もう一つは除染のウソ。「除染してあげるから、ここに居なさい」「帰っていらっしやい」のウソです。ほんとうに放射性廃棄物は除染することができないわけです。人間はそれができない。ただ場所を変える、移染にすぎない。では、なんでこんなに除染が宣伝されるかと言うと、原子力産業関連で潤った企業がまた請け負うのです。原発で潤った同じ自治体も除染で儲ける。こういう巧みな関連をわたしたちがきちっと見破り、いろいろなところで話すときに、伝えなければなりません。原発の宣伝とカネで潤っているのは、市町村長だけではなくて、もちろん文部科学省、大学などもそうです。
- ◆ 郡山市ではこの移染について、こういうことがありました。高い放射能のガレキか土かを、子どもが遊ぶ公園に移染させ、埋設していたのです。
- ◆ 去年の話。ある幼稚園は最初から積極的に除染を実施しました。0.4 マイクロシーベルトに下がったのですが、9月になると、長雨や台風により再び元に戻った。「イタチゴッコだ」と園長が諦めました。
- ◆ 皆さんの教区の中で、「この汚染地域から出たい」と言う人がいたら励ましてください。「我慢したほうがいいのだよ」って言わないように。難しいことですが・・・。家族が分裂するかもしれない。でも子どもたちや未来のことを考えたアドバイスをすべきです。それに加えて何よりも大切なのは、指導者として命がけで原発を止めることです。
- ◆ 今、私たちがしっかり見つめ決意すべきは次のひとことにつけるかもしれません。小出裕章の言う「エネルギーがありようがありなからうが、電気が足りようが足りなからうが、(ちょっと小出さんの思議な日本語ですよ) 原子力だけはやってはいけない」ということです。不思議な日本語だから、よけいに心に残るのですけれども。
- ◆ 戦争は誰のために、原発は誰のために続けるのか、続けたのか。同じことですよ。同じ利益を得た人が原発でまたも利益を得ている。そのつけを庶民に回して、重い税金で搾り取る。皆さん知っていました？日本は先進国の中でかなり貧困状態にあるっていうことを。日本の子どもたちの14.9%、7人に1人がもう貧困。両親が子どもたちを育てられないから、自分で三つのバイトを掛け持ちして、駅のトイレで寝泊まりする。原発があるかぎり、こういう社会がもっと深刻になっていきます。その責任を誰も問わない。
- ◆ 原発から出る死の灰は、日々広島原爆4発分です。事故があろうがなかろうが生み出されているわけです。このことを、わたしもリーフレットをつくるまで知らなかったのですけれども。54基が今まで生み出してきた死の灰の量はおおよそどれぐらいでしょうか？ 120万発分です！ これだけが大気中への放出や使用済み核燃料として蓄積されつづけているのです。これ小出さんが綿密に計算しました数値です。そしてその灰を消す力は人間にはない。
- ◆ 先ほども言いましたように、被曝地から移住させない、そこに張り付けにさせて、除染というエサで、原発を続けている。これが日本の国策です。
- ◆ 少年がデモで訴えます。なかなか面白い。「おとなは はんせいしなさい」。「ほんとうはデモとかしたくないんだよ、原発のバカ」。この訴えに、わたしは共感を持ちます。わたし自らが、デモに参加しますが、シュプレヒコールも、こぶしを挙げることもできない

タイプです。歩きながら原発のバカということばも、つぶやいたりしています。誰だってほんとは原発のことで、デモなんかしたくないですよ。

- ◆ガレキ問題。瓦礫が日本各地に運ばれていくのは、またまた同じ原発関連産業が儲けているからです。あるいは実際にある人が某政治家から直接聞いたという（もちろん新聞には出ないですが）「ガレキをばら撒かないと、福島だけが癌が多発するから、日本中にばら撒いておけば、他にも癌が出たときに、福島の人々へ補償しなくても済むから」という話が出てくることさえあります。

ウソ④ <原発はお金のかからない発電方法>

- ◆原発はお金のかからない発電方法というのは、これがウソであるのももちろんです。1970年から2007年に実際に使用された費用をもとに、立命館大学の大島堅一教授が有価証券報告書・政府の原発の財政支出、原発の立地から運転、使用済み核燃料の処理に至る実際の費用をもとに、電源別総単価キロあたり、原発が一番お金のかかる発電であることを証明しました。また原発の夜の余った電気で水を汲み上げ発電するという揚水発電が、原発とセットで日本の河川に建設されてしまいました。この揚水発電を加えると原発のコストは、さらに大きな総単価になります。

<原発事故が起こったのは津波か地震か？>

- ◆最後のほうになってきましたが今まであまり知られていないことをお話します。
- ◆地震と火山地帯、両方が重なっているのは日本だけなのです。火山と地震地帯の上に54基の原発を建設した国は世界で日本だけ。チェルノブイリの原発事故とスリーマイル島以後の世界の原発はほとんど増えなかったのに、日本だけが増えてきた。
- ◆では、3・11の福島で、原発事故が起こったのは津波か地震か？ 多くの方が津波と思っていらっしゃるでしょう。（地震？）そうなのですね地震です。政府と東電とマスコミが隠し続けてきたことを、国会の事故調査委員会が7月11日に発表したのです。地震で、原発システムそのものが損傷した可能性を公にしたのです。委員の田中三彦さんが中心になって調査した結果です。これは、原発が地震に脆いということを証明した重要な調査でした。

この事実を朝日新聞はチョロっと掲載しましたが、毎日ばかりと大きかったですね。東京新聞は堂々と載せています。
- ◆もう少し詳しく見てみましょう。もう皆さんご存知だから、そんなに力を入れる必要もないけど。地震があったのは2時46分。このときに、格納容器と配管などが破損しました。その1時間後に津波が来た。
- ◆原発にはたくさんの配管があって。あれだけ長あく、ぐらあぐらあ揺れましたよね。そうすると配管っていうのは引っ張られたり伸びたりして、多くの部分が損傷したのです。どこの大きな部分であるか、小さな部分であるかはとにかく。
- ◆地震学者の島村英紀さんご自身がおっしゃる。気象庁によって最初に発表されたのはマグニチュード震度、気象庁マグニチュードというこれで7.9。ところが二日後まで徐々

に上げていって、モメントマグニチュードという、今まで日本が使ったことのない測り方をして9に上げたのです。7から9に。なぜ9が必要だったか。どなたかわかる方いらっしゃいますか？（想定外じゃないですか）そうです！「想定外」って言いたかったのです。事故の責任も法的に免れることができる、「想定外」だから。これ以後、「想定外」がしばしば使われるようになった。これは、原発が地震に対して脆弱だったということを隠すことになります。

- ◆これ、微妙なところなのですが、津波が来たと発表された3時35分は沖合の観測地点です。まだ福島原発には到着していなかった。ところが、もうこの時点で冷却能力は破損していたという発表が行われてしまっていたのです。津波が来る前の時間帯で、すでに冷却不能という事態になったという発表！今回の国会事故調査委員会が、この問題を明るみに出したのです。地震による原発の破損です。政府の事故調査委員会は、これを隠そうとして今に至っています。

一番信頼のおける国会の事故調査委員会の発表を、ニュースステーションで報道したら、クビになりそうな状況で、「皆さんとお会いできないかもしれない」というようなことを古舘さんが言ったわけです。けれども、彼を支持する多くの声が寄せられて、今まだ続けていらっしやいます。この問題をずっと最初から追求してきたのが田中三彦さん。福島原発の格納容器の製造に関わって、その脆さをずっと語って来られた人です。多々脅迫を受けたのですが、幸か不幸か国会事故調査委員会のメンバーに選ばれるに至り、この問題の追及ができたのです。

- ◆脆さ。福島第一原発は米国から輸入したマークIという、最初の原発を含めて、欠陥原発だったのです。この原発は3.11以前に幾度も危機的状態にあった。加えて3号機の問題は密かにプルトニウムを燃やしていたことです。
- ◆地震によって、配管部分が破断。冷却用電源喪失も起こっていた1号機。空焚きで真っ先に12日の午前中に水素爆発を起こします。空焚きになるってすごいことですよ。昨年の5月に入って、政府・東電は、あれはメルトダウンだったと言ったのです。地震による破断を隠したままに。メルトダウンだということを強調したわけです。今は、メルトスルー。燃料がどこまでもぐっっているかわからない状態にあります。
- ◆この12日、浪江町の住民、ボランティアも含めて、被曝してしまうわけです。双葉町の井戸川町長は、ズーという鋭い音とファイバーグラスのような破片が牡丹雪、親指と人差し指で丸をつくるほどの、そんな大きなものが彼の上に降って来て、鼻血は今も止まらない状態になりました。体毛は抜けたまま。こういう人が多いわけですよ。
- ◆2号機。15日早朝に圧力抑制室から水素爆発を起こします。破損して水がそこから漏れるというような形で、大量の高濃度汚染水が地下へ、海へと漏れ続けています。
- ◆そういうこと知らされていない労働者が、足首までつかっちゃって大被曝事故がありましたね。こういう労働者の数々の犠牲の中で事故処理がなされている。
- ◆労働者への被曝線量を低く表示させる偽装バッチ事件もありました。昔も今も労働者の被曝の犠牲のうえに、原発の操業はなりたっています。
- ◆さてプルトニウムを燃やしていたという3号機。空焚きが遅ればせながら進んで14日

早朝に巨大爆発。火の手があがり、黒雲、キノコ雲が上空に高くあがりました。これは水素爆発ではなくて核爆発だという人もいます。燃料プールは破壊されたままです。

- ◆浪江町に、このことが知らされたのは1日後のこと。北西への風によって人々は猛烈な被曝をさせられてしまいます。3号機は、今も高温で、放射能の煙を出し続けています。で、もう一回3月21日、23日ね、再溶融しているのですね。このときは雨と風の日で福島だけでなく、首都圏に流れ込んだので、首都圏が汚染されました。
- ◆4号機。プルトニウム入り使用済み核燃料を1536本も貯蔵していました。しかし冷却できずに空焚きになって爆発。プルトニウム入り死の灰を四散させました。ホースで水を注いでも焼け石に水。これが、今一番危ないかもしれないと言われているのは、この支えている構造物が地震で崩落してしまう。そしてたらもう首都圏どころか日本壊滅ですよ。地球規模の巨大な汚染がもたらされる。
- ◆プルトニウムというのは、角砂糖を5個お皿の上に乗せた量のプルトニウムを日本にばら撒いただけで日本人全員が死ぬほどの地球上最猛毒の人間が作りだした物質です。
- ◆政府は「スピード」という放射能の測定器を持ちながら、政府は住民に全く知らさなかった。知らされないままに多くの住民が被曝します。
- ◆一方欧米の大使館は自国民をどんどん退避させていました。わたしの居る日野の丘の上は、厚木基地あるいは羽田からの飛行機の通路になって、なんでこんなに毎日、あるいは毎時刻、飛行機が北に向かって行くのだろうと思って。日本から急ぎよ逃がしていた飛行機でした。でも日本政府だけは、健康に直接差し障りがないからと言って何らの救済もしなかったのです。
- ◆3月21日から23日雨。首都圏から静岡まで。東京に向かってまっしぐら。この頃、静岡のお茶が汚染された。なんであんな遠く？って、思った方があるかもしれませんが、首都圏もともに汚染。
- ◆原爆10日後の広島を超えたセシウムの量が21日、東京に降り注いだのです。どのくらいのプルトニウムが出てしまったかわかりませんが。
- ◆わたしは、15日も、21日から23日も、日野の丘など（今でも汚染値が高い）外を歩き回って、それ以来ちょっと声の具合があまり良くないのです。その他いろいろな症候から、被曝したかなあ？と思っています。
- ◆そして福島県立医大の教授となった山下俊一教授、御用学者。彼の指導の下に、「もう汚染は問題ない。水や食べ物を一ヶ月ぐらい食べたり飲んだりしても影響はない。マスクは必要ない。たばこより安全。癌になるリスクは低い。」「被曝による健康被害はない」として、データーは隠されたまま、医療行為は行われていません。
- ◆見捨てられた動物達。世界に既に拡散している福島からの放射能。
- ◆放射能レベルが風向きと共にどのように、どっちに向かうか。ジェット気流に乗って南に向かったとき、西に巻き込んだり、あるいは北に、という。汚染された土が日本中に舞いあがって散らばって、もうどこも日本中、安全なところはないわけです。
- ◆阿武隈川が一日500億ベクレルの放射性セシウムを流し続ける。ヨーロッパ・ユニオンは、あるいは他の国々は、もう東日本からの食品輸入を禁じています。

- ◆ 厳しい労働のもとで、わずかな賃金、絶えず汚染に曝されている労働者。労働者は、近づくともう10万ミリシーベルト、もう即死するほどの中で働いていた。
- ◆ 川柳でこういうのを詠んだ労働者がいます。「下請けの おいらのいのち 想定外」。
- ◆ 都会に住むわたしたちが問われています。潤い続けるのは誰でしょうか。
- ◆ でも、まるで何事もなかったかのように、事故に蓋をしようとしている。
- ◆ わたしたち自身がウソを見破る知恵と、歴史の曲がり角を変えていく誓い。
イエスの生き方にならわないと、その力はないのかもしれない。

ちょっと時間がないので、細かいことはさけます。

- ◆ 今、モンゴルへの死の灰の埋蔵計画が出ています。お隣のモンゴル。この計画をすっば抜いた毎日新聞の記者と会ったことがあります。彼は「いのちの危険にさらされている」とおっしゃっていましたが、しっかりと書かれたわけです。

- ◆ スイス、ドイツ、イタリアはすでに脱原発。イタリアは94%で脱原発を選び取った。

- ◆ ジャマイカというところ（カリブ海）にWCCの総会で3・11以後の5月に、日本からの声を伝えるために、私が派遣されたときに、必死になって、日本から行った責任で、原発を止めようと、そういう決議を、声明を採択することができました。そのために、かなり頑張ったのです。



- ◆ 最後にリーフレットを作成したときのリーフレット・チームを紹介します。小出裕章さんの指導のもとに、カトリックの松浦司教と広島・仙台・埼玉のメンバーです。出る寸前のリーフレットを持参して、京都大学の原子炉実験所の小出さんを訪問して、皆でお祝いをしたのですが、この後に3.11が起これとは知るよしもなく、皆で出版を祝いました。

- ◆ 小出さんは、「宗教者であるあなたたちが、つくったこのリーフレットは、おそらく皆さまの思いを超えてはるかに大きな力を持つ」と、繰り返しおっしゃったのです。“温暖化”問題のキャンペーンについても疑問を呈しました。それは重要なことでした。そのときわたしは、リーフレットの持つ預言的な意味について、まだ充分目を開いていなかったのですが、10万部を超える発行になって、3・11以後の反応を見て、わかるようになりました。

今ここに、これだけの皆さんが集まって、聖公会として何ができるだろうか、ちいさな力、あるいはみんな一緒に、それぞれの地域で何ができるだろうか、というその思いは、ほんとうに大きな力になることを、わたしは信じて疑いません。



- ◆ 3・11以後、小出さんの研修会に大勢の人々が詰めかけつづけています。みんな気づき始めている。原発宣伝がぜえんぶウソだったと。
- ◆ ほんとに悲しいことに、日本における貧富の差が、もう10年前と比べて格段の差を見せています。ごく一部の金持ちが儲けて優雅な生活をしている。80%以上の人びとが、底辺近くの暮らししかできないでいる。この姿を山口里子さん（女性神学者、プロテスタント）は、イエスの時代の社会の姿と重ねて、“フラスコをさかさまにしたような姿”と言われるのです。多くの政治・経済・御用学者宗教界の支配者などが上部を占めていて、その下方に膨大な数の民衆がいます。これは、じつはイエスの生きていた時と全く同じだそうです。そのあまりにも不正義の構造に抵抗してイエスは死んでいったのです。キリストの弟子であるわたしたちが、どのようにこの不正義に関わるか。非国民と言われるたくない。教会の中で目立って批判されたくない。そんな小さな思いが意外にキリストの弟子として、Genuine（本物という意味）に生きることを妨げているのかもしれない。
- ◆ そういうわたしたちを、脆い神は沈黙の声は、沈黙のなかで、どのようなメッセージを発していらっしゃるのでしょうか。受肉という言葉が言われます。ほんとうのInculturation、受肉とは。森羅万象に受肉した神の視点から見ること。脆い神の視点から原発の悪を見直してみる。そのときにきっと、Local（草の根）に生きるということが何であるか。Genuineに生きるということが何であるのか。現場の苦しみ、地域の苦しみに連動することが何であるのかかわかると思うのです。
- ◆ 私たちのかかわりが“解放”というところまでいきますように。そうでないと、イエスのメッセージにはならないわけですね。慈善事業して救済して、被災者を助けることは易しいですけども、その被災者の被災地域が寸断され、いろんな問題の中にあるときに、わたしたちが発するメッセージが、イエスのメッセージでありますように。
- ◆ 今2012年において原発を止めるため Genuine 生きるとは何であるか。イエスの生き方に見倣い、霊の導きを皆で、ここに集まった皆で求めていきましょう。

わたしも自分の全力を尽くしますが、皆さんとこうやって出会えたことを深く感謝しつつ、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。（拍手）



7 「いっしょに歩こう！プロジェクト」報告

被災の地にて

司祭 フランシス 長谷川清純 秋田聖救主教会牧師



3・11から1年5ヶ月福島は今・・・

司祭 ピリポ 越山健蔵 郡山聖ペテロ聖パウロ教会牧師

レジメ

被災の地にて 司祭 フランシス 長谷川清純

1. 「スリーディ（3出）」

- 1) 押し出される
イエスの足跡を歩む
- 2) 出逢う
被災された方々、周囲の人たち、支援者たち
— 臨在の主のお姿
— み言葉がそこにある
- 3) 出発する
— 最後の晩餐、飲み食い語り、泣き笑う。
— 次の朝には新しい出発

2. ミニストーリーの原モデル

事例 十三浜わかめ収穫支援
センターしんち支援内容
ふじ幼稚園
磯山聖ヨハネ教会

日常性が凝縮された非常性

3. 宣教＝牧会＝宣教

信徒互助・仲間親睦・絆・信頼・相互愛
スピリチャルケア
聴くこと
訪ねること
触れあうこと
伝えること
「アメニモマケズ カゼニモマケズ」

4. 貧しいことが豊かさに転換する＝十字架・復活

5. 再びハチドリ計画

長谷川司祭報告

こんばんは。(こんばんは) 今、ご紹介にあずかりました長谷川です。

「いっしょに歩こう！プロジェクト」では、プログラムディレクターってということで、働かせていただいておりますが、6月9日に福島県の新地町、磯山聖ヨハネ教会のある場所ですが、そこに「センター新地」をオープンしまして、そちらのセンター長としても、働かせていただいております。

東北教区では秋田聖救主教会の牧師で、能代キリスト教会の管理をしています。秋田には学校法人の聖使幼稚園がありまして、そのチャプレンもしています。

ということで、秋田の牧師をしながら、たいてい週日は仙台のオフィスで勤めまして、今もセンター新地のほうにも出向いているということです。そして土、日、月は秋田に戻るようになります。

しかし先月からは、磯山聖ヨハネ教会の協働牧師ということもおおせつかりまして、月の第一は磯山聖ヨハネ教会で聖餐式、第二主日は能代の聖餐式、第三と第四が秋田で聖餐式というような生活をしております。

わたくしのペースでいきますと、夕食を食べればもう今日一日終わりなのですね。あとは寝るだけなのですけれども、(笑い) まあ眠たい目をこすりながら、夜のセッションをしなければならぬという辛い立場にいると思います。

それで、今日は与えられた時間30分ですので、こんなふうにはゆっくりしているとすぐ時間経ちますが。「いっしょに歩こう！プロジェクト」の中味って言いますか、どんなことをしてきたかっていう報告は、きょうはしません。みなさまのほうに、手元に既に、中間報告という小冊子が配られていますので、もうお読みになっていると思います。お読みになった方？

ああ、はい。でも半分いきませんね。まあそんなもんなのでございましょうか。まあ、そんなもんだと思いますが。三割いけばいいと。三割バターがいいバターですからね。三割いってましたようですので、まあ合格点かなと思います。

きょう、お話ししたいレジメを31頁(※当日配布資料での31頁のこと)に載せています。

◆きょうは。あのお、タイトルはできたんです、(笑い) これはばっちりなんです。きょうこれ、3Dでないですね、皆さんに眼鏡を用意していません。ですけど、わたしのレジメの最初はスリーディなのです。ちょっと濁りますね、スリーディ。東北ではスリーディと言います。それはわたしが3月24日に加藤主教様から、「仙台に来なさい」と。「東北教区の対策本部でご奉仕しなさい」ということを仰せつかりました。それが3月24日でございました。そのときからいろんな場面でわたしたちは、きょう、五十嵐主教様をご紹介してくださった、ですけども。まあ、そういう体験をしていくのですが。

1. 「スリーディ（3出）」

1) 押し出される

一番目のスリーディのディは、イエス様に押し出されると、押し出されていくと、いうことです。じっとしていたところから、向こうの方へ出て行けということと呼ばれます。で、わたしは何回も現場へ押し出されていくわけでありました。これが一つ目の「ディ」。

2) 出逢う

そして二つ目の「ディ」は、押し出されていった場所で、出逢う、出逢いの出でした。これが二つ目の「ディ」でした。そこに、被災された方々がもちろんいますし、避難をされている方々がいらして、わたしたちは、またそこでたくさんの人と逢いながら、自分たちと同じように支援する人たちとも出逢っていきました。その出逢いの中で、ほんとに不思議な体験ですが、人と人が関係の無いようでありながら、つながっていく。「あの人のことは知っているよ」と、そういう形でどんどんどんどん広がっていく、つながっていく。そういう不思議な体験をしていきました。そのときに、わたしは、もうわたしたちが行く前にすでに、復活のイエス様がそこにおられて、傍らに立っておられた。その姿を見る。見たと思います。そうして、イエス様が共にわたしたちといらっしゃるということはまちがいのないということの経験、体験をしていきました。出逢った中で、たくさんの笑いも出てきますが、涙や、それから感謝の言葉や、さまざまな事柄を経験しながら、その一日の働きを終えます。

3) 出発する

当初、ナザレの家という施設が東北教区にありまして、そこにスタッフとかボランティアとかが住んでいました。何人かが住んでいました。近くにアパートも借りるようになります。夜は、ほんとうは振り返りの時間があって、こんな働きこんな働きがあって、どうしてこうしたのだから、こうしなきゃいけないとか、ああしなきゃいけないという事柄は、反省会とか振り返りをするんでしょうけど。一日の疲れた体は、そこでは食事をする。あったことの体験を話しながら、当然おいしいアルコールもあるし、ビールを飲みながら話をします。くたびれている体なのだけれども、11時、12時、遅くなるまでみんな話をした。そういう経験をす
 る中で、わたしは、当時の中村淳司祭さんもそんなのですが、今まさに、イエス様とお弟子さんたちの宣教の毎日を自分たちが体験している、追体験している。同じことなのだっていうことを、ほんとうにリアルに、その通り感じました。「ほんとにそうだね！」っていうことを、中村司祭さんと二人、話していたものです。



そうしますと、ほんとに最後の晩餐というのは、毎日の生活の夕食会、まあ酒盛りと言ってしまうと悪いんでしょうけど。でも疲れた心と体を皆が分かち合いながら、食事をしながら、アルコールを入れながら、「また明日がんばろう」という気持ちになる。それが毎夜、毎夜の

ことでありました。

そうして、次の日の朝、わたしたちはまた新しい現場に送りだされていく。そこは、その朝は、「そこから出発していくんだ」という気持ちでありました。これが三つ目の「ディ」、出発でした。

これの三つの「ディ」が繰り返されていったので、わたしの中では「スリーディ(3出)」だなぁと知っているわけです。

2. ミニストーリーの原モデル

イエス様の語られた聖書のみ言葉が、そのつどそのつどいろんな場面で、わたしの頭や心の中に思い出される。イエス様の語られたみ言葉が、わたしの中に入ってくる。そういう体験をさせていただいておりましたので、ほんとに聖書のみ言葉は事実だ、現実だとつくづく感じさせられた毎日でありました。

あとから、中村司祭さんが一年の働きを終えられて、東京に戻る前に、この本をプレゼントしていきました。山浦先生のケセン語訳なのですが『イエスの言葉』っていう書物です。山浦先生が被災して、それからいろんな人たちの助けを得ながら、立ち上がっていくのですが、そのボランティアの人とか支援してくれる人とか、町の人とか、いろんな人たちの中で、聖書のみ言葉の中のリアリティが語られています。また、ほんとに見事に文章にしてくださいますので、わたしはそのとおりだ、そのとおりだと思いながら、一章ずつ読みました。ほんとに素晴らしい本です、どうぞ皆さんもお手に取っていただければと思います。

3月11日の2時47分で時計が止まっているのは、これは磯山聖ヨハネ教会の集会室の時計です。いろんな場面で、偶然性というか、神様のおはからいというか示しというか、「気が付けよ」ということを、神様はわたしたちにするんですね。ひじょうにシンボリックにしますが、きょう、わたしのお部屋は1311ですね。2011年の1番で3月11日、1311号室という(オオ)、このお部屋割りをした方はどなたなのでしょう。か。(笑い)あまりにも見事すぎて、こういう偶然性というのは必然だなと思いながら、何かわたしに語りかけるものがある、ということです。



たとえばスタッフ、「いっしょに歩こう！」のスタッフが12人いたりして、会議をしている。加藤主教さまもいらして、「わあ、12人のお弟子さんたちが今ここにいるんだな」というような、そういうことが何度も何度も起きていく。それは何気ないことなのですが、それを、ちゃんと神様からのメッセージだと受け取ったときに、わたしがどうあるべきかを教えてくれるというふうに思います。

押し出されていくときの緊急車両ですが、車に乗っていく。最初にわたしがいたときに、今は解体してしまいましたが、東北教区の教区会館のステージのところに、対策本部が仮に設けられていました、緊急で。仙台キリスト教会の牧師の林国秀司祭さんが模造紙にマジックで、磯山聖ヨハネ教会関連と仙台キリスト教会関連の信徒の方々のお名前を書きながら、「こ

の方。どうされているんだろう」、「どうされているんだろう」。安否確認をしています。その安否確認の中から、被災地へ訪問していき、そこで、その信徒の方々だけでなく、一緒に避難しているの方々、すべての人が対象となって、わたしたちの活動は広がっていくわけです。

事例：十三浜わかめ収穫支援

そんな中で、例えば、これは宣教協議会なので、わたしの頭の中に、宣教との関連の中でのお話をするようになりますが。牧会をしていくときの事柄についてなんですけれども。石巻の十三浜で漁業が再開されていきます。

皆様の中にもわかめをご購入していただいた方も多いかと思いますが、その組合長さんをするようになります佐藤清吾さんという方のところに、わたしたちは定期的に通いまして。「どうしていますかぁ。お元気ですかぁ」ということで、訪ねて行きました。仮設住宅に住んでおりました時には、3か月ぐらい経って行くわけなんですけれども、これはDVDにも残っているんですが、わたしとか北関東教区の岸本執事がそちらの方面を行っていましたので、あるときに、その仮設のお部屋でお話をしていましたらば、ほんとに「後ろから背中を押されたんだ」と。もう自分は、奥様とかわいお孫さん二人を津波に吞まれて、ほんとに自暴自棄になって、力がなくて、ぼおっとしていた時期があったんですけども、聖公会の皆さんが来てくださって、お話をしてくれている中で、「何やってんだろう」と「自分は」。「こういうふうにして、大勢の人たちが応援してくれているんだから、がんばりなくちゃいけない！と背中を後押しされた。」ということで、ほんとにそれからはバイタリティを持って、漁港の再建に奔走していくわけです。この方のご親戚に遠藤さんというお宅があって、そこにこんどは、岸本執事さんはほんとに1週間にいっぺん通いながら、まァ牧会訪問ですね、されます。毎週、毎週、毎週、通って行きます。最初は支援物資を持って行ってましたけど、やがてそれは必要なくなります。あとは顔を合わせてお話しをする。「お昼だから食べていきなさい」。お昼を一緒に食べる。そんな関係がどんどん続いていきまして、「わかめを種付けをするんだ。それを体験させてあげよう」「船に乗せてあげよう」というところまでいく。あいにく嵐になって行けなかったんですけども、「じゃ、収穫の時はまた来てくれ」ということで、こんどは収穫にいくときにボランティアを募って行きます。で、彼はわたしが見ていたところでは、ほんとにその漁港の方々と、ほんとに仲良くなりました。それで、信頼を得て、素人にもできるようなわかめの収穫の作業を任せてくれる。そこまでになりました。そうして、お手伝いをさせていただくことにほんとに感謝をされる。そういう中で「牧会とは何かな」というのを、彼は感じ取ったと思います。そして、いろんな困難さを持ちながらも、聖職として働くということに、すこし自信というか、そういうものを持ったんだ



と思います。ということで、様々な個人的ないろんな困難も、わたしたち持ちますけれども、それを乗り越えさせるものは、相手とのつながりの中で、自分が役割を持って働かせていただいているという喜びと感謝だと思います。そういう意味では、最後の収穫が終わって、そして最後の最後に彼は。満開の桜でした。その向こうに見えるちょっと右手の下に海が見えています。これはわかめ収穫をした最終回です。記念の写真一枚、納まったわけですが、もう遠藤さんご夫妻からは、息子って言ったら変ですけど、「家族の一員だな」と言われて、手を握られた。彼も、それから左側に写っています緑色の方は仙台聖フランシス教会の信者さんですが、ずっと同じように通いました。彼ももう家族の一員として受け容れられていましたので、2人とも、最終回終わってから、別々の自分の車で家に帰宅するんですが、その車中で大泣きだったということで。危なかったですね、交通事故起きなくてよかったです。そのぐらいつながりができたのであります。そういう事柄が起きてきて、いのちがとても豊かにされたのでありますので、そういう経験というのはたいへん大きな事柄だろうと思います。

事例：センターしんち支援

「与えながら与えられる」「与えられながら与える」（閑上）

同じような事柄は、牧会とまた別の事柄ですけど。「与えながら与えられる」「与えられながら与える」という、そのことで人間が活着ているってということも体験をいたしました。牧会者はいつも与えていかなきゃいけないんじゃないかというふうに思うんですけども、でもそうじゃないということなんです。これは名取の信者さんなんですけれども、閑上海岸で、津波に呑まれて、家具、家財一切無くされた方でした。で、しばらく半年ぐらいの間、なかなか涙も出ないほどの苦しみだったんですけども、ようやく半年ぐらい経って泣けるようになった。そうしますと、何かが落ちたんでしょう、今までいっぱい支援していただきながら、物資をもらうんですけど、もうそれだけじゃ自分は生きられないんだ。「わたしから皆さんに何かさしあげたい」と言って、いろんな物資があるんですけど、とても高級品なんかは使わないからと言って、わたしたちがもらったりする。そうかと思うと、その方は散髪をされましたので、散髪ができますからってということで、「いっしょに歩こう！プロジェクト」のスタッフのみなさんの頭を刈ります。顔を剃ります。生きるには、もらっただけじゃとても生きられない。自分も与える喜びがあつてこそ、生きていけるということを示してくださいました。

それから、これは名取の第一中学校の避難所でしたが、大友さん、この方です。箱塚桜団地に住むわけですけど、そこに移っていったから、これは名古屋学院大学のなんかすごいお兄ちゃんたちが来たんですが、ボランティアをしています。お父



さんが足湯をしてもらっている。今は買い物バスツアーをしていますけど、とても明るくなりました。自分が、まあ give & take っていうことなんでしょうけど。やっぱり人は、「与えなければ生きていけない」というようなことでございます。

事例：いのちでつながっている絆（ふじ幼稚園）

それからもう一つのお話ししたいのは、磯山聖ヨハネ教会の亡くなられた信者さんの中曾順子さんが勤めておりました「ふじ幼稚園」。そのふじ幼稚園の園長先生のお話しなんです。それは、自分は幼稚園児さん 11 名と先生 1 名を津波で亡くしてしまったことによる、とても落ち込みがあったんですが、「やっぱり、その園児さんたちの "いのち" と中曾順子先生の "いのち" をたいせつにするためには、残されたわたしたちがそのいのちの重さ、大きさを受けながら、わたしたちが応えて生きていかなきゃいけないんだ」と、そういうふうに思えて、それから幼稚園を再開していくっていうことができていきます。

そんな方にお逢いしていますと、「絆」っていう言葉がはまりましたけど、生きている者同士、あるいは赤い糸でつながれた夫婦といますか、そういうものなんでしょうけど、生きている人と生きている人との絆っていうのはもちろんあるけれども、生きている人とそれから亡くなられた方との絆。赤い糸。そのいのちでつながっている、それもあるなあと。亡くなられた方の分まで、とよく言われます。そういう意味で、向こうの世界と、今、地上で生きている自分とがつながっているっていうところで、人も生かされていくんだなあとということをおもいました。

日常性が凝縮された非常性

特別な状況の中なのでこういうことが起きているんだと思いがちですけど、やっぱり考えてみたら、そういう非日常性というのはなくて、わたしたちの日常の中に、その現場があるということだと思います。ですから、特別な場所をさがしてわたしたちが福音・宣教するのでもないし、何かがあったから特別にできたんだということでもない。ほんとうは、毎日の生活の中での宣教でなければならないのではないかなあと、わたしは思いました。

3. 宣教＝牧会＝宣教

なので、訪ねて行くことや、聴くことや、触れあうということ、そういう事柄はほんとうに大事なことであって。ソウル教区・大韓聖公会の金主教さんが来られたときには、みんなの肩を抱いたり、手を握っていただきました。一人ひとり。その触れあう、手を握りあう、握手する、肩を抱くということは、ほんとうに励ましになるというふうに思います。それが、ふだん、わたくしは東北の人間なので、気が小っちゃくて、シャイなので、なかなか手を握るなんて恥ずかしくてできないことですが、平和の挨拶で皆さん手を握りますが、ちょっと恥ずかしいなあと思いながら握手をしています。でもそれが、震災後はいきなり普通にできました。つまり、そこへ訪ねて行ったときに手が出ますね。そうすると被災された方も手が出ます。始めて逢ったのに握手してるんですね。それが特別だからできるんじゃないかと、日常で出されるのが宣教、福音を伝えているっていうことなんだろうと思います。

5. 再びハチドリ計画

前回のプレ宣教協議会で、鈴木育三執事さんが最後にはハチドリ計画というお話をしてくださいました。ほんとにそうだとわたしも思います。

クリキンディという主人公は、一滴一滴、くちばしに溜めたお水を、その山の火事に、とても手におえない、もうそこらじゅうが火事で燃えているのに、わずか一滴ずつを注いで垂らしていく。周りの動物たちは「何やってんだあ」。いぶかりますが、「わたしにできることをしているだけです」ということ。

広い、広い被災地の中で、「いっしょに歩こう！プロジェクト」が出逢って、何かをなせたっていうのは、ほんとにちっちゃな、ちっちゃな点です。わたしたちの働きもそういうもので、わずかな小さな働きですけれども、それは神様にむくいていただけるものと信じて、一滴を垂らし続けていきたいなと思っております。(拍手)

レジメ

司祭 ピリポ 越山健蔵 郡山聖ペテロ聖パウロ教会牧師

事故が起きて以来年月が経過し、人々は一見平和な日常を取り戻しつつあるように思えますが、あの日以来福島は時間が止まってしまいました。それでも時は、福島の思いとは無関係に流れていきます。人の思いも変化していきました。

震災が起きてしばらくはお互いに寄り添い絆が深まった感じがしていました。人間って何て素晴らしいのだらうと思ったものでした。日本の全てに絆の文字が溢れていました。しかし今、「絆」の文字はいつの間にかメディアから消えていきました。原発事故さえなければ、人々の思いは復興に向けて希望が見えていたかもしれません。福島の市民は悲しいと言いません、悔しいと言います。最近「がんばろう福島」のステッカーが走る福島・いわきナンバーの車に多く見かけます。最近それは励ましとは逆にとても孤立感を覚えます。福島の未来はどうなるのか？仮設に住む帰宅困難地域の人々に普通の生活は戻ってくるのか、皆元気を装って自らを鼓舞しています。今一番危惧されること、イエスに繋がる信徒の一人として、今もこれからも未永く覚えていただきたいこと。

- 1 25年後の子どもたちの健康…命こそ一番
- 2 瓦礫処理、除染、中間貯蔵施設のこれから
- 3 原発事故が人間関係を破壊していく恐怖…真実が歪められていく
- 4 被害者が加害者に変身させられる現実…福島差別（福島と聞いただけで…）
- 5 教会が宣教として福島をどう捉えるのか…
- 6 わたしたち一人一人が福島にどう寄り添えるのか

越山司祭報告

みなさん、こんばんは。

すいません高い所で。顔が見える関係をつくりたいので。どういう表情でしゃべっているかということを見ていただきたく思いましたので。自分では、苦悶に表情が歪んでいるような感じを自分では思っていますが、根は明るく楽天的です。でも、そんなこと言っていられないのが今の状況です。

今わたしは、郡山の聖ペテロ聖パウロ教会の牧師といわきの小名浜聖テモテ教会、ここにテモテベースのボランティアセンターがあります、その両方の牧師をしています。

また郡山では、朝日新聞で一躍有名になりました「ホットスポットにある幼稚園」である、セントポール幼稚園のチャプレンをしています。またもう一つは、いわき小名浜の小名浜聖テモテ幼稚園の園長をしております。歳は65歳になりました。

◆写真は郡山の教会です。ここがですね、今、写真では、草木が生えていますけど、現在はコンクリートになっています。かつて、ここは、6マイクロシーベルトから12マイクロシーベルト（礼拝堂脇草の部分）ありました。ツアーの方々はびっくりして、「早く帰ろう、東京へ」っていうころでした。さきほどの先生によると、東京もかなり降ったらしいですね。東京も大丈夫かなあと思ったんですけども。でもそのぐらい、当時ここは高線量地域でした。



真ん中に見えるのが牧師館で、わたしが住んでいるところです。この当時、室内で0.5～0.7ありました、室内で、です。

そして、影みたいになっているところですけど、ここは台所の裏口になっていますが、ここは針が振り切れました。ですから20マイクロシーベルト以上あったと思われます。で、それでも、何が起きているのかわかりませんでした。

◆この写真は、最初の頃（3月12日～）の水を求めているところです。

これは、小名浜の3月12日の図です。この光景が約1週間続きました。3月12日から3月17, 18日ぐらいまで。毎日、こういう光景が続きました。これ何をしているかっていうと、水を求めている人達です。約1000名以上の方が、朝6時に並んで、もらえるのが午後1時でした。この時、先ほど清水シスターが言いましたように、我々には放射線の線量値ほとんど知らされていませんでした。この時、25マイクロシーベルトから50マイクロシーベルトが、いわきに降り注いでいたんです。この方たちは間もなく脱出する人た



ちです。どこに脱出したかっていうと多くは郡山。20キロ圏、30キロ圏という円が示されましたので、そこにかなりの方が避難して行きました。実はそこは高線量地域でした。

このときに、驚いたのは人間の行動です。わたしはいろんなところでおしゃべりしていますので「もう聞いたよ」って言う方は耳を塞いでください。でも、どうしても言いたいです、すいません。人間の行動の不可思議です。市の広報車が「外に出てはいけません」。「換気扇は止めてください」。「窓は閉め切って」、広報車でガンガン、この周りをです、「皆さん、家に戻ってください」っていうふうに、がなりたてていました。ところが誰一人、その広報車には耳を傾けようとはしませんでした。「何を言ってんだ、水がなかったら生きていけないじゃないか」。その広報車は、「25 マイクロシーベルト降った（10月の市の公報紙で発表）」ということは全く言っていませんでした。ただ「爆発したから、家に戻ってください」。「爆発したって何が？」っていう世界でした。ですから、それが後で災いとなるんです、高線量の放射能が降ってきたということには繋がっていかないんです。で、なぜここに並んだかって言うと、非常事態になったら2000人分の水が地下タンクに保存してあります。そのために、爆発したので水道の水は使えない。保存している井戸水を、電気は停電でしたから、手動ポンプで汲み上げるんです、ポンプは一個しかないんです。一人でせいぜいポリタンクに1個。二つ持っていますけど、やめてくれって怒られます。ほんとに日本人ってつつましいですよ。ほんとに家族のために1個持ったら、あとはもう次の人っていう感じで。だけど5時間並んで、やっとポリタンク1個の水がもらえました。

じつは幼稚園、早く水道が通じたんです。ここに来て言いました、「みなさん、幼稚園の水が出ましたから、どうぞ幼稚園の水道をお使いください」って言ったら、返ってきた答えは「誰がそんな水が飲めるか」って言うのですね、放射能だからって。で、「お前、それ飲んでるのか？」って言うので、「いや、トイレの水にでもどうぞ自由に」って言いましたが、しっぺ返しを受けました。だから、放射能よりも水が大事だったんです。こういう行動をやっぱり人間はしてしまう。放射能のことは5年先、10年先。これからたぶん25年先のことも、ほとんど考えられない。今、目の前にあること、生きなきゃいけないっていうことで、こういうふうに並びました。

これから間もなく小名浜から人がいなくなります。小名浜の人口は16,000人ですけど。富岡の人口は17,000人です。近くに仮設があるんです。ほぼ同じ人口の富岡の人たち、帰れない人たちが、約8か所の仮設に住んでいます。この人口の何十倍も、もう戻れない人たちがいるって、驚くべきことですし、いやぁもう信じられない世界が、これから広がっていったわけです。

- ◆これはスーパー、次の日です。何もありませんでした、当然ですけど。11日の、その震災のときにすぐ行ったんです、5万円持って。あるだけ買おうと思って。これは絶対大変なことになると思って。その時モノがたくさんありました。スーパー、やっているなんて誰も思って



ないんです。ですからモノが溢れていました。で、スーパーの店長は「お金、どうでもいいから持っていけるだけ持っていけ」って言って。そしてワゴン車に詰めるだけ品物をもって帰ってきました。それがあとの、最初の震災支援の原資となりました。粉ミルクとか、ありったけ詰め込んで、もう「5万円しかないからこれで」っていったら、「ああ、いい、いい」って。そういう世界でした。で、まもなく、店頭から物資は無くなりました。多くの人がすごい勢いで押しかけました。

◆これは皆さんが届けてくれた物資の様子です。皆さんに、この場をお借りしてところより感謝いたします。まもなく全国から支援物資が続々と届きました。物資が集められたテモテ幼稚園のホールです。

◆ちょっと飛びますけど。震災からちょうど1年7か月経ちました。

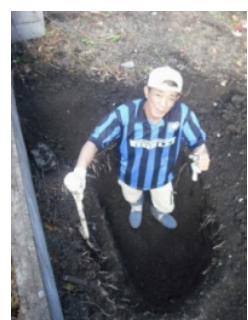
彼は除染のボランティアさんです。彼、50日間、幼稚園と教会、一人で毎日除染をしていました。こういう形で、ずっと除染を続けていました。しかし、今これはしていません。今思うと、とても危険なことをしたっていうことを、反省していますけど、当時は考える余裕はありませんでした。その名残ですね。こういう状態があったということですね、半年ぐらいこれは続きました。9月いっぱいぐらいまで。

◆これ幼稚園の庭です、毎朝と午後3時、二回除染をしていました。ここに白い点がありますけど、ここは市の職員が測る、「線量計測点」と言って、この位置で測られるんですね。このときはまだ高い数値がありました。これ、立教女学院の先生方がボランティアで来てくれた時の写真です。

◆これは小名浜の幼稚園ですけれども。毎週、こうやって線量を測りに、市の職員が来ました。あそこにある遊具は一回も遊んでない遊具です。もうこの時から外には一度も出られない状況が続いています。これ4月に入ってきたんですが、テモテ幼稚園50周年記念のために購入したものです、150万円、最後の虎の子をはたいて買った遊具なんですけども、結局一度もここで遊ばすことができていません。この園庭の土も全部剥がしました。で、10センチ掘って入れ替えました。

◆これは何しているかという、枯葉を埋めるんです。こういう形で我々もしました、穴を掘って枯葉を埋めていきました。

◆これは0.95マイクロシーベルト。これは4月頃の郡山駅前の数値です。ここは今、下がって、0.4とか0.5ですけどね。郡山市内、



だいたいこのぐらいありました。ちなみにですね、ここは皆さん喜んでいただいて結構なんですけど、わたしのこのガイガーカウンターが、いま 0.05 を示していますから、ほとんど平常値に近い。いいですね。

- ◆これは自宅のわたしの部屋です、0.35。これは先月の数字ですね。このぐらいあります、記録としてとっておいたのですけども。家の中でも高線量地域の郡山はこれぐらいあるんです。ちなみに、郡山の人たち 0.35 は低いって言います。0.5 あればちょっと高いかな、って言います。その温度差がひじょうに違う。



- ◆これは、先ほど清水シスターが見せてくれましたけど。同じように放射能が高かったときのお化けチューリップです。こんなでかいチューリップ咲くわけありません。色がすごいきれいでした、鮮血っていいですか。これは毎年植えばなしで。普通、こういうチューリップは、植え替えするんです。そうでないと大きくなるんですけど。これは植え替えするのを忘れていたチューリップ、ところが、もう保護者の方がビックリしていました、「なんなのこのチューリップ！ この大きさは」。

- ◆これも司祭館の庭ですけど。こんな花、咲いたことがありません、一度も。これはどこから飛んできて、一面です。これもほんとに。刈ろうと思いましたが、線量が高いから触れられないんです、保護者会の草取りも今年は中止しました。



- ◆左は6月頃のビワの木です。これから一ヶ月ぐらいしてさらに、ムクムクと毛むくじゃらになったようなビワの木です。これ幹ですけど、普通この位置にはビワの葉は生えません。専門の先生に来てもらいました。これ、カリウムとセシウムをまちがって木が栄養だと思って吸収して、大きくなったとおっしゃいました。実が一個もありません。以前たくさん実がつけたのですが。



- ◆左の写真は正常なビワの木です。これは春ですから葉っぱは茂っていません。しかし場所が変わるともうふさふさと茂っているんです。というのはこの木の下は、当時4マイクロシーベルトありました。これ幼稚園の脇の側溝です、ここが高い数値を示していました。ここは低いですね。明らかに低いところは正常なんです、高いところはこのぐ



らい、お化けビワになっています。子どもたちが「お化け」「お化け」って言っています。「トトロの木」だとも言っていますが、それはちょっと聞いていて辛くなります。

- ◆この写真は、教会の近くに食べ物とか土とか全部測ってくれる放射能計測器です。これが2台導入されました。一台250万ぐらいするんです、いわき市内の教会の牧師さんたちがHelpの援助を得て2台設置しました。これ、簡単に誰でもできるかっていうと、とてもそうではなくて、なぜペットボトルで囲んであるか。周りの放射線が高いところだと誤作動するんです。原発近くの避難されている方が地元産の野菜等を持って来ます、庭のカボチャとかナスとか。ところがこれ、測る以前に放射線量が高いんです。だから測る方も命がけです。保健所に持って行ったら、高いから測ってくれない。「教会の先生だったら測ってくれるだろう」って言って。ですから教会におられる牧師さんの奥様が当番でやっていますが、「わたしも命がけよ」っていう感じで。「いやだ、って言えないじゃないですか」って。顔ひきつって受け取るって言うんです。そういう現実があります。



- ◆これは、ちょっと悲しい現実ですけど、セントポール幼稚園の園児です。今も線量バッチを持っています。これ線量バッチはその時のものを測るのではなくて、被曝線量の合計を出すためのものです。4月からずっと着けています。今わたし、これ持っていますけど、この線量計これは合算計です。郡山の牧師館の玄関にずっと置いてあるんです、12月から置いて現在1.9ミリシーベルトです。ですから半年でもう2ミリシーベルトになっています。彼女は着けてはいますが、数値はわたし達に教えてくれません。



本人以外には教えてくれません。いろんな理由があります。一つはこの子が大人になって、結婚したときに、子どもができなかった？。あの時、あなたは何ミリシーベルトを受けた。もし幼稚園に記録があれば、そういうことを聞かれる恐れがあるのかも知れません。だから幼稚園が当局に聞いても、プライバシーの問題で一切教えてくれません。本人だけにデータが示されるそうです。これは郡山市内の幼稚園、全園児に（小学生もそうですけど）、全員に配られています。いまもこれを着けて登園してきます。ずっとこれは、これからもしばらく。いわき市は無くなりましたが、放射線量が低くなっていますので。子どもたちは無邪気ですけど、これ首にかかってけっこう重いです。でもこれぶら下げて登園して来ます。かつては、マスクを着けて、帽子をかぶって、登園していました（今も）。1年7ヶ月短く駆け足で見てきました。

これからちょっと5,6分で大事なところをお話したいと思います。

レジメにも書いておきました。1年7ヶ月経ちました。郡山は基本的にあまり変わっていません。

園児が70名から今35名になりました。多くの1歳児、2歳児が、郡山から避難していきました。

ここで、皆さん読んだことがあると思うんですが、聖公会新聞の5月号に「子どものいのちを本気で守る」という、『シナモンティをのみながら』という藤井あけみさんの投稿がありました。ちょっと、「何！」って怒るかもわかりませんが、あえて読ませてもらいます。

郡山市(…)はとても高い数値です。なんと放射線管理区域の15倍です。ここに人が住んでいます。子どもが、赤ちゃんが住んでいます。この危険をお父さんやお母さんの立場の人に伝えたいのですが、なかなかうまくいきません。控えめに伝えても「不安を煽らないで」と言われる場合があります。そのくらい汚染地帯に住む人々に放射能の話はタブーのようです。しかし事実は深刻です。これらの地域に子どもを住まわすということは、誤解を恐れずに言えば緩慢な殺人です。

と、書かれていました。

これを見た郡山の人たちはどういう反応をしたか。ほとんど無視でした。騒ぐ人はほとんどいませんでした。「司祭さん、抗議してよ」という程度でした。むしろ抗議する力が湧いてこないんです。胸の奥にズシーンときたと感じました。園長先生が、「司祭さん、わたし達殺人をやっているんでしょうか、幼稚園をやるっていうことは」ということを、ポツって言われたのが、ほんとにその一言が、今も残っています。

先ほどの清水先生が、「たとえ分断、寸断されても何が起こっても、避難を優先すべきだ」という言葉を、とても僕は重く受け止めました。僕もそうかと思うのですが、ここが、これからが、ひじょうに辛いところです。「誰といっしょに歩くのか？ 教会は？ あなたは？」。

最初に五十嵐主教様が、「長谷川司祭と越山司祭から、教会としてはどうなのか。メッセージが語られるでしょう」と、大変なプレッシャーをいただきました。そこでわたしはどう答えればいいのか。清水シスターの話と併せますと、言葉を失ってしまうんです。「教会は何をすべきか」、「教会はどこに立つのか」…。

「そこで行われているのは、幼稚園の保育事業は殺人じゃないか」。片一方で言われる。でも、そう言われても、そこから逃げ出せない人がいる。避難したくても避難できない人たちが今、残っているんです。そして、彼女らは、かつては被害者でした。被害者だったんです。みんなから「たいへんですね」ということで励まされました。でも今はどうでしょうか。「まだ保育園やっているの？ こんな危ないところで」ということも言われたりします。それでも黙って耐えているんです。最近「司祭はどう思うんですか？」という事も聞かれなくなりました。最初の頃は、信徒と幼稚園ともいろいろ議論を重ねました。でも、やっぱり僕は郡山にとどまっているわけです。放射線量が高いので、窓は二重窓にしました。玄関は放射能避けも設置しました。しかし閉め切った中に(外は散歩できませんので)、ずっと室内にいと、人によってはおかしくなってきました。

ところが、ところがですよ。信徒の方たちはそういう条件の中で住んでいるんです、生活

しているんです、何事もなく、普通どおり。「なぜ、司祭さんの奥さんは逃げなきゃいけないの？」と言われても反論はできません。申し訳ありませんと言うしかないのです。最初は好意的でした、司祭さんはあちこち仕事に行っているの、いいだろう。「でも奥さんはずっと中にいるから、やっぱりせめて連れ合いさんだけでも避難させたら」っていう、とっても好意的な話をしてくれます。でもそれは、決して本音ではないと思います、ずっと今でも思うんです。本音は、やっぱり居てほしい。でも「居て下さい」とは言えない。

弱いわたし達、弱い人っていうのは群れをつくり、動物もそうです、群れをつくり、群れをつくり。「絆」という言葉、たくさん出ました。でも、この「絆」は「日本全国の絆」から「福島県の絆」になってきています。福島県だけはせめて手を取り合おうと。だんだん小さくなっていきます。郡山だけでも。「小名浜は放射能ないからいいよねえ」。「わたし達はたいへんだよねえ」。次にもっと小さくなります、この絆っていうの。「教会の信徒、わたし達、もう人生長くないから、わたし達、ここでがんばりましょう」というふうに言います。「司祭さん、ずっと居てくれますか、5年で退職ですね…。ここに骨埋める覚悟はありますか？」なんとも答えようがありません。

で、そのときにはじめて、牧師は聖職者でありますけれども人の子ですから、やっぱり家族の安全も考えてしまいます。とても辛い状況ではあります。

先ほどシスターが言いました。僕は先のお話でとっても勇気づけられました。「どんな状況にあっても、イエス様がやっぱりわたし達を導いてくれる。その方向をまちがってはいけない」というのは、きょう改めて、目からうろこのように思いました。たとえ絆がどんどん小さくなって寸断されても、やっぱり真実をみていかなきゃいけない。そのへんが今ここで、真実はこうだとは言えませんが。でも、今回のキーワードは「いのち」ですね。いのちは何物にも変えられない。わたし達が視点をそこに集中したときに、絆とか何かよりも、「このいのちをどうするんだ」ということを、ちょっと忘れていたような気がするんです。信徒にこう言われたら困る。批判されたら困る。牧師は信徒にいい牧師でなきゃいけない。もちろん僕は思っていますけど？ でも、それよりも大事なものは何かって言うことですね。気づかされました。今「避難しよう」とは決して言えませんが。でも、大事な視点を与えられました。

もう一つ最後に言います。最後の絆ですね。夫婦の絆ですね、親子の絆。ここも今、危うくなっています。先ほど清水シスターが言われました。家族でさえ意見が違う。お父さんが「大丈夫だ」、お母さんは「とんでもない。あなた子どもをどうするのよ」ということですね。そういう会話を家族間でしている。お父さんは福島、家族は郡山。みなさん、どう思いますか？ 皆さんからすると、福島も郡山もそんなに変わらないような気がしますでしょう。でも、当事者にとっては違うんです、微妙に。それぐらい個人的な思いが違うっていうこと。温度差もあります。

教会はどうすべきなのか。残っている人といっしょに歩く。寄り添っていく。当然です。

しかしいつまでその緊張感を持続できるのか。いま郡山では新聞にあるとおり、放射能に関しての話題はほとんどタブーです。保護者会等でも気軽にはできません。「大丈夫です！」って言ったお母さんが、休みになると「キッズベップ」っていう子どもの全天候型の遊園地に、子ども達を連れてやってきます。いま整理券配られる程大人気です。一人一回1時間半、1時間ぐらい待ちます。そこにたくさん子どもが集まっています。「大丈夫だ？」の聲が私には空しく響くのです。

先程長崎大学の山下先生の話が出ました、信じられないことですが関係者の間でこういう話を聞きました。「年間20ミリシーベルト、毎時3.8マイクロシーベルトも1ミリシーベルトも、健康に害はないんだ。大丈夫だと伝えてくれ」って…。でもその次に「先生、ほんとに大丈夫ですか？」って「先生の子供ならどうするんですか？」。と聞くと「いや、少なくとも僕の子供だけは行かしたくないし、福島のを食べさせたくない。それは君、オフレコにしてくれよ」なんて、人の親ですから、当然かもしれません。

じゃ、本当はどうなんでしょう。本当に人を信じられない世界が今、作られています。でも、人間ですから、それもありかなあと思います。でも、わたし達はそういう人までも、そのまま受け入れる、闇の中に居たままですよ。「しゃべられない」。「避難したい」。「助けてくれ」。SOSを発信しています。でもその中で、教会はどうするのか。闇も全部包んだ中で、そのまんま。私のことを100パーセント信じてもらえない。そう思われつつも、やっぱり信徒といっしょにそこに居たい。だから、寄り添う、連れ添う、いっしょに歩く、っていうことは中途半端な気持ちでは出来ないかもしれません。僕にとって今は「いっしょに歩こう！」っていうのは、ほんとに全部を受け入れられるかと自問しつつ揺れています。「あなたなんか信じないよ」「いや、でもいいんだ、いっしょに歩こうよ」。言葉は無いけれども、やっぱり、いっしょにそこに居るっていうこと、しかないと思うんです。

最後にメッセージって言われましたから、一つだけです。

ヨシュア記のエリコの城壁をどうやって落としたか。福島に、放射能対策のための、フクシマプロジェクトができました。でも、どうしていいかわかりません。1年以上、福島をほっておいたんじゃないかっていう意見もありました。でも、どうしたらいいか本当にわからないんです。そのときフト思ったのは旧約のエリコの話ですよ、エリコ。毎日、毎日、神様が「町を一周しなさい」。ぐるぐる、ぐるぐる周ったんですね、6日間。城は落ちませんでした。もうへとへとで耐えられない。最後に7日目にどう言ったかっていうと、「7回周りなさい」っていうんです。そして、雄叫びをあげたときに城壁が崩れて、門が開いて落城していくんです。

わたし達はやっぱり、イエスと共に歩く、とにかく歩き続ける。いっしょに歩く！歩き続ける。何か分からないけど、「歩け」って言われているんですから、やっぱり。ぐるぐるぐるぐる歩いています。でも、まだまだ町を一周し、7日間エリコの城壁を落とすような歩きは足りないんじゃないか。そして、あきらめない。そして最後まで歩き続ける。そこに希望が開けてくるのかなあ、というふうに思っています。

ぜひどうぞ皆さんに、福島のことを忘れないでいただきたい。やっぱり辛いけど辛いと言えない。「元気ですよ！」って答えている。みんなそう言っています、郡山の人たちは。でも、けして元気ではありません。とっても辛く、顔に書いてあります。ですから、ここで上がったのは、やっぱり表情を見て、人間の思いは、顔じゃ笑っているんですけど、ここではやっぱり辛い。そういう思いを。ぜひ見える形でお祈りくださればほんとにありがたいと思います。どうぞ、闇の中にあるそのままを包んでいただきたいと思います。まだまだこれからだと思います。

ちょっと時間オーバーしましたが、終わりたいと思います。ありがとうございました。



8 バイブルシェアリング

わたしたちは何者で 何をすべき存在であるのか
～神との関わりの中で問いかけに答える～



司祭 マリア・グレース 笹森田鶴

≡ レジメ

I はじめに

1995年の日本聖公会宣教協議会（以下95年宣教協議会）の開催は、第30回聖公会神学院臨床牧会訓練での差別発言によって日本聖公会が問われたことがきっかけであったと理解する。「あなたはどこに立っているのか、どのような福音理解を持つのか」と、同じ信仰者として問われた。その応答としての日本聖公会の自己表明を試みたのが95年宣教協議会であった。

だからこそ95年宣教協議会では、第2次世界大戦前後の歴史認識の再確認が中心となり、現在の教会の課題と同時に、使命やビジョンが語られた。さらに日本聖公会という信仰共同体が新しい姿へと変革させられる道筋が期待された。

2012年の現在、95年宣教協議会で出した答えに応答してきたこと、応答しきれなかったことがある。この度の宣教協議会に連なるわたしたちも、95年宣教協議会との連続と非連続の中で、「あなたはどこに立っているのか、どのような福音理解を持つのか」と問われている。この問いに、現時点で応答しなおすことが求められていると考える。

また、東日本大震災という大きな痛みと悲しみの経験を通して、社会の中での教会の存在意義や行き先、そして神の意思は何かという大きな問いにわたしたちはぶつかり、苦悶している。

そこで、天地創造物語に関する聖書のメッセージの考察をきっかけに、自分たちが何者であるかを確認し、そこから宣教する共同体の原点を思い巡らす時間としたい。宣教する共同体のなすべきことを探り、今この地にて求められる神からの使命・目指す地点を探る。

II ふたつの天地創造物語の並列

1章、2章の天地創造の聖書箇所は、歴史書でも科学的根拠の記述でも、単なる神話でもない。神がはじめに何をされようとしたのか、神が何を存在させようとしたのか、その意味は何かを記すものである。イスラエルの民の原点は出エジプトの出来事であり、天地創造、族長たちの物語はすべて、イスラエルの民を力強く救った神の出来事へとつながっている。イスラエルのすべての歴史的な出来事は、「神は救ってくださるお方である」という事へ突き進んでおり、信仰告白にも明記されている（申命 26:5 - 10）。また過去は過去のみの出来事ではな

く、神の救いの歴史は当然現在も起っており、将来も起こりうるという、歴史を司る神への信仰が底辺に流れ続けている。

天地創造が過去起きたように、神の知恵による創造の業は今も継続されている。出エジプトの出来事を引き起こし、さらに今もこの宇宙のすべてを造り続ける創造の業として、また将来も継続している神の業としてつながっているという信仰が前提としてある。神の時のはじめから、神は救いの出来事を起こすために、神の秩序を形成した。それは、神の創造の業は、神が宇宙のすべてのものと関わり合っていること、いこうとしていることのしるしでもある。そして、神こそが創造主であり、被造物は神ではないこと、世界は神によってのみ命を与えられることを示された。

二つの天地物語は、神の業の奥深さ、幅広さを表現するために、互いに補完しあう形で、しかも当然ながら、矛盾をはらみながら並列されている。出エジプトの物語のように二つの資料をひとつの物語に編集するのではなく、あくまでも二つの別の視点で紡がれた物語を併記していることに意味があるのではないか。この並列の意味を思い巡らしたい。

1. 創世記 1 : 1 – 2 : 4 a

紀元前 500 年頃のバビロン捕囚期もしくは捕囚以降
祭司資料・祭司的編集資料 (P)

2. 創世記 2 : 4 b – 2 5

紀元前 950 年頃のダビデ・ソロモンの統一王国の時代に編纂されたもの
ヤハウエスト資料 (J)

Ⅲ 天地創造の物語 1

創世記 1 章は、神の秩序形成への賛美とも言える。神のみが主権をもち、世界は深い大水によって覆われ、混沌—荒れてむなしく暗黒の世界—であった。それがひとつ深淵を秩序付け、空と海と分けられた。そのように、神は混沌からもこの世界をお造りくださった。

また神は、神の像—王として—に似せて人間を造られた。そして人間以外の命も造り、祝福された。

神の命令；

治める (ラーダー מַלְכָּה) 王に関して用いられる言葉。

すべての人間が王として、神の代理として、神の意志を代行する。

他の被造物より人間が明らかに区別され、被造物でありながらもその中での優位性を保持する。

そして人間は世界の中で、植物・動物と共存して生きる様子が描かれている。

「産めよ、増えよ、地に満ちよ」という言葉によって、将来に亘っての、一回に終わることのない継続的な神の働きを示された。そして神の秩序が一つずつ実現していくことを、神は「よし」とされた。

バビロン捕囚という国家の破綻のただ中であって、イスラエルの民の絶望と敵による抑圧の苦しみのただ中で、混沌からも神はその知恵—言葉—によって秩序を形成され、今も形成し続けておられるという信仰を確立していく。そこでは神の似姿に造られた人間が他の被造物よりも優れた立場で、神の業を遂行していくことこそ、人間の使命であることが強調されている。

→洪水物語と虹の約束へと続く物語 破局と再創造 しかし、二度としないという約束。約束は被造物全体と結ばれる。

IV 天地創造の物語 2

創世記2章では、はじめに世界は荒野であり、耕す条件（雨や耕す人）もなかったことが記される。人間（アダム）は土を耕す者として、土（アダマー）のちりから造られた。これは人間が大地の一部であり、死ぬとちりにかえるもの（3:19）と言う表現と相まって、自然の循環の中に存在することを示す。野の獣も空の鳥も土から造られる。

ただし、人間には神の息（霊、風）が吹き入れられ、動物への命名権や特別なパートナーシップが与えられていることから、動物よりも優位にある。さらに見ることと、食べることの自由と制限が加えられる。→神との約束

「人をエデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。」(2:15)

→人間は農耕に従事するものとなる。

人間は本来、エデンの園で果樹園を耕し、大地を守る使命が神によって与えられている。

神の命令；

耕す（アーバド **אָבַד**）：①働く、仕事をする ②奉仕する ③神に仕える、礼拝する

しかし、人間はその自由と使命を逸脱し、神に取って代わろうとした。それが神との関係の破れとなり、園から追放される。

本来人間は、ふさわしい助け手と共に、神のために大地に仕えて働くもの。ひいてはそれが神に仕えることとなるという人間理解が前提にある、パレスチナの農民の生活を基盤にした物語。

安定した農耕文化・生活様式の中で、神より賜る恵みの中で生活し、労働することの喜びが強調されている。

また、ある程度の安定した生活を得た時、イスラエルの歴史に起った出来事が、実はイスラエルのみに限定されるものではなく、すべての被造物全体に神が働いておられ、すべての被

造物を神が支えてくださっていると考えるようになった。この神の出来事は、すべての人にとっての天地創造である。イスラエルの民への救い、そして全世界への救いの出来事は、あの天地を造られた神のなされたことであり、神の主権は世界に広がる可能性をもつという認識が拡大していった。

V 最初の天地創造物語から多様さを抱えた人間の旅—被造物の使命

モーセ五書の編纂は、捕囚期以後、紀元前4世紀前半と言われている。P資料よりも後代に創世記は編纂されている。P資料の後にJ資料を配置した最初の物語を通して、編纂者は神の救いの歴史の広がりや原初史において示そうとした。

1章において、混沌の中においても神は大水を分けられ、世界を神の意志によって意味づけ、2章において、荒れ果てた大地においても、必要な水と耕す（仕える）人を配置し、天地を豊かに実らせてくださるといった確信を提示している。

また、神と人間が自然と対峙しようと、神が人間と自然に対峙しようが、人間が被造物であることには変わりなく、人間は神によって救われるということと、神が被造物を創造したことや創造者によって天地は支えられているということは切り離せないものと受け止められている。

しかし一方的に「治める」のではなく、また命名権があるので何をしても良いわけでもなく、ただ人間は神によって造られ、他の被造物の命も神によって支えられる中で、神の命令の下に生きる存在であることを二つの時代の物語はそれぞれに語っている。

人間は、この二つの物語での使命（大地を治め、同時に仕える）を両立させることが求められる。

→責任を果たすリーダーシップを取り、尚且つ被造物のひとつの存在であるという謙遜さを兼ね備えているもの。

また、人間は知恵を与えられ、神の使命を果たすべき存在として命を神よりいただいた。

①混沌の中から世界を造られた神の意志を現在の世界に取り戻す使命

②すべての被造物と調和の中で生き、大地の中で互いに豊かに支え合い、神の新しい世界・新しい国の創造へと向かっていく使命

VII 創造の業の継続

あの天地創造は、今も行われているという連続の歴史観をイスラエルの民は持つ。神が現在においても、世界をそのご意志によって造り続けていらっしゃる事への確信と期待（イザヤ 41:17-20,42:9,43:19）は、今も全世界へ祝福と救いを神がもたらしてくださっていることでもある。

その後に登場するすべての被造物も、神の秩序によって命が与えられるという意味を持つ。

さらに、「新しい天と新しい地」（イザヤ 65:17,66:2）についての預言は、未来に向かって

神のみ業が継続されることを示す。さらに新しい世界観を広げていく（イザヤ 11:6-9）。イスラエルの民は、神の天地創造の業、また被造物全体への配慮と苦悩と希望の業を繰り返し思い起こす。

<ヨブ記 38:1-17 の神の言葉>

「なぜ」を繰り返しながら人間が被造物のひとつに過ぎないことをしるヨブ。
一方、神はヨブの苦悩に共感しながらも、被造物との距離と区別を宣言する。

キリストによって、わたしたちにはさらに新しい天地のビジョンが与えられている。キリストの言葉と行いに示されている神の国が新しい天地として与えられ、キリストの弟子としてそこへ向かってわたしたちは旅立つ。宣教する共同体として、しなければならないことは、神が造り続けておられる新しい天地の創造の業に参与し続けること。この世での神の国の実現というビジョンに向かって歩み続けること。すべての教会の営みや課題は、この一点に向かっている。

「み国が来ますように み心が行われるとおりに地にも行われますように」

教会の営みの中心である、礼拝や牧会(教会内部だけではなく、地域社会に対して)のすべては、新しい創造への道、この地における神の国の実現につながらなければならない。

具体的な課題や現状に嘆きながらも、神は、常に被造物への配慮を賜り、新しい創造を行われる。そしてキリストは、天地が造られる前から神と共にいまし、見えない神の姿として（コロサイ 1:15）この地上に住まわれ、常に周囲の人々、ことに周縁に追いやられている人々への配慮をもって行動された。他者のために生き、他者のために自らを献げ尽くすことで成就される何かをわたしたちの前に示してくださった。それが新しい創造であり、新しい歴史の始まりである。

混沌の中から世界に秩序を造られた神の秩序を取り戻し、荒野となっても必要なものが与えられることを確信し、絶望の中にあっても救いは起るといふ歴史認識を共有する。

キリストが示された新しい天地を喜び、すべての被造物と共にうめき、共に産みの苦しみを味わいながらも、神のこどもたちの栄光に輝く自由を希望として歩む。（ローマ 8:21 以下）

「我」と「汝」の関係だけに留まらず、創造されたすべてのものが、わたしたちの兄弟姉妹として共にあるという感覚を回復していくことは、この日本の中で宣教に従事するわたしたちには重要なこととなっていくであろう。それは、パレスチナという厳しい自然の中で培われた、神とこの世界との関係とそうかけ離れている訳ではない。日本は決して穏やかな自然とは言えない。

Ⅶ 問への応え

「あなたはどこに立っているのか、どのような福音理解をしているのか」
 「あなたの十字架はあなたが負う」のか

キリストの十字架は、キリストご自身の課題ではなく、すべての人の罪のため
 キリストは他の人の課題や痛みや悲しみを負ってくださった
 それが新しい天地、新しい神の国での被造物の姿

わたしたちも自分の生きている地において、神さまが出会わせてくださった一人一人の、それは教会内外を問わず出会う人々の、課題や痛みや悲しみを共に背負っていきたくらいと願い、それぞれの場所で丁寧にひとつずつ実行していくことが、新しい創造の業へ奉仕していくこととなる。

過去と将来のはざまにあって、ビジョンと現実のはざまにあって、矛盾を抱えながら多面的な視野によって、また神学的にも違う立場によって、互いに補完し合う共同体へと成長していきたくらい。

イスラエルの民が繰り返し神の業と歴史を思い起こしたように、わたしたちも互いに新しい天と地のビジョンを思い起こし合うことが大切であり、それらが共有、確信される時、わたしたちはキリストの呼びかけに従って生きていく力を見いだすことができると願う。

「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。…神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」(ヨハネ黙示録 21:1,3-4)

<参考文献>

- 柏井宣夫『旧約聖書における創造と救い』日本基督教団出版局、1990
- 荒井献『聖書のなかの差別と共生』岩波書店、1999
- B.W. アンダーソン『新しい創造の神学—創造信仰の再発見』教文館、2001
- 富坂キリスト教センター編『エコロジーとキリスト教』新教出版社、1993
- 大河原礼三『聖書におけるエコロジーと人権』不二出版、1999



最初に、ご一緒に聖歌を歌いたいのですけれども。聖歌集、お持ちでしょうか？
570番です。座ったままでどうぞ。

主こそ まことの救い 永遠の喜び
わが力 わが歌 主 のみを信じて 決して恐れない

祈りましょう。

わたしたちを教えるために聖書を記させられた主よ、どうかこれを聞き、これを読み、心を込めて学び、深く味わって魂の養いとさせてください。また、み言葉によって強められ、耐え忍ぶことを習い、み子によって授けてくださった限りない命の望みを抱き、常にこれを保つことができますように、み子イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン

バイブルシェアリングに入ります前に、少し自己紹介を兼ねて、皆さまにお礼を申し上げたいと思っております。

わたくしは東京教区の聖アンデレ教会の牧師をしております。もう一つ、小笠原聖ジョージ教会という小笠原の父島にございます、小さな教会の管理牧師をさせていただいております。たぶん、日本一離れた教会を持たせていただいていると思いますが、東京から1000キロ離れている小笠原です。そして小笠原の歴史というのは、沖縄のことについては皆さま聞かれたこと、それから何か読まれたこと、沖縄に行って知ることってというのが、おありだと思うんですけれども、小笠原も戦争によって、ひじょうに島民の一人ひとりがその生活を変化させられ、そしてその度に苦しい思いを経験した、そういう島の人たちがいます。特に小笠原聖ジョージ教会には、旧島民と呼ばれる昔からの方々が生きています。その方々は日本の名前に、いわゆる創氏改名させられ、もともとの名前に当てはまらないので、まったく違う日本の名前を苗字にされたり、それから東京に移り住まわされたり、また基地がそこにできるからといって、その周辺には人がいないと不便だからといってまた戻されたりというような、そういう歴史を抱えている、それをずっと見続けてきたのが小笠原の教会です。そして、その旧島民の方を中心とした教会形成を小笠原聖ジョージ教会はしております。その小笠原聖ジョージ教会の土地を、お向かいの土地ですけれども、道路に直接面していなかったため、今まで誰も使っていなかったため勝手に使っていたんですけれども、そこはじつは、別の方の土地で、やはりそこをそのままほっとくわけにはいかないであろうと。そこが特に世界遺産になった後、いろんな方々が島に入りたくて願うようになっておりましたので、そこをきちっと確保しておかないと、道路に面しないことになってしまいますので、今後、礼拝堂を建てなすとか、いろんなことが起こったときに、できなくなるということが分かっていたので、何とか手に入れたいけれども、小笠原の現在受聖餐者9名だけの交わりではなかなかうまくいかないということで、大齋克己献金の国内伝道強化資金の計画として、候補に挙

げさせていただきまして、そして認められ、皆さまの大斎克己献金、貴重な大斎克己献金から献金をいただきました。ほんとにそのことについて、小笠原の一人ひとりの信徒の方たちは心から喜んでいきます。「遠い、こおんな遠い島の、しかも、こんな小さな島のことを、日本中の教会の方々が覚えて祈って、そしてそのために献金してくれる」って。「もっと頑張らなくちゃ!」、「自分たちも頑張らなきゃ!」。とても励まされるっていうふうに、皆で言っておりました。そのことのお礼を、きょうは皆さまにお伝えしたいと思って、全国の皆さまにどうぞお伝えください。小笠原聖ジョージ教会、頑張ります。現在受聖餐者9名ですが、礼拝の平均が14名ほどになっています。これから先の様々なこと、困難もたくさんありますけれども、ほんとにできること、小笠原でできることを一生懸命やっていきたいっていうふうに、皆さん頑張っておりますので、どうぞよろしくお願ひします。そしてほんとに心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

本題に入りたいと思いますが。

きょうはバイブルシェアリングということで、担当するようにと申しつかりました。ずっと、何をどういうふうにしたらいいのだろうか、ということをお悩みましたし、またこれだけいろんな方々が集まる中で、何でよりもよってわたくしがするのだろうか、今でも胃が痛いんですけれども。それはじつは150人以上の方が目の前にいるから胃が痛いというわけではなく、たとえばこれが教会の聖研の例えば10数名であっても、わたくしはじつは胃が痛く、人前で話をするのとモノを書くことが最も苦手な者ですから。すいません、頑張っている時間を過ごしたいと思いますが、皆さんにできるだけお伝えしたいと思っておりますが、分かり辛いこととか、間違っていることとか、いろいろご指摘いただきたいというふうに思っています。そして、わたしにいただいている時間は、皆さまのグループ討議も含めて1時間半となっておりますので、なるべく前半30分少しぐらいのお話をさせていただいて、その後皆さまの、グループの分かち合いの時間を持ちたいと思っております。

取り上げたいと思っている箇所は、創世記の1章と2章のところが主です。ですから、皆さまちょうどその辺りを開いて、分かり易く、一番最初の頁とその次の頁ぐらいとなっておりますので、見ていただければと思っています。

I はじめに

「はじめに」のところにも書きましたけれども。この宣教協議会が行われる前に、1995年に宣教協議会が開催されました。それはもう皆さま、何度もすでに聞いていらっしゃることで。そのきっかけは何だったのだろうか。もちろん総会で決議されたということであるのに、福音伝道の10年だったということもありますけれども。わたしたちの中で、日本聖公会の宣教協議会を開催しようというふうに思ったきっかけは、これはいろんなことがあるかもしれないけど、大きなきっかけは、わたしは「第30回PCT差別発言問題」ではなかったかというふうに思っております。その差別発言があったことによって、日本聖公会が同じ信仰者から、「あなたは、どこに立っているのか」「あなたはどのような福音理解をしているのか」ということを、問われました。それは在日韓国人のある神学生が臨床牧会訓練に参加してい

て、そしてその時に説教をされるのですけれども、その説教が「神にかえる」という説教で、そしてご自分の歴史について、自分史について語っていらした内容の説教をされたのですが。そのことについて、当時のスーパーバイザーの一人から、「それは、きょうの礼拝の方たちに届くメッセージだっただろうか」と。「あなたは、自分の十字架は自分で負わなければならないんだ」という発言をされた、ということから発していることです。その「あなたは、自分の十字架は自分で背負うんだ。そういうふうに聖書に書いてある」と言われたということによって、「あなたはどこに立っているのでしょうか？」「あなたの福音理解はどういうことなんでしょうか？」という質問が出たと思います。その応答として、そのことに応えたいということが、95年の宣教協議会のきっかけであったというふうに思います。だからこそ、95年宣教協議会では第二次世界大戦前からの歴史認識の再確認というのが、ひじょうに重要な項目になりました。そして、「現在の教会の課題は何か」「使命やビジョンは何か」。まさに自分たちはどこに立っていて、どこに向かおうとしているのか。そういう内容が語られたと思います。当時の宣言文であるとか、戦争責任についての告白などは、そういう今までの歴史認識をどう持ち、そしてそのことのゆえに、今後日本聖公会がどう生きていこうとしているのかのこのことの表明であったというふうに思います。だから、この信仰共同体が、何か、そこから新しい姿へと変革させられていく、変革していく、そういう道筋が期待されていたと思います。

もちろん基調講演にもあったように、できたこと、できなかったこと、いろいろあります。だからこそ、あの時間われたことについて、95年の時だけではなく今も、わたしたちは現時点で「あなたはどこに立っているのか」「どのような福音理解を持つのだ」という問いに、応えていかなければいけないのではないかとというふうに思っています。

また同時に、東日本大震災という大きな大きな出来事がありました。わたくしは福島県の小名浜で生まれて、その後は青森県の弘前、岩手県の盛岡、仙台というふうに住んでいましたので、ほんとうにあの出来事は、自分の故郷に何が起こったのだというような、愕然とした思いだったわけですけれども。そういう状況の中で、「いっしょに歩こう！プロジェクト」が始動し始めて、そして活動している。社会の中での、教会のすべきことは何かっていうことを、ほんとうに皆さんが走りながら考えているというような、そういうことを目の当たりにさせていただいて、「神様はいったい何をお考えで、わたしたちをどこに連れて行こうとしているのか」という、そういう大きな問いにもぶつかっているという、そしてそこでひじょうに苦悶しているというふうに思っています。

それで、95年の宣教協議会のときから今に至るまでの、もちろんできたことできなかったこともさることながら、95年に立とうとした時点よりも、もうちょっと長いスパンで、天地創造のときからの、今に至るわたしたちというようなことを少し概観しながら、ご一緒に思い巡らしをする時間になるといいなというふうに思っております。

II ふたつの天地創造物語の並列

さて、皆さんご存知のように、天地創造の物語は二つあります。前半1章、そして後半が2章の途中から始まる物語です。資料も違いますし、それからその時代も違います。しかし

なぜか二つ併記されています。出エジプトの出来事というのは、あの記事も二つの資料から成っています。ところが二つの資料を、こっちの資料とこっちの資料をうまいこと噛み合わせて、そして一つの物語に作っています。ですからその二つの資料を色分けして、例えば赤なら赤、青なら青というふうに色分けして、青だけ読んでも一つの物語になる、赤だけ読んでも一つの物語になる。そういう編纂の仕方を出エジプトの出来事はしていますが、なぜか天地創造については二つ併記している。明らかに違う立場で、違う時代であるから、それはちょっと難しかったのかもしれないけれども、二つ並べることによって、その対比を持たせて、そこに意味を何か持たせているんじゃないだろうか、というふうに考えました。

もう一つ前提になっていることと言いますと。創世記の出来事は天地創造ですから「初め」なわけですが、イスラエルの歴史観というのは、出エジプトから始まっています。出エジプトの出来事がまずあって、そこからすべての時代を観ようとしています。ですから出エジプトの、あのエジプトの土地で奴隷としていたイスラエルの人々が、神によってその苦しみや悲しみや声にもならない叫び声を聴いてもらって、その神によって脱出させてもらった、救ってもらった。そして40年の旅を経て、約束された土地にまで導き入れてもらった。その出来事がすべての始まり。イスラエルの民とそして神との始まりであるという、そういう歴史認識を持っています。「神は救ってくださるお方だ。あんなに大変なときでも、救ってくださるお方だ。ああいう状況の中においても、見出してくださるお方だ」。それをベースにして、他のことについて考察していたときに、その救いの歴史の中で、初めにはこういうことがあったらと、あった、ということを書いているのが天地創造の物語です。

ですから、最初から最後まで、いわゆるバベルの塔の物語もノアの洪水の物語も、単なる神話でもそして歴史的事実でもなく、それは、「神は救ってくださる」という信仰的な物語なんです。「神は救ってくださる」。イスラエルの神は力強く救ってくださる。イスラエルに関わるすべての歴史は、神がそここのところにいつも一緒にいてくださる。歴史を司る神への信仰というものが底辺に流れています。

ですから、あのとき起こったことは今も起こるだろうし、将来に向けても必ず起こる。わたしたちは感覚で、過去というと、自分が立って後ろにあるのが過去で、現時点がここで、前が未来、将来というような時間の感覚を持っていると思いますけれども。イスラエルの人の、特に旧約の民の時間の感覚というのは、目の前に、過去も現在も未来も一緒にあるのだ。それはすべて神のなさることだ。神が救ってくれた一つひとつの時間であると。そういうことをベースにしています。

ですから天地創造のことも、二つの立場から、それぞれの。1章の天地創造と2章の天地創造の物語と二つありますけれども、いずれにしても、天地創造がかつてあったのと同じように、今も、そして未来も、神はその業をし続けて下さるお方だという前提があります。その、神が歴史にかかわってくださるということは、神は一人ひとりの生活や思いや、それらすべてとかかわってくださっている。神が歴史を司るとするのは、何か遠い所で何かをして下さると、采配を振るうというのではなく、その場において、共にある神、ということです。

二つの天地創造物語が並列されているということは、その救いの歴史の最初の部分を、なるべく一つにまとめずに、逆に二つ並べることによって、幅広さであるとか奥深さであるとか、

そういうものを示そうと、互いに補完し合う形で、しかも当然、矛盾を持ちつつも、矛盾よりも、神の業の奥深さを伝えようとしたのではないかというふうに思います。創世記の1章1節から2章の4節aまでは、紀元前500年頃のバビロン捕囚期かもしくは捕囚以降と言われていいます。その頃に書かれたもの。そして創世記の2章4節bから25節までは紀元前950年頃のダビデ・ソロモンの統一王国の時代に編纂されたもの。つまり創世記2章の方が古いものですね、時代的には逆に配置しているということになります。

さてちょっと一個ずつ見ていきたいんですが、なるべく簡単に簡潔に見ていきます。

天地創造の物語 1

創世記1章。これは眺めてご覧になると、皆さんよくご存じの箇所だと思います。一日一日、神が秩序形成をされていく、そのことについての賛美だととれる箇所です。神様だけが主権を持っている。天地創造の前、世界は深い大水によって覆われていました。深淵というのは、深い淵というのは大水のことです。そして混沌でありました。荒れてむなしく暗黒の世界でした。それが、神様のことば一つひとつによって、分けられて、整理されていきます。秩序立てられていきます。空と海を分けるとか、昼と夜を分けるとか、秩序立てられていって、そのように一つひとつ、神様は大水で覆われ混沌としているところから世界を造られた。

人間も造りました。神の像に似せて、王として、銘を人間にうってくださった。そして人間以外の命ももちろん造り、祝福されます。

そして神様は人間にお命じになりました。「治めなさい」、「治めなさい」(ラーダー)。この言葉は王に関して用いられる言葉です。すべての人間が王として、つまり神の代理者として、神の意思を代行するものとして、このように造られます。

王様というのは、とても偉い人とか、何でもできる人とか、自分の領地なり領土を持っているという理解ではなく、古代の王というのは、神の意図をきちんと人々に伝え、そして実行することで、その土地を治めていく人のことです。

ですから、治めるといのは、ひじょうに、他の被造物よりも優位性が強いですが、あくまでもそれは、神の代理として行われることです。

そして人間は世界の中でそのように造られた。世界の中で植物や動物と共存して生きていきます。「産めよ、増えよ、地に満ちよ」。先のことまで神様は約束してください。一回こっきりの天地創造ではなく、将来にわたってのできごとです。そういう継続的な神の働きを示され、一つずつ、神様の秩序が実現していくことを、神様は「良し」とされます。

内容的にはそういう物語ですが、この物語の背景はバビロン捕囚期の影響がひじょうに強いです。国家は破たんしていました。強い国に負けて、主だった人たちは敵国の都市のバビロンに連れていかれていた時代です。そこではまさに、名前も変えられ、言葉も宗教もすべてバビロニア流じゃないとだめだった生活を何十年と過ごします。

イスラエルの民は、長ければ長いほど、どんどんどんそれが絶望、抑圧のようなものが重くのしかかって、苦しい状況だったと思います。大水に覆われ混沌であった。まさにその中に人々はいたと思います。けれども、そういう大水に覆われて息もできない混沌であっ

た世界からも、神はご自分の天地を、その知恵によって造られ、今もそれをなし続けておられる。そういう信仰を、当時の人びとは確立していきます。だからこそ、苦しかった、一番しんどい思いをしている人間は、神に選ばれてこの地を治めて王になっていく。そういう表現がとられていくのは、ひじょうに自然なことだったというふうに思います。神の似姿に造られた人間が、他の被造物よりも優れた立場で、神の業を代理して遂行していく。それこそ人間の使命。「治めなさい」「治めなさい」。王として、神の意思を代行していきなさい。そういう命令が、使命が人間には与えられたのが天地創造の物語の一つ目です。

天地創造の物語 2

二つ目。創世記 2 章には、はじめに世界は荒野でした、荒地でした。耕す条件はそろっていませんでした。そこに、雨や耕す人を神は配置されます。人間（アダム）は土を耕すものとして、土（アダマー）のちりから造られます。これは人間と大地の、ものすごい強い関係を示していると思います。人間は死ぬとちりにかえる。その表現と相まって、大地と人間、自然の循環の中に人間が存在すること。そのことが 2 章のほうには示されます。

野の獣も空の鳥も土から造られます。けれども人間には神の息が吹きいれられて、動物の名前をつけるという、これもある種の優位性ではありますけれども、そういうことの権利や、それから特別なパートナーシップを持って、つまり誰かと真剣にかかわりあいながら生きる。そういう、関係の中に生きるものであることが、神様から与えられます。動物より確かに優位です。さらに、見ることや食べることなどの楽しみも神様は与えてくださいました。自由がありました。同時に制限もありました。「あれとあれは食べてはいけない」、制限がありました。神様との約束があり、神様は人をエデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようになされた。人間は農耕に従事する者となります。人間はエデンの園で果樹園を耕し、大地を守る使命が、神様によって与えられます。この耕す（アバド）、これは働くとか、仕事をやる。その他に奉仕する。神に仕える。転じて礼拝するという訳をあてられる言葉です。耕すことは仕えることでした。土を耕しなさいということは、土に仕えなさいと訳せる言葉です。しかし人間は、せっかく与えられたその楽しみを、見たり食べたりする楽しみ、そして自由、制限はあるけれど自由、そこを逸脱して、しかも使命を逸脱して、神にとってかわろうとしました。そして関係が破れ、園から追放されます。けれども追放される時も、神は人間に必要なものを与えて追放します。

本来、人間は、自分と自分にとってふさわしい助け手と一緒に、神のために大地に仕えて働くものでした。それがひいては神に仕えるという、そういう人間理解が、この天地創造の物語には前提としてあります。

パレスチナの農民の生活を基盤にした物語です。そして、さっき申し上げたように、ダビデ・ソロモン統一王国の時代という、ひじょうに国家としては安定した国家のときです。そういう農耕文化や生活様式の中で、神からいただく恵みの中で、労働することの喜びや、その使命が強調されています。

そしてもう一つ、それは 1 章でも言えることですが、どこかで、神は「天地を創造された」、「人を創造された」と書きますが、「イスラエル人を創造した」とは書かなかった。

どこかで、これは全世界にもつながる出来事だという感覚を、認識を持っていたとも言えると思います。

最初の天地創造物語から多様さを抱えた人間の旅—被造物の使命

さて、先ほど申し上げたように、1章の資料と2章の資料。2章の方が古い。けれども1章の方が前に来ている。しかもそれらをそのように配置したのはさらに新しい時代です。紀元前4世紀前半と言われています。この二つの物語を配置したのは1章の物語の資料に近いグループでした。だから当然それは、1章が先に来ると言えばそうなのですけれども、それでおしまいにせずに、この2章を入れることによって、1章は「治める」という、ひじょうに、人間のやるべきことが他の自然とは違う存在だということを示すものであり、2章はどちらかと言うと、それは確かに違うけれども、どこかで大地と共にある人間の姿というのが、対比的にあると思います。それを並べることによって、天地創造の意図。最初の頃から、わたしたちは様々な意図を持って造られているということを示していたのではないかという。そして1章においては、混沌の中においても神は大水を分けられ、神の意志によって世界を意味づけていったこと。2章では荒れ果てた大地においても、必要な水と耕す人、仕える人を配置して、天地を豊かに実らせてくださるといふ確信を提示しているのが、この天地創造の物語でないかと思います。

わたくしはこの大水という言葉に出会うときに、津波のことを思い出しました。そして荒れた土地、必要な水が無く耕す人もいない大地と言われたときに、そういう言葉に出会ったときに、津波のあとの荒れ果てた田畑や人々の生活の跡の土地を思い出しました。それらの、混沌であろうが深淵が、地を覆ってしようが、荒れ果てた大地であろうが、神は人間をそれらの土地の中に、人間のために天地を造ったのではなく、神の意思をそこに示すために配置され、そして二つの物語で二つの使命、「大地を治めること」と同時に「仕えること」という二つの使命を与えてくださった。責任を果たすリーダーシップをとること。なおかつ、被造物の一つとして存在しているという謙遜さを兼ね備えること。それらを、この二つの物語はわたしたちに教えてくださっているのではないかというふうに思いました。

人間は知恵を与えられて、神の使命を果たすべき存在として命を神からいただいています。混沌の中から世界を造られた神の意思を現在の世界に取り戻す使命があります。すべての被造物と調和の中で生き、大地の中で互いに豊かに支え合い、新しい神の世界・新しい国の創造へと向かっていく使命があります。

創造の業の継続

これらの、最初に起こったことは、過去に起こったことは、今にも起こり、そして未来にも起こる。その信仰の中で、預言者たちは「新しい天と地」のイメージを持つことになります。ここにイザヤ書のいくつか書いてあるところがありますので、どうぞのちほどご覧ください。

そして、新しい天と地を期待しながら、イスラエルの民はその新しい天と地が与えられることに向かって、かつてあった神の天地創造の業、そしてまた被造物全体への配慮と苦悩と希望の業を、繰り返し、繰り返し思い起こします。きょう奇しくも、ヨブ記の38章1～17節、

朝の聖餐式のときに読まれました。これは朝の日課のほうの旧約でしたけれども。ヨブは「なぜ、なぜ私にこんなことが起こるのか」。「なぜ」っていうことを、ずっと疑問をぶつけていくわけですが、最終的に神が、「あなたは何者か」。創造主と被造物というのは全く違うのだということを、神の経緯を隠すものはいったい誰だというわけですが、神はただ単にそこに線引きをしたというだけではなく、ヨブの苦悩に共感しながら、被造物との距離をもちろんおきながら、おきながらも、ご自分の創造の業の中で、今も生みの苦しみをされている、ご自分の思いというものをヨブにぶつけたのではないかなというふうに思います。

わたしたちはさらに、さらに旧約の預言者の言葉、また詩編の中に出てくる希望を超えて、主イエスさまによって新しい天地のビジョンが、希望が与えられている。それは何かというと、キリストの言葉と行いに示されている神の国の実現です。それは過去にあったことだけでも、今あることだけでも、未来に起こることだけでもなく、それらをすべて統合して、しかも空間を超えて、起こりうる神の国。キリストの弟子は神の国の実現をめざすのだ。それはこういう生き方だ。ということ、主イエス様はご自身の人生を通して教えてくださった。ですからわたしたちは、その主イエス様の教えてくださった国を、新しい天と地だという、ひじょうに具体的にイメージを持ってそこに向かっていくのです。わたしたちの教会の営みとか課題とか、今、抱えている悩みであるとか、それらはすべて、何をするにも神の国に向かっていく。「み国が来ますように。み心が行われるとおりに地にも行われますように」。礼拝においても、教会の中だけでなく外に向けての牧会的な働きにしても。すべては新しい、神様がかつてなさっていたこと、今もなさっていること、そして将来もなさってくださる。しかも、主イエス様がそれを時間と空間を超えて統合してくださろうとしている。そこに奉仕しているものであろうというふうに思います。

ロマ書にあるように、「すべての被造物と共にうめきながら、共に産みの苦しみを味わいながら、神のこどもたちの栄光に輝く自由を希望として歩む」。そのような姿を、わたしたちは求められていると思います。そのときに、新しい天と地、ほんとに一番苦しいとき、国家の破たんするときから、希望を失わなかったイスラエルの人びとの思いや、主イエス様が生きてらしたときに、ひじょうに困難の中にあつた人々が夢みた、新しい世界の実現を、わたしたちはめざしていきたいというふうに思います。

問いへの応え

ちょっと端折って、一番最後のところにしますが。

「あなたはどこに立っているのか、どのような福音理解をしているのか」。さきほど、「自分の十字架は自分で背負いなさい」というふうに応えられたことについての問いだったというふうにお伝えしましたが、イエス様の十字架というのは、ご自分のための十字架ではなくて、他の人の罪が十字架でした。「あなたの十字架はあなたが負いなさい」というときに、わたしが負わなきゃいけない十字架というのは、他の人の重荷であったり、他の人の罪であったり、他の人の課題なのだということ。自分が悩んでいることは、きっと別の人背負って、何よりもイエス様が背負ってくださる。

キリストの十字架はキリストご自身の課題ではなかった。すべての人の罪のため。それは、

キリストが他の人の課題や痛みや悲しみを負うことによって、新しい天地の具体的な姿をそこに示してくださったと思います。

わたしたちも、95年のときのきっかけになった問いに応えつつ、自分が生きている地において、どこかすごく遠い所に行ってすごいことをするとか、そういうやることではなくて、わたしの居る場所において、神様が出会わしてくださった一人ひとりの(教会の内外を問わず)方々の課題や痛みや悲しみを、一緒に背負っていくにはどうしたらいいでしょうかと、問い続けながら、ていねいに一つずつ、そのことに向き合っていくことができれば、ほんとうに嬉しいというふうに思います。それが新しい創造の業へ、わたしたちが奉仕していくことだと思います。

いつも、過去と将来のはざま、現実と夢の姿のはざまの中で、わたしたちはひじょうに大きな矛盾を抱えながら、苦悩するわけですがけれども。でも苦悩してヨブのように悩んで、その答えが見つかったら動くのか。そうではないのだと思うのですね。悩みながら動いて行って、また課題にぶつかって悩んで、それでも、混沌からも荒地からも天地を造られた神がわたしたちを支えてくださるという信仰に立っていきたいと、心から願っています。

ヨハネの黙示録のことばを最後にお読みします。

「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。…神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」

そのことを夢見ていく、宣教共同体でありたいと心から願っています。

長い時間ありがとうございました。(拍手)



グループ 1

司祭 大町信也(※)、久末隼一、福富牧子、斉藤響子、司祭 宮崎 仁、福永君二、司祭 中尾志朗、司祭 越山健蔵、高木栄子



①宣教における聖職と信徒の役割と関係は、どのようなものであるか？

聖職と信徒が共に牧会・宣教する共同体（牧会共同体）のための要素？

- ・ 司祭では担えない重荷を抱えた人に対して関わる専門性を、発見、活用する仕組み。
- ・ 信徒の奉仕職（信徒奉事をはじめ）が、様々なレベルでエンパワメントされる仕組み。
※信徒訓練の方向と方法が、多様性を持つ事（画一化される事は避け）に留意したい。
- ・ 聖職が、信徒と協働して牧会にあたるために、自ら整えられる訓練の機会の必要。また、聖職とその家族が霊的にケアされる仕組みの必要。

②「いっしょに歩こうプロジェクト」は、どのような意味で教会モデルとなるか？

- ・ 「旅する共同体」の生きたモデル。
- ・ 「いっしょに・・・」とその背後の現実を、非日常と捉えず、日常の教会の現実と切り結んでいく必要。
- ・ 既成の社会構造（命よりお金という観点で繋がっている世界）に、「対峙」する事に大胆であり、自覚的であり、持続的である事。困難な状況に置かれた人々と共にする立ち位置から、見えてくる事実とサイエンスの積み重ね（マスコミや利権構造に惑わされず）から、社会的矛盾を明らかにし続ける。
※教会が毅然とした態度表明を持つ事と、すべての人に対して開かれている（包括的である）事との関係と配慮は必要。

③キリスト教信仰を明確に表現する事

- ・ 内部にだけ通用する言葉ではなく、キリスト教と縁遠い位置にある人にどう伝えるかが課題。
- ・ 聖公会信徒である事を、誇りに思い。自分の教会について喜びをもって紹介できるには。
- ・ 教会の教えの魅力と、信徒の生活、教会の在り様の一致、あるいは一致への努力。

④謙虚に自らを見直す姿勢を持つ事。

- ・ 具体的方策という結果だけでなく、ウェールズ聖公会や、カナダ聖公会の現実を直視する真摯な姿勢と、打開策を生み出すプロセスを大切にしたい。抽象的で言い放しとなるのではなく、実現へのマイルストーンを明確にする姿勢も、そのような誠実さに裏打

ちされている。

- ・ プラン（計画）・ドウ（実行）・チェック（評価）のアクションの必要。

⑤教会がかかわる社会事業は伝道（信徒獲得）のツールではなく、教会の本質的働きそのものの

- ・ 聖公会の特質として評価すべきだが、それでは、何を伝えているのかという事の基本的理解の共有が、もっと必要。

⑥礼拝が宣教の全体性を現すものとなるために

- ・ 礼拝が宣教の一要素を超えて、宣教の包括的表現である事を大切にしたい。
- ・ 礼拝経験が、「習慣」ではなく「感動」を大切にしたい。
- ・ 主イエスの臨在を、すべての人が分かち合うための、配慮と取組への挑戦。

⑦教会が存在する事こそが宣教となるために

- ・ 既存の習慣や組織に固執せず相対化する態度。（信徒が一人もいない所から出発した事を覚え）
- ・ 教会が、一人一人の存在を喜び祝う共同体となる。
- ・ 人の弱みにつけこまず（カルト）、弱音をはける場所でありたい。

⑧牧会的機能の空洞化の克服

- ・ 「牧会が宣教」という説明が、妥当性を持つには、牧会が内実を伴い社会的広がりを持つ事が前提条件。一方、本当の悩み・困難は、教会では話せない（きれい事で終わる）し、話せる状況ではない事に対しても直視すべき。牧会の空洞化は、即、宣教の空洞化に直結している。

⑩終末論的視点の確認

バイブルシェアリングの最後の言葉「わたしたちは、新しい天と新しい地を見た・・・」私達に神が期待されている事を忠実に行うと共に、最終的には神による成就を待ち望むという視点を、確保すべき。

グループ 2

司祭 長谷川清純(※)、司祭 神崎和子、司祭 小林祐二、平部延幸、司祭 後藤香織、芳我顕司、吉鹿善郎、古澤はんな、司祭 ユ・シギョン



- 5Marks については、積極的に促進している教区、まだまだの教区、様々であった。
- 教区によっては、教会の近未来の具体像をアンケートで回収、配布し、具体的なアクションにつなげている。
- 教役者不足に対する具体策として、複数教会を複数の教役者で受け持つ実践が行われている教区もある。退職教役者のサポート、立地条件も関わる。
- 信徒が教役者のサポートをできればと考えるが、高齢化が進んでいると難しい面もあり、マイナス方向へ表れることもある。自覚と体力、訓練が必要。
- 教会の成立経緯や教役者の派遣の経緯によって、教会の性格（教役者主導タイプ、信徒積極タイプ）が左右されている。信徒がどこまでやっていいのか、聖職はどこまでなのか、ある程度基準化が必要ではないか。
- 定住者の有無にかかわらず、どのような会衆形成をしたいのかが大切であろう。教区が会衆に提示することが必要。
- 教会委員会こそが真の宣教協議会ではないだろうか。委員会全体でまとめ上げるプロセスを大切にしたい。
- 聖餐に与りたいという願いは強いが、現実問題として無理が生じている。み言葉の礼拝を信徒が司式、感話するトレーニングは必須。信徒奉仕者の働き。
- マニュアル、テキストの作成継承は必要。
- 司祭がいなくても動ける会衆でありたい。教役者には異動もある。
- 教会ごとの教会委員選挙の内規を分かち合うこともよかろう。
- 世代間の隔てが障害となることもある。世代ごとの自主性と見守りが大切。
- 地域に仕えることを考えるとき、牧師、行事はある程度の継続が必要。
- 観光地等においては、自分の教会をのべ伝えるのではなく、観光客が帰ってから、自分の地で教会に行けるような配慮。
- 高齢化に対するハード面の備えだけでなく、地域での声かけや訪問を行うこと。
- 高齢者に向けての働きと、若者に向けての働き、同時に考えなくてはならない。
- 家族が手を取り合って来られ、帰れる教会。
- ご葬儀と逝去者記念式を通じての宣教。
- 会議のスリム化
- 子どもへの配慮→聖餐式を短時間化する工夫。

- ・ 報告、紹介は説教後や平和の挨拶前に移す等、礼拝の流れもフレキシブルに考える余地がある。
- ・ 子どもの陪餐については主教会の見解をまつ。

以上

グループ3

司祭 小野寺 達(※)、渡部和夫、司祭 藤原健久、
佐々木靖子、仲宗根清美、八幡真也、チョン・
ヘジヨ



《原発関連》

正確な情報が手に入れにくい。政府発表の情報と、清水シスターの話すような事実とずれがある。「怪しい」「嘘だ」と思いながら。自分で正しい知識を得ること、現場の人の話を聞くことの大切さを、学んだように思った。

韓国では、「日本」に行くことが危険とされた。日本では、「地域」だけの問題にされていたのではないか。

《教会内で》

仙台で「いっしょに歩こう！プロジェクト」立ち上げのときの会議。あの会議は、ものを決める会議ではなく、思いを分かち合う会議だった。プロセスが重要。牧師が兼任している現状では、信徒と牧師が話し合う機会がない。信徒同士も話し合っていない。大口では信徒の方が話し合っただけで教会を運営していたと聞いて、教会は、話し合うことが重要。

信徒の意識や活動が活発になる必要がある。「牧師にお伺いを立てる」という意識ではだめ。司祭しかできないのは sacrament。それ以外は信徒も積極的に活動を。役割を持って奉仕することで、喜びが増す。

《震災を通して》

釜石、小名浜等の支援センターの働きが、教会の宣教につながるもののように思えた。被災者の方々を思いやったり、苦楽を共にするのは、「牧会」と同じ。「支援活動」と「牧会」の間の壁は、活動してゆく中で低くなる。

《日本の中での宣教》

「死」の問題。愛する人の死を前にして苦しむ人への丁寧なかかわりが大変重要。日本の宗教

的伝統の中で「葬儀」「法要」は非常に大きい。「先祖」「お墓」をどう捉えるかなどの課題もあるのでは。

《宣教の5指標》

大韓聖公会が発行した「しおり」(本に挟む)に、聖公会の宣教の5指標が印刷されていた。日本聖公会では、日常、5指標が語られることがない。

グループ4

司祭 原田光雄(※)、司祭 佐々木道人、下泉小波、内田研吾、司祭 越山哲也、吉谷かおる、主教 五十嵐正司、司祭 キム・ヒョンゲン



- ・日本というコンテクスト、日本に聖公会が入ってきた時、文化の発祥言として教会があったときがあったと思う。今はそのように求める人がいなくなった。昔は憧れの場所だった。庶民的にはなったけど、庶民的になりすぎた。
- ・日本は都市型の教会だが、韓国は農村に教会がいっぱいある。なぜ？宣教の違いはあるのか？
- ・農村伝道は農村に出て行けとプロテスタントがおこなった殿堂スタイル。(60年代)
- ・新しい視点を持った人しかいまは伝道にでていかない。
- ・テジョン教区全体で農村にある教会は半数以上。
- ・韓国のキリスト教、プロテスタントとカトリック・聖公会の2つにわけて考えることが多い。プロテスタントは韓国の伝統に従わない。偶像崇拜になるので檀家などにはならない。しかし、聖公会・カトリックは先祖崇拜は尊ぶものであり、偶像崇拜ではないと考える。
- ・儒教から来た人はプロテスタントの精神を受け入れられない。韓国はプロテスタントの人が多いが、プロテスタント嫌う人も多い。日本の従来宗教とキリスト教の関わり。キリスト教信仰は生活全般。信仰をもとうという人を迎え入れていく。開かれた場所に。
- ・いっしょにあるこうプロジェクト。新地、小名浜、釜石、どの教会もふだん10名以下の教会。信者獲得のためにボランティアをしているのではなく、お茶っこという文化。聖公会だけでなく仏教でもしている。下心なく献身的につかえることによって、洗礼の恵みにあずかるひともある。

*方向性→場所貸しを含め、地域に解放していく。開かれた教会へ・・・。

精神的に不安定で苦しんでいるひとたちのよりどころとなるような礼拝はどのようなものなのか・・・？(高齢者も)

ほんとうに仲間として受け入れているか？

教会は神秘的なほうがはいりやすいのか。がちがちしているほうがはいりやすいのか。

完成した信徒像になるのではない・・・。

実は教会にいろんなひとが来ている。

信徒が面倒くさがって司祭に押し付けてしまっている部分がある。

日曜日の礼拝の自分の時間を守りたい、邪魔されたくないと思っているひともある。

野宿者、育児放棄、精神的な問題・・・いろいろな問題を抱えているひとを排除してしまいがち。今いる場所のニーズに答えていく。

きれいなハーモニーだけが教会ではない。

人間だけでなく、自然界全体にも目を向けていく。

グループ 5

司祭 入江 修(※)、司祭 興石 勇、原 栄理、大東康人、司祭 吉岡容子、司祭 金 ジョンス、赤坂聖矢、司祭 橋本克也、橋口 満、

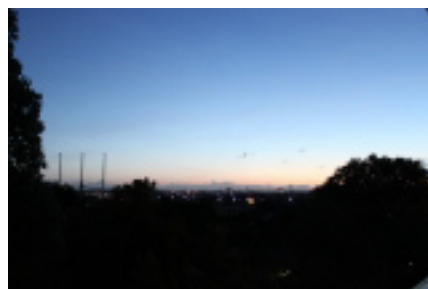


-
- ・ 西原司祭のテーマは一人ひとりを丁寧に見る牧会が原点だが、5つの指標とはどのように関わることができるのか(小さな教会では働きが難しい。特に高齢者主体の教会) 教会内の関係は問題ないが、社会との関わり・信徒の学びの機会が弱い。
 - ・ 方法論的な結論が盛り上がり計画が頓挫することがある。結論のみを求めるのではなく、定期的に反省を行なって新しい課題に取り組む。
 - ・ 「元気が出る礼拝」「元気が出る交わり」というものを求めてみてはどうだろうか。聖餐が形式的なものとなっていないだろうか。
 - ・ 毎主日にご聖体をいただけることは聖公会の強み。他教派にあって聖公会にないものはどういうものか。韓国の教会の働きに学びたい。
 - ・ 教会の交わりと社会正義は密接に関わっている。人間を無視するところから不正が始まる。人々の違いを大切にすることが正義の戦い。
 - ・ ここは、教会は、自分がいていいんだ、という気持ちが大事。
 - ・ 信仰の話は親の責任。親からの信仰を学ばないと教会に来ない。
 - ・ 親に無理やり連れて行かれるのはとても嫌だったけど、教会の周りの人々との関わりがとても良かった。
 - ・ アメリカの中流家庭のドラマで食前の感謝をしている。それがとても自然に見える。実生活では恥ずかしくて出来ない。そのバリアがあちこちにできてしまう。
 - ・ 子どもに手を置くこととイエス様のつながりが実感としてある。

- ・教会が癒しの場になるような雰囲気を作ること。
- ・歴史的に、聖公会の社会事業はもっと評価されて良いのでは。
- ・マイナスを少なくする考え方は発展がない。教区内で知り合わなくてはならない。外に向けての支援と教区の中での支援が必要。
- ・園長と牧師が両立していた時期とは違う。教会から遠ざかっている人を呼び戻すには。社会事業は信徒の増に繋がっていない。しかし、教会のあり方としてあり得る。他教派との共同の地域活動が何かできるのではないか。
- ・調べられた教会になっていく時に、教会が社会に必要とされる存在となるのでは。
- ・女性司祭の問題、聖公会の一致としてどのように考えるか。
- ・何年後への教区のあり方として教区職含めて考えなおさなくてはならない。
- ・社会的な問題にちゃんと向きあっていくことが信頼を得ることになる。
- ・今後、俸給を払えなくなることがわかっている。そのため、総会含めて共に歩くことを模索する必要がある。信徒の権限が弱いという部分を、今後どうするか。
- ・懐の深い教派なので、話し合いの中を進められれば良いと思う。

グループ 6

司祭 土井宏純(※)、渡辺康弘、司祭 相澤牧人、
小林玲子、蔵元英一、司祭 山崎貞司、司祭 広
谷和文、畑野希美



■パリッシュで起こっている課題を教会の課題とできるか

原発、可児ミッション、ホームレス、在日外国人、高齢者……。代祷の豊かさ。寄りそう。訪ねる。

■場（居場所）の設定があると良い

家庭集会、雑談ができる会、アルファコース、被災者支援センターしんち信徒のファミリーーターを育てて、信徒同士の聖書研究などの学びや分かち合いの場があると良いのではないか。

■定住牧師のいない教会では、信徒が積極的に役割を担ってきたが、その信徒の高齢化や後継者といった大きな課題がある。

■宣教の5指標が教会、信徒に伝わっていないという指摘があり、そこには教役者の責任もあるだろう。たとえば、礼拝での説教で語り続けることが大切。

■宣教協議会のテーマの視点から、宣教の5指標の翻訳を試みてはどうだろうか。

グループ 7

司祭 大岡 創(※)、主教 高地 敬、中林三平、司祭 三木メイ、武藤直二、弘井宗子、司祭 中村 正、尾崎茂雄、司祭 岩城 聡



(1) 最初に、昨日の清水シスターの講演と今日の西原司祭の講演についての感想を話し合った。それぞれのお話して感動したところ、新たに知ったこと、良く理解できなかったことなどを率直に出し合って認識を深めた。また、郡山での線量の高さなど、始めて触れた事実も多くあった。西原司祭の講演には、多くの示唆を受けたという感想が語られた。西原司祭は、最後に丁寧に学ぶ、丁寧に共に歩く、と言われたが、「丁寧に」とは細かいところにまで気を配る、という意味。教会も丁寧にやることによって人に届くことができる。また、原発問題について聖公会として今後どのような取り組みを進めようとしているのかについての発言もあった。また、原発に反対する人々で合意されているのは、人間にコントロールできないものに手を出してしまったということだが、それは、地球温暖化も同じではないかという意見が出された。

(2) 討論の中では、日本になぜキリスト教が伸びなかった原因や、協働司牧の問題についても意見が出された。また、神愛修女会におけるさまざまな経験を通じて、教会や諸施設が協力することの必要性も語られた。

大口聖公会をはじめ、信徒の力によって形成され、支えられてきた教会もあり、その経験を大切にすることが必要であるという意見が出された。それは、信徒のミニストリーを重視することにつながる。伝道師や信徒奉事者などの職務は法規に認められているが、その規定では不十分でないかという意見が出された。また、信徒のミニストリーという場合、その多様性と信徒自身の召命感を尊重する必要性も指摘された。五島の教会をめぐったときに、そこで。五島、島原、天草にも行った。島原は遺跡巡り。五島では、教会が生きている。故郷に帰ってくるような感じがした。伝道師を沢山造ることが必要。牧師がいなくても教会を形成できる。

アイオナ共同体を訪れた経験について語った方は、青年スタッフの中で青年や若い女性の活躍に印象を受けたことを語られた。そこでは、聖職中心ではない共同体づくりが行われている。「開かれた教会」「誰もが来ることができる教会」についてビジョンをまとめた教会の経験も紹介された。しかし、実際にそれを実行するときには反対意見も出されてくるという悩みも出された。

また、「教会に招く」ではなく、「出かける」ミニストリーの大切さも指摘された。その場合、信徒個人の活動として無関心になるのではなく、教会のミニストリーとしてそれを支えることが必要である。

原発問題に関しては、われわれ自身の認識の甘さ、教会の神学的誤りなどをしっかりと自己反省し、われわれ自身のライフスタイルの転換を実現する決意が必要である。

グループ 8

司祭 山本 眞(※)、高木 泉、永井眞由美、司祭
三原一男、主教 中村 豊、長野泰信、山崎典美、
池住 圭、司祭 小林 聡



これまでの流れと、講演の振り返り

- 1995年宣教協議会后、大阪の社会派と福音派の分裂、
- G F S、U 2 6など青年の動き
- 神戸教区財政と数、ミッション・アクション・プランの動き教会の総会の内容がどこまで現実味をおびるのか。2013年フィードバック。祈ること→考えること→フィードバック、具体的な数字、数値化することをした
- 脱原発の声明を出したが、各個教会で動かなければ何もならない。みんなが考えられるようなことが大事。自分たちの礼拝を守っているだけではだめ。
- 65-85才までの人生設計がない。そういう人たちが、足を引っ張る。10年後どうなるかというイメージが大事。
- 80歳近い方と若者とのコラボはとてもいい。自分の子ども5割くらい離れている。
- 牧会配慮とは何か、地域の人への関わり、昨日の長谷川先生の話に出て来ていた岸本執事の話。相手をクリスチャンにしようという野心を持たない。相手への関わり。
- ミッション・アクション・プラン→西原先生がビジョンのことを出された。地域を含めたことを出したい。
- 福島、そこから移れない人がいる人と共にいる越山先生。緩慢な殺人という現状になっている現状。越小さな寄りそうことからしか出来ない。陸前高田市長の言葉。被災地の現場で、祈るしかできない。
- お年寄り、いい物をもっておられる。次の世代に伝えていこうにも、次の世代がない。
- 越山先生の苦しみは共有したい。清水シスターの話はまっとうな話だが、現場の人にはつらい話し。中部、ミッションプランを作るとかやってきたが、作ったらやった気になってきた。ニーズを大事にしたい。教会に人が来ないのはなぜか？青年センターの経験から、何かやってれば人は集まる。ニーズがあればお金もらってもいい。いっしょに歩こう震災ボランティアの青年、しんどいけど生き活きとやっている。探りを入れていくこと大事。マーケティング、探らないとだめ。
- 教会は居心地のいい場所であってほしい。地域の人を巻き込める。気付くことが先。
- 自分の居場所と自分が用いられているということがあれば喜び。子どものための幼稚園

なら存続意味がある。

- ・ ミカエルの信者に←主任クラスまでキリスト教を理解させること大事。
- ・ 職員に対してどのようにキリスト教を伝えるか。
- ・ 17年前、1995年、柳さんも神戸の震災ボランティアに来ていた。コミュニケーションを持たないといけない、東アジア・レベルで。戦争に対する和解。オーストラリアのダーウィンに来年行かないといけない。懺悔しないといけない。
- ・ みんなで牧会することに慣れないといけない。
- ・ 鳥の巣型教会論、何でもありという考え方の鳥の巣ではありたくない。鳥の巣はその中の命を育むためにある。
- ・ 今ある教会の形を壊さない限りは次に進めない。人を増やし献金を増やすことをやめる。

グループ9

司祭 柴本孝夫(※)、竹石由美子、主教 大西 修、
司祭 涌井康福、阪田隆一、司祭 中原康貴、安
村 妙、鈴木 一、司祭 野村 潔



◆講演・報告を聞いた感想

* 西原司祭の講演から

- ・ 鳥の巣型の教会というのは実際に自分たちの教会に当てはめるとどのようなものだろうか。
- ・ 言われていることは頭ではわかるのだが、なかなか行動にならない。信仰の原点となっていないのか。教会の中でいろんなことに縛られている。背負い過ぎて、身動きが取れないでいるように思う。
- ・ 管区・教区でやっていること、訴えていることがどれほど各教会に伝わっているだろう。
- ・ 「パリッシュ」という考えは「社会派」「牧会派」という壁を超えるのではないか。
- ・ 弱くされた人々に関わるということはよくわかるが、関われば、関わるほど、今の教会が（特に経済的に）立ち行かなくなる。
- ・ 100年前の宣教師たちは今の教役者のように動き回っていただろうか。現在は動き過ぎているのではないだろうか。
- ・ 教区の統合はすぐには難しいが、ウェールズ聖公会のようにいくつかのセンターを置いて、協働することはできるのではないだろうか。
- ・ 人々の生き方を知ることも宣教だ。信仰を生きた人々の歩み、それは教会の宝物だと気づいた。身近なことをもっと自覚して大切に生きることも宣教の第一歩になる。
- ・ 自分たちの教会のためだけでなく、地域のため、パリッシュのために、「出ていく」ことの大切さを教えられた。

- ・講演から改めて「聖公会」ということを確認した。そして、聖公会の教会として、どう生きていくのかを見つめなおしたい。
- ・若者たちのタラントを引き出す。本物の出会いの場を提供する必要が教会にある。と感じながらも、なかなかできていない。
- ・教役者がいろいろと仕事を引き受け過ぎている。忙しくしていることを許してしまっているのではないか。あえて断るべきではないか。

*シスター清水の講演・「いっしょに歩こうプロジェクト」の報告から

- ・私たちが原発を動かしてきた。見逃してきた。「目覚めていなさい」というイエスの言葉を思い出した。
- ・シスターのように、原発の働きに特化できる。その働きを支えているカトリックはすごい。
- ・信仰者としてどのように決断し、行動すべきかを突き付けられた。
- ・教会共同体としてシスターの話をどのように受け止め、何ができるのだろうか。
- ・シスターたちの働きを支えているのは祈りであるということを見逃してはならない。
- ・シスターの話は今まで聞いたことがなかった。多くのことが報道されていないのだと分かった。

◆感想の分かち合いを聞いて

- ・教区の再編は本当に必要なのか。必要であれば、どの時点でそれを行うことができるのか。また、すべきか。
- ・女性の教役者がもっと働ける状況を築けないだろうか。現在は多くの壁があると感じる。
- ・小さな教会をどうすべきか。教会を閉じるということは「悪いこと」なのだろうか。
- ・アメリカで見たこと。古い立派な教会を閉鎖し、人々がいるスーパーの跡地を買い取って教会としていた。建物が教会ではなく、人々がいるところが教会。
- ・時代の流れ、社会の流れをどう読むか。人を増やす余地は十分ある。しかし、弱く貧しい人が増えても、現状の教会は支えられないという葛藤がある。

グループ 10

司祭 石塚秀司(※)、草間真理、吉澤正昭、中村邦雄、秋山みどり、司祭 岩佐直人、司祭 吉田雅人、主教 大畑喜道、司祭 芳我秀一



-
- ・原発をやめていくとしても、やめていくための研究者や、身を挺して働く人が必要になる。原発に関わっているから、こうだからあの人はダメな人ということではない。相反する

- 2つのことを考えていく、現場を大切にすること、一人一人と出会っていくことが大切。
- 宣教が一人歩きするのではなく、牧会があって宣教がある。そのために信徒と聖職が一緒にやっていけるかを考えていくことが必要。一緒に支え合いながらやっていかなければいけない。
 - 聖公会は人との交わりを大切にしている教会。受洗者も人との交わりの中で生まれてくる。信徒の背中を見て信徒になろうと決意していくこと、あの人が好きだからのような「ゆるい」中にも洗礼に導かれていく人があるのではないか。
 - 教会でみ言葉が語られているかということが、教会に人が集まるかどうかということ。福音としてみ言葉が語られたら教会はどんどん大きくなっていくものではないか。
 - どんなに大変でも行うということが、聖職と信徒との信頼関係になっていくことではないか。丁寧に牧会をし、訪問することで信徒は人を教会に呼ぶようになるのではないか。
 - 信徒は説教の中に聖職の生き様を見ている。心に響くかどうかは、人間性を感じられるかどうかではないか。
 - 信徒教育とは「自分はどうして教会に行くのか」という動機付け。楽しい、居場所を見つけることができたからではないか。「わたしがいてもいい」という居場所を作ることが大切。レイトウルギアとは、民の仕事の意味。川に地主が橋を作り、タダでみんなを通してあげるというボランティア・奉仕のこと。自分で止まるのではなく、みんなとどのように交わることができるか。わたしがどのように主に変えられていくかということ。これを支えていくのが交わりと説教というみ言葉になるのではないか。
 - 困ったときに「助けて、手伝って」という声が教会の中で聞こえるようになると、自然に人が集まってくるのではないか。
 - 「あなたがいてもいい」と示すことが教会に繋がっている原点。このことを他の人にも示していくことが、教会の成長になるのではないか。

これまで出てきた話のキーワード

み言葉、繋がり、ていねいな牧会、関わり、居場所、「助けて、手伝って」の声掛け、⇒楽しい教会、

なぜこれらが失われたのか、これをどのように実践していくのが課題。

⇒立つべき位置に立ち、丁寧にやっていく。

グループ 11

司祭 上原榮正(※)、司祭 卓志雄、太田信三、
主教 三鍋裕、山田益男、新崎久美子、司祭 高
良孝太郎、中原千津子、宮脇博子



- ・わたしたちは出かけて行って何を宣べ伝えるべきか。
- 東日本大震災対策活動によって「社会参与派」と「教会内派」との区分がなくなった。「社会に対する関心や参与は教会がやらなければならない働きである」との共通認識が深まった。但し、教会の働きはNPOの働きとは異なる。礼拝と祈りによって養われて出かけて行く。
- ・出かけて行って浅い言葉で他人と出会うのではなく、深層において「本物 (Genuine)」として出会うことが大切。他人とのつながりは相手の顔を見ることだけではなく、相手と同じ方向を見て進むこと。また 100 人の内 1 人だけがクリスチャンである日本。わたしたちは 99 人のためにきちんと福音を語ってきたか。寄り添うとしたのか。教会の働きは声が小さい人、声が出ない人に耳を傾けること。また 99 人の要求に忠実に応えていくこと。99 人が教会に入りやすい、礼拝に参加しやすい配慮も必要である。御体、御血とみ言葉によって養われていくことから宣教は始まる。
- ・自分の現場だけを精一杯取り組んでいるので、後ろから着いて来る人の配慮が足りないのではないか。小さい出会いを大事にし「駆込み寺」のような働きができる教会を造っていく。
- ・そのためには原点（牧会）に忠実すること、立ち帰ることが大切。わたしたちは「教会が教会である」ことに対して忠実に応えてきたか。支えてきたか。守ってきたか。そこから考えて行きたい。
- ・教会が内向きであることは必ずしも悪いことではない。まず忠実に「内」を固めること。
→ 信仰の継承が問題になっている。非日常である教会で養われ、日常に派遣されていくこと、そして本物のクリスチャンとして生きる。
- ・信仰の継承
→ 教会の日曜学校：子どもに対して良い物（本物）を喜びながら人との関係性を通して伝えるべきなのに、「早く」と言いながら「刷り込み」のような方法で信仰を継承しているのではないか。長い目でみる。教会の中で役割を与える。葬儀、結婚、子育て・・・など教会に戻ってくるときは必ずくる。
- ・現状の教会を考える際、チームミニストリは大事である。信徒の数が経ていくことは聖職の不足につながる。「聖職が足りないから」ということより「信徒が支える」ことから「共」に牧会をすることが必要。教区内だけではなく、教区間の共同（例：東北教区に対

する支援・・・)。

- 各自が教区に帰ったら今回の経験を独り占めにするのではなく、十分分かち合うこと。
- 「日本聖公会 11 教区が必要か」という議論に対して、日本は広い、また日本における牧会的特徴を考えると（関係性、地域性など）現状では教区の数減らすことは厳しい。共通の課題を共に担いながら力を合わせていくことが必要。
- 多様性の中で相手を尊重し耳を傾けること。

グループ 12

平岡義和(※)、執事 吉野暁生、石塚正史、司祭 竹内一也、主教 渋澤一郎、司祭 齊藤 壹、司祭 戸塚鉄也、砂田郁郎、村井恵子



主な論点

- 牧会について
 - 広い視点、長い視点
 - 現在受聖餐者ではない信徒へのアプローチ→日曜学校を2回休んだら来た手紙 何か芽を出す、種をまき続ける
 - 神さまはあなたのことを手放さない → わたしたちもあきらめない
 - 手紙・クリスマスカード → オウム真理教からの脱却
 - 教会の人にだけでなく、神様の目は教会の外であってもすべての人に注がれる
- 誰にでもわかる言葉
 - 教会用語はわかりにくい (例)「愛する」→「大切にする」
 - 神さまに大切にされているということ。誰でも。
- 様々な人への配慮
 - 牧会的配慮
 - 礼拝の時間は自由になるのでは。曜日も。
 - 新しい形の礼拝を作ることも可能では → ロックな礼拝
 - み言葉の礼拝でも養われること → 聖餐式は当たり前なのか
- 礼拝での配慮
 - 用いる冊数が多くて大変。教えるほうも大変
 - 聖歌までまとめた1冊 → カトリックの実践 → 作成は教区単位？
 - プロジェクターでの映写
 - 杯の陪餐 → インテイクション？ 衛生面？ 習慣
 - 印刷をされた説教を読み上げること
- 多様性ということ

多様性を認めること

それぞれの教区の事情・それぞれの教会の事情

嫌い≠さよなら

嫌いでも共存できる、並存できる

・信徒同士のネットワーク

お互いのことを知っている。異動してしまう牧師より知っている。

来ない人・来られない人への配慮も

牧師ではできない様々なシーンへの対応

信徒でしかできないこともある

牧師と訪問を共にする

・幼稚園や保育園、学校

宣教のツールなのか、それとも牧会的配慮なのか

もったいなさもある

・教区間協働

様々なチャーチマンシップ 幅広さ 統合の困難

聖職養成の多様なあり方

グループ 13

司祭 小林尚明(※)、主教 植松 誠、赤坂 唯、司祭 田中 誠、山田拓路、伊藤美佐子、松原恵美子、島田光司、司祭 木村直樹



【財政】

- ・ コーリー司祭の言葉のように、「お金のことは神さまが何とかしてくださる」と言える強い信頼をいかに築くか。
- ・ 献金に収入を頼ると、献金を払えなさそうな人へのアプローチが後回しになっていくおそれ。それは周縁に追いやられた人であることも多く、本末転倒に。
- ・ 事業をして収入を得られれば。 → 好立地を活かし、結婚式やコンサートを。
- ・ 希望を持った教会の統廃合をしていきたい。
- ・ 有給ばかりの聖職ではなく、一部有給や無給というような形も。
- ・ 聖職養成神学塾（北関東）を作り、自前の講座で執事を生んでいる。すると、神学院に送る費用がかからないし、時間の融通も効く。
- ・ 今の枠組みをちょっと外してしまえば、知恵を働かせて面白いアイデアは一杯出る。
- ・ カフェ、居酒屋、牧師ホストのいる Bar、古着屋、規格外野菜配付・・・。
- ・ 仙台は、教会敷地の一部を有料駐車場化。良い収入になる。不可欠。

【礼拝】

- ・若い世代が礼拝をバンド音楽で捧げる。他にも多様な礼拝のあり方があっていい。
- ・チャンセルにプレイルームを作って子どもが遊べるように、という試みを行ってみる。
＝子どもたちを気兼ねなく連れてこられる教会へ。
- ・聖職は海外での経験等から、多様な礼拝の知識はあるが、自分の教会で実践することは躊躇われる。信徒の理解が得られるか・・・。
- ・子ども向けの式文を、大阪、北海道、京都では使っている。
- ・月1回、子どもと共に、分かり易い式文で礼拝を捧げている（札幌キリスト）
- ・幼児陪餐しないのに一緒に礼拝をして、それで本当に一緒にしたと言えるのか
- ・堅信式と陪餐許可を区別するという考えもある
- ・ルーテルの教会には、チャリスの中が分かれていて、ぶどう酒かジュースか選べるようになっている所も。しかし、それでいいのかは疑問。

【その他】

- ・時代に合わせ、変えられるものは変える、変えるべきでないものは変えない。
- ・守られている伝統に関し、もっと思い切って口を出していいのではないか。
- ・司祭や主教に対して「楽しい」と感じられる関係性が築けてこなかったが、それもあっていいのでは。
- ・U26 を通して、出て行って出会うことが出来た。出て行かないと知ることが出来なかったことが沢山ある。

グループ 14

谷川 誠(※)、主教 加藤博道、司祭 大橋邦一、
司祭 齊藤 徹、宮本紘明、司祭 矢萩新一、司祭
武藤謙一、矢部幸子、唐澤秩子



1、「ミニストリー・エリア」

- ・「ミニストリー・エリア」を検討する時期に来ている
- ・一教会一牧師は厳しいという現実がある。
→信徒・教役者間の深い人間関係の構築ができるかどうか課題。
わたしたちは、一教会一牧師の回復に努めるのか、新しい形を生み出していくのか。

2、教会と付属施設（幼稚園・保育園）

- ・牧師ではなく、信徒が園長という体制に切り替わって来ている。
- ・牧師が今の幼稚園・保育園を兼務できる状況にない。

3、教役者不在の礼拝について

- ・「み言葉の礼拝」は礼拝人数が減少する。→信徒の礼拝は「二次的礼拝」という意識。
- ・「み言葉の礼拝」は、信徒主導の豊かな礼拝として生み出されたもの。
- ・聖職中心主義からの脱却。信徒主導の意識。一教会一牧師ではないという意識

4、教会と財政

- ・財政面でも大きな教会に牧師を派遣するという状況に依存しがち
- ・宣教費とは、地域・社会の人々にメッセージを発信するための費用
- ・宣教費は見返りや効果を求めるお金ではない。メッセージを伝えるために使うお金。使うことが必要などころにはしっかり使う。
- ・青年を育てることに力と知恵とお金を注ぐことはとても大切な宣教。
→青年の交わりは、教区を超えて行うことが良い

5、教区間・教会間の交わり

- ・青年たちの経験が、一人の人の信仰生活を作っていく
- ・小学校・中学生・高校生のキャンプについて。少人数なら、教区を超えて合同キャンプ
- ・違う教会同士が交流し合う場。(e x) 全国教会スタンプラリー
- ・東北には震災ボランティアのために全国の人々が入り混じって働き、交わった。
- ・交流教会を教区を超えてもつこと。タイプの違う教会・地域・人と出会い交わっていくことで、互いに励まされていく。

6、地域・社会の中の教会の働き

- ・人と人の出会いから、顔の見える関係ができていくか
地域に住む信徒が地域につながっている（地域活動やボランティアなど）
→信徒がもっている賜物を互いに励まし合い、祝福しあう
- ・宣教師・伝道師の思いに学んでいく→必要に応える働き
- ・教会のヴィジョンをもつことは重要。それは地域・社会の必要に耳を傾けること。
「信徒がこういう教会にしたい」という思いをもつことは大切
→信徒と教役者が話し合っ、教会の歩みを考えていく

グループ 15

後藤 務(※)、主教 広田勝一、司祭 笹森田鶴、
司祭 下原太介、小池義郎、成岡宏晃、宮里順子、
宮崎典子、聖補 大岡左代子



基調講演を受けて「宣教」という言葉が持つ多様性に触れ、3つの切り口から「宣教」について分かち合うことにしました。

1. 教会に連なる私たちの信仰の在りよう

「宣教」という言葉を聞くと、外に向けて何かをしていかなければならないということを考えがちですが、教会が社会の中でどのような働きを担うのかということを考える前に、私たちが日々の信仰生活を通してどのように養われているのかということをつかち合いました。私たちが目を注ぐべきことは、一人ひとりが持つ「ダメな自分」を共同体の中で受け入れ、神さまの愛と喜びを共に分かち合うということです。しかし、私たちはどこまでこの想いと真剣に向き合っているのでしょうか。先人たちが強い信仰を持って何も無いところから一歩ずつ歩き始めた時は、小さな集団からさまざまな出会いによって進められました。その出会いの中心にはイエス・キリストがおられ、私たちは主日の聖餐式においてイエス・キリストと出会います。その恵みは、物質的な豊かさではなく霊に満ちた温かさです。この温かさを分かち合うために、私たちはそれぞれの生活の中で、それぞれの働きの中に生きる福音を多くの人たちと分かち合います。聖職と信徒が共に豊かな聖餐式を捧げることで違いを知り、受け入れ地域と共に歩んでいけるようになるのです。

2. 日本聖公会の在り方

ウェールズ聖公会と同様の困難を、日本聖公会も経験しているさなかです。特に、財政的な困難は目下の課題です。ここで、新たに踏み出すために大切なことは、どのように現状を維持していくかではなく、原点に返り抜本的に立て直すという意識です。つまり、聖職者をふやす、献金を増やす、といったことではなく、教会として何のために人やお金を用いるのかということを実際に考えるということです。このことは、一朝一夕で結論を出すものではなく祈りの中で、今まで以上にシビアに現実と向き合っていくべきだと思います。聖職と信徒が共に成長していけるような環境をはじめ教区全体が教区を支えていくという気持ちを持ち続けることが必要です。

3. 教会の目線はどこに向くのか

150年以上の歴史を重ねてきた日本聖公会は、これまで地域社会のために、地域社会と共に生きていく共同体として存在し続けてきました。この長い歴史の間に日本という国のさまざまな状況は急速に変化し続けてきました。それは、保育の必要性、核家族化による孤立、地域格差の拡大による自給の課題など多岐にわたります。

しかし、その一方で変わらずに在り続けるものもあります。それは、地域に根付いている文化・風習です。その中で生まれる宗教観や神観は、その土地に生き続けるものであり、教会にはこれらと共生していく姿勢が求められるのではないのでしょうか。そのために多くの違いを持つ多様な私たちが、教会の中での交わりを通して、地域へと派遣されていくことが「宣教」の第一歩ではないのでしょうか。

お詫び

宣教協議会の三日目にグループ討議の中間報告が行われました。その中のあるグループの報告において、趣旨としては「多様な有り様を受けとめましょう」という文脈で、「性同一性障がい者や女性司祭が嫌いでも、共存できる」との発言がありました。

グループ討議中間報告が終了した後、参加者の一人より、「この発言を見過ごしにすることはできない、この発言で、どれほど傷ついている人がいるか、考えて欲しい」との訴えがありました。

しかしながら、司会者がこの訴えについて、参加者に向けて「傷ついている人がいることを考えて欲しい」と言ったのみで、実行委員会としては、それ以上の対応をしませんでした。グループ討議終了後に、五十嵐正司実行委員長が謝罪をしましたが、本来であれば、プログラムをいったん中断し、そのことの問題性について、全体で分かち合わなければならないような内容でした。しかし、時間的な制約のなかで見過ごしてしまいましたことを、参加者の皆さまに、ことにこの発言で傷ついた方々に深くお詫び申し上げます。

「嫌い」というのは、避けがたい人間の自然な感情です。しかしわたしたちは、この宣教協議会で「いのち」をテーマとし、また「他者への（牧会的）配慮」がとても重要な宣教的課題であるということをお話し合いました。ですから、自分の好き嫌いの感情を超えて、「尊厳限りないいのち」を生きる他者への理解、そして配慮へと歩み出すことが、実行委員にも、そして参加者全員にも求められていたのです。

しかし、上記の発言がなされた直後に、傷ついた人びとの立場に立った発言もせず、傷ついた人びとがいるという指摘を受けるまで、何の対応もしませんでした。これは、実行委員会自体が、人の痛みやいのちの大切さについての敏感さと配慮を欠いていたことを示しており、傷つかれた方には本当に申し訳なく存じます。

また、他の参加者からは、グループ討議のリーダーが、男性のみであることについての疑義が寄せられました。わたしたち実行委員は、女性の参加者が少なかったため、できるだけ多くの女性たちに発言の機会を持っていただけるようにとの配慮から、司会者を男性の中から選ばせていただきました。しかし、わたしたちのこの配慮が最善のものであったのか、実行委員会として反省しなければならないと感じています。

わたしたち実行委員会は、時間的、力量的な制約はありましたが、今回の記念すべき宣教協議会の準備と実行に携わることができましたことを光栄に感じています。しかし、至るところで、配慮や準備が不足していたことも事実として受けとめなければなりません。それによって、結果的に傷つかれた方々、ご迷惑をおかけした皆様には、実行委員一同、心からお詫びいたします。

2012年11月

2012年日本聖公会宣教協議会実行委員会

理解の共有が、更に必要である。そのため、施設職員等が、その仕事についてキリスト教との関わりにおいて、自らの言葉と表現で伝えるための、教育・訓練の場とツール（教材）を、組織的・体系的に整える必要。

⑥礼拝が宣教の全体性を現すものとなるために

- ・礼拝が宣教の一要素ではなく、宣教の全体を包みこむものある事を再確認する。
- ・礼拝経験が、「習慣」ではなく「感動」を大切にすることであるために多様な礼拝経験を奨励する。

⑦教会が存在する事こそが宣教となるために

- ・既存の習慣や組織に固執せず相対化する態度。（信徒が一人もいない所から出発した事を覚え）
- ・教会が、一人一人の存在を喜び祝う共同体となる。
- ・人の弱みにつけこまず（カルト）、弱音をはける場所でありたい。
- ・「どこで、誰と、どのように」を大切にしたい教会とプログラムの提供。
例えば、（静謐な場の提供等）空間としての教会の意義を再評価する。

⑧牧会的機能の空洞化の克服

- ・「牧会が宣教」という説明が、妥当性を持つには、牧会が内実を伴い社会的広がりを持つ事が前提条件となるが、教会という場の内実とは、本当の悩み・困難が話され分かち合われ、話せる場とは決してない事を直視すべき。「牧会」の空洞化は、即、「宣教」の空洞化に直結している。

⑨日本聖公会の宣教が、自覚的に歴史を刻んで行くために

- ・「牧会」が「宣教」となるためのダイナミクスを形成するためには、実践の検証、情報の分かち合いと発信、様々なレベルでの訓練などを行う機関が必要。
- ・聖公会が現在に至るまで発してきた、社会的声明をまとめた資料集の発行が必要。

⑩人の生死に寄り添う 教会として

- ・高齢者への配慮を、高齢者の生活の様々な局面において具体的な形で表現できる教会となる。
- ・結婚式・病床訪問・葬儀など、様々な状況や、未信徒に対しても開かれたものとして整える。
そのような視点で、祈祷書改正の際に、パストラルリタジーの再検討を行う事。

⑪終末論的視点の確認

- ・バイブルシェアリングの最後の言葉として投げかけられた「わたしたちは、新しい天と新しい地を見た・・」を受け止め、神が期待されている事を私達が忠実にやる事と同時に、最終的には神による成就を待ち望むという視点を、確認すべき。

⑫新たな形での宣教ミーティングの模索

- ・沢山の人が集まる形態だけでなく、インターネットを活用した、講演の放映、双方向的参加、などの形を取り入れても良いのではないかと。

め、み言葉と礼拝への思いを深め、信徒・聖職ともに祈り、また継続的な教育、トレーニングを重ねます。教会の建てられた地域のなかで、特に癒しと解放を求める人々に心を通わせ、彼らのいのちを宝とし、地域と共に主の救いに与ることを願います。

＜提言作成に向けて グループ3＞

《「いっしょに歩こう！プロジェクト」、東日本大震災被災者支援に関して》

- ・来年5月でプロジェクト終了。けれども、支援活動は終了できるのか。
- ・被災者の方々の状況を見、現場の意見を聞きながら、必要があるならば、支援活動を継続すべきではないか。
- ・東北教区が中心となり、管区、他教区からの援助を具体的に検討できないだろうか。

《「ケリュグマ」み言葉による養ない、み言葉の宣べ伝えについて。》

- ・信徒、また信徒でない人において、み言葉を学びたいという欲求が潜在的にある。
- ・従来の「聖書研究会」「聖書勉強会」に、堅苦しい、難しい、などの内容、イメージがある。
- ・方法を大胆に変革する必要があるのでは。食事をしながら、生活に密着しながら、気軽に触れるように、など。
- ・昨日、一昨日の討議の中でも、教役者－信徒間、信徒－信徒間での、話し合いの不足が挙げられていた。み言葉の学びが、深い話し合いの機会になることもあろう。

《財政問題》

- ・財政問題は宣教問題である。献金を増やすのを目的に宣教するのではない。
- ・財政問題は深刻だが、岡谷の例のように、神様からの支えを信頼する信仰が必要。
- ・教役者の給与が適正であるかどうかの検討も必要。教役者が、給与にふさわしい働き、生活をしているかを見直す必要。これは、「教役者と信徒との協働」でも触れる（後記）。

《礼拝の多様性》

- ・主日の礼拝は、聖餐式、み言葉の礼拝が中心的に営まれている。
- ・そのほかの曜日、時間帯に多様な礼拝がなされてよい。
- ・出勤前、仕事帰りの人のために、早朝礼拝、夕の礼拝の実践がある。
- ・より躍動的な祈りを求める人のための「賛美礼拝」の実践もある。
- ・青年層が、バンドで奉仕することを通して、礼拝に参加することがある。
- ・み言葉の礼拝の時に、参加者が減る傾向がある。これには、み言葉の礼拝の意義を十分に理解していないことがあるのではないか。意義の学びが必要かもしれない。また、聖餐式に対して「二次的な礼拝だ」という意識があるなら、信徒の意識改革が必要。

《青年層、若年層、子供たちへの宣教について》

- ・青年層が教会の礼拝に参加し、教会運営に参加してくれることを、心から求める。
- ・U 2 6 の活動に注目している。様々な意見を聞かせてほしいし、教会で様々な活動をしてほしい。できる限り青年たちの自主性を重んじ、その活動を支援したいと考えている。
- ・高校を卒業すると、進学、就職のため地元を離れる人々が多くいるという現状がある。

- ・若者たちのタラントを引きだす。本物の出会いの場を提供する必要が教会にある。と感じながらも、なかなかできていない。
- ・教役者がいろいろと仕事を引き受け過ぎている。忙しくしていることを許してしまっているのではないか。あえて断るべきではないか。

*シスター清水の講演・「いっしょに歩こうプロジェクト」の報告から

- ・私たちが原発を動かしてきた。見逃してきた。「目覚めていなさい」というイエスの言葉を思い出した。
- ・シスターのように、原発の働きに特化できる。その働きを支えているカトリックはずごい。
- ・信仰者としてどのように決断し、行動すべきかを突き付けられた。
- ・教会共同体としてシスターの話をどのように受け止め、何ができるのだろうか。
- ・シスターたちの働きを支えているのは祈りであるということを見逃してはならない。
- ・シスターの話は今まで聞いたことがなかった。多くのことが報道されていないのだと分かった。

◆感想の分かち合いを聞いて

- ・教区の再編は本当に必要なのか。必要であれば、どの時点でそれを行うことができるのか。また、すべきか。
- ・女性の教役者がもっと働ける状況を築けないだろうか。現在は多くの壁があると感じる。
- ・小さな教会をどうすべきか。教会を閉じるということは「悪いこと」なのだろうか。
- ・アメリカで見たこと。古い立派な教会を閉鎖し、人々がいるスーパーの跡地を買い取って教会としていた。建物が教会ではなく、人々がいるところが教会。
- ・時代の流れ、社会の流れをどう読むか。人を増やす余地は十分ある。しかし、弱く貧しい人が増えても、現状の教会は支えられないという葛藤がある。

討議Ⅳ

2017年から2022年に向けて提言

- ・礼拝（例えば、信徒が分餐を行えるようにする）の中で、信徒が担える部分を増やす。
- ・無給教役者を増やす。執事職を見直す。彼らの学びの場として神学校が通信コースを設ける。
- ・教会を必要とする人を受け入れる体制を作る。
- ・祈祷書をもっと大切にする。聖書の学びと同じく、祈祷書の学びを推奨する。
- ・各自が自らの信仰の原点を日々、確認する。それを助けるツールを模索し、施行する。
- ・日本におけるミニストリー・エリアを模索し、施行する。
- ・聖餐式の代用ではなく、主日礼拝の一つとしての「みことばの礼拝」を再確認するための方策を模索し、施行する。

切にしていこうとするのがていねいな牧会ではないか。

- ・ 阪神淡路大震災のとき、支援物資を教会だけでなく、困っている隣りの家に持って行った。それがていねいな牧会ではないか。
- ・ 教会内でも基本的な事柄をていねいにしていくこと。信徒の前を通り過ぎてしまっている自分がある。これはていねいな牧会をする大前提。
- ・ 92 主教会覚書で牧会型から宣教型へということが言われた。牧会型がだめなのではなく、ていねいな牧会をしていけば自然と宣教となっていく。
- ・ 席に座って祈ること、力を使って役割をすることなど自分の宣教をしていくこと。
- ・ 矛盾がどこかにあって、最初はよくてもだんだん不満が出てくることがある。このようにときにどうするべきか、何ができるのか。限界がある。行政が入ってきても同じ。
- ・ 教会が地域の問題に対応しようとするときに覚悟が必要になる。善意だけでは成り立たない。教会が信徒全員と一つになって取り組まないといけない。
- ・ 宣教というととてつもなく大きなことと捉えがちだが、目の前のことをコツコツとすることでしかないのではないか。「ていねいな」とは目の前の、地道なこと。
- ・ 「大問題」だけではなく、「わたしの隣りの人、目の前の人のこと」に取り組むことではないか。
- ・ 現状でカナダやウェールズ聖公会のやり方は機能しない。もっと目の前の具体的なこと。
- ・ ボランティアに行った信徒の話の主日午後に分かち合える場があるといいのではないか。
- ・ 手を差し出す人を探すのは疲れる。実際には助けを求める声に応えていくことになる。
- ・ 情報をうまく捉えることが大切。最初の一步が遅いところがある。
- ・ 聖職個人にかかっているところが多すぎる。

★ていねいな牧会ということを指針としてあげても現実は何も変わらないのではないか。

一人一人の努力に委ねられてしまい、実際には何も変わらないのではないか。日本聖公会の具体的な方向性としてあげるときにどのようなことが求められるのか。

- ・ ていねいな牧会の具体的な内容とは？
- ・ 聖職が忙しそうで声をかけにくいということをどこの教会も同じように感じているのではないか。14 グループのミニストリー・エリア制度を用いることができれば聖職の仕事が分担でき、ていねいな牧会になっていくのではないか。
- 地方では難しい。隣りの教会までの距離なども考慮しなくてはいけない。牧師が2人で仕事をするということにも慣れていない。
- 基本は1教会1牧師で、仕方なくということになっている
- 最近は管理牧師ではなく兼任牧師になっている。教会が間に合わせて牧師が来ているのではないのだと意識があり、全然違う。教会が複数の礼拝堂を持っているというイメージ。
- モデルとして兼牧をしたことがあるが、結果はあまり良くは無かった。将来的に牧師が増えるというビジョンのもとでやっていなければならない。

- 教会間の仲が良くなり、協力し合えるようになったところもある。今すぐにといいことは難しい。
 - 牧師になる人が育っていくまでの間、信徒で中心的になる人、牧師と共同して働いてもらえる人を育てなければならない。
 - その奉仕はボランティアでは難しい。法規を渡し、牧師のもとで仕事をしてもらおうとき、現場にいる信徒のところにクレームが行ってしまう。
 - 英国聖公会でレイワーカーとレイリーダーという公的なリーダー的存在。いずれにしても信徒の奉仕職の育成が必要。
 - 幼稚園を1法人化するなどの牧師から事務をなくしていくという方法もある。
 - エリア内に「事務センター」のような、基本的な週報やポスター作製などを依頼できるといいのではないか。人材の問題もある。
 - オルガニストの派遣など、できるところからやってはどうか。管理牧師だからこそできることもある。
- ・ ていねいな牧会の実現にシステムの変革も必要なのか
 - 結局は人が変わらなければ、何も変わらなければならないのではないか。
 - 関心を持つことから始まるのではないか。話をしたい人が、最近では素通りしてしまっているのではないか。
 - 雑談をする場を持つこと、自分のことを聞いてくれる人がいるということ確かめることが大切。特に共に食事をする事で雰囲気は変わる。
 - リーダーが結論を言わない、冗談を言うなどのトレーニングが必要。
 - 聴くことを大切にすることがていねいな牧会につながっていくのではないか。
 - 教会の中で、何でも話せる会をしているとそれぞれの思いを出せて、それを聞くことで少しずつ前に進んでいける。
 - 「1の会」一人暮らしで最近教会に来ていない人に手紙を出し続けるということをしている。
 - 「困っている」と言える場があることが大切。場がなくなると本当に困っている状況になってしまう。
 - 聴くこと、聴かせてもらえる関係がていねいな牧会
 - 教勢が落ちているのは、教会で嫌なことを経験したということも大きいのではないか。そのようなところに家族や親友を連れてはいけぬ。
 - 家族の中で、自分だけクリスチャンという場合も居辛かったり教会に行けなかったりしている。
 - そういうことも含めて、話し合う場が必要。
 - 牧師の家に行く、食事をごちそうになるという機会が最近では少なくなっている。プライベートを重視しているためか関係性の希薄ということがある。
 - 少し前まで「牧師夫人」は何でもできて当たり前だった。最近はお連れ合いによって牧師館に入る等、関係や信徒が求めることも変わってきているのではないか。

- システムなどは変えていくのではなく、主によって変えられていく。
- ・ ていねいな牧会をするために、聖職と信徒が一緒になって話し合いながらやっていかなければならない。
- 現実には、ボス的な信徒の存在など教会を離れていく人もいる。そのような人にも応対していかなければならないなど、一緒にやっていくための課題もある。
- 福音を福音として語ること、「いい説教」となること。
- ドロドロした関係の中にある人たちが一緒に礼拝するという素晴らしいものがそこにある。
- 和解していない人との「主の平和」の握手は、何を求めているか。希望となっているのではないか。
- 握手を苦手とする人のために、「無理をしなくていい」ということを周知してもらうことが大切。

★「ていねいな牧会」 → それに向けて実現可能なこと

- ・ 出会った人を大切にす
- ・ 他の教会との交流（姉妹教区）
- ・ 常に学ぶ（信徒への研修、日曜学校教師やオルターなどのプログラムやテキスト）
- ・ 聴く教会
- ・ 牧師と信徒が協働して働く信徒奉仕者の養育とそのためのカリキュラム
- ・ 各教会がそれぞれ「ていねいな牧会」について具体的な目標を協議できる場を作る。教区がまとめ、管区が提唱者となる。
- ・ 自身を持ちましょう。あなたもキリストに愛されています。
- ・ みんなで聴く
- ・ 日常的に聞くこと、み言葉を語り続けること。祈ること。書斎での仕事を減らす。
- ・ 出かける
- ・ できない自分を愛する

結局は十字架の神学…

逆に、今までできていなかったこと。

上記の効率の悪いことをコツコツとやっていく。

これらをすぐに忘れてしまうので、繰り返し話し合っていくこと。

- ・ 洗礼：諸事情によって教会との関わりを深く持っているが「洗礼」に対しては拒否感を持つ。教会との関わりはたくさんある。
- ・ 信徒にしようとする宣教ではなく、苦しんでいる人々のための宣教。洗礼が目的ではない。

「②新たな信徒を、教え、洗礼を授け、養うこと」との関係は。

→み言葉を握って生きていき、具体的に関わりを持てば「仕えて（ディアコニア）」、「証して（マルトウリア）」行くことができる。

→教会は結果を先に考えないで「ていねい」に一人ひとりと寄り添っていく。

：教会（人間）が求めているの（信徒拡充、献金等）は必然的に神さまが備えてくださる。

- ・ 出会いは「ていねい」を重ねていくこと。
- ・ 献金は信徒の義務ではあるが、つまずきをさせない「ていねい」が必要
- ・ 「いらっしゃい」、「よく来ました」というメッセージを発信し続ける。

・ 「内向き」について

：信徒が来なかった。2週間も来なかった。本当に関心を持っているのか。教会内において兄弟姉妹である信徒同士が十分話し合って交わりを持っているのか。そのすべてを牧師だけに任せているのではないか。自分と神さまとの関係だけを求めているのではないか。わたしたち自身がつながり（閉鎖的ではない）を大切にしているのか。「日常生活の中で、証しているか（マルトウギア）」。

・ 宣教：本物を本物として本気で考え外に向けて発信しないと説得力がない。主のみ言葉の宣言をする器として本物になっているのか。

・ 本物を伝えるためには。

- ①自分が愛されている確信をもって人と愛を分かち合う（他人に愛を伝える）。
- ②「伝える」ためには訓練（慣れる）が必要（方法論的に）。
- ③教会の外で通用する言葉を用いる。

・ 一人ひとりが宣の担い手になる意識を持つ。

大切にする。大切にしてもらう。

ていねい

本物

女性

・ 諸事情があったためグループリーダーに女性が一人もいない。女性の活発な参加ができるように働きかけていく。

→ 大切にする。大切にしてもらう。

まとめ

○< vision2022 >○

全ての生命の尊厳を守るために、信徒と聖職が共に豊かな共同体を目指します。だからこそ、新たにされることを強く自覚します。そのために、私たちは「声」を聴き・学び、「生きた供え物として」自らを献げます。

メモ

・感性を養う・聴くこと・知ること・共に寄り添う・祈り・共感・信徒と聖職が共に成長する(養われる)→変化しつづけていく、主体的に変える、創り変えられていく・再創造、神さまによって新たにされる(ことを願う)・積み重ねではなく創造・気づき合う・違いや固有性を大切にすること・コンパスを取り戻す・真剣勝負の礼拝：天の祭壇につながっている、時空を超えた空間である

Cf. 脆い神…崩れはしないけど痛みはする、脆さに共感できる神？

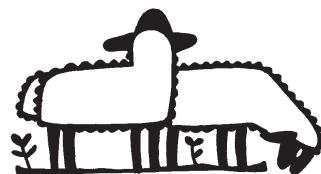
<聴く - 取り込む - 教会の営みの中に運び込む>

1 グループ討議中間報告において差別的な発言がなされたことについて、グループ内で分かち合いを行った。この現状を捉え、私たちは一人ひとりに与えられた命が等しく創造されたものであるということ、もう一度根底から見直す必要があると強く感じた。

2 いのちの声、かすかな声、細い声、求める声、沈黙の声、呻き、神の声などを包括する。

○具体的な働きかけとして…○

- ・世代の違いを大切にします
- ・一人ひとりの在りようを認めます
- ・丁寧な牧会の働きはおのずと地域に広がっていくと考えます
- ・真摯な礼拝をささげます
- ・与えられた賜物を感謝しつつ大胆に用います
- ・自然と共生することで地球の生命を守ります



12 礼拝説教

<開会礼拝説教 9月14日>

実行委員長 主教 ガブリエル 五十嵐正司（九州教区主教）



父と子と聖霊のみ名により アーメン

本日はこのように、日本聖公会の宣教協議会を開くことができ、ほんとうに嬉しく思います。きょうは、これだけの皆さんが日本の各地から集まって来られた。しかも、ここに来られている人たちは、教会で教区であるいは管区で、何らかの役割を担っている人たちであるということを見ると、ほんとに、日本聖公会の働きを担っている中心的な人がこれだけ集まった、っていうことを思うと、何かとても力づけられます。

今、大韓聖公会から3人の方が入ってこられたので。わたしたちと共に、宣教の働きをしてくれる大韓聖公会の代表の人も3名、ここに居てくださるっていうのは、ほんとに、日本聖公会の宣教を共に考えている、一生懸命考えている仲間がこれだけいる。そのことをまず思うだけでも嬉しいです。

そして、どういうふうにして、わたしたち自身の教会、そして教区、そして日本聖公会管区、日本の人びとのために、世界の人びとのために、どういうふうにしていったら一番いいのだろうかということ、一生懸命考える。そして考えて、4日のちには、わたしたちはイエス・キリストの御体・御血に養われて、それぞれの日本各地に派遣されていきます。これだけの仲間が日本の各地に派遣されていく。なんかそのことを思うと、わたしは、ぞくぞくするような、なんかちょっと嬉しいような思いがいたします。まず、わたしたちこういう仲間がいるのだということ、喜びをもって、思いを新たにしていきたいなど、そのように思います。

ここにいらっしゃる、参加している人たちは、教区で選ばれて、あるいは管区で選ばれて来ているという意味で、「いったいわたしに何ができるんだろうか」っていう、そういう多少のプレッシャーを持ちながらも、ここにいらっしゃる方々が、たぶん、だいたいいるんじゃないかと、思うんですが。しかしこれだけの仲間と共に、一緒に考えることができるという、そのことを思って、「新しい何か生まれる」ということを期待しながら、共に悩みつつ話し合いをし、そして祈りつつ、そして主にゆだねて、何か決めることが決められるならば、ということをお願いします。

日本聖公会の各教区は、共通の課題をそれぞれに持っています。それは、信徒が増えない、信徒の減少。また聖職の減少。また信仰を継承してくれる若者がいない。また建物が老朽化している。財政的にも困難である。こういう中でどうしたらいい、というのが共通の課題としてまずあります。

またわたしたちは、こういう日本の状況の中で、世界の状況の中で、何を、わたしたちは教会として語るべきなのかという、そのこともまた、課題として持っているわけです。

そのことについて、2年前の（プレ）宣教協議会において話し合われて、それからきょうまでの間、各教区では、どのように自分たちの教会を、自分たちの教区を、そして日本聖公

会をどうしていったらいいのかということを考えて、きょう、ここに集まっているのだと思います。

もしもどうしたらいいのかっていう答えがどこかにあるならば、わたしたちはここに集まる必要がなかったと思います。でもどうしたらいいかわからない、いっしょに祈りながら、いっしょに考えようということでもって集まっている。わたしたちは祈りながら、考える。とにかく求めながら、自分たちの思いを出し合いながら、話をする。その時に、わたしたちは、恵みとして与えられるものがあるんじゃないでしょうか。ということ期待して、この会議を、4日間過ごしていきたいと願います。

きょうは、箴言16章の言葉を紹介いたします。

16章の1節にこういう言葉があります。

「人間は心構えをする。 主は舌に応えるべきことを与えてくださる。」

「舌」っていうのはこのペロですね。「主は舌に語る（応える）べきことを与えてくださる」。さらに16章の9節ではこのように言われます。

「人間の心は自分の道を計画する 主は一步一步を備えてくださる。」

この言葉を、わたしたち信じながら、いろいろな話し合いをしていきたいと思います。

今回わたしたちは、この宣教協議会に参加するために、ここにいらっしゃる方には、実行委員会から、この11頁にわたる小冊子をお配りいたしました。「2012日本聖公会宣教協議会に向けて」という、これをお渡ししまして。そして、お渡しした中には、「これを熟読してご参加ください」というようにですね、宿題を出してあったのですけれども、皆さんはこれを読んでいかがだったでしょうか？ ということと思いますが。ほんとにいろんな、1995年以降、なぜ本日これをするかっていうことの流れ、そして「こんな方向にいけば」という流れが記されているものです。

この文章の中に書かれていますように、プレ宣教協議会以降、今年の3月11日に、東日本大震災が起きました。そして甚大な被害が発生して、皆さんご存知のように、多くの方が亡くなられて。そして、多くの方が一瞬にして生活の基盤を、足元をすくわれるようにして、失ってしまった。故郷を失い、それこそ希望を失い。また福島第一原発事故によって、放射能汚染にほんとに苦しんでいる人たち、また緊急に疎開しなければいけなかった人たち。故郷を離れたけど、もう故郷には帰ることができない。

福岡の教会にも、福島から来た人がいます。「自分はもう故郷が無くなったと思っている。」「自分は今、喪失感の中にとらわれています」。そういうことを言われていました。そういうような突如な、そういう苦しみ悲しみ。そういうことが起きたときに、わたしたち教会は何をすることができるのだろうか。イエス様ならば何をされるのだろうか。教会のミッションは何か、考えさせられてきました。

東北教区の人々の苦悩、そしてその中での働き。日本聖公会として、その状況にかかわる姿勢を、「いっしょに歩こう！プロジェクト」という名称によって進めている人々の経験は、わたしたちに、主イエスのお働きがどのようなものであるかを、垣間見させていただいている思いがいたします。

「いっしょに歩こう！プロジェクト」の基本姿勢の中に、こうありました。

「困難を負って生きている人々に尊敬（敬意）を払って、いっしょに歩く」と、まず記されています。尊敬（敬意）を払っていっしょに歩く。これは、イエス・キリストの生き方、そのものではないのだろうか。

また、同じプロジェクトの基本姿勢の中に、

「主イエス・キリストが、共に歩いてくださることに励まされ（て）、いっしょに歩く！」ともあります。長谷川司祭が、ほんとに困難な中にある人と共に過ごしている中で言われた言葉、「困難な中に生きる人々の傍に行ったときに、イエス様がすでにその場に居られた」と話してくださった、その言葉はとても印象的です。困難の中にある人々に、イエス様はすぐ傍らにおられる。わたしたちがその人々と共に何かしようとするときには、イエス様といっしょになって歩んでいるのだ、ということ。そういう意味で、このプロジェクトの基本姿勢に書かれていました、「主イエス・キリストが共に歩いてくださることに励まされていっしょに歩く」。そのことについても、「ああ、そうなのか」ということを思わせられました。

今回、長谷川司祭また越山司祭からお話しを聞きます。そういう中で、教会はどういう言葉を語ることができるのか、またそのいろんな体験の中で話してくださることを、それをたくさん伺いたいと思っております。

また、カトリック教会のベリス・メルセス宣教修道女会の清水靖子シスターからお話を聞かせていただきます。清水シスターは、1980年にミクロネシアに派遣されたときに、日本政府が行おうとしていた「放射性廃棄物の海洋投棄」計画を知ります。神様が造られた自然。その中に神様もいっしょにいらっしゃる。放射性廃棄物の投棄によって自然が傷つけられて、その地域にいる人たちも傷つけられて、神様も傷つけられている。清水シスターは、そこで原子力発電の問題性に気づいて、現地の人たちと共に、この問題に、誠実に、キッチリと、かかわっていった。シスターの言葉では「genuine」にかかわった。「genuine」、純正なってということでしょうか、きっちり、誠実にかかわっていった。そのときに、「きっちり誠実にかかわる人々が集められてきた」というふうにおっしゃっていました。その言葉はとっても印象的なので、きょうの福音書で読まれた「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」。この言葉と、シスターの、「genuineに関わっていると、genuineな人々が集められてきたんです」というその言葉も、印象的に覚えています。

また、西原廉太司祭にはプレ宣教協議会において講演をしていただきまして、「聖公会が大切にしてきたもの」というタイトルで、いろいろ話をさせていただきました。その中でも、聖公会の教会形成として、「鳥の巣型の教会形成」という話などは、とてもわたしには印象的でした。今回もまた、わたしたちにいろんな教会のあり方について、お話をしてくださるのだと思って、とても期待をしております。

今回のプログラムでは、同じメンバーによるグループディスカッションをいたしまして、それには多くの時間をとります。このグループディスカッションについては、皆さまにお送りいたしました、この『2012年日本聖公会宣教協議会に向けて』の中で書かれていることがありますので、それをまず聞いていただきます。

〔グループディスカッション〕

この宣教協議会において、ある意味、最も大切なセッションは、このグループでの時間です。今回の宣教協議会のキーワードは「いのち」です。このことを常に念頭に置きながら、プレ宣教協議会で分かち合われた課題も含め、今日の教会が直面している様々な社会的課題、宣教・牧会上の課題について具体的な取り組みを提案します。また、教会の人材、財政、組織のことなど日本聖公会が直面している課題についても、具体的な提案をしていただきます。それらは、グループごとにまとめられて、全体への提案という形にしたいと思います。各グループには、あらかじめ指名されたリーダーがおり、具体的な提案まで導いてくださいます。各グループから提案された内容を更に整理し、日本聖公会が歩むべき指針としてまとめ、協議会全体からのメッセージとしたいと思います。

というように、グループディスカッションについて、述べられております。

これまでに皆さんがそれぞれの教会でもって、教区でもって話し合われたこと。それを皆さんは、こころの中にすでに持っていらっしゃると思います。しかし常置委員としてではなくて、あるいは財政担当としてではなくて。このグループの中に入りましたらば、その全ての自分の持っているタレント、願い、いろんなものを出し合いながら、そこで一つの話が進められていけば、ということをお願いしております。

最後にもう一度、箴言の次のことばを紹介いたします。

16:1「人間は心構えをする。主は舌に応えるべきことを与えてくださる。」

16:9「人間の心は自分の道を計画する。主は一步一步を備えてくださる。」

以上です。



<主日礼拝説教 9月16日>

東北教区主教 ヨハネ 加藤博道



主よ、あなたは週の初めの日、聖霊の息吹を送り、集う会衆を清め、また強められました。今ここに集い、主日の礼拝を共にするわたしたちの上にも聖霊を送り、とくにこの日本聖公会宣教協議会を祝福し導いてください。またわたしたちを送りだしているすべての教区、教会の上にも、そして今も大きな苦難の中にある多くの災害の被災地の人々にも、今この時、あなたのみ力が豊かにありますように。今語ります、わたしの口の言葉と心の思いを聖霊の光によって照らし導いてください。

主イエス・キリストの御名によって。アーメン

今日の使徒書は「信仰と行為」を巡る個所であり、また福音書にはペトロの信仰告白、「自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」という有名な、そして重要な言葉があります。しかしわたしは、今日の聖書日課を開いた時、最初に目にとまる言葉、旧約聖書の冒頭、『イザヤ書』第50章4節以下の言葉に目が引き付けられてしまいました。

「主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え
 疲れた人を励ますように
 言葉を呼び覚ましてくださる。
 朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし
 弟子として聞き従うようにしてくださる。
 主なる神はわたしの耳を開かれた。
 わたしは逆らわず、退かなかった」(50章4節、5節)

「わたしは逆らわず、退かなかった」、とくにこの1節です。

この個所、イザヤ書の50章前後は、イスラエルの歴史の中で、最も重大で深刻な出来事「バビロン捕囚」からの帰還に関わる記事であるようです。紀元前6世紀、紀元前587年(から538年、半世紀間)、バビロニア王の侵攻によってエルサレムとユダの地域は滅亡して、住民の主だった者たちがバビロニアに連れ去られました。いわば民族が分断され、再興・復興の望みも断たれるような事態です。しかしやがて約半世紀後、新たに台頭してきたペルシャによって、今度はバビロニアが滅ぼされ、そうした捕囚の人々は祖国に帰還出来ることになった、そういう背景のようです。ですから、それは基本的には嬉しいこと、めでたいことの筈ですが、しかしそれにも関わらず多くの困難が表われてきます。

約半世紀も、囚われの身とは言え、ある地域に根差して生活した人々の中には、もうそこ

に生活の基盤もあり、帰ることを望まない者、望むとしても危険な荒野を通って行くことを恐れる者があり、かえって祖国に帰還することに反対する人々が現れ、対立が起こった、そういう背景だと言われているようです。強制的に移住させられたバビロンの地からの、祖国への喜ばしい帰還の筈であっても、長い時間が経ち、もはや帰りたくても帰れないような複雑な事情が生まれ、対立まで生まれてしまうということに、思わず福島のことを重ね合わせてしまいます。もちろん、そうはならないことを願って、ですが。

旧約聖書を正確に読み解くことは、これ以上ここでは出来ないとお許しをいただいて、わたしは、ごくここに書かれたままに、新共同訳聖書の日本語のニュアンスのままに読んで、心を引かれたのです。

「主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え
疲れた人を励ますように
言葉を呼び覚ましてくださる。
朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし
弟子として聞き従うようにしてくださる。
主なる神はわたしの耳を開かれた。
わたしは逆らわず、退かなかった」(50章4節、5節)

「わたしは逆らわず、退かなかった」！！

わたしたちは、昨年3月11日以来、この間、何から退かなかったのでしょうか！？

岩手県、釜石市での活動のことを例にお話しますので、その前に少し釜石の神愛教会、神愛幼児学園についてご紹介したいと思います。

東北教区には22教会、2伝道所、そして16幼稚園、1保育園があります。

ほとんどの場合、アメリカ等の宣教師の働きに基づいて、まず教会の基礎が作られ、それから幼稚園等が出来ていったと思います。しかし釜石の場合は異なっています。今から約80年前、九州の小倉（おそらく小倉インマヌエル教会でしょうか）で聖公会の信仰にはいった藤村哲之、美代夫妻が製鉄所の仕事で釜石に来ます。寒い冬の日、両親が働いているため、世話をする人もなく路上で遊んでいる子どもたちを、美代さんが家に連れて帰り、絵本を読み聞かせ、お菓子を食べさせた、それが今日の保育園の出発点となっていきます。つまり信徒の、地域の必要に応じた働きから、保育園、そして教会が立ち上がっていったということをご紹介しておきたいと思います。

さて、その釜石での「いっしょに歩こう！プロジェクト」の釜石ベース、被災者支援センターの働きから、2つのことを申し上げたいと思います。

1つは、日々祈りが続けられ、礼拝が捧げられ、守られ続けているということです。釜石

には北海道教区と東京教区が主として、関わり続けてくださっています。釜石の駅の近くに、表通りに面して「いっしょに歩こう！」の釜石ベース、被災者支援センターがあるため、仮設住宅の訪問だけでなく、毎日被災者の方々が訪れてくる、そのような働きです。

釜石ベースは、毎朝7時の朝の祈りに始まり、毎晩、その日一日の分かち合いに続く「コンプリン（就寝前の祈り）」まで、いつも夜の9時になるようで、ちょっと一日が長過ぎると心配しているのですが一働き続けます。さらに釜石神愛幼児学園の子どもたちの礼拝すべてに参加し、あるいは司式し、そして主日の聖餐式を何としても守ろうとします。東北教区としてはちょっとお恥ずかしい話なのかも知れませんが、釜石の教会の信徒はごく少数、数人です。高齢の方と、あとは保育園の先生で、彼女らは月曜から土曜まで、本当に長時間の労働をしていますので、なかなか毎週日曜日の礼拝には出席できない、「すみませんが、礼拝は支援センターの方で、皆さんだけでやってください」という事態にもなっています。それくらい支援活動の中でも礼拝をきちんと守り、捧げ続ける意識は強いのです。

しかし、それは決して義務感とか規則だからということではないと感じます。礼拝の時間はとても大切な時間で、日々の活動に、一定の規律とリズムを与えています。また全国から様々な人が集まっても、礼拝においては、唯一の神の前にいるという、共通の感覚を経験する機会ともなっていると思います。

わたしたちはあまり意識せず、当たり前と思っているかも知れませんが、震災直後から、すぐに共通の祈りや嘆願の式文を作り、全国の教会で用いるようにし、また様々に震災を覚えるの特別な礼拝を繰り返していることも、一もちろん他の教派でも同様の面はありますが一きわめて聖公会らしい一面です。

2点目は、さらに釜石の例を取り上げますが、その礼拝と礼拝の間、一日の長い時間、今度は本当にキリスト教信仰をおしつけるようなことはまったくなく、ただひたすら、地域の被災者の人々の思いと必要に寄り添い続けてきているということです。「奉仕」という言葉が適当なのか、ともかく一緒にいよう、一緒に歩こうとし続けています。大きな困難の中にあっても、なお、いや、その中であってこそ、一人一人に対する神様の「イエス（肯定）」を、あなたは大切な一人なのだということを、言葉よりは地道な働きを通して語り続けているのです。

それは正直に申し上げて、東北教区の主教であるわたし等の指導でもなんでもありません。教役者も含めて、ですが、多くの全国からの信徒の方々が、まるで当たり前のように日々なされている働きなのです。今は釜石のことを例としましたが、これは被災地における聖公会のすべての取り組みに共通していることと思います。

その2点において「退かない」！！そこに立ち続ける！！教会なのだ、そうあろうとしてきたし、そうありたいと、今わたしは確信と共に祈ります。

1点目は、聖公会誕生以来のもっとも古い伝統です。聖公会は「礼拝の共同体」であり続けているということです。

2点目は、これは決して、そういう土壌もない中で、今回の「いっしょに歩こう！プロジェクト」が急に生み出して実現したものではありません。なんだかんだと葛藤しながらも、この数十年、1960年代以降、教会の宣教を巡る様々な議論や試行錯誤の中で、徐々にわたしたちの教会が、感じ取ってきた宣教の感覚なのだと思います。人々の悲しみと困難の中に、小さくされた存在の中にわたしたちの主は共におられるのだと。わたしたちもまた共に歩もうと。1995年の宣教協議会以来、わたしたちはどれ程のことをしてきたのだろうかという問い直しがありますが、もちろん決してこれで十分という意味ではありませんが、地道に積み重ねてきたものもあると思うのです。

預言者イザヤが伝えた、2500年前の人々の労苦、敵からの攻撃だけでなく、同胞の中においてさえ分裂が起こり、一致や平和というものなど、決して簡単には実現しないと思われるような困難の中でも、「わたしは退かない」という、その言葉が胸に響きます。

さて、用意した原稿はここまでです。

昨日、一昨日と、大変内容の濃いお話を伺ってきて、わたしの思いも揺れています。用意した説教原稿ではなく、昨日までの内容から感じ、考えたことを、この後お話をさせていただきたいと思います。

1番目は西原先生の基調講演から。ケリュグマ（み言葉の宣言）、ディアコニア（奉仕）、マルトウリア（証し）、レイトウルギア（礼拝）、コイノニア（交わり）と、教会の姿を見ていく上での意味での指標についてお話をいただきました。先程の釜石での働き、いや釜石だけではなく、日本聖公会の多くの場所での働きを振り返る時、奉仕があり、交わりがあり、礼拝がある、そういう意味ではケリュグマ（み言葉の宣言）という面がやや弱いのかなと感じました。

しかし「み言葉の宣言」—聖書の言葉を福音として、この世界に向けてはっきりと伝えていくこと—と言っても、ただ一方的に「真理の言葉」を、スピーカーで言い渡すというわけではないでしょう。言葉が言葉として、相手の心に届いていくには、そうしたお互いの関係が成立していくことが大事でしょう。そういう意味では時間のかかることだと思います。しかし日本聖公会の宣教を考える上での、一つの課題ではあると感じました。

2番目は、越山健蔵司祭のお話から。最後は本当に呻きのようなお話を聞きながら、「いっしょに歩く」ということは決して簡単でない、むしろドロドロしたことと思えてきました。もっとも困難な人々と共に歩む、と言っても、まさに福島では、避難した人たちも困難、残った人たちも困難、劣悪な環境の中で働かざるを得ない原発労働者も困難。一体誰と、どのように一緒に歩くのか、本当に簡単ではありません。

最後に。ちょうど時間を遡っていますが、協議会のはじめのシスター清水の講演から。わたしたちの為すことが最後は、キリストのなさったように「解放」に至らなければならない

というお言葉を、重く受けとめました。「いっしょに歩く」だけで十分なのだろうか？ もちろん「いっしょに歩く」こと自体、本当に難しいことと思いつつ、しかしそれが「いっしょに解放されていく」ところまで至らなければならない、と言われていると思いました。

わたしは大変恵まれていて、かつて聖公会神学院で働きながら、神学院と東京教区の支えによってカトリックの大学の神学部で学ぶ機会を与えられました(その機会を作ってくださった当時の菊地栄三校長に感謝しています。信徒の校長であり、大変明確な教育者としての姿勢を持たれ、後継者の育成ということを最重要にお考えになっていました)。なぜカトリックの神学部かと言えば、そこに当時、日本のカトリック教会の典礼(礼拝)刷新を担い、日本聖公会の祈祷書改正にも大きな影響を与えられた典礼学者、土屋吉正神父がおられたからです。ちょうど今年、亡くなられました。その土屋神父が講義の中で、たびたび繰り返しておられた言葉を思い出しました。

「皆さんはよく『あいつはわかっていない』というような言い方をするでしょう。しかし『あいつはわかっていない』とすれば、それは『自分もわかっていない』ことなのです。『いっしょに見えていく(分かっていく)』ことが大事なのです」とたびたびおっしゃっていたのです。英語の conscious (意識している)、ラテン語の conscientia という言葉が示すように、con は共に、共に分かっていく、共に見えて理解していくこと、が大事なのだというわけです。礼拝もそのように「共に見えてくる(共同の意識化の)場」であるという、礼拝理解が関係しています。

「いっしょに歩く」ことから、さらに「いっしょに<希望が>見えてくる」ところまで、解放に向って歩む、その希望と姿勢を見失ってはいけないと、シスターのお話から考えていました。多くの考え方、感じ方、理解の違い、置かれた立場の違いを孕みながらも、教会が希望と解放(最終的には被造物全体の祝福=シャローム)に向って祈りながら歩む、そのような共同体であることを信じたいと思います。

この大震災の中で、テーマ曲のようになった『日本聖公会聖歌集』第476番の歌詞を思い出します。

「暗闇行くときには 主イエスが示された
輝く星をもとめ 光に顔むけよう
光は闇を照らし 昼は夜をつつむ
とりまく影をぬぐいて 光を仰ぎ見よう」

父と子と聖霊によって アーメン

<閉会聖餐式説教 9月17日>

北海道教区主教 ナタナエル 植松 誠



この四日間、日本聖公会の11教区から、また大韓聖公会から、140名にのぼる方々が、ここ浜名湖カリアックに集まり、日本聖公会の宣教について熱心に話し合うことができたお恵みをまず感謝いたします。私自身、皆様との熱の入った話し合いの中で、また共に祈る礼拝を通して、これらの方々が、皆、日本聖公会を心から愛していらっしゃることに、そして、その宣教のわざに自分も関わるのだという熱意を持っておられることに深く感銘を受け、このように多くの仲間たちが日本聖公会の隅々にいらっしゃることに大きな励ましをいただきました。今、この宣教協議会を終えるにあたり、この4日間を私なりに振り返って、改めて私にとって宣教とは何かを考えてみたいと思います。

アメリカにいる私の姪が、大学の卒業論文制作のために来日したことがあります。彼女の卒論のテーマは、「何故、日本ではキリスト教が伸びないのか」というものでした。明治初期から150年経った今も、日本ではクリスチャン人口が1%にも満たないという状況はなぜなのかという問いでした。西原廉太司祭の講演の中にも、難しい土壌で宣教する日本聖公会のことがありましたが、私の姪は、来日して、いろいろな人にインタビューし、その問いを投げかけました。北海道から九州まで、各地で、クリスチャンに、ノンクリスチャンに、聖職者に、信徒にそれを聞いていきました。東京では、私の弟の紹介で、仏教の僧侶を寺に訪ねました。そのお坊さんはとてもユニークな方で、寺の表の掲示板に、聖書の言葉を見事な毛筆で書いて貼っているような方でした。彼は、「どうして日本ではキリスト教がはやらないのか」という姪の質問に、「それは当然なこと。だってキリスト様がおっしゃっている福音をまともに受け入れて、それに従っていくなどということは不可能に近いからだ」と答えたそうです。「あの厳しい、でも本当に素晴らしいキリスト様の生き様のように生きるのはとてもむずかしくて、普通の人だったら多分尻込みしてしまう」と。「たった1%かもしれないが、それでもそのようなキリスト様を信じる人がいるということに私は深い畏れと尊敬の念を禁じ得ない」と言ってくれたそうです。教会では信徒が毎日曜日に来て礼拝するということは、法事のときにしか来ない信者がほとんどの自分の寺では考えられないことだと。

マルコによる福音書3章20節以下にこのような記事があります。「イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。『あの男は気が変になっている』と言われていたからである。」

イエス様は気が変になっていると、人々から、そして身内からも思われていたということに私はとても衝撃を受けます。しかし、イエス様の周りの人々にはそのように判断する根拠

があったのです。「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、私は言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが、1ミليون行くように強いるなら、一緒に2ミليون行きなさい。求めるものには与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。(マタイ5：38～42)

確かにこの世の常識の中で見れば、気が変になっていると思われても仕方ありません。さらにイエスは、この世においては惨めな境遇、あるいは不幸であると思われている人々に呼びかけます。「心の貧しい人々、悲しむ人々、義に飢え渴く人々、義のために迫害される人々、あなたがたは幸いである」と。そして、ご自身、十字架上で、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」とおっしゃる。まさに、気が変になっていると思われて当然です。しかし、もしも主イエスが気が変になっていると人々から思われていたのだとしたら、私たちの教会にもそのように思われる人々が必要なのです。主イエスと同じようにどのような人でも愛し、与え、イエスがお赦しになったように赦し、正義と愛を行い、慈悲深く、謙遜に生きる人が。暗黒と絶望が支配していると思える世界を、神のお望みになる世界に変革しようと敢えて取り組んでいく人が教会には必要なのです。日本において、人口の1%にも満たないクリスチャンの存在です。しかし、確か西原廉太司祭がおっしゃったように、それ自体、決して低い数字ではなく、1%のクリスチャンの存在こそが大きな神様からの祝福、奇跡なのかもしれないと、今思い始めています。日本でキリスト教が伸びないと嘆くことは止めて、1%ものクリスチャンがいることを大いに感謝しながら、この1%の人々がキリストを、その福音を周囲に伝えていけることに何か希望を見出したかのように思います。

「宣教とは何か」と改めて問われる今、私は今回の宣教協議会で、何か大きなアクションを興すことや大きな目標を定めるといった意見があまりなかったことにホッとしています。信徒倍増、献金倍増などという目標がかつて「明日の教会を考える会」で出されたことと、同時に、結果的にはその目標には遠く及ばなかったことも聞いております。

宣教はとても単純なことだと私は思っています。簡単に言いますと、宣教とはキリストの福音を証しすること。そして、人々をキリストの愛と交わりにお招きすること、それに尽きてしまうと思います。自分の言葉で、自分の生き方で、生きざままでキリストを証しすることです。人の言葉ではなく自分の言葉で、み言葉を、イエス様の愛を、私への慈しみを、自分にとっての喜びを、希望を人々に語ることです。それは決して牧師任せではなく、教会の長老の信徒任せでもだめなのです。一人ひとりが、また教会という共同体がどのようにイエス様を、福音の喜びを伝えていくか、それに尽きる。私はいつもそのように思っています。確かに、日本聖公会の現状は、信徒減少、聖職者減少、財政の困窮などが問題として挙げられています。宣教を語る時、それら現状の困難な問題の指摘や分析も必要かもしれませんが、それ以上に、自分にとって、また教会として今誇れること、嬉しいこと、希望や夢に目を向

けることが大切ではないでしょうか。それは決して現実逃避ではなく、キリストの福音に根ざした私たちの信仰のあり方だと思います。

数年前の夏、北海道教区の北部にある小さな四つの教会の合同修養会で、宣教に向けた希望や夢が熱っぽく語られましたが、その最後に、一人の80歳を超えた長老が、これからは自分は年寄りだということをもう言わないことにする。今、神様が自分に与えてくださっている使命は何かを考え、それを喜んで実行していくとの決意を参加者の前で表明し、私をはじめ、そこにいた人々に大きな感銘と励ましを与えました。

長谷川清純司祭と越山健蔵司祭のお話や西原司祭の講演の中に、私たちの日常の中に宣教の現場があることが語られていました。宣教するために、特別な場所を探す必要はないということ。毎日の生活の中に、福音を伝えていく現場があるということを私は大事にしたいと思いました。勿論、昔宣教師たちが、遠く英国や米国などから日本の宣教に赴いたように、私たちにとって離れた地での宣教は必要ではないと言っているではありません。まず周りを見てごらん。家庭で、職場で、学校で、地域社会で、教会で、そこにあなたの宣教が大いに求められているということにまず目を向けること、それが大事だということです。「自分に来ることをしている。それがたとえ小さな働きであっても」と長谷川司祭はおっしゃいました。宣教とは、何か特別なことではないのでしょうか。とても地味で、静かで、ゆっくりで、時には当たり前で、それが宣教であるなどと意識されることもない、そのようなものではないでしょうか。

西原司祭が、岡谷聖バルナバ教会の深澤小よ志さんのなさった宣教についてお話ししてくださったことを感謝しています。普通には取り立てて語られることもないような一人の人の生き様が実は大きな宣教となって、人々に平安と癒し、慰めと励まし、喜びと希望を与えているということを、私も日々出会う信徒の一人ひとりから教えられます。

残暑がいつまでも続く今年の夏でしたが、秋になると北海道は急に冷え込み始めます。10月の末頃、雪虫が舞い、霜が降りるようになると、初雪も間近です。私が車のタイヤを冬用に替えている時、主教館の向かいも隣りも、大根を干し、植木にわらを巻きつけ、結構忙しくなります。そのうち雪が降り始め、降ったり融けたり積もったりを繰り返しながら根雪になります。漬物を漬けるにしても、雪かきにしてもかなりの体力が要ります。しかし、それを60代、70代、時には80代の女性が黙々とやり続けます。その光景を見ていると、北海道の女性の強さをひしひしと感じます。今でこそ家の造りも温かく、便利な融雪機もあります。しかし、数十年前なら、きっとどの地域でも豪雪の中の生活を余儀なくされていたはずで、北海道の厳しい寒さは、自分たちの生活が決して思い通りにはならないことを嫌という程、人々に思い知らせたことでしょう。その中で家族を守り助けてきた女性たちの静かな強さを今も感じ取ることができます。そして私はイエス様のまわりにいた女性たちを思うのです。決して翔び抜けた賜物を持った人たちではなかった。いろいろな弱さや惨めな過去を持った人たちもいました。しかし、その消し去ってしまいたい自分の過去の重さゆえに、そしてそこから逃げ出すことも出来ない哀しさのゆえに、黙々と一日一日を過ごす強さが養

われていました。同じことの繰り返し、ほんの少しの希望すら見え隠れしてしまう毎日の生活。毎日毎日、重石を並べていくような生活の中で、イエス様からの一筋の光を感じ取るのです。十字架につけられたイエス様を追ってきたのもこれらの女性たちでした。弟子たちとは違い、彼女たちはそのようなイエス様にも希望を持ち続けたからではなかったかと思います。闇の中から逃げだそうとするのではなく、闇の中の一筋の光りが途絶えることはない信じて、光りを見ながら闇にいることに耐えた女性たち。岡谷の深澤小よ志さんもまさにそのような女性の一人ではなかったでしょうか。そのような人々の生きざまは、そのまま宣教となって、周りに影響を与え、私にとっても大きな励ましとなるのです。

本物を生きる、GENUINE を生きるということもこの宣教協議会で語られました。私たちにとっての本物は、復活の生命に生きることです。何があろうと、どのような問題が起ころうと、もう暗闇で何も見えないという絶望の中にあっても、私たちの信仰は復活への希望であるはずです。私は毎年イースターの頃、酪農とじゃがいもの産地として有名な今金のインマヌエル教会を巡回します。それはこの農村の教会がとても大事にしている「種の祝福」の礼拝をするためです。その年に蒔く種、種籾、麦、豆、種芋、トウモロコシなどを信徒たちは持ってきて祭壇の前に置き、私が聖水をふって祝福の祈りを捧げます。私はこの「種の祝福式」に毎回とても大きな感動を覚えます。それはこれが私たちの復活の信仰と結びついているからです。長く厳しい北海道の冬はすべての生命の痕跡を消してしまい、この「種の祝福式」の時も、雪に覆われ凍った大地は一面死の世界のようです。生命の兆しは何もありません。何の希望も夢もそこには見られません。この死と暗黒の世界の中で、農業に従事する信徒たちは、復活の主の生命が与えられることを信じて静かに待ちます。今の現実がどんなに暗くても、どんなに厳しくても、それが永遠に続くのではなく、主の溢れる生命と恵みが与えられ、秋には豊かな収穫が得られると信じて、今からその収穫の喜びを先取りしているのです。

ゴルゴダの丘の彼方に復活があることを既に知っている私たちには、いつも一条の光り、希望と夢があります。この希望と夢に目を向けつつ、順境の時も、逆境の時も、日々の小さな信仰の営みを忠実に続けていくこと、それが宣教であり、宣教につながるのだということをお大切にしていきたいものです。

皆様の上に主の豊かな祝福がありますように。アーメン

<京都教区>

主教 高地 敬
司祭 石塚秀司 常置委員
伊藤美佐子 常置委員
宮本紘明 財政担当
司祭 大岡 創 宣教担当
司祭 藤原健久 広報担当
佐々木靖子 女性
司祭 三木メイ 女性
武藤直二 幼保・社会事業

<大阪教区>

主教 大西 修 (教区間協働デスク)
長野泰信 幼保・社会事業
司祭 山本 眞 常置委員(法憲法規委員)
小池義郎 財政担当
司祭 齊藤 壹 宣教担当
司祭 原田光雄 広報担当
成岡宏晃 青年
畑野希美 青年
松原恵美子 女性

<神戸教区>

主教 中村 豊 (年金・年金維持委員会)
司祭 芳我秀一 常置委員
大東康人 常置委員
橋口 満 財政担当
司祭 小林尚明 宣教担当
司祭 中原康貴 広報担当
芳我顕司 青年
弘井宗子 女性
福永君二 幼保・社会事業

<九州教区>

主教 五十嵐正司
吉鹿善郎 幼保・社会事業
司祭 中村 正 常置委員
蔵元英一 常置委員
中村邦雄 財政担当
司祭 山崎貞司 宣教担当
秋山みどり 広報担当
古澤はん奈 青年
安村 妙 女性
宮崎典子 幼保・社会事業
司祭 吉岡容子 宣教協議会担当

<沖縄教区>

仲宗根清美 幼保・社会事業
司祭 上原榮正 常置委員
司祭 戸塚鉄也 常置委員
新崎久美子 常置委員
島田光司 財政担当
司祭 高良孝太郎 宣教担当
司祭 金 ジョンス 宣教担当
司祭 岩佐直人 青年
宮里順子 女性

<大韓聖公会>

司祭 ユ・シギョン 管区一致協働局長
日韓協働委員
司祭 キム・ヒョンゲン 大田教区
チョン・ヘジュ ソウル教区宣教委員

<関係学校・団体>

司祭 広谷和文 聖公会神学院
中原千津子 日本聖公会婦人会
砂田郁郎 BSA

<講師>

司祭 西原廉太 (管区常議員)
シスター 清水靖子

<取材>

聖公会新聞 唐澤秩子

<管区主事>

司祭 相澤牧人 総主事
阪田隆一 総務主事
鈴木一 広報主事
八幡眞也 渉外主事
尾崎茂雄 財政主事
司祭 矢萩新一 宣教主事

<管区諸委員>

司祭 吉田雅人 礼拝委員会
(ウイリアムス神学館)
司祭 小林 聡 青年委員会
司祭 竹内一也 エキュメニズム委員会
吉谷かおる 女性デスク
司祭 柴本孝夫 正義と平和委員会
・沖縄P
聖補 大岡左代子 正義と平和委員会
・ジェンダーP
司祭 岩城 聡 正義と平和委員会
・環境担当
高木栄子 正義と平和委員会
・憲法P
司祭 輿石 勇 管区常議員
池住 圭 管区常議員

<実行委員>

主教 五十嵐正司 九州教区
主教 大畑喜道 東京教区
司祭 木村直樹
司祭 野村 潔
司祭 武藤謙一 正義と平和委員会
・日韓協働P

宮脇博子
村井恵子

<ステュワード>

高橋 愛 北海道教区
深山鷹一 横浜教区
松山健作 京都教区
山本風大 神戸教区
山本祐希 京都教区
永谷 亮 神学院
阿部恵子 神学院
姜 炯俊 神学院

<ドラフトコミッティー>

池住 圭
聖補 大岡左代子
司祭 神崎和子
司祭 木村直樹
司祭 卓 志雄
司祭 野村 潔
司祭 原田光雄
平岡義和
司祭 西原廉太 (アドバイザー)





◆関連資料

① 原発のない世界を求めて — 原子力発電に対する日本聖公会の立場 —

東日本大震災における東京電力福島第一原子力発電所の事故は、周辺地域のみならず広範囲にわたって放射性物質を飛散させ、人々のいのちを脅かすとともに、原子力発電そのものが危険きわまりないものであるという事実を私たちに突きつけました。被爆体験を持ちながらも、これまで原子力発電と放射能の問題について十分な認識を持つことができなかった私たち一人ひとりにとって、それは神からの警告であるといっても過言ではありません。

しかしそもそも、原子力発電そのものが、燃料採掘の段階から廃棄物処理にいたるまで、弱い立場に追いやられている人々に犠牲を強いるものであり、たとえ発電所の事故がなくても、それは神から与えられたいのちを脅かすものであることは否定できません。また、人々の犠牲の上に成り立っているという点で、イエス・キリストの教えに反するものだと言うことができます。

にもかかわらず、私たちは「原子力の平和利用の名のもと、原子力発電所が日本各地に建設され、より多くの電力を消費することで（…）快適で文化的な生活を享受してきました。しかし、東日本大震災は、原子力の平和利用を標榜した原子力発電の安全神話を粉々に打ち砕きました。今後は、原子力に依存するエネルギー政策の転換と、私たちのライフスタイルの転換が強く求められています。」（2012年3月11日・日本聖公会主教会メッセージ）

日本聖公会は、その深刻な反省に立って、改めて、次のような点で原子力発電には重大な問題性があると考えます。

神によって造られたいのちを脅かす

福島第一原子力発電所事故は、生きとし生けるものすべてのいのちを脅かしています。とくに、子どもの被曝は、将来の世代の健康を蝕んでいます。処理技術もないまま大量に生み出された放射性廃棄物は、長期にわたって人々のいのちにとって脅威になり続けます。しかも、日本のような世界有数の地震多発国における原子力発電所の存在は、将来にわたって事故を引き起こす危険性がきわめて高いものであるということは誰も否定できません。

さらに、海外のウラン鉱の採掘・精錬においても、先住民をはじめ労働に携わる人々を被曝させ、国内では原子力発電所の維持・管理にあたる原発労働者のいのちを危険に晒しています。また、原子力発電所から生み出される大量のプルトニウムは、直ちに核兵器の原料となりうるもので、原子力の平和利用と軍事目的とは表裏一体の関係にあります。また、戦争や紛争によって外部からの攻撃に晒された場合、危険性はきわめて大きなものとなります。

神によって創造された自然を破壊する

神は天地万物を創造され、最後に人間を創造されて、被造物すべてを保全する責任を委ねられました（創世記第1章）。原子力発電は、神による委託の範囲を超えて自然を破壊する行為です。長い時間を経て安定した状態にされた放射性物質を発掘し、自然界には少量しか存在しないウラン235を濃縮して核分裂を起こすことによって巨大なエネルギーを引き出す原

子力技術は、自然生態系の安定性を破壊し、重大な結果を引き起こしています。また、原子力発電は二酸化炭素を排出しないクリーンなエネルギーだとされてきましたが、実際には精錬の過程や維持管理において化石燃料を用いて大量の二酸化炭素を排出するのみならず、二次冷却水の温排水によって莫大な熱を環境に排出しているのです。

さらに原子力発電によって生み出された大量の廃棄物は、安全に処理することも保管することもできず、未処理のまま将来の世代に残されることになります。それらの廃棄物の処理に対する責任は私たちにあります。

私たち一人ひとりが、つくられたすべてのものを見て「良しとされた」神のもとに立ち帰らなければなりません。

神によって与えられた平和な暮らしを奪う

原子力発電所は「絶対に安全だ」というふれこみのもとで、経済的疲弊を余儀なくされてきた地域に押し付けられてきました。それは雇用を創出し繁栄をもたらすと宣伝されてきましたが、実際には地域間格差を更に拡大しました。今回の事故によって周辺住民は住む家を失い、職場を失い、漁業や農業などの仕事も奪われ、生活基盤が確立できないために、子どものいのちを守るための避難もままなりません。さらに、広範囲の人々が、放射能汚染の脅威のために不安定な生活を余儀なくされ、精神的なストレスも深まっており、家庭崩壊さえもたります。このような状況も私たちは深刻に受け止めていかなければなりません。

原発のない世界を求めて

このような点を踏まえて、日本聖公会において信仰生活を営む私たちは、まず、現在の事故において脅かされている人々、そしてこの地上のすべてのいのちを守るために祈り、イエス・キリストに従う者として公に発言すべきだと考えます。

なによりも、今回の原子力発電所事故がもたらした破壊的結果を、日本という国が責任をもって収束させるように求めるとともに、私たち一人ひとりがその責任を分かち合います。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」(マタイによる福音書第7章12節)というイエス・キリストの教えは、私たちが原子力発電所の危険性と被曝を人口過疎地に押しついたり、原発を他国に輸出することによって、その地に新たな危険性を創出したりすることを許さないからです。

私たちは教派・宗教を超えて連帯し、原子力発電所そのものを直ちに撤廃し、国のエネルギー政策を代替エネルギーの利用技術を開発する方向に転換するように求めます。そのために、利便性、快適さを追い求めてきた私たち自身のライフスタイルを転換することを決意します。苦しみや困難を抱える人々と痛みを分かち合い、学び合い、愛し合い、支え合って生きる世界を目指します。

神がこの地を祝福し、地の平和を取り戻してくださいように。

2012年5月23日

日本聖公会第59(定期)総会

② 聖公会の戦争責任に関する宣言

第49(定期)総会決議第34号・1996年5月

1)日本聖公会は、戦後50年を経た今、戦前、戦中に日本国家による植民地支配と侵略戦争を支持・黙認した責任を認め、その罪を告白します。

1945年、日本聖公会は日本によるアジア太平洋諸地域に対する侵略と植民地支配の終焉という歴史的転機に立ちました。その年の臨時総会告示で、佐々木鎮次主教は戦時下の教会の反省を述べ、「国策への迎合」「教会の使命の忘却」を指摘しました。このとき、総会も主教会も教区も各個教会も預言者的働きをなしえなかったことを深く反省し、日本が侵略・支配した隣人へ心から謝罪し、真実に和解の関係を公会として求めるべきでありました。

日本聖公会は、設立以来、福音に反する天皇制国家の国体思想や軍国主義に対し、妥協をつづけ、強く抵抗し拒むことができませんでした。日本聖公会が英国、米国、カナダなどの聖公会と繋がりを持つゆえに、官憲の圧迫を受け、信仰の戦いを経験した牧師、信徒もいましたが、その苦汁の経験にもかかわらず、わたしたちの教会は、抑圧され苦しむ人々と共に立つ姿勢を持ちませんでした。また、国際的な交わりを持つ教会であるにもかかわらず、侵略戦争による加害者としての国家の姿に目を開くことができませんでした。むしろ「支那事変特別祈願式」「大東亜戦争特別祈祷」などを用い、他民族支配や戦争協力をキリスト教の名において肯定し、教勢の拡張や体制の維持のみをめざす閉ざされた教会にとどまり、主の福音が示す「地の塩」としての役割を果たすことができませんでした。

2)日本聖公会は、敗戦後、すみやかにこの過ちを認めなかったこと、また戦後の50年も自らの責任を自覚せず、和解と補償のため積極的に働くことなく今日にいたったことを、神の前に告白し、アジア・太平洋の人々に謝罪します。

戦後、日本聖公会は1947年第22総会において、1938年版の祈祷書をそのまま正本として採用しました。その祈祷書には、天皇の支配を神の御旨とみなす「天皇のため」「紀元節祈祷」などの祈祷文がありました。さらに1959年祈祷書改正まで、公会問答において「隣に対してなすべきこと如何」の答えとして「…天皇陛下とその有司(つかさ)に従い…」と教え、聖餐式の中では「すべて主権を持つもの殊にわが今上天皇を祝し」と司祭が祈りました。このように戦後もなお、戦争責任においてもっとも問われるべき天皇やその国家体制を肯定する祈祷書を用い続け、自らの姿勢を自覚的に正すことを怠ってきました。

皇国臣民化政策の結果、引き起こされた沖縄戦の住民虐殺や強制集団自決、さらに戦後における米軍基地の脅威などの沖縄の経験は、沖縄教区を通して語られつづけ、1972年の日本聖公会への移管に向けて「歴史と現状を理解してほしい」との沖縄教区からの問いかけがありました。しかし、その後も日本聖公会として応答することを怠ってきたことを、反省し

なければなりません。

3)日本聖公会は、差別体質を戦後も克服できないでいることを告白します。神の民として正義を行うことへと召されていることを自覚し、平和の器として、世界の分裂と痛み、叫びと苦しみの声を聴き取ることのできる教会へと変えられることを祈り求めます。

以上わたしたちの悔い改めの徴として次のことをすすめていきます。

- (1) 日本聖公会の戦争責任の告白を全教会が共有すること。
- (2) 日本が侵略した諸国の教会に対し、日本聖公会としての謝罪の意志を伝えること。
- (3) 歴史的事実の認識と福音理解を問い直し深めるための取組みを、各教区・教会の中で継続してすすめること。

③ 日本聖公会第 58 (定期) 総会決議第 18 号

日本聖公会宣教協議会開催の件

提出者 管区事務所

第 57 (定期) 総会決議第 16 号に基づき、宣教に関する将来のビジョンを策定するため、2012年に日本聖公会宣教協議会を下記の内容で開催する。

日 程 :	2012年8月下旬(3泊4日予定)	
場 所 :	清泉寮	
目 的 :	日本聖公会の現状と課題を分かち合い、これからの日本聖公会の宣教に関する方針と方向性を提示する。	
主 題 :	「宣教する共同体のありようを求めて」(仮題)	
参加者 :	各教区参加者、管区関係委員会代表、諸団体代表など約150名	
予 算 :	収 入	
	参加費	360万円
	大齋克己献金より(2年間)	300万円
	宣教150周年会計残金より	100万円
	訓練計画資金より	200万円
	合 計	960万円
	支 出	
	宿泊費	450万円
	交通費補助	180万円
	講師・ゲスト・実行委員諸費	100万円
	実行委員会費(2年間)	230万円
	合 計	960万円

<提案理由>

- 1、昨年2009年1月に開催された各教区常置委員長及び宣教担当者の集いにおいても分かち合われたように、日本聖公会のすべての教区において、信徒の減少、高齢化、聖職者の不足、教会建物の老朽化、財政の逼迫など様々な課題に直面しています。主イエス・キリストの十字架の愛と復活の命に生かされる共同体としての信仰を確認し合いながら、わたしたちのこの深刻な状況をしっかりと受け止め克服するために、お互いの智恵と経験を分かち合い、この喜びの福音を伝える宣教の具体的なビジョンを構築したいと思います。
- 2、今日の日本社会においても様々な歪みが生じています。長期にわたる経済不況によって、多くの人々が貧困、失業、家庭崩壊など様々な困難に直面しています。殊に高齢者や障がい者など社会的に弱い立場に置かれている人々にとっては、益々、生きにくい社会になってきています。このような社会において、わたしたちの教会に求められている宣教について再確認し、具体的な方策を検討しなければなりません。
- 3、世界の各地では、依然として政治、宗教、国家、民族などをめぐる対立が続いており、未だ戦火が止むことがありません。毎日のように、世界のどこかで尊い生命が失われています。平和の実現こそが、教会の最も大切な使命(ミッション)だと信じます。1996年の管区総会決議を通して、日本聖公会は、日本の戦争責任に関してアジア諸国に対して公式に謝罪いたしました。その決議を踏まえ、日本聖公会が永久に平和の器として用いられるように全教区の一致と協力が求められています。

宣教協議会 収支報告

2012年日本聖公会宣教協議会 収支報告

2010年1月1日から2012年12月31日まで

【支出の部】		決算額
		円
1	実行委員会費	2,197,640
	会議費	
2	事務費	553,986
	会議資料	7,330
	事務用品費とテープ起こし費用	75,198
	通信費、支払手数料	71,458
	報告書作成と送料	400,000
3	印刷機器レンタル費	54,464
4	宿泊費・会場費	5,038,291
	カリアック	
5	各教区参加交通費支援金	1,794,000
6	管区諸委員等参加者交通費	739,610
	主教、管区諸委員、主事、常議員、実行委員	
7	講師謝礼	170,000
	2名	
8	プレ宣教協議会の精算	891,653
20	支出合計	11,439,644
		円

【収入の部】		決算額
		円
31	宣教150周年会計より受入	1,000,000
32	2011年大齋克己献金より受入	1,500,000
33	2012年大齋克己献金より受入	1,500,000
35	訓練計画資金より受入	2,000,000
34	参加費収入	5,295,444
	各教区参加者	3,395,000
	主教、管区諸委員、主事、常議員、実行委員	1,700,444
	関係団体他	200,000
36	寄付金（カンパ）	144,200
37	その他の収入	0
50	収入合計	11,439,644
		円

	主日礼拝信施金～放射能被災者ことに子どもとその家族のため	152,100
		円

2012年 日本聖公会宣教協議会報告書

2012年12月25日発行

発行 2012年日本聖公会宣教協議会実行委員会

発行所 日本聖公会管区事務所

〒162-0805 東京都新宿区矢来町65

tel 03-5228-3171 fax 03-5228-3175

印刷 大雅堂

800部